

重茂館遺跡群

—第1次発掘調査報告書—



1992.3

岩手県宮古市教育委員会

重茂館遺跡群 OMOETATE Site Group

—第1次発掘調査報告書—

The Report on the 1st Research



重茂館遺跡群垂直写真

1992.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education

Miyako, Iwate, Japan

序 文

宮古市域の東部に位置する重茂地区は、本州最東端の鮭ヶ崎灯台や、ブナの原生林が現存することで、自然観察教育林として保護されている十二神山などがあり、ひとつの地域（半島）のなかで、標高700m級の山地から海岸線までといった複雑な地形的景観をみせています。

太平洋に面した海岸線では漁業が盛んで、ウニやアワビなどのほかにコンブやワカメなどが特産品として有名ですし、また、アカマツ林などの山林からは、マツタケなどのキノコも出荷されています。

このような山海の恵みは、おそらくは数千年前の縄文時代の人々の暮らしを支えてきた貴重な資源でもあったと思われる。

分布調査の結果では、半島北部の仲組地区、中央部の重茂館遺跡群、南部の千鷲・石浜地区などに縄文時代の大規模な集落跡が形成されており、特に昭和62年度に発掘調査を実施した千鷲遺跡からは、縄文時代前期初頭としては東北地方有数の規模を誇る大集落跡が発見されています。

さて、本書は重茂地区の中心的な遺跡である重茂館遺跡群において平成2年度に実施された個人住宅建築に先だつ緊急発掘調査の成果をとりまとめた報告書ではありますが、調査の結果、縄文時代中期を主体とする遺物包含層が検出され、多量の縄文土器のほか、当地方であまり例のなかった板状土偶が出土しております。

これらの資料は、当市の縄文文化研究を進めるうえで、極めて重要な意義を有するものであると思われる。

最後になりましたが、発掘調査、資料整理および本書の作成にあたり指導や協力をいただきました関係各位に心より感謝申し上げて序文といたします。

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

例 言

- 1 本書は平成2年度に実施した重茂遺跡群第1次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）で、発掘調査、資料整理、本書の執筆は高橋が担当した。
- 3 調査座標は任意とし、高さは標高値をそのまま使用した。
- 4 発掘調査および資料整理、本書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。（敬称略、所属は当時のもの）

高橋 信雄（岩手県教育委員会文化課）

佐藤 正彦（陸前高田市立博物館）

佐々木 勝（岩手県教育委員会文化課）

岸 昌一（宮古市史編さん室）

小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）

竹下 将男（宮古市史編さん室）

熊谷 常正（岩手県立博物館）

齊藤 英樹（宮古市文化財保護審議委員）

- 5 本文中の引用文献は次のとおり略記した。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲 → 『大付報文79』
熊谷 常正

1983～86 『宮古市分布調査報告書』 武田 将男 → 『分布調査1～4』

1986 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田 将男 → 『分布図86』

1987～91 『崎山遺跡群 I～V 昭和61年～平成元年度発掘調査概報』

→ 『崎山遺跡群 I～V』

1989 『千鶏遺跡 昭和62年度発掘調査報告書』 → 『千鶏報文89』

1989 『トロノ木遺跡第1次～第7次発掘調査報告書』 → 『トロノ木報文89』

1989 『高根遺跡 昭和63年度発掘調査報告書』 → 『高根報文89』

1990 『鍬ヶ崎館山貝塚 平成元年度発掘調査報告書』 → 『鍬ヶ崎館山報文90』

目 次

序 文
例 言
目 次

I 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査要旨	1
3 調査体制	3
II 重茂館遺跡群と周辺の遺跡	3
III 調査の内容	9
1 調査の方法	9
2 基本層序	11
3 検出遺構	13
(1) 第1号集石跡	13
4 遺物包含層	13
(1) 遺物の出土状況	13
(2) 出土遺物	14
a 土器	14
XIII a 層出土土器	14
XII a 層出土土器	16
XI b 層出土土器	19
XI a 層～X a 層出土土器	28
IX a 層出土土器	35
VIII a 層出土土器	42
VII b 層出土土器	44
VII b 層～VII a 層出土土器	49
VII a 層出土土器	49
VI a 層出土土器	55
V c 層～V a 層遺物出土状況	58
V c 層出土土器	58
V b 層出土土器	70
V a 層遺物出土状況	81
V a 層（下部）出土土器	81
V a 層上部出土土器	88
IV f 層出土土器	91

IV e 層出土土器	91
IV b 層出土土器	94
IV a 層出土土器	94
III a 層出土土器	94
II a 層出土陶磁器・土器	96
I 層出土土器	99
b 石器	99
剥片石器	99
石核石器	100
礫石器等	100
c 土製品	110
土偶	110
異形土製品	112
円盤状土製品	112
d 石製品	112
動物形石製品	112
石棒・石剣類	112
IV 調査のまとめ	116
1 土器	116
(1) 器形分類	116
(2) 土器群の分類と編年的位置づけ	117
2 土偶	131

図 版 目 次

第 1 図版	調査区全景・遺物包含層土層堆積状況
第 2 図版	遺物出土状況
第 3 図版	出土遺物 (1)
第 4 図版	出土遺物 (2)
第 5 図版	出土遺物 (3)

内表紙写真 重茂館遺跡群垂直写真

挿 図 目 次

第1図	位置図	2
第2図	重茂館遺跡群と周辺の遺跡	4
第3図	重茂館遺跡群地形図	6
第4図	調査区付近地形図	7
第5図	調査区全体図	8
第6図	土層断面図 (1)	10
第7図	土層断面図 (2)	12
第8図	第1号集石跡	13
第9図	出土土器-1 (Ⅻa層-1)	15
第10図	出土土器-2 (Ⅻa層-1)	17
第11図	出土土器-3 (Ⅻb層-2)	18
第12図	出土土器-4 (Ⅺb層-1)	21
第13図	出土土器-5 (Ⅺb層-2)	22
第14図	出土土器-6 (Ⅺb層-3)	23
第15図	出土土器-7 (Ⅺb層-4)	24
第16図	出土土器-8 (Ⅺb層-5)	25
第17図	出土土器-9 (Ⅺb層-6)	26
第18図	出土土器-10 (Ⅺb層-7、Ⅺa層~Ⅹa層-1)	27
第19図	出土土器-11 (Ⅺa層~Ⅹa層-2)	31
第20図	出土土器-12 (Ⅺa層~Ⅹa層-3)	32
第21図	出土土器-13 (Ⅺa層~Ⅹa層-4)	33
第22図	出土土器-14 (Ⅺa層~Ⅹa層-5)	34
第23図	出土土器-15 (Ⅸa層-1)	37
第24図	出土土器-16 (Ⅸa層-2)	38
第25図	出土土器-17 (Ⅸa層-3)	39
第26図	出土土器-18 (Ⅸa層-4)	40
第27図	出土土器-19 (Ⅸa層-5)	41
第28図	出土土器-20 (Ⅷa層-1)	43
第29図	出土土器-21 (Ⅶb層-1)	46
第30図	出土土器-22 (Ⅶb層-2)	47
第31図	出土土器-23 (Ⅶb層-3)	48
第32図	出土土器-24 (Ⅶa層-1)	51
第33図	出土土器-25 (Ⅶa層-2)	52
第34図	出土土器-26 (Ⅶa層-3)	53
第35図	出土土器-27 (Ⅶa層-4)	54
第36図	出土土器-28 (Ⅵa層-1)	56

第37図	遺物出土状況	(V a 層～V c 層)	57
第38図	出土土器-29	(V c 層-1)	60
第39図	出土土器-30	(V c 層-2)	61
第40図	出土土器-31	(V c 層-3)	62
第41図	出土土器-32	(V c 層-4)	63
第42図	出土土器-33	(V c 層-5)	64
第43図	出土土器-34	(V c 層-6)	65
第44図	出土土器-35	(V c 層-7)	66
第45図	出土土器-36	(V c 層-8)	67
第46図	出土土器-37	(V c 層-9)	68
第47図	出土土器-38	(V c 層-10)	69
第48図	出土土器-39	(V b 層-1)	73
第49図	出土土器-40	(V b 層-2)	74
第50図	出土土器-41	(V b 層-3)	75
第51図	出土土器-42	(V b 層-4)	76
第52図	出土土器-43	(V b 層-5)	77
第53図	出土土器-44	(V b 層-6)	78
第54図	出土土器-45	(V b 層-7)	79
第55図	出土土器-46	(V b 層-8)	80
第56図	出土土器-47	(V a 層-1)	83
第57図	出土土器-48	(V a 層-2)	84
第58図	出土土器-49	(V a 層-3)	85
第59図	出土土器-50	(V a 層-4)	86
第50図	出土土器-51	(V a 層-5)	87
第61図	出土土器-52	(V a 層-6)	89
第62図	出土土器-53	(V a 層-7)	90
第63図	出土土器-54	(IV f 層-1、IV e 層-1)	92
第64図	出土土器-55	(IV e 層-2、IV b 層-1、IV a 層-1、III a 層-1)	93
第65図	出土土器-56	(III a 層-2)	95
第66図	出土土器-57	(III a 層-3、II 層～I 層-1)	97
第67図	出土土器-58	(セクションベルトほか)	98
第68図	出土石器-1	(剥片石器-1)	101
第69図	出土石器-2	(剥片石器-2)	102
第70図	出土石器-3	(剥片石器-3)	103
第71図	出土石器-4	(剥片石器-4、石核石器-1、礫石器等-1)	104
第72図	出土石器-5	(礫石器等-2)	105
第73図	出土石器-6	(礫石器等-3)	106
第74図	出土石器-7	(礫石器等-4)	107

第75図	出土石器- 8 (礫石器等- 5)	108
第76図	出土石器- 9 (礫石器等- 6)、出土石製品- 1	109
第77図	出土土製品- 1	111
第78図	出土土製品- 2、出土石製品- 2	113
第79図	出土土製品- 3	114
第80図	出土土製品- 4、出土陶磁器- 1	115
第81図	器形分類図	116
第82図	出土土器集成図 (1)	124
第83図	出土土器集成図 (2)	125
第84図	出土土器集成図 (3)	126
第85図	出土土器集成図 (4)	127
第86図	出土土器集成図 (5)	128
第87図	出土土器集成図 (6)	129
第88図	出土土器集成図 (7)	130

I 調査経過

1 調査に至る経過

重茂館遺跡群は宮古市のコードL G55-0284、岩手県のコードL G55-0283として登録された周知の遺跡である。

重茂館遺跡群

「分布調査1」によると、遺跡群内にはOT-01～OT-04の4遺跡が確認されているが、いずれも密接しており、個々の範囲を明確にし得ない状態である。表面採集される遺物は、4遺跡ともに縄文時代を主体としており、OT-04が早期末～前期、OT-02が中期、OT-03が前期～晩期を中心としているようである。

OT-01は知名の由来となった重茂館跡で、2つの郭と帯部、砦を配する山城である。15世紀頃の造営と推定されている。なお、OT-01からも縄文時代の遺物が採集されている。

今回の調査地点はOT-01に含まれているが、出土遺物の内容からはむしろOT-03に含まれる可能性が大きいと言える。各遺跡の範囲や内容については今後の調査成果に期待することとし、本調査区は仮に重茂館遺跡群の第1次調査として報告する。

ところで、本調査は個人住宅建築に先だつ緊急調査であるが、平成元年10月に重茂カウにより提出された農地転用許可申請を発端とする。宮古市教育委員会は申請地が周知の遺跡の範囲内であることを重茂へ告げるとともに、その取扱いについて直ちに事前協議を開始した。

両者の協議の結果、住宅建築により破壊される区域を対象として、平成2年度に発掘調査を実施することとし、宮古市教育委員会は必要経費を予算計上した。

平成2年4月に重茂より提出された埋蔵文化財発掘届出書を受けて、4月11日より5月25日まで発掘調査を実施した。

資料整理作業は平成2年度から平成3年度にかけて実施した。

2 調査要旨

発掘調査地点 宮古市大字重茂第2地割字館116番

遺跡名 重茂館遺跡群(L G55-0284)

調査原因 個人住宅建築に先だつ緊急発掘調査

発掘調査期間 平成2年4月10日～平成2年5月25日 面積 294㎡

資料整理期間 平成2年12月26日～平成3年3月31日

平成3年4月1日～平成4年10月31日

出土遺物 調査区内に28層(細分層)の遺物包含層を検出した。遺物包含層に伴い中期の大木7a式～大木9式までと後期・晩期の土器、石器が多量に出土したほか、板状土偶が1点出土しており特筆される。

また、遺物包含層の上層から、わずかではあるが近世に伴う陶磁器類が出土している。

3 調査体制

今回の発掘調査、資料整理の体制は次のとおりである。

調査総括	大森 翼	宮古市教育委員会社会教育課長
事務担当	小本 哲	宮古市教育委員会社会教育係長（平成2年度）
＊	山崎 吉章	宮古市教育委員会社会教育係長（平成3年度）
＊	坂下 昇	宮古市教育委員会社会教育係主任兼社会教育主事補
調査員	高橋憲太郎	宮古市教育委員会社会教育係主事（主担当）
＊	鎌田 祐二	宮古市教育委員会社会教育係主事
＊	鶴田 均	宮古市教育委員会社会教育係主事
＊	阿部 豊	宮古市教育委員会教育係埋蔵文化財調査員 （非常勤職員、平成2年9月から）

調査の実施にあたり、次の各位から多大の協力をいただいた。（敬称略）

<地権者等> 重茂カウ 重茂進（民宿重茂荘）

<発掘調査> 阿部豊、古館友三、吉田昭、佐伯裕則、佐々木清、菊池清八、大越貞蔵
齊藤英樹

<整理作業> 山野目崇子、笹川美穂子、前川友宏、成田寿美江、久保田加代子、越田真理子

II 重茂館遺跡群と周辺の遺跡(第2図、第3図)

重茂半島全体の概要については既に『千鶴報文89』に詳しいので、ここでは重茂館遺跡群の存在する半島中央部についてのみ記述する。

半島中央部に存在する遺跡群には、沿岸部の鮭ヶ崎丘陵上に立地するものと、十二神山山地東辺の小起伏山地上に立地するものの2者がある。

前者は、北から鶴石～荒巻地区、音部里、小角柄地区、笹見内～重茂館地区が相当し、後者は麦生野地区が担当する。

これらの遺跡群は、いずれも縄文時代に伴うものであるが、前期～後期に伴うものが主体を占めるようである。晩期の遺物が出土しているのは今のところ重茂館遺跡群のみである。

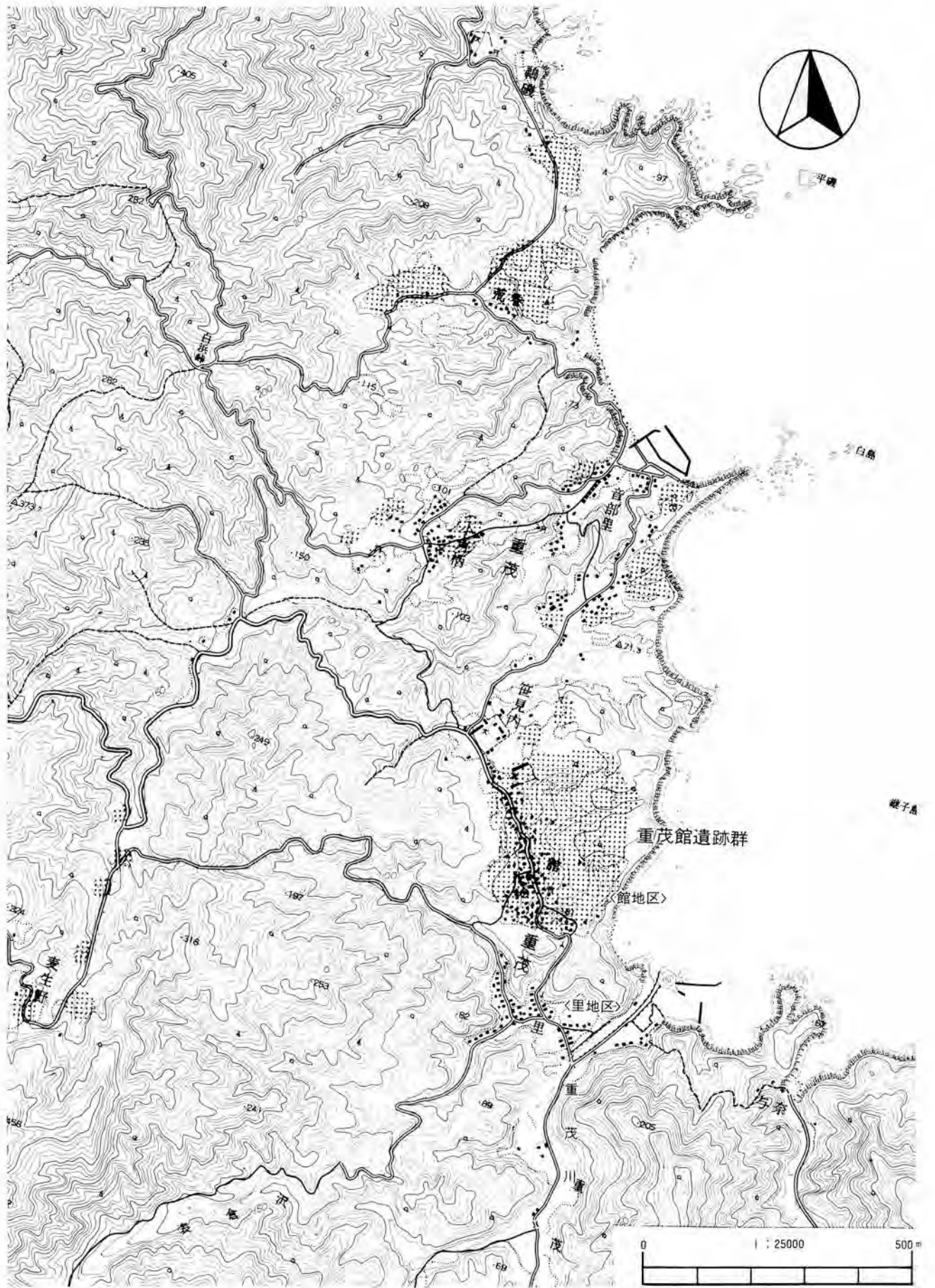
続く弥生時代～古代の遺跡は極端に少なくなり、わずかに麦生野VI遺跡から土師器片が表採されているのみである。

中世の遺跡は、重茂半島東岸唯一の城館跡である重茂館跡がある。丘陵頂部を空堀で分断した2つの郭を帯郭がとり囲み、立陵の先端部に砦が伴うという比較的単純な構造の山城である。

館主は重茂氏とされるが、重茂氏の出自については不明な点も多い。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけては、赤前と閉崎（註1）が河南閉伊氏の領有地であったが、この時点で重茂姓を名乗る氏族の有無は不明である。

一説によると、南北朝動乱の頃近能氏が閉伊氏の名跡を継ぎ、この一派が重茂氏を称し、重茂氏の祖は民部少輔広嗣（明応9年(1500)年）という人物であったという。（註2）。

重茂館跡



第2図 重茂館遺跡群と周辺の遺跡

また、『参考諸家系図』によると重茂与十郎義氏の譜に「先祖某より代々田鎖氏に属して閉伊郡重茂村を領す。信直公旧地に依って重茂村に八十石を賜ふ」とある。この重茂与十郎は実在の人物で、慶長6年(1601)の『信濃守利直公岩崎御出陣人数定』にも「二百石 重茂与十郎 此下七人」とあり、16世紀末頃から17世紀初めにかけて重茂地区を領有していたのであろう(註3)。

重茂館を築いた人物は、時期的にみて重茂与十郎とは考えづらいので、おそらく民部少輔広嗣の時代であったろうと思われる。とすると、その創建時期は15世紀代の後半期になろうかと思われる。しかし、民部少輔広嗣の出自にも不明瞭な部分があり、また、この人物から重茂与十郎への系譜も今のところ不明であると言わざるを得ない。

江戸時代の遺跡については、遺構等を確認しているわけではないが、現在の白山神社付近に遠見番所が置かれ、重茂与十郎義氏の三男重茂源助吉長の後が、代々遠見番を勤めたとされている(註4)。

ところで、重茂館地区の南には里という地区と重茂川が存在する。現地点でこの地域には遺跡は確認されていない。

重茂川は十二神山を源とし、山岳溪流の趣を呈し、流域に十分な平坦面や緩斜面を形成していないことが理由として上げられる。一方、里地区については、おそらく縄文時代には入江か湿地の状態で居住に不適当な地形であったものと思われる。しかし、田村によるとこの地区に中世の集落が想定されるという(註5)。この可能性は極めて大きいと思われるが、現在の集落との重複が著しいものと思われ、遺構や遺物は確認できていない。

次にこれらの遺跡の発見の経緯と、重茂館遺跡群の位置づけについて述べる。

重茂地区の遺跡の発見については中嶋吉兵衛の尽力によるところが大きい。大正11年に発刊された『下閉伊郡志』の附録「石器時代遺跡考」の中で、中嶋は重茂村に重茂館遺跡をはじめとして23ヶ所に縄文遺跡を報告している。この時点で、重茂館遺跡は1ヶ所に数えられている。

中嶋吉兵衛
「石器時代遺跡考」

大正13年に来宮した内務省考査官柴田常恵の野帳には、中嶋の所有する重茂(重茂館遺跡か)出土の玦状耳飾4点と、重茂鶴磯地区出土の石器?のスケッチが記録されている。

柴田常恵

時代は下って、昭和53年4月に刊行された『宮古市埋蔵文化財包蔵地等分布図』では重茂館遺跡群として9ヶ所の遺跡が示されているが、本来一つの遺跡(城跡)であるべき重茂館跡が3つの遺跡に分けられていたり、やや問題がある。

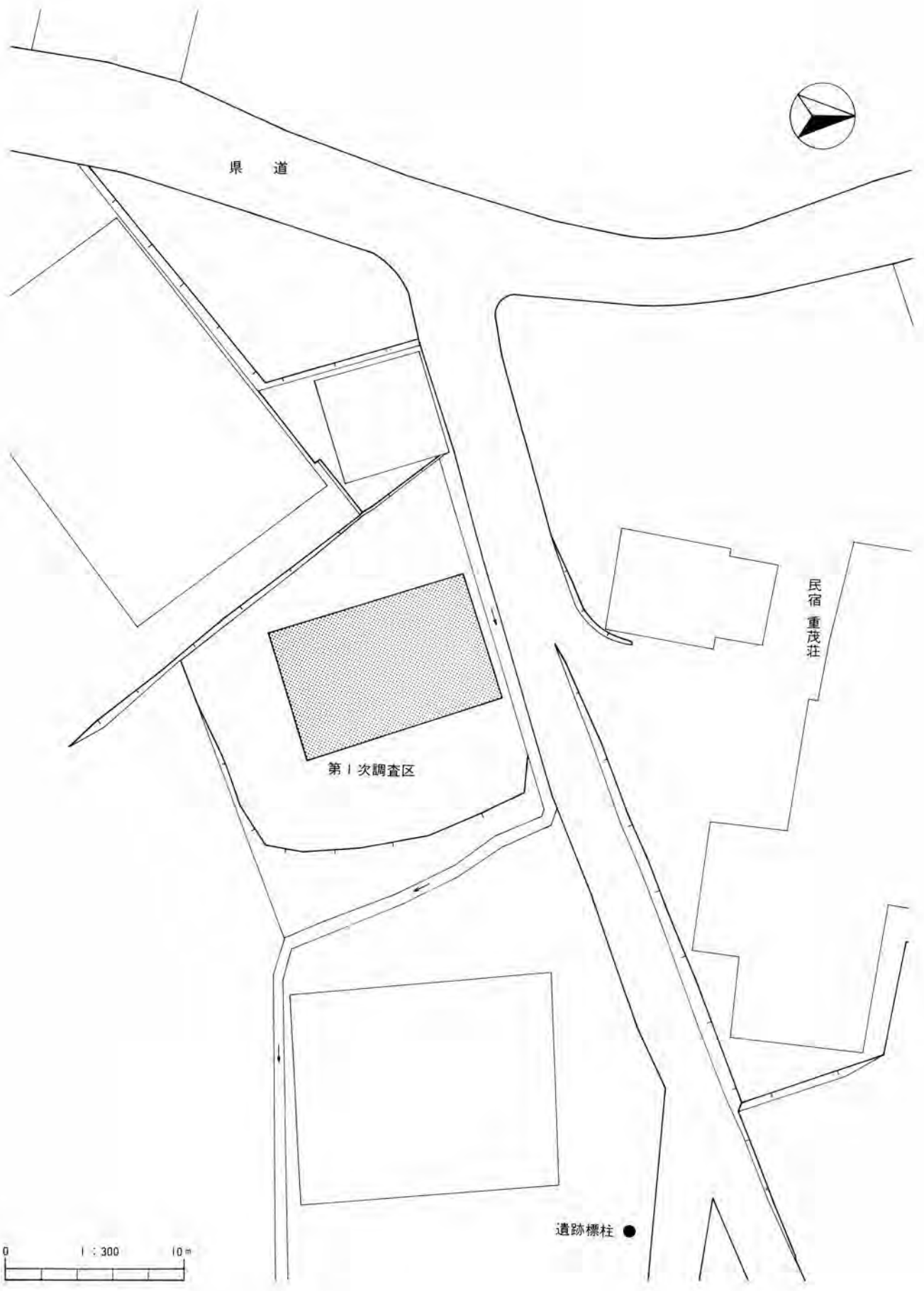
昭和58年度に文化庁文化財保護部より刊行された『全国遺跡地図 岩手県』によると、重茂館遺跡は1遺跡として登録されているが、遺跡の範囲が実際のものよりやや小規模に示されている。

昭和57年度から昭和60年度にかけて宮古市では市内の遺跡分布調査を実施している。『分布調査1』によると、重茂館地区には4ヶ所の遺跡が確認されており、OT-01~04と仮称したうえで、これらを総称し重茂館遺跡群としている。しかし、前述したとおり、各々の遺跡が密集しており、各遺跡の範囲を確定し得ない状況であった。

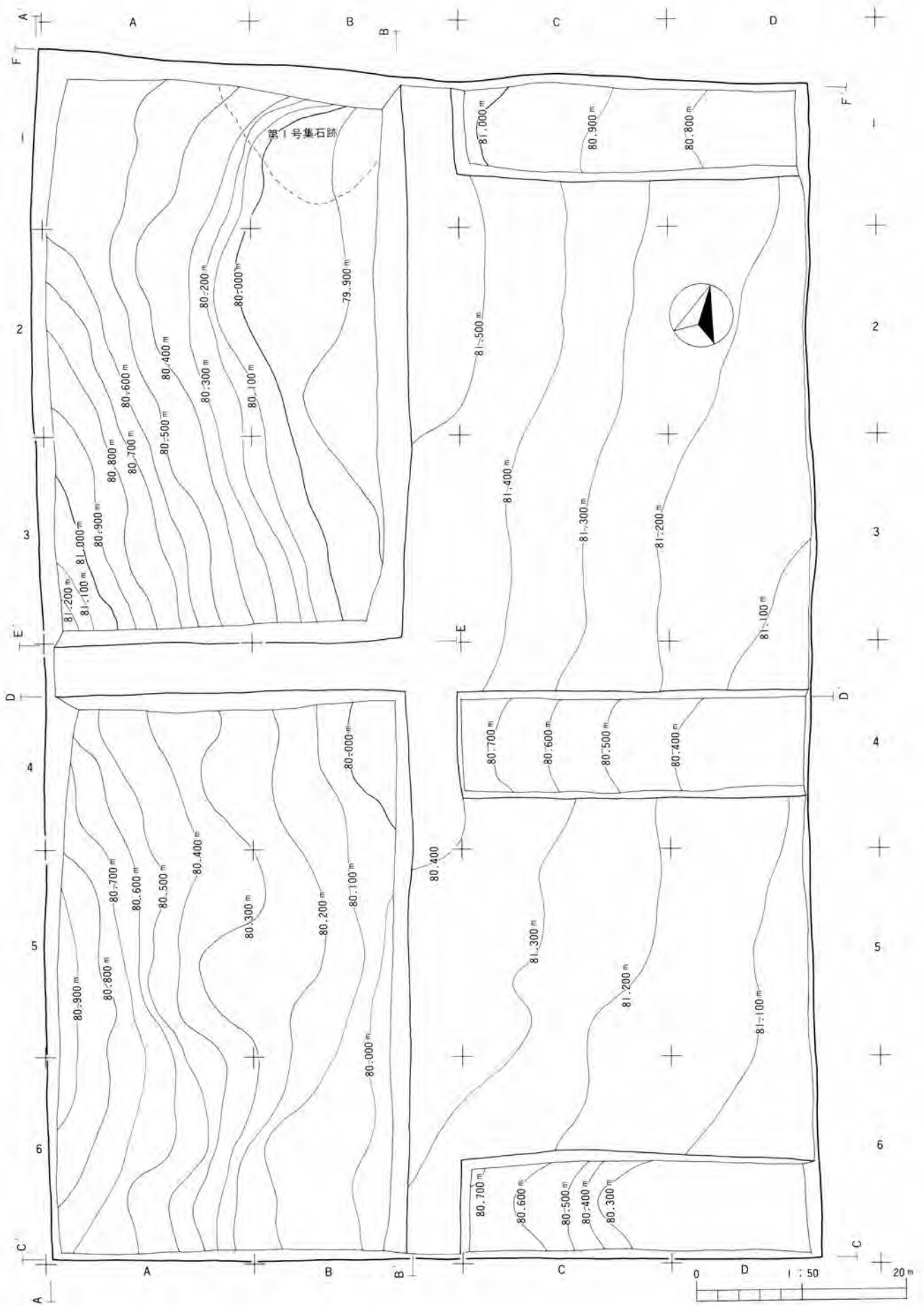
昭和60年度に刊行された『分布図86』では、このような事情により重茂館遺跡群として一括した範囲を示している。現時点では、この『分布図86』の知見を基に岩手県や文化庁の遺跡台帳の遺跡範囲が統一されている。



第3図 重茂館遺跡群地形図



第4図 調査区付近地形図



第5図 調査区全体図

更に、平成2年度に刊行された『宮古市史 年表』中の「宮古市遺跡分布図」でも重茂館遺跡群として一括している。

以上のような理由により、『分布図86』の知見に基づき重茂館地区の遺跡を重茂館遺跡群として一括し、個々の範囲と名称は今後の調査成果に期待したい。

最後に、昭和55年度に刊行された『宮古市史 漁業・交易』の中で中嶋隆は、「重茂館」に縄文時代晩期の貝層が存在し、マガキ・イガイ・ツメタガイ・イボニシ・アワビの動物遺体が出土したと記述している。

残念ながら、貝層の出土地点や検出状況および伴出遺物などの基礎的情報が欠落しており、詳細は不明である。今後は、この貝層の有無を確認することも急務となろう。

(註1) 『鎌倉幕府裁決状』および『北畠顕家宣旨状』。閉崎が重茂半島全体を指すものか半島北部を指すものかは不明である。田村忠博は当初は半島全体を指したものであろうとしている。因に半島北部に戸ノ崎という小字名が残っている。

(註2) 田村忠博 1986 『宮古地方の中世史 古城物語』より。

(註3) (註2)および 岸昌一 1984 『宮古市史 資料集(近世一)』宮古市より。

(註4) (註2)と同じ

(註5) (註2)と同じ

Ⅲ 調査の内容

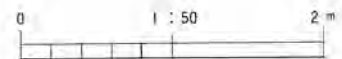
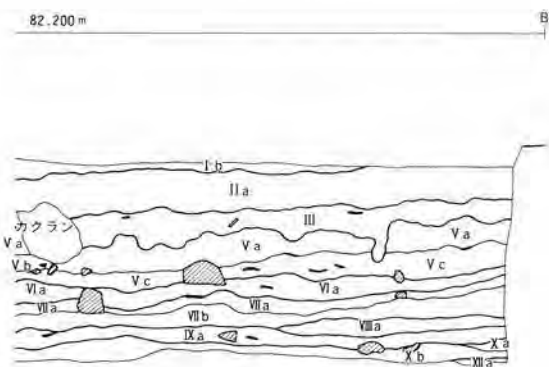
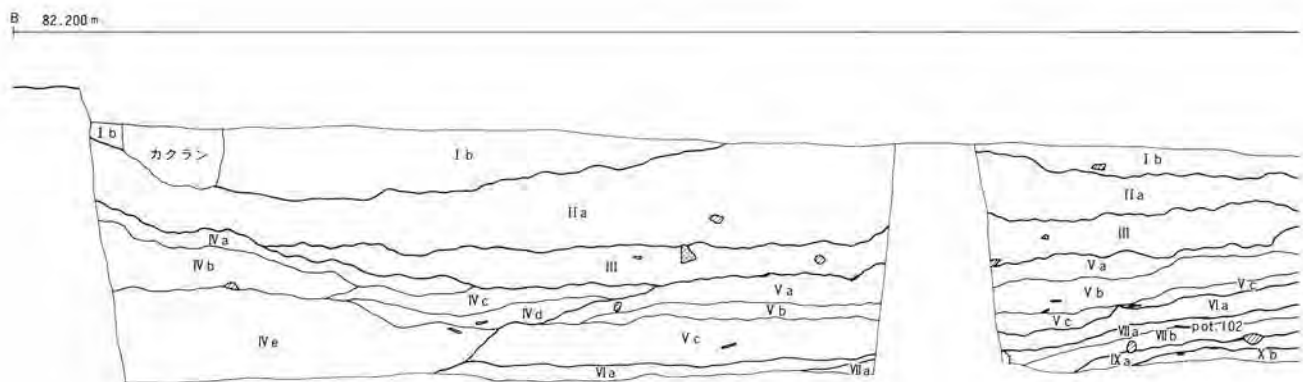
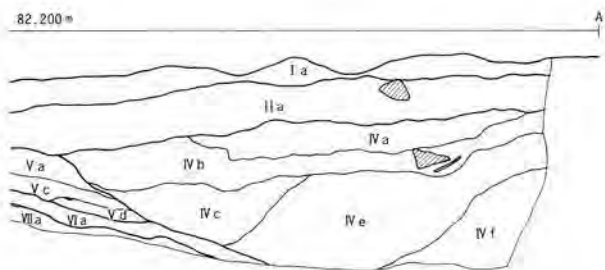
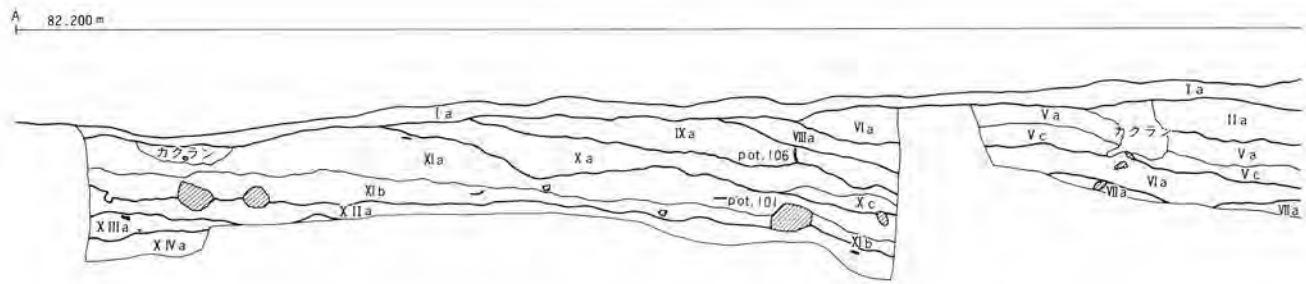
1 調査の方法(第4図、第5図)

今回の調査地点は西から東へ傾斜する緩斜面の上端部付近にあたり、小さな沢により開折された洞状の地形上に立地している。調査地点周辺での標高は82m程である。尚、調査地点の南35mには重茂館遺跡の標柱が立っている。発掘調査は、個人住宅建築により破壊される部分のすべてを対象とした。周囲に公共座標の基準点が無いことから、調査座標は住宅の方向に合わせて、南北に1～6、東西にA～Dの2×2mのグリッドを設定した。調査座標は磁北より10°35′西へ偏している。

調査区全体の表土(I層)を剥いだ後に、斜面上部の西半部分は全面を掘り下げ、東半部分はトレンチにより調査を進めることとした。東半部分は1mほど掘り下げたところで遺物包含層の上面に達したが、周辺に土捨場を確保できず、また、住宅の基礎がここまで達しないことなどから、この時点で調査を打ち切り、西半部分に集中することとした。

しかし、西半部分は調査中の湧水が著しく、A1、A2、B1グリッドで調査区の壁が大きく崩壊してしまった。調査区に接して、道路や既存の住宅があり、これらへ被害が及ぶことを避けるために、A1～A3、B1～B3グリッドについては、この時点で調査を打ち切ることとした。従ってこれらのグリッドについては、VI層～VII層上部までしか精査できなかった。

結果的にはほぼ全掘できたのは、A4～A6、B4～B6グリッドのみとなってしまった。



第6図 土層断面図 (1)

2 基本層序（第6図、第7図）

調査区内に確認された土層は、細分層で28層あり、このうち縄文時代の遺物包含層は25層である。これらの土層は、層相により15層に大別される。以下、上層より説明する。

I層は表土層で、2層に細分される、I a層は暗褐色土層で現在の表土層である。I b層は盛土層で、褐色土や暗褐色土の混合土層である。いずれの層も、やや柔らかくしまりが無い。

II層は暗褐色土層で、混入土の割合は極めて少ない。やや柔らかくしまりが無い。

III層は黒色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊をやや多く含む。堅さは中程度で、ややしまりが無い。IV層とは不整合の関係で堆積している。

IV層はA1・A2・B1・B2グリッドを中心に堆積する土層で、いずれもグライ化している。斜面に沿って西から東へ傾斜しながら、北から南へ流れ込む状態で堆積しており、V層以下とは不整合の関係にある。

本層は6層に細分される。IV a層は、ややシルト質の黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊をわずかに含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。IV b層は、ややシルト質の黒色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊を少量含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。IV c層とIV d層は黒褐色土と暗褐色土の混合土層である。IV e層は、ややシルト質の黒褐色粘質土を基本土とし、やや明るい黒褐色土塊を含む、やや柔らかく、しまりは中程度である。

IV f層は上層とやや異なり、ややシルト質の褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。柔らかく、しまりは中程度である。

V層以下は連続した堆積で、いずれも整合関係にある。斜面に沿って西から東へ傾斜しながら南から北へ流れ込む状態で堆積している。

V層は暗褐色土層で、4層に細分される。V a層は、やや暗い暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊や暗褐色土塊を含む。やや固く、しまりは中程度である。

V b層とV c層はいずれも暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊や黒褐色土塊を含むが、V c層のほうが混入割合が大きい。両層ともやや固く、しまりは中程度である。

V d層はA2グリッド付近でのみ堆積する。黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。

VI層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や砂質の黄褐色土塊などを多量に含んでいる。やや固く、ややしまりが無い。

VII層は、やや暗い暗褐色～黒褐色土層で、多粒の炭化物粒を含んでいる。2層に細分される。VII a層は、やや暗い暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊や褐色土塊を含む。やや固く、ややしまりが無い。VII b層は、やや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を多量に含む。やや固く、ややしまりが無い。

VIII層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多量に含む。固さは中程度で、ややしまりが無い。炭化物粒を多量に含む。

IX層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。炭化物粒を多量に含む。

X層は多量の炭化物粒を含む褐色土層であり、3層に細分される。X a層とX c層は褐色粘

I層 表土層

盛土層

II層 暗褐色土層

III層

黒色土層

IV層

黒褐色～黒色

土層

褐色土層

V層

暗褐色土層

黒褐色土層

VI層

暗褐色土層

VII層

暗褐色土層

黒褐色土層

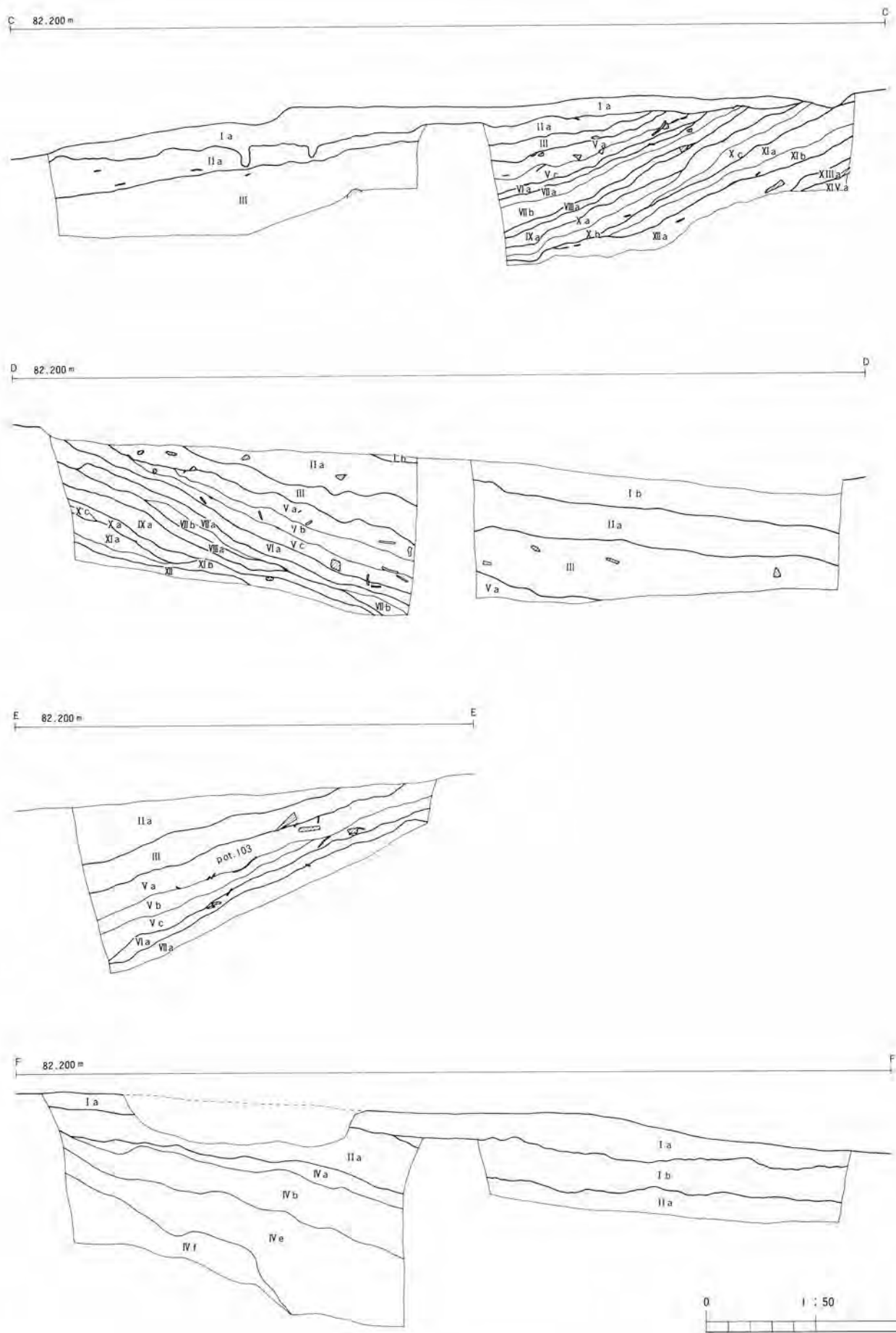
VIII層

褐色土層

IX層

暗褐色土塊

X層



第7図 土層断面図 (2)

質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含むが、Xc層で特に多く混入土を含む。両層とも固さは中程度で、ややしまりが無い。

褐色土層

Xb層は、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。固く、ややしまりが無い。

XI層は炭化物粒を含まない褐色土層であり、2層に細分される。XIa層は、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を多量に含む。固さは中程度で、ややしまりが無い。XIb層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多量に含む。固さしまりともに中程度である。

XI層
褐色土層

XII層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。炭化物粒を多く含む。

XII層
暗褐色土層

XIII層は、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。固さは中程度で、ややしまりが無い。

XIII層
褐色土層

XIV層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊をわずかに含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。

XIV層
暗褐色土層

XV層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊をわずかに含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。

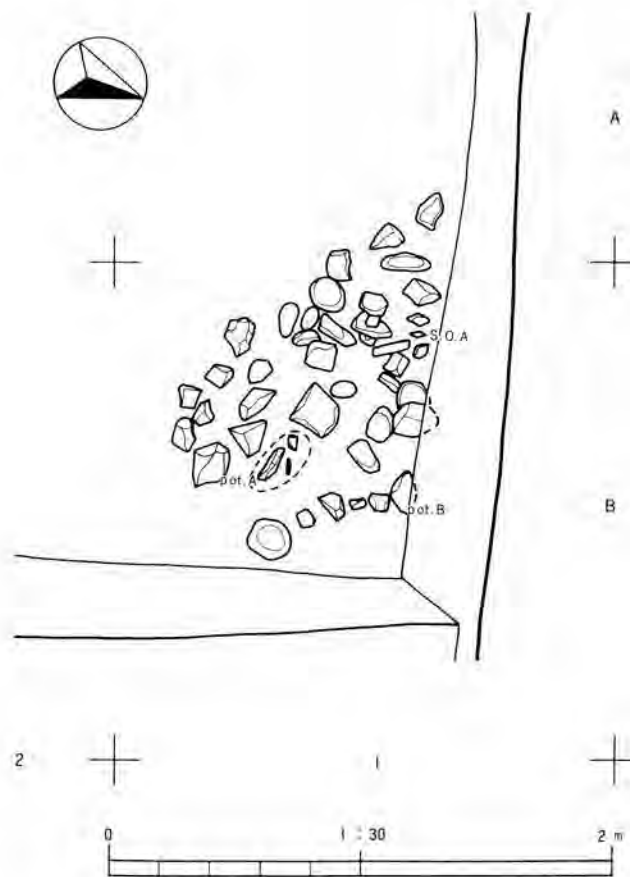
XV層
黒褐色土層

3 検出遺構

(1) 第1号集石跡 (第8図)

今回の発掘調査で検出した唯一の遺構である。B1グリッド北壁の第IVb層上面に、東西1.3m、南北1.0mの範囲で円礫や亜角礫が集積していた。大半が調査区外に延びるため平面形や規模は不明である。遺物包含層中には、他にこのような礫の集積は認められなかった。

第1号集石跡に伴い縄文土器(803, 804)や石棒片(983)、土製品(988)が出土している。この集石の下部には土拵等の掘込みは認められなかった。



4 遺物包含層

(1) 遺物の出土状況

調査区内の土層がI層からXV層に大別されることは前述したとおりである。こ

第8図 第1号集石跡

のうち、Ⅰ層は現代の表土および盛土層である。また、Ⅱ層は江戸時代以降の土層と思われ、陶磁器などが出土している。

Ⅲ層からⅫ層は縄文時代の遺物包含層である。

Ⅲ層とⅣ層は晩期を主体とするが、前述したとおり両層は不整合の関係にある。出土遺物はⅢ層が晩期前半、Ⅳ層は後期～晩期前葉と、やや時間幅がある。両層ともに遺物の出土量はあまり多いとは言えず、中期の遺物などが混入している。

Ⅳ層とⅤ層以下も不整合の関係にある。

Ⅴ層からⅫ層は中期の遺物包含層であり、大木7 a式から大木9式にわたりほぼ連続した堆積状況を呈しているがⅤ層とⅥ層の間にはわずかな断絶がある。Ⅻ層については細片が少量出土したのみで時期は不明である。

遺物はⅤ層・Ⅶ層・Ⅸ層・Ⅹ層・Ⅺ層で出土量が多く、Ⅵ層・Ⅷ層・Ⅷ層・Ⅸ層では少ない。いずれの層も、その層以前の土器片が混入している。また、Ⅺ a層～Ⅹ b層から板状土偶が出土しており特筆される。

Ⅻ層は無遺物層である。

(2) 出土遺物 (第9図～第36図、第38図～第80図)

a 土器 (第9図～第36図、第38図～第67図)

器形や施文技法、さらには型式分類については後述する。以下、各層位毎の概要を記述する。

Ⅻ a層出土土器 (第9図)

1、2は同一個体である。器形はやや大型の深鉢(深鉢A)で、口縁部は大波状を呈する。文様帯は口縁部に集中する。文様帯の上下を平行沈線で区画し、波頂下に縦位の平行沈線を施して文様帯を分割している。また、これらの平行沈線は連続した山形の沈線により加飾される。

3は口縁部の外傾する深鉢(深鉢C)で、口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線や沈線による施文がみられる。

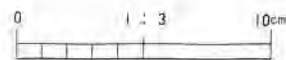
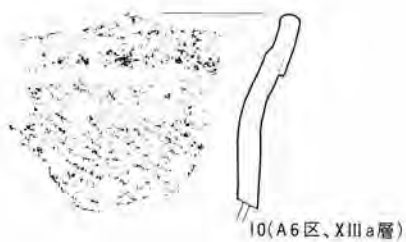
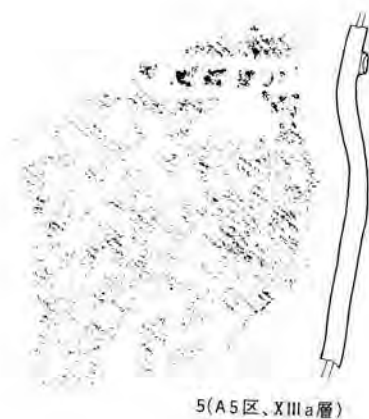
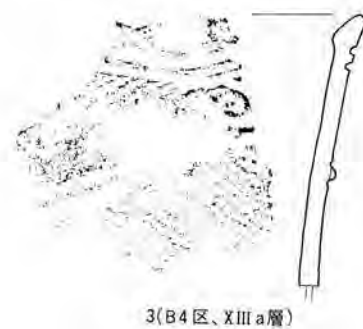
4も口縁部の外傾する深鉢(深鉢C)で、口縁部文様帯に横位の沈線と波状文を交互に施している。

5は頸部に屈曲を有し、体部がやや膨らむ深鉢(深鉢D)で、頸部に横位の粘土紐をめぐらせて、その上面に連続した刻目を施す。

10も頸部に屈曲を有する深鉢(深鉢D)で、口縁部は波状を呈する。主体的な施文は認められないが、口縁部を複合している。

7は口縁部の内湾する深鉢で、口縁部の内外面に粘土紐を貼付けて施文している。

6はノ字形の貼付上に刻目を施すもので、8・9は半裁竹管により縦位の刻目など施すものである。



第9図 出土土器—1 (XIII a層—1)

XII a 層出土土器（第10図～第11図）

25・26はやや大形の深鉢（深鉢A）で、口縁部を肥厚させ台形の波頂を有する。25は波頂下にY字形の沈線を伴う隆起線を施し、横位山形の沈線で加飾している。波頂部には刻目が伴う。26は波頂下に沈線を伴う隆起線により楕円形文を施し、下位に縦位の沈線を伴う隆起線を2条垂下させる。隆起線間には円形の沈線文を2段施し、外側には横位山形の沈線文が伴う。

27も台形の波頂を有する。小形の深鉢（深鉢A）で沈線による施文がみられる。波頂部の口唇部に刻目が伴う。

28は山形の波状口縁を呈する小形深鉢で沈線により施文される。20、21は口縁部を肥厚させて、原体圧痕による刻目を施す。22は単純口縁で、横位3条の原体圧痕文が施される。

11～18・23・24は深鉢の破片であるが、器形は不明である。いずれも原体圧痕により施文される。

11は原体圧痕文を伴う隆起線により横位楕円形の区画文を施し、連結部にはY字形の隆起線を施すものである。

12・13は口縁部を肥厚させるものであり、モチーフは不明である。15は横位の原体圧痕文に小波状文が伴うものである。

16～18は波頂部等に円形の凸部を有するものである。16は凸部に沿って粘土紐を貼付け、下に縦位の粘土紐を貼付けている。

23は沈線及び沈線を伴う隆起線により施文し、隆起線上に縄文を施すものである。

24は隆起線に沿って原体圧痕文を施すものである。

29は口縁部がわずかに内湾する深鉢で、口唇部に粘土紐を貼付けている。33は口縁部に縦位の粘土紐を貼付け、下位に平行沈線をめぐらせるものである。

31は小波状の隆起線を施すもので、端部が渦巻文となっている。

44・45・52は頸部に横位の粘土紐をめぐらせて、その上に連続した刻目や押捺を施すものである。器形は44が頸部に屈曲を有し、体部に膨らみを有する深鉢（深鉢D）で、52が体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する深鉢（深鉢C）である。

19は浅鉢、または鉢形土器で、口縁部文様帯に隆起線と、原体圧痕により施文されるもので下端にC字形の加飾が認められる。

30・49は口縁部を肥厚させる深鉢で、地文のみを施すものである。

32・34～43は半裁竹管により施文されるものであるが、器形は不明である。

32・34は半裁竹管による押引き文などにより施文されるものである。

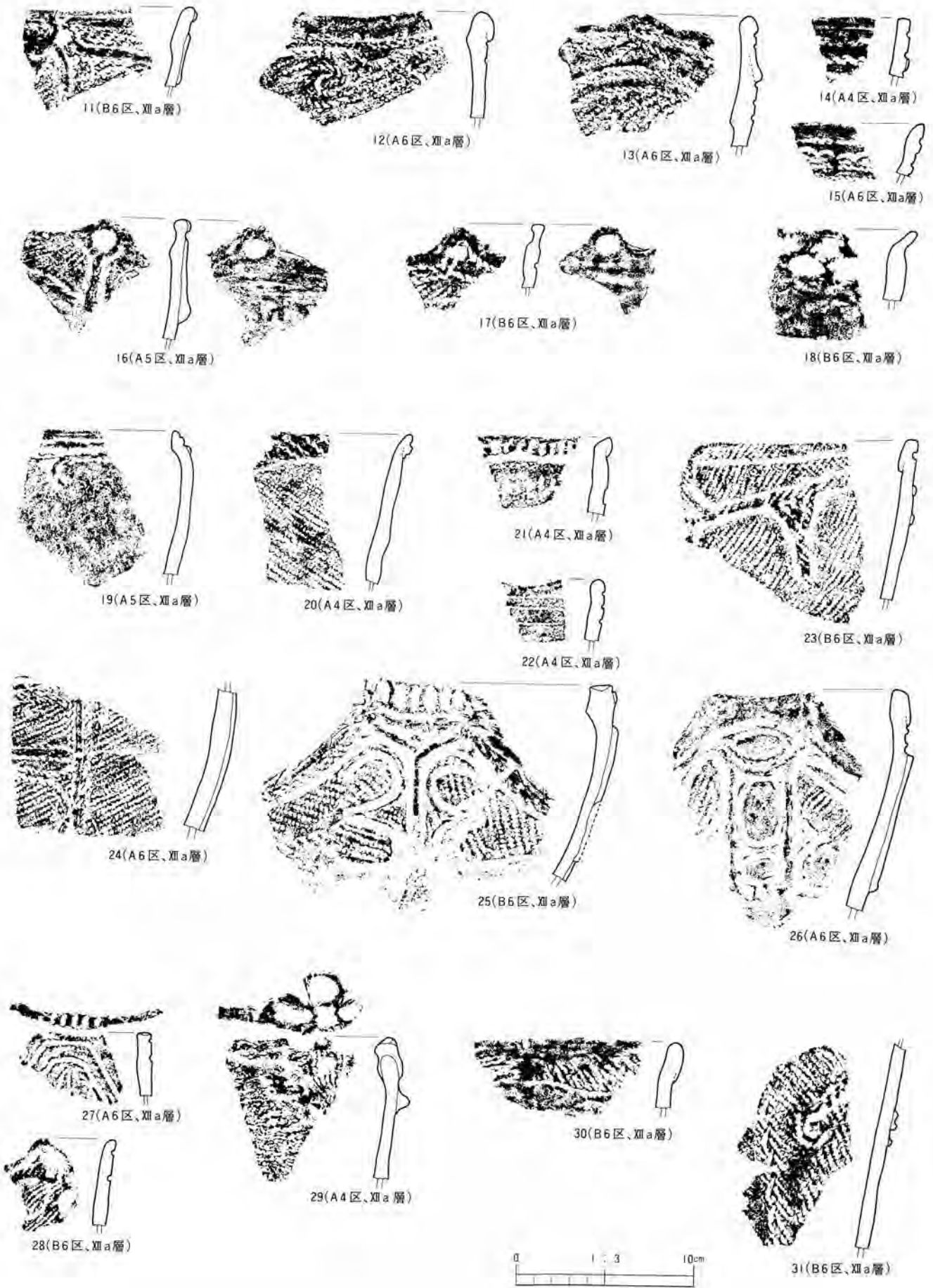
35は刻目を有する縦位の粘土紐を貼付け、周囲に沈線文を施すものである。

41～43は半裁竹管による平行沈線により施文されるものである。

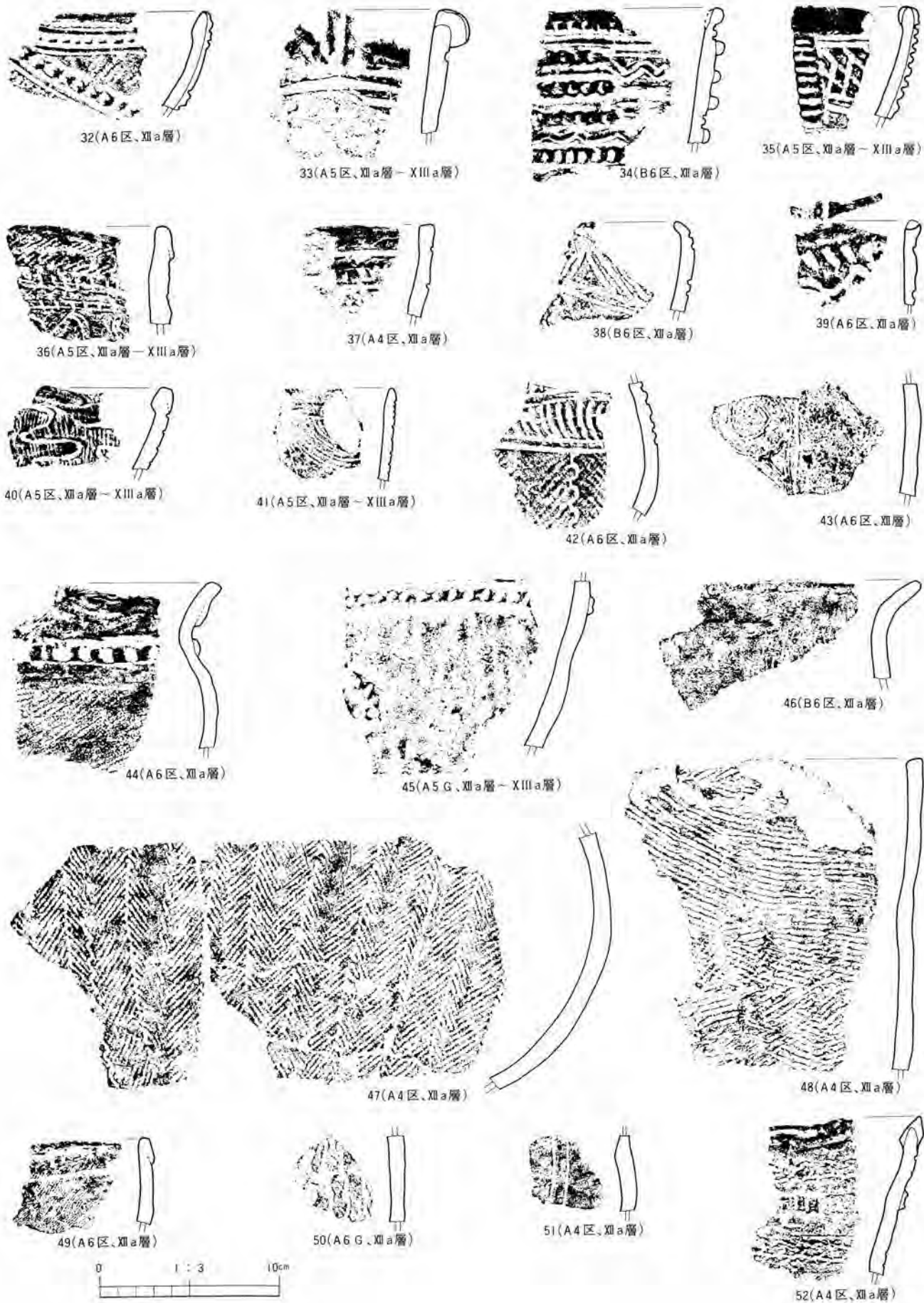
他のものも平行沈線文や刻目等により施文されるものである。

46～48は地文のみを施す破片である。

46は口縁部の外反する深鉢（深鉢D）で撚糸文を地文とするものである。47は体部が強く膨らむ深鉢で縦位の羽状縄文を地文とする。48は口縁部がわずかに外傾する深鉢（深鉢C）で、口縁部がわずかに波状を呈する。無節縄文（ ℓ ）を地文とする。



第10图 出土土器—2 (XIa层—1)



第11図 出土土器-3 (Ⅻa層の-2)

XI b 層出土土器（第12図～第18図）

53・54・69・94～100・140は、口縁部が台形状の波状を呈する深鉢（深鉢A）で、98以外は全て大形である。

53・54は同一個体である。口縁部に4単位の台形状の波頂を有し、頂部に3単位の特記を施す。波頂部には横位1条と、連弧状の原体圧痕文が施される、口縁部文様帯は、横位1条の隆起線で区画し、内部に2条の平行した原体圧痕文により施文されている。欠損により全体的なモチーフは不明瞭であるが、原体圧痕文を隅丸三角形と菱形に施し、文様帯を8分割しているようである。また、これらの頂部には渦巻文が伴う。

69も同様の器形を呈する深鉢（深鉢A）で、波頂部がわずかな凹みを有することで2突起状となる。2条の平行した原体圧痕文により隅丸三角形の区画文を施し、口縁部文様帯を分割しさらに上端に渦巻文を伴うY字文を施すことにより細分割をしている。おそらく文様帯を8単位に分割したものである。分割部分には弧状などの加飾が伴っている。

94～96も同様の器形を呈する深鉢（深鉢A）で、波頂部はほとんど平坦である。いずれも沈線を伴った隆起線により施文されている。

94は波頂部に沈線を伴った隆起線により円文を施し、下位に沈線を伴った隆起線を縦位に2条施す。隆起線間には円文等を配す。波頂間の口縁部文様帯には横位1条の隆起線と、沈線による連弧文（山形文）が施される。これらの施文により口縁部文様帯を4分割しているようである。

95も94に類似するが、94に比較して、波頂下の隆起線間に施文されないことや、連弧文（山形文）が文様帯下端部にのみ施される等、やや省略された施文となる。波頂部に刻目が伴う。口縁部文様帯は8分割されているようである。

96は波頂下の縦位の施文が沈線によってのみ行われ、波頂間の区画文の連結部分に沈線を伴った隆起線を施す。口縁部文様帯の下半が剥落しており不明瞭であるが、53に類似するモチーフかと思われる。

97～100も同様な深鉢（深鉢A）と思われるが、98は小形である。いずれも現存部に沈線のみで施文する。

97・98は波頂部の破片で、波頂に沿った沈線のほかに、縦位の沈線が施される。99は波頂間の破片で、沈線による区画文の端部が接している。また、この部分の体部に縦位2条の波状沈線文が施される。

55・65・66・72・73・75・80～82・89～92・100・122は口縁部が外傾またはわずかに外反する深鉢（深鉢C）である。

55は部分的に不整の波状口縁を呈し、口縁部を肥厚させている。口縁部文様帯は隆起線を用いて横位長楕円形区画文を施すことにより4単位に区画している。区画文の連結部分には原体圧痕文を伴う粘土紐を貼りつけている。区画文内部には隆起線に沿って原体圧痕が施されるほか、その内部にも長楕円形の原体圧痕が施されている。口縁部文様帯の下部には沈線による連弧文が施されるが、区画文の連結部では端部から2条の沈線が垂下する。地文はL-R単節斜縄文を横方向に回転させるが、下端を結束しており、綾絡文が伴っている。

65は55にほぼ類似するものと思われる。66は口縁部に粘土紐を貼付けるものであるが、やは

り55に類似する施文がみられる。

87・89は口縁部文様帯に沈線を伴った隆起線により長だ円形の区画文を施すものである。区画文の連結部には同様の技法によりY字文を施す。両者ともに地文は羽状縄文を縦方向に回転させる。

90・92はいずれも小形の深鉢で、口縁部が波状を呈する。口縁部文様帯に沈線による楕円形区画文等を施す。

72・73・75・80は口縁部文様帯に横位の原体圧痕文のみを施すものである。

81は横位の原体圧痕と縦位の沈線により施文されるものである。82は口縁部文様帯の上下に横位の原体圧痕を施し、内部に沈線による横位2条の連弧文を施すものである。

63・79は頸部が強く屈曲し、体部に膨らみを有する深鉢（深鉢D）である。

63は波状口縁で、口縁部文様帯は大波頂部に隆起線による渦巻文を施し、横位3条の原体圧痕により各々を連絡している。頸部には隆起線による横位の楕円形区画文を施し、渦巻文下部を連結部としている。なお、区画文の連結部は縦位の突起状となり、原体圧痕文が伴う。

79は頸部に横位1条の原体圧痕文を施すものである。

93は頸部に強い屈曲を有し、口縁部が内傾する算盤玉形の器形（深鉢G）を呈する。口縁部文様帯は沈線を伴った隆起線により横位長楕円形区画文を上下2段に施す。下位の区画文中には沈線により連弧文?等が施される。体部文様帯は体部の上半に集中するようで、沈線によりC字文や渦巻文等のやや複雑な施文がみられる。器面は比較的丁寧に調整され、地文は施されない。

101は横位4条の原体圧痕と横位1条の隆起線および、沈線による連弧文にて施文されるものである。122は口縁部を肥厚させて、その上に「く」字形の刻目を連続させるものである。

67～70・71・74・76～78・91・102・104～107は口縁部が内湾気味となる深鉢であるが、器形は不詳である。

67～70は隆起線、原体圧痕、沈線が複合した施文となるもので、67は渦巻文、68は横位楕円形区画文等を施すものである。70は隆起線と原体圧痕により斜位の施文がみられるがモチーフは不明である。

71、74、76～78は原体圧痕のみにより施文されるもので71は口縁部文様帯に渦巻文や連弧文等を組み合わせたやや複雑な施文となるものである。他のものは口縁部文様帯に横位の原体圧痕文を数条施すものである。

91は口縁部文様帯に沈線を伴った隆起線により横位長楕円形の区画文を施すものである。

102・104～106はいずれも沈線のみにより施文されるものである。いずれも横位の沈線と連弧文（山形文）にて施文される。102は口縁部に小突起を有するもので、口縁部文様帯の施文が他のものより複雑となる。深鉢Cに類似する器形であろうか。

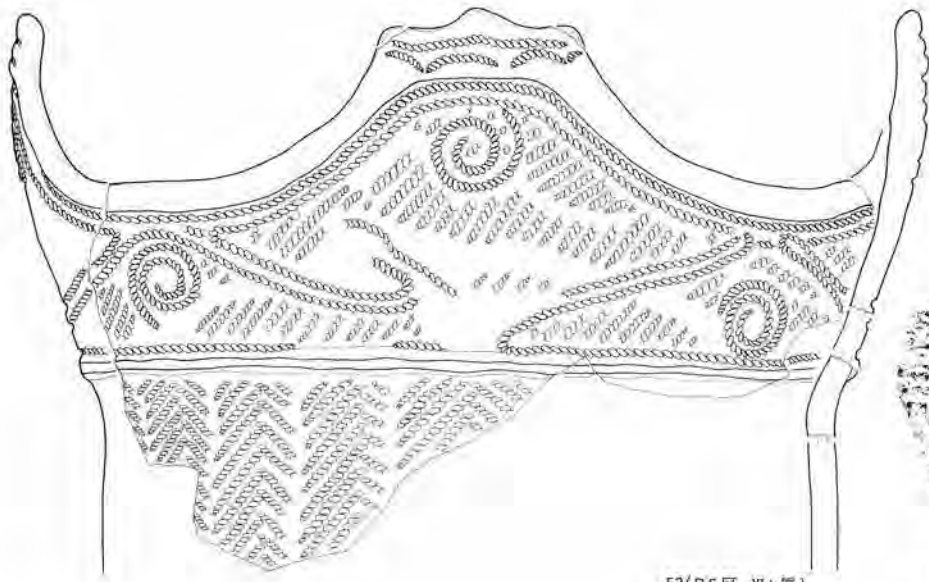
107は、沈線を伴った隆起線により横方向に転開する施文がみられる。

56・83～86・108～110は体部破片等であり、器形・モチーフともに不明瞭なものである。

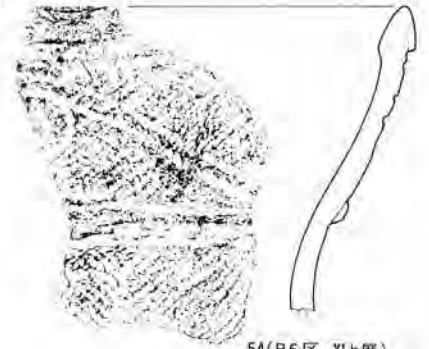
56は現存部上端に沈線による施文がみられる。

83～86は原体圧痕を施すものであるが、83・85は沈線を伴っている。

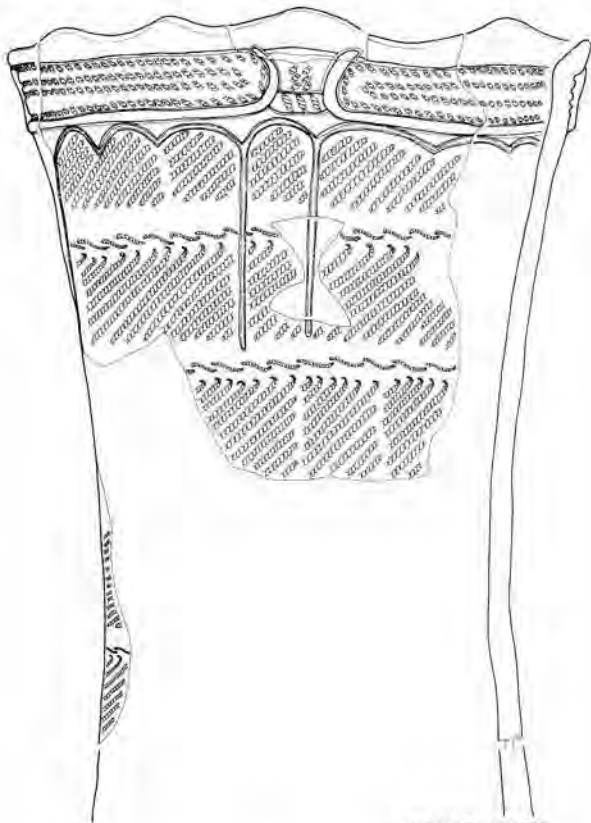
108は原体圧痕にて施文する口縁部破片、109・110は沈線にて施文するものである。



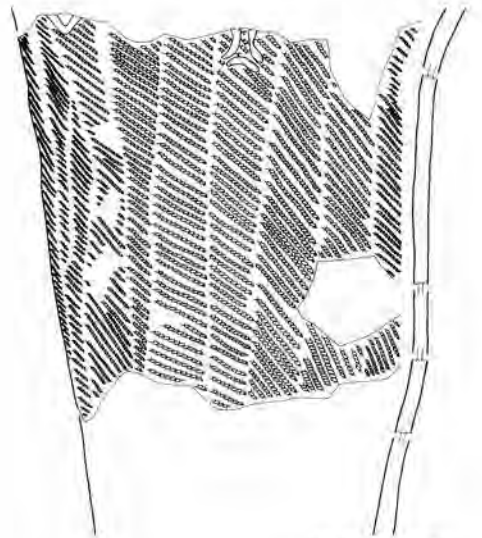
53(B6区、XIb層)



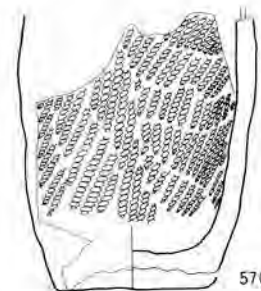
54(B6区、XIb層)



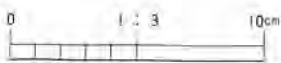
55(B6区、XIb層)



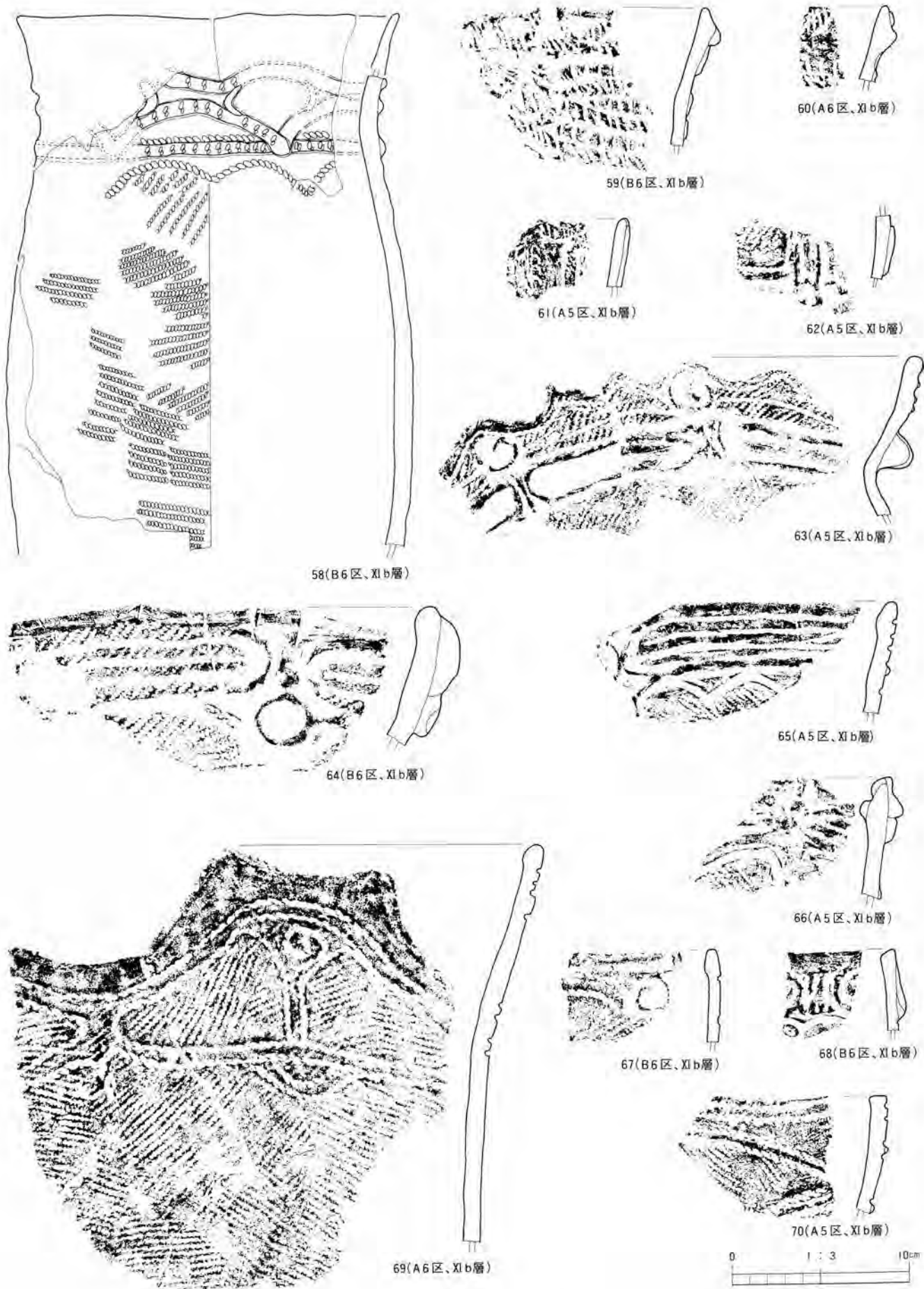
56(B6区、XIb層)



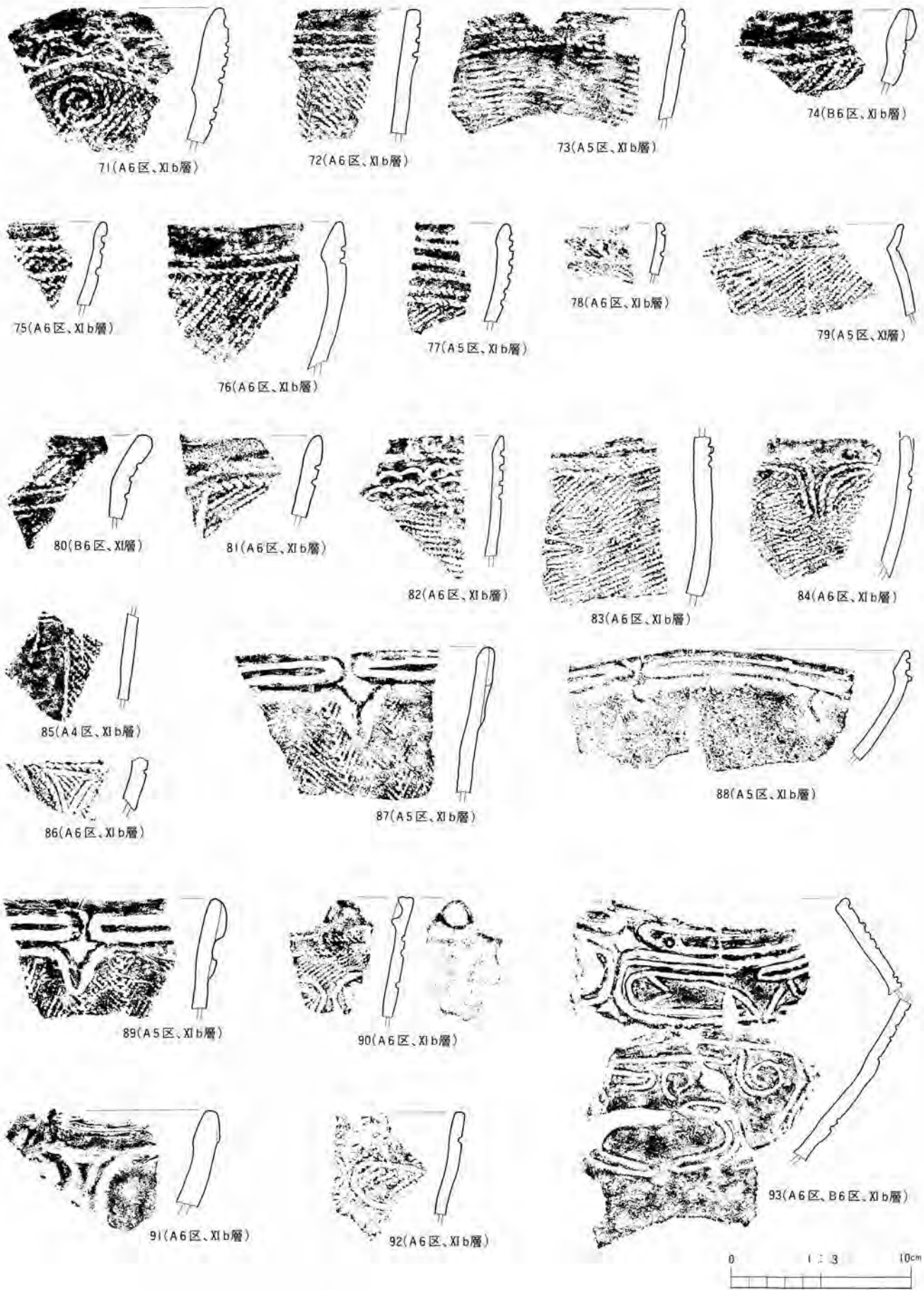
57(B6区、XIb層)



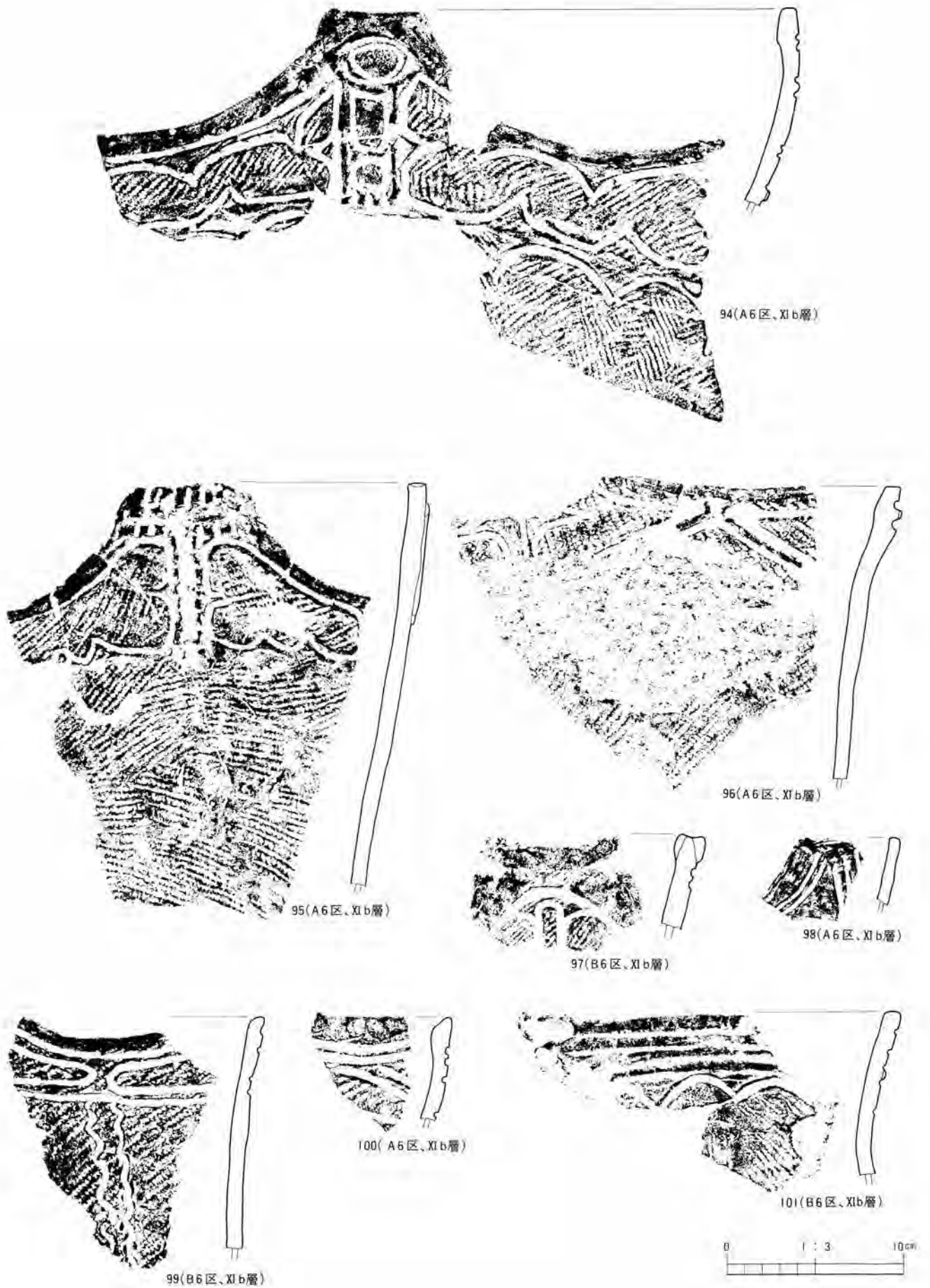
第12図 出土土器—4 (XIb層—1)



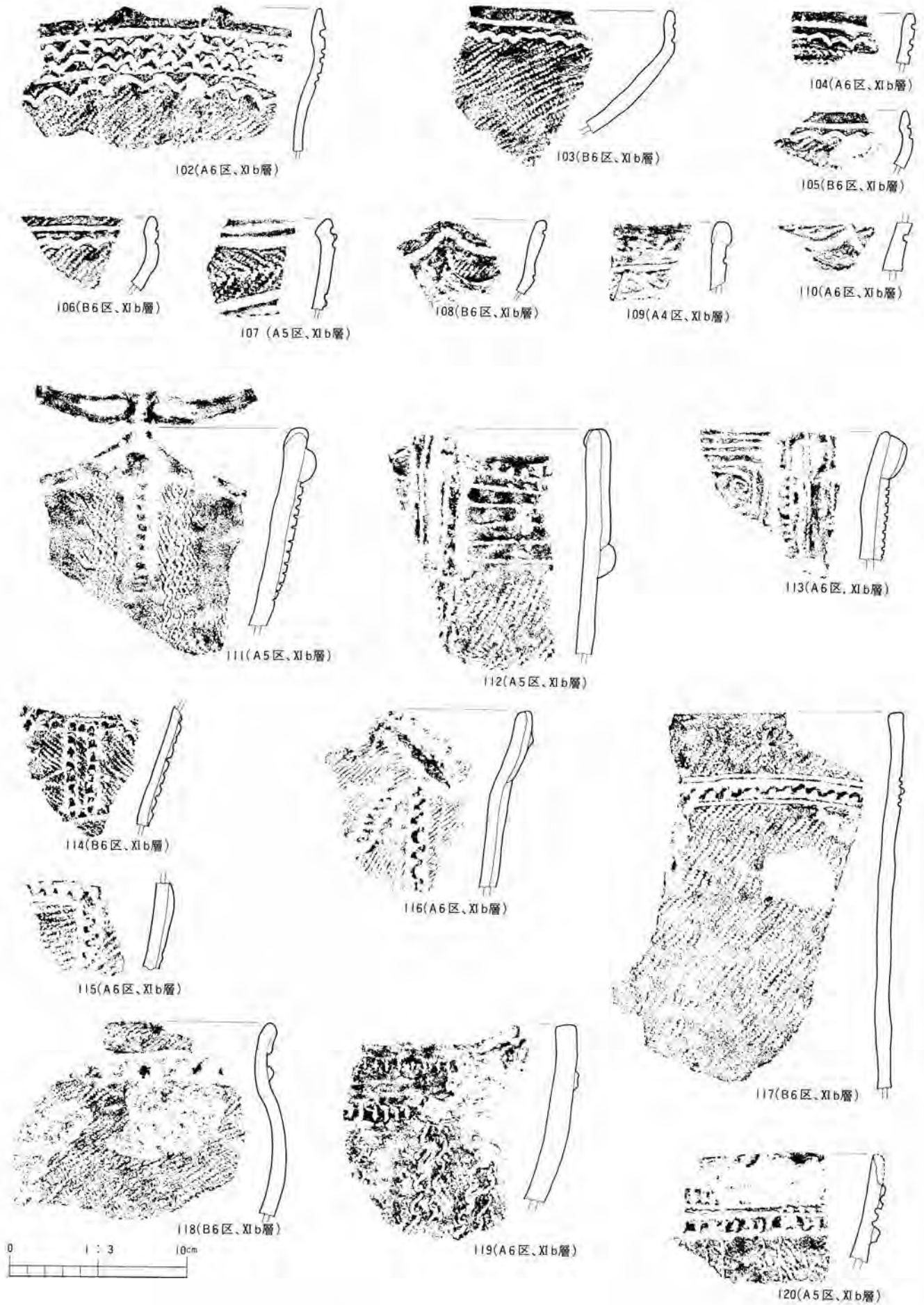
第13图 出土土器—5 (XI b層—2)



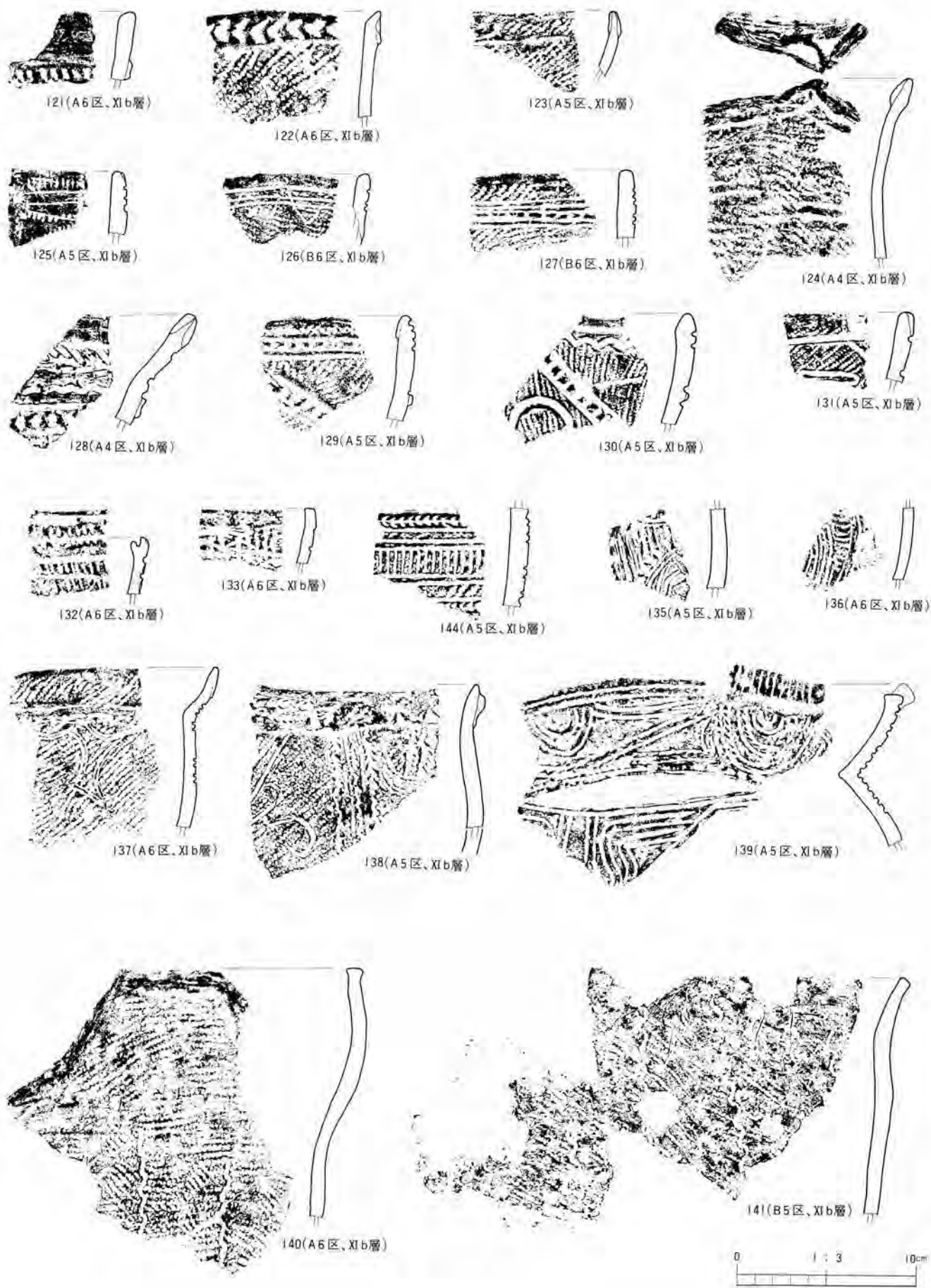
第14图 出土土器—6 (XIb層—3)



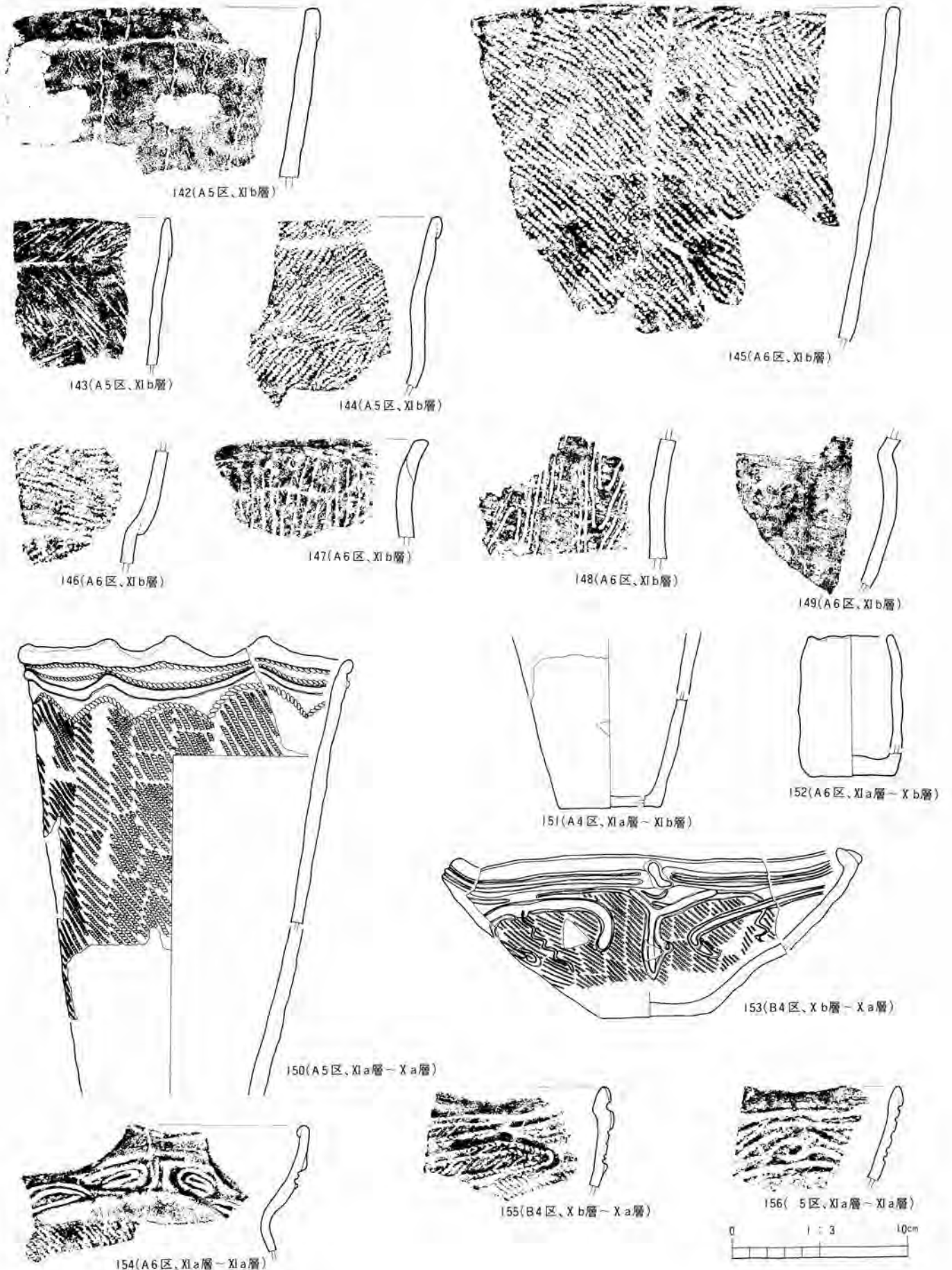
第15図 出土土器—7 (XIb層—4)



第16图 出土土器—8 (XIb層—5)



第17图 出土土器—9 (XIb層—6)



第18图 出土土器—10 (XIb層—7、XIa層~XIa層—1)

58～60は円筒形を呈する深鉢（深鉢Ⅰ）であるが、58によると頸部がゆるやかに屈曲し、口縁部がわずかに外反するようである。

58は口縁部文様帯下部に横位1条の粘土紐を施し、この上部に粘土紐を連弧状に貼付けた施文が展開している。粘土紐の上面には刻目上の原体圧痕が伴う。横位1条めぐらせた粘土紐の上部には横位1条の、下部には連弧状の原体圧痕が伴っている。

59・60もほぼ同様であるが、口縁部上端に弧状の粘土紐を貼付けている。粘土紐上面と粘土紐間には刻目状の原体圧痕が伴っている。

61は粘土紐上面に刻目状の原体圧痕文を施し、これに沿って馬蹄形の原体圧痕文が伴う。

64、88、103は浅鉢の破片である。

64はやや大形で鉢形の器形の可能性もある。口縁部文様帯に隆起線を用い長楕円形の区画文を施し、内部に横位の原体圧痕を施す。区画文の連結部を突起状とし、下部に隆起線により円文を施す。

88は口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線により長だ円形の区画文を施す。区画文の連結部等の下部には隆起線によるC字文で加飾される。体部は無文である。

103は口縁部文様帯に横位1条の沈線と小波状の沈線を施す。

115～117は小波状の隆起線により施文される深鉢であるが、モチーフは一様ではない。

111～114は刻目を有する粘土紐を縦位に施す深鉢で、112・113は原体圧痕による施文が伴う。

118～121は頸部にめぐらせた粘土紐の上に刻目等を施すものである。

125～131は沈線等により施文されるが、前述したものとはややモチーフを異にするものである。

132～139は半裁竹管により施文されるものである。

57・123・124・141～149は地文のみを施すものである。

57はR-L単節斜縄文を施す小形深鉢である。

123・124・143～146は口縁部を肥厚させて縄文のみを施すものである。

141・145は単純口縁で縄文のみを施すものである。141は綾絡文が伴う。

147は撚糸文を、148は木目状撚糸文を、149は櫛目文を施すものである。

XI a層～X a層出土土器（第18図～第22図、第67図）

XI a層とX層は本来層相を異にするが、いずれの層もほぼ同様な地点に堆積しており、また、降雨や湧水により判別ができなくなってしまった。同様にX層中の分層発掘も不可能な状態であった。したがって、ここではXI a層、X c層、X b層、X a層の出土遺物を一括して説明する。ただし、土層断面の観察によると比較的層厚があるのはXI a層とX a層で、遺物の大半は両層からの出土と思われる。

883～885は土層断面にてXI a層より採集した遺物（第67図POT.101）である。

883・884は同一個体と思われ、口縁部が台形状の大波状を呈する深鉢（深鉢A）で、口縁部文様帯に沈線による施文がみられる。波頂部に渦巻文を施し、下位に縦位2状の沈線を施すことにより、文様帯を4分割している。また、文様帯下端部には横位の連弧文を施す。

885は口縁部文様帯に横位の沈線と連弧文を重層的に施文するものである。

これらの遺物の組合わせは、XIII a 層のそれに共通するものである。

154・164・165・221・225は口縁部が台形状の大波状を呈する深鉢（深鉢A）である

154はやや小形であるが、口縁部文様帯に原体圧痕を伴う隆起線文により区画文を施す。

164、165、225は大形で、口縁部文様帯に原体圧痕を伴う隆起線文を施文するものである。

164は波頂下にY字文を2条施し、波頂間に円文と山形文を組み合わせて施文している。これらにより口縁部文様帯は8分割される。165は波頂下にY字文を1条施し、口縁部文様帯を8分割している。225も同様に縦位の隆起線文や口縁に沿った原体圧痕文が施されるもののモチーフの全容は不明である。221は刻目を伴う粘土紐にて施文されるものである。

160も同様の深鉢（深鉢A）であるが、口縁部文様帯に原体圧痕による弧状文を施文している。

166も同様の深鉢（深鉢A）であるが、口縁部文様帯に刺突を伴う平行沈線にて施文している。

209はやはり同様の深鉢（深鉢A）であるが、波頂部に円孔が穿たれる。現存部下端に沈線による施文が認められる。

202・204・208・211・212も同様の深鉢（深鉢A）であるが、口縁部文様帯に沈線にて施文するものである。器形・モチーフともに前述した883・884に類似する。

203も同様の深鉢（深鉢A）であるが、沈線を伴った隆起線により大略方形の区画文を施す。

191～197は原体圧痕による刻目を有する粘土紐で施文されるものである。器形は191～194が口縁部に台形状の大波頂を有する深鉢（深鉢A）である。

191～192は波頂下に縦位2条の粘土紐を施すもので、文様帯の上下両端にも同様な技法による施文がみられる。また、部分的に原体圧痕による馬蹄形の圧痕文なども認められる。

194・195・197も同様の技法により施文されるが、モチーフがやや異なるようである。

196も同様の技法によるが、円形の連続刺突文が伴う。

157～159・200は口縁部文様帯付近に膨らみを有するキャリパー形の深鉢（深鉢B）である。

200は口縁部文様帯を上下に重層化し、上部は横位に溝状の凹部をめぐらし、縦位の連続刺突文で充填する。また、下部の文様帯は上下の境界線を横位1条の沈線で区画した上で、内部に長楕円形の区画文を施す。区画文の連続部分には沈線による加飾が伴う。

157～159はいずれも口縁部文様帯に原体圧痕を伴う隆起線により隅丸三角形の区画文を施すが、157のみは渦巻文等を伴う。また、157の口縁部文様帯は重層化しており、上部の文様帯には原体圧痕による波状文が施文される。

150・177・183・185・219は口縁部が外傾またはわずかに外反する深鉢（深鉢C）である。

150は肥厚させた口縁部に部分的に山形の突起を有するもので、口縁部文様帯に原体圧痕を伴う隆起線を弧状に施すことにより横位D字形の区画文を作出する。口縁部文様帯の下部には原体圧痕による弧状文を施す。

219は口縁部文様帯に沈線による渦巻文等を施す。

185は口縁部文様帯に原体圧痕を伴う隆起線を横方向に施す。177は小形で、口縁部文様帯に原体圧痕による渦巻文等を施す。183もやや小形である。口縁部文様帯に原体圧痕を施すが一部区画的なモチーフとなる。

167・174・229・230は頸部に屈曲を有し、口縁部が外反する深鉢（深鉢D）である。

167は口縁部文様帯を肥厚させ、原体圧痕により横位長楕円形区画文を施すものである。

174は口縁部文様帯を上下に重層化し、上部の文様帯には上面に原体圧痕による刻目を施す粘土紐を貼付け、波状のモチーフを施文する。また、これに沿って原体圧痕文が施される。下部の文様帯は上面に原体圧痕による刻目を施す粘土紐を貼付け、横位長楕円形区画文を施す。

229・230は頸部に横位に粘土紐をめぐるものである。229は波状口縁で、粘土紐の上面に原体圧痕による円形の刻目を施す。230は粘土紐の上下に刺突を施し小波状とする。

155・156・161・162 168～173・176・180～182、184・186～190・199・201・202・213～216・218は口縁部が内湾するものである。深鉢Fや鉢などの器形が考えられる。

168～173は口縁部文様帯に原体圧痕を伴う隆起線により横位長楕円形区画文を施すものである。171～173は区画文の連結部に三角文を施すことにより区画文がやや変形している。

169・170は口縁部文様帯を重層化し、上部文様帯に横位長楕円形区画文を施す。区画文の連結部には原体圧痕を伴う突起を施す。下部文様帯には原体圧痕文による施文がみられる。

161・162は波状口縁を呈し、口縁部から体部にかけて原体圧痕による渦巻文等を施すものである。

176・180～182は口縁部文様帯に横位の原体圧痕文や隆起線文を施すものである。180のみは口縁部に円形の貼付文を伴う突起が認められる。176・182の口縁部文様帯の下部には原体圧痕による施文が伴っている。

184・186～190は口縁部文様帯に横位に数条の原体圧痕文を施すものである。

201は口縁部文様帯に沈線を伴った隆起線により横位長楕円形の区画文を施すが、区画文の端部がやや変形している。また、区画文の連結部にはY字文を加飾している。

199・213～216・218は口縁部文様帯に沈線を施すものである。

199は渦巻文等を施すものである。

213～216・218は口縁部文様帯に横位数条の沈線を施し、最下段に連弧文、鋸歯状文等を施すものである。213・214は沈線間に刻目を施すものである。

222～224・226は刻目を伴う粘土紐にて施文されるもので、器形は口縁部が内湾気味のもの、わずかな屈曲を有するものなどがある。破片でもありモチーフは不明であるが、一様ではないものと思われる。

227・228は刺突により小波状になった粘土紐を施すもので、縦位のものと同横位のものの2者がある。

163・178・217・220はいずれも口縁部下端～体部の破片である。

163・178は原体圧痕と隆起線による施文がみられる。

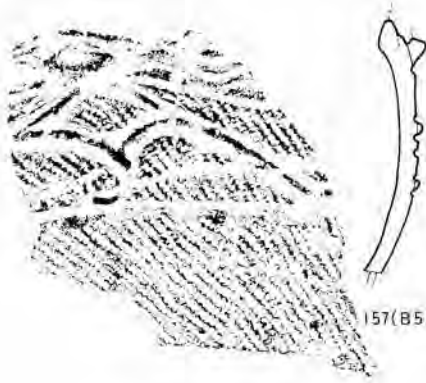
217は横位の沈線と連弧文を施すもので、883・884に類似するものである可能性が大きい。

220は体部に沈線による縦位の波状文を施すものである。

151・152は無文の小形土器である。152は底部から体部にかけて直に立ち上がり口縁部がわずかに内湾するものである。

232は口縁部に円文を伴う小突起を有するもので、地文として羽状縄文を横方向に回転する。

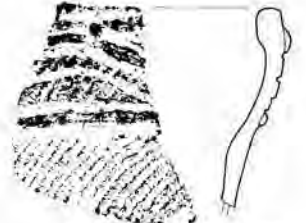
153・198・231は浅鉢である。



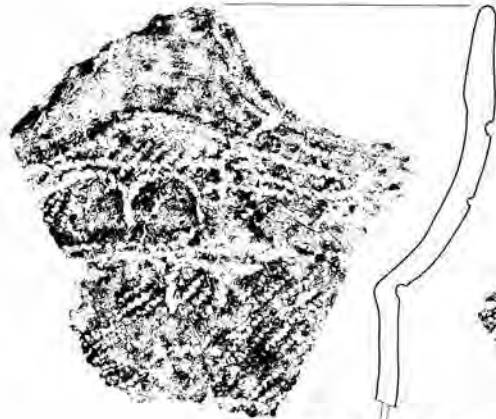
157(B5区、XIa層-Xa層)



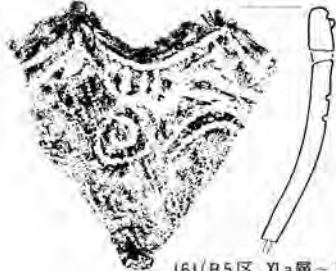
158(A5区、XIa層-Xa層)



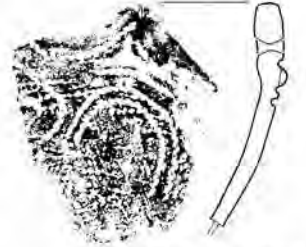
159(A5区、XIa層-Xa層)



160(A5区、XIa層-Xa層)



161(B5区、XIa層-Xa層)



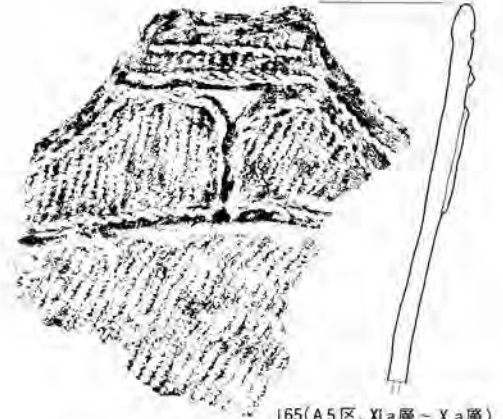
162(A5区、XIa層-Xa層)



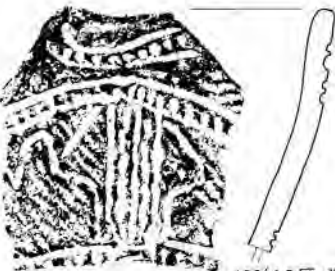
163(A6区、XIa層-Xa層)



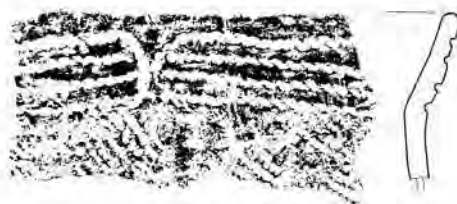
164(A6区、XIa層-Xa層)



165(A5区、XIa層-Xa層)



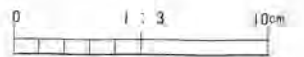
166(A5区、XIa層-Xa層)



167(A6区、XIa層-Xa層)

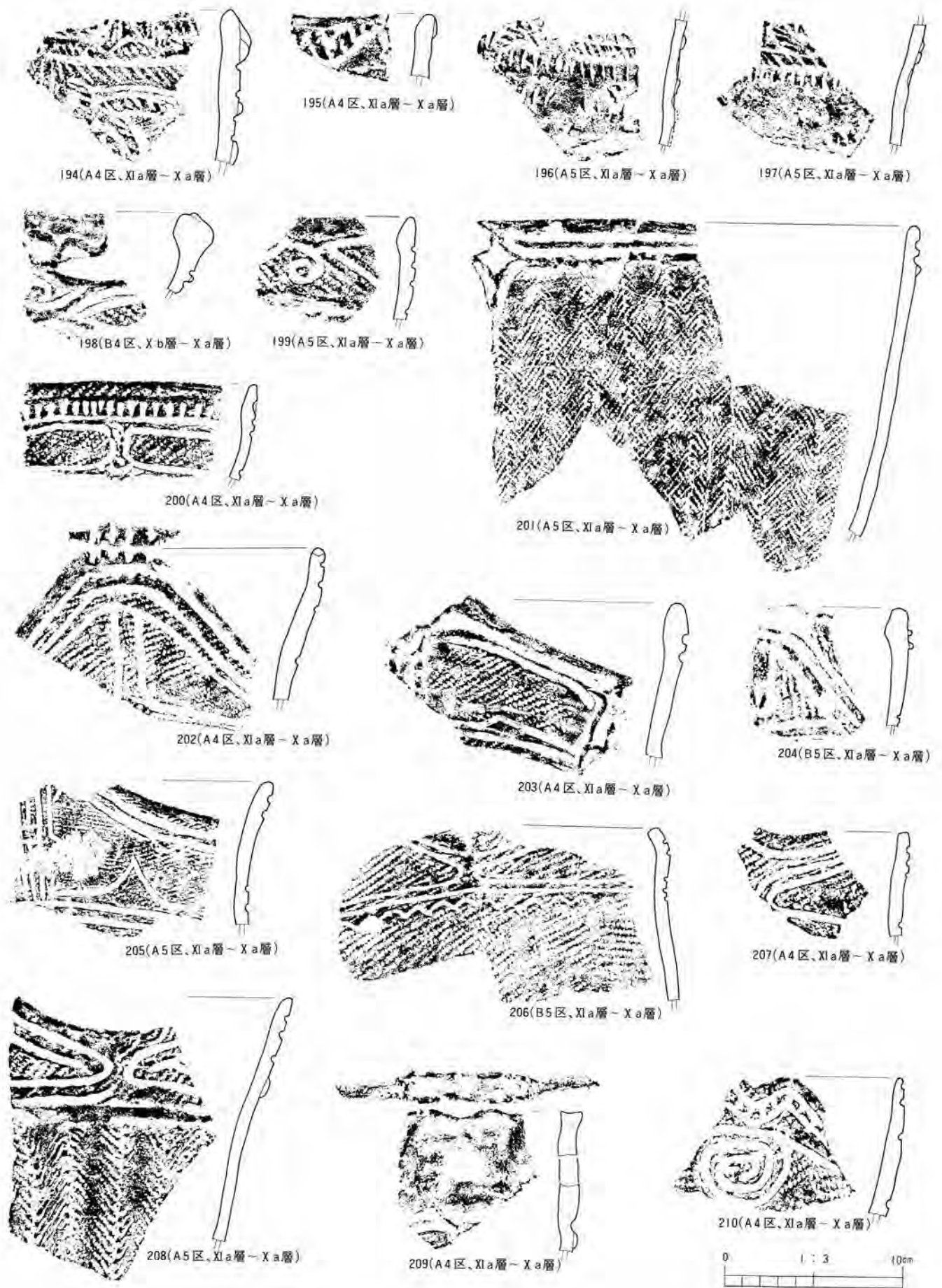


168(A4区、XIa層-Xa層)

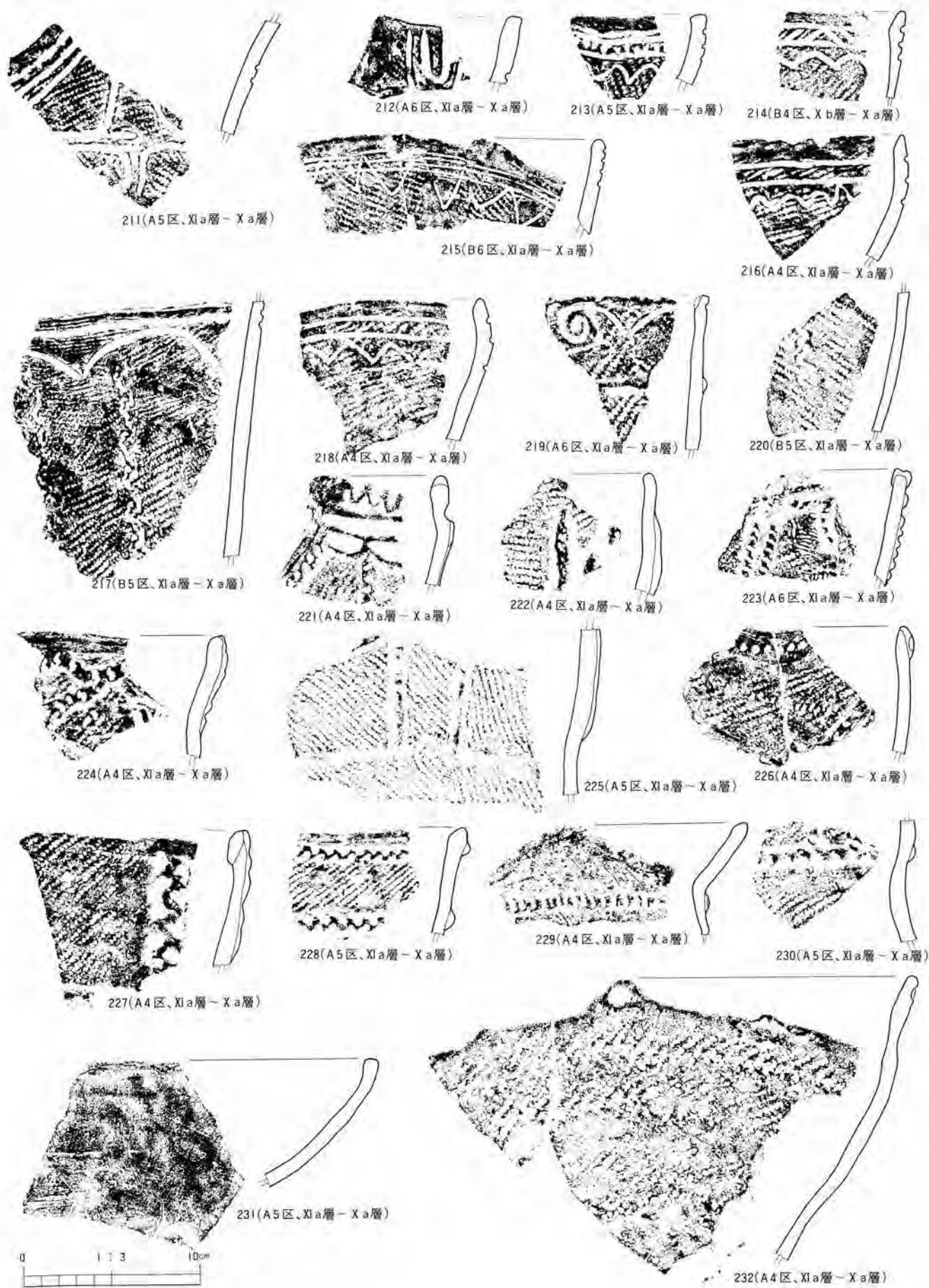




第20图 出土土器—12 (XIa層~Xa層—3)



第21图 出土土器—13 (XIa層~Xa層—4)



第22图 出土土器-14 (XIa層~Xa層-5)

153は口縁部に沈線を伴う隆起線により区画文を施すが、やや変形している。区画文の連結部には突起が伴う。体部には沈線を伴う隆起線によりY字文、横位C字文(?)を施すほか、沈線による縦位波状文などが施される。

198は口唇部に隆起線により施文し、口縁部に沈線や隆起線により施文するものである。

231は無文の浅鉢で、口縁部がわずかに内湾気味に立ち上がる。

IX a 層出土土器 (第23図～第27図)

249・256・257・264・265・267・268・277・284・287は口縁部がわずかに内湾し台形状の波頂を有する深鉢(深鉢A)である。

256は屈曲が著しいために別な器形の可能性も考えられる。台形状から変化したと思われる撥形の波頂を有し、中央部に楕円形の孔を穿つ。口唇部付近に波状の隆起線を施す。

口縁部文様帯は上下に重層化し、上部文様帯は隆起線を用いて作出した楕円形区画文内部に2段の連続刺突文を充填する。下部文様帯は沈線による楕円形区画文を施す。以下の施文は不明である。

277も波頂部に円孔を穿つもので、口縁部文様帯に沈線による施文がみられる。

246・267・268は原体圧痕を施すもので、原体圧痕により隅丸三角形あるいは山形の区画文を施し、内部に小渦巻文や逆U字文などを施している。いずれも類似性の強いモチーフである。

257は隆起線による縦位の施文と沈線による連弧文などで施文されるが、モチーフの全容は不明である。

287も隆起線と沈線による施文であるが、隆起線上には原体圧痕による刻目が伴う。また、沈線による渦巻文なども認められる。

264・284は波頂部に粘土紐を貼付けて、上面に縄文を施すものである。

265は刺突を伴った小波状の隆起線などで施文されるものである。

233・241・250・251・261・274・276は口縁部文様帯に膨らみを有するキャリパー形深鉢(深鉢B)である。

233は逆ノ字形の貼付けを有する突起を4単位施す。口縁部文様帯は上下に重層化し、上部文様帯は溝状の凹部を原体圧痕を伴う縦位2条の隆起線で4単位に区画し、内部に原体圧痕による波状文を施す。下部文様帯は原体圧痕を伴う隆起線を波状に施し、波頂部に原体圧痕による渦巻文や棘状文などを施す。

241は口縁部文様帯に粘土紐を横位波状に貼付け、上面に縄文を施す。

250は口縁部文様帯を重層化するもので、上部文様帯は横位の溝状の凹部に刻目状の原体圧痕文を施す。下部文様帯は原体圧痕により楕円形区画文を施す。

251は口縁部文様帯に原体圧痕による楕円形区画文を施す。

261は口縁部文様帯に沈線を横位2条施し、下位に鋸歯状文を施す。

253・269・270・272は体部が直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する深鉢(深鉢C)である。いずれも原体圧痕にて施文される。

269は口縁部に突起を有し、口縁部文様帯に横位2条の原体圧痕を施し、下位に鋸歯状文を

施す。

270は口縁部文様帯に横位3条の原体圧痕と横位1条の連弧文を施す。272は横位2条の原体圧痕を施す。

285・286は口縁部が著しく外反する深鉢で、口縁部は大波状を呈する。深鉢Aにもやや類似する。口縁部文様帯に平行沈線により施文する。

234・243は頸部に屈曲を有し、口縁部が外反する深鉢で、体部の膨らみ具合により2者に分けられる。

234は体部のほぼ中央に膨らみを有する（深鉢D）。口縁部は2つの大波頂を有し、波頂間には山形の小突起が2単位施される。大波頂部には不整の小突起が伴い、また、波頂部に粘土紐を貼付けた円文を施す。口縁部文様帯は粘土紐をX字形に貼付けることにより横位長楕円形の区画文を作出し、内部に横位3条の原体圧痕文を施す。また、文様帯下部には沈線による連弧文を施す。

243は体部の膨らみが比較的小さい深鉢（深鉢D）である。口縁部に台形状の波頂を4単位施すのみで、口縁部から体部にかけてL-R単節斜縄文のみを施す。

235・260・273・275・279～281・282は口縁部が内湾気味の深鉢（深鉢F）であるが一部鉢形（鉢）などを含む可能性がある。

235はやや大形で、口縁部文様帯をやや肥厚させた上に横位3条の原体圧痕を施す。また、口縁部文様帯下部には横位の突起が4単位施される。体部には地文として通常の単節斜縄文とL撚りの不整な縄文が施される。

275は口縁部文様帯に沈線により横位楕円形区画文等を施し、下部の文様帯にも沈線により施文するものである。

260・279～281はいずれも口縁部文様帯に横位2条の沈線と鋸歯状文を施すものである。

279は体部にも縦位の鋸歯状文を施す。283も類似する施文がみられる。

281は沈線間に円形の連続刺突が伴う。

273・282は口縁部文様帯に横位2条の原体圧痕文を施すものであるが、282は下部に沈線による横位の鋸歯状文が伴う。

262・263は器形は一樣ではないが、頸部にめぐらせた粘土紐上面に押捺を施すものである。

252・254・255・258・259はいずれも深鉢の体部破片等で器形の不明なものである。

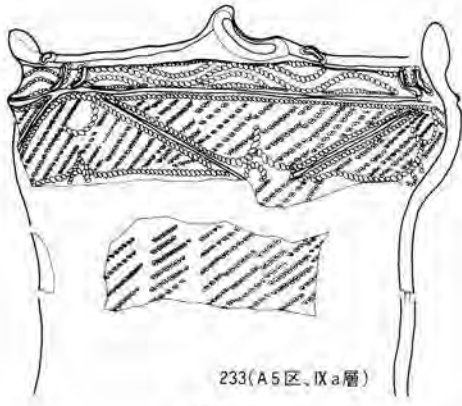
252は隆起線と原体圧痕により施文されるものである。258・259は隆起線と沈線により施文されるものである。254は原体圧痕により馬蹄形圧痕文等を施すものである。255は沈線により格子目状文が施されるものである。

236・240・278は鉢形を呈する土器であるが、口縁部がゆるやかに内湾するものと屈曲を有するものの2者がある。

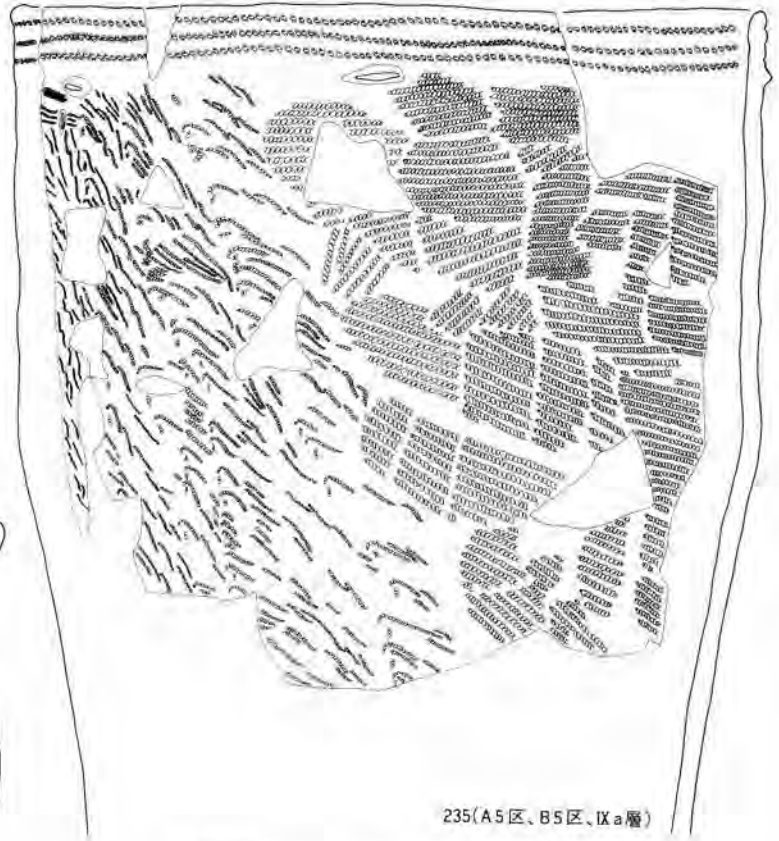
236は口縁部の内湾する鉢で口縁部文様帯に横位2条の原体圧痕を施す。

278も同様な器形で、口縁部文様帯に沈線による横位楕円形区画文を施すが、端部がやや変形している。また、区画文内部には施文されない。

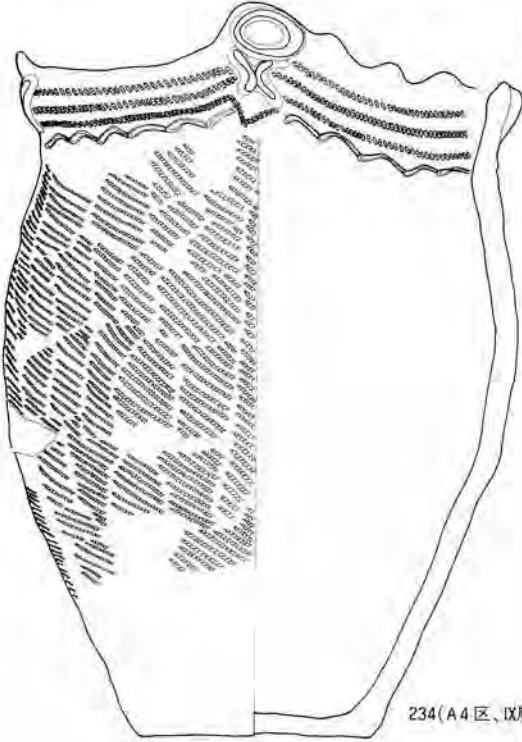
240は屈曲を有するもの（鉢）で、口縁部に台形状の波頂を有する。口縁部文様帯には横位2条の原体圧痕文を施す。



233(A5区、IXa層)



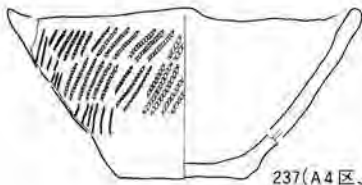
235(A5区、B5区、IXa層)



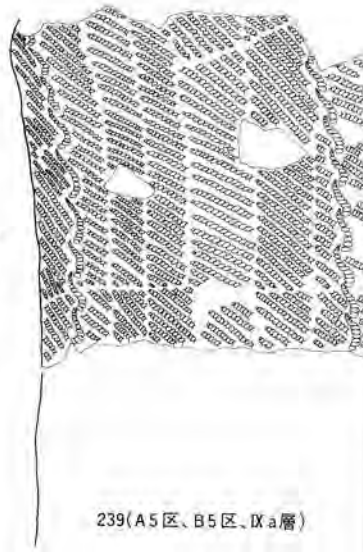
234(A4区、IX層下部)



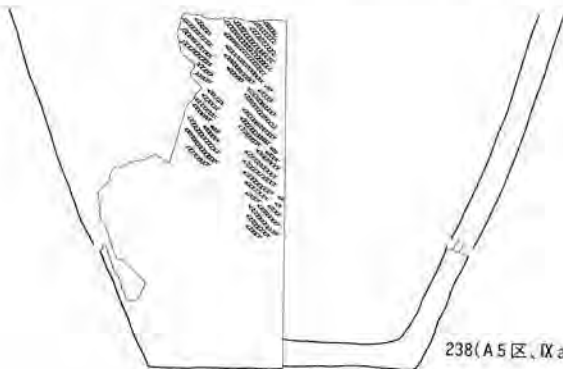
236(B5区、IXa層)



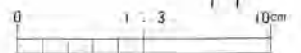
237(A4区、IX層下部)



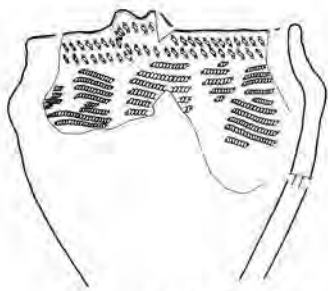
239(A5区、B5区、IXa層)



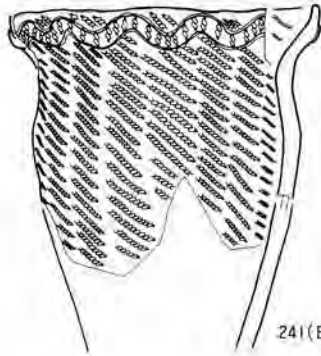
238(A5区、IXa層)



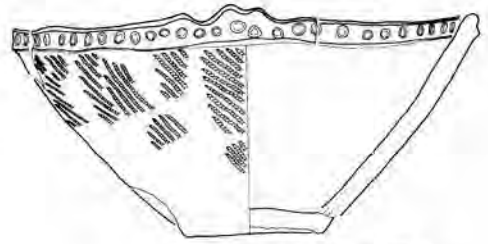
第23図 出土土器—15 (IXa層—1)



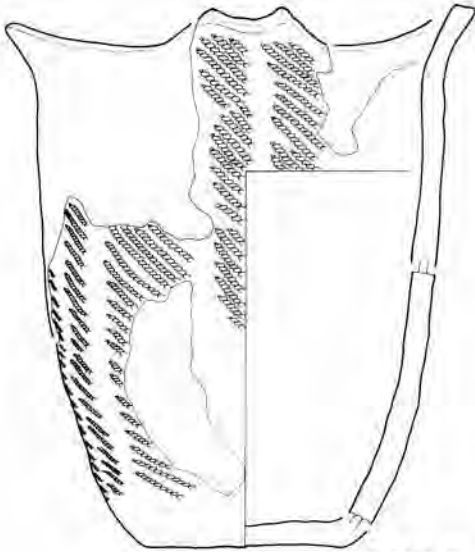
240(B6区、IXa層)



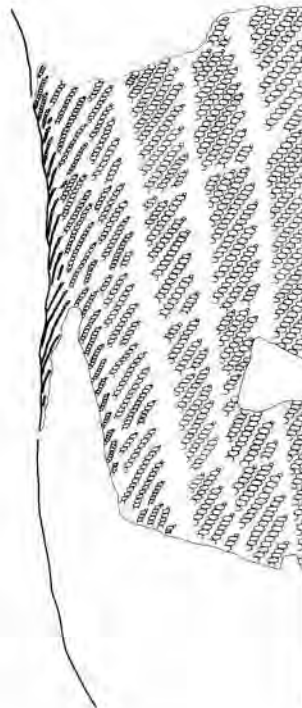
241(B6区、IXa層)



242(A4区、IXa層)



243(B5区、IXa層)



246(B6区、IXa層)



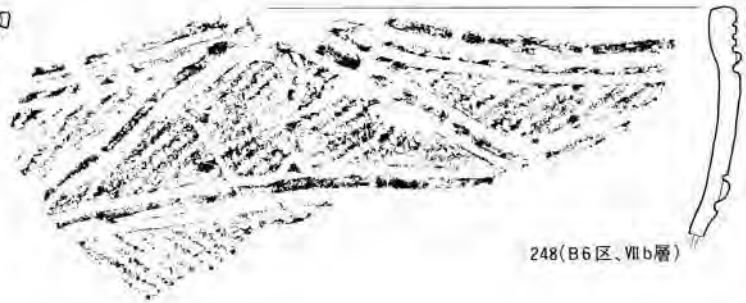
244(B5区、IXa層)



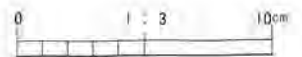
245(B5区、IXa層)



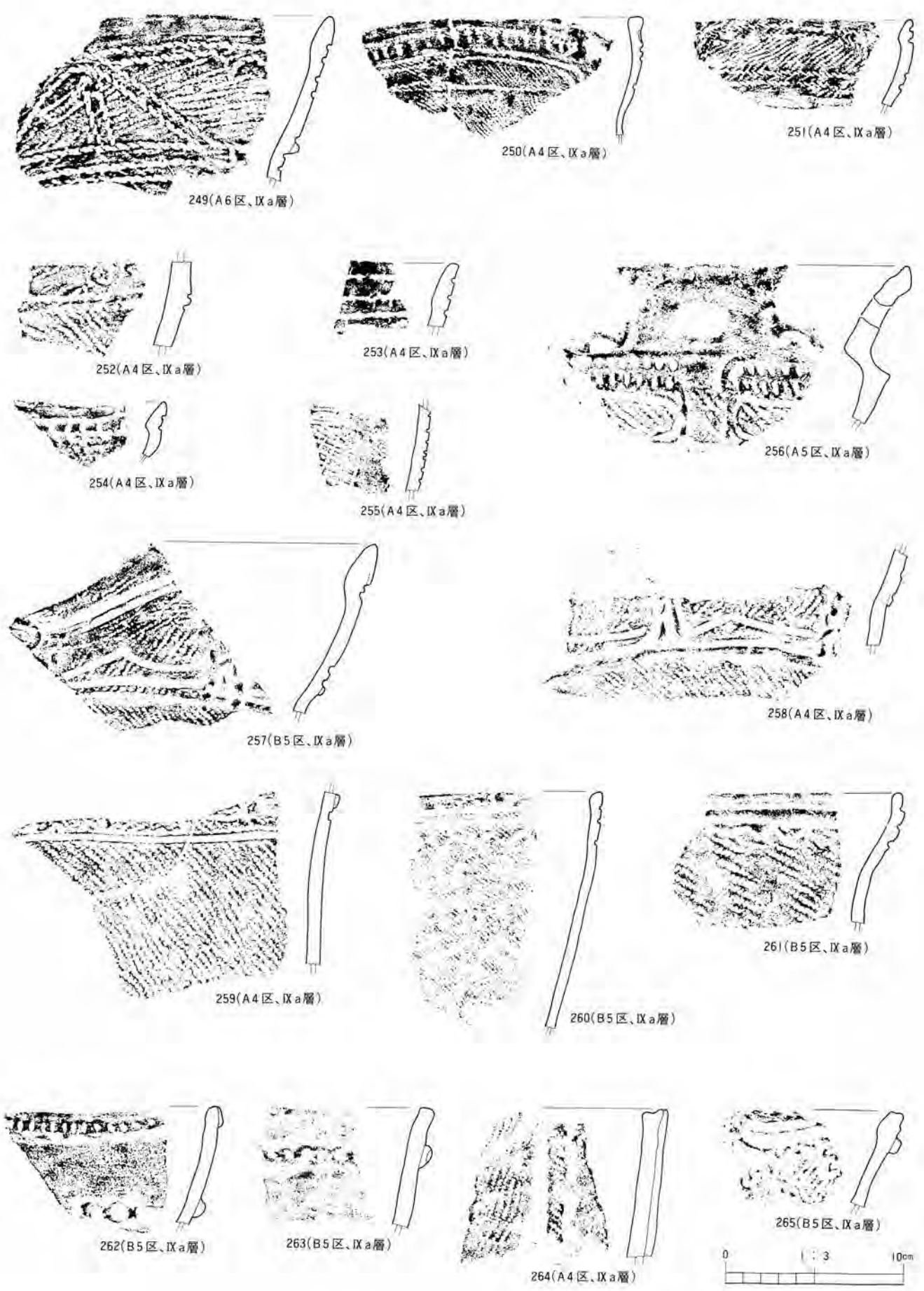
247(B4区、VIIb層~VIIa層)



248(B6区、VIIb層)



第24図 出土土器—16 (IXa層—2)



第25図 出土土器—17 (IXa層—3)



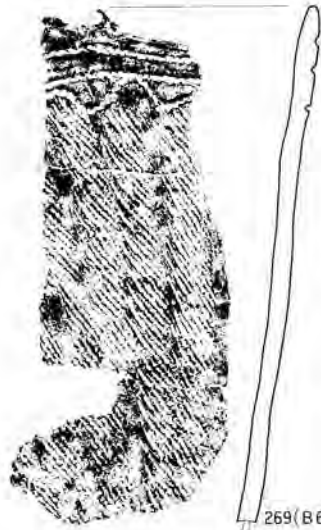
266(A5区、IXa層)



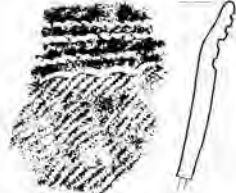
267(B6区、IXa層)



268(B6区、IXa層)



269(B6区、IXa層)



270(A6区、IXa層)



271(A5区、IXa層)



272(A5区、IXa層)



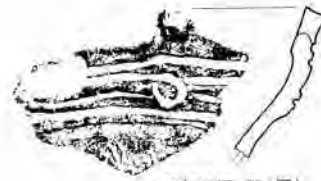
273(A6区、IXa層)



274(A6区、IXa層)



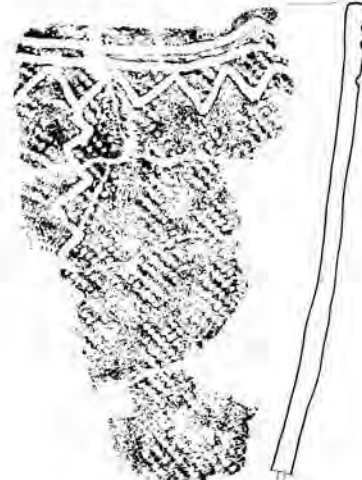
275(A6区、IXa層)



276(B6区、IXa層)



278(A6区、IXa層)



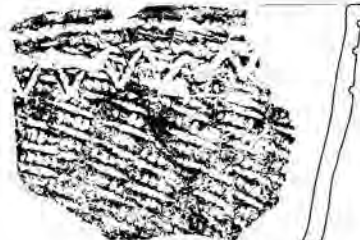
279(B5区、IXa層)



277(A6区、IXa層)



280(A5区、IXa層)



282(B6区、IXa層)



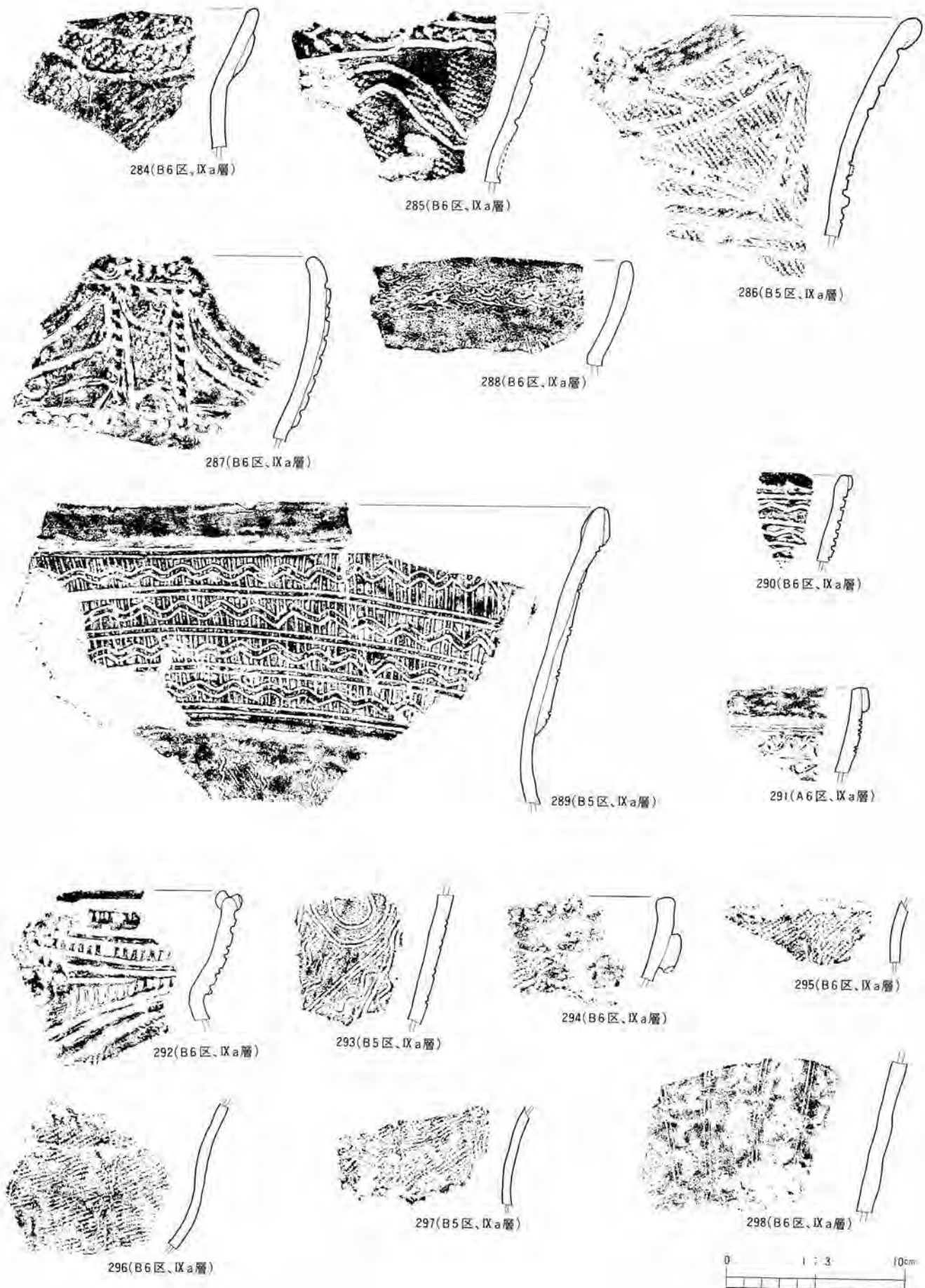
281(B6区、IXa層)



283(B6区、IXa層)



第26图 出土土器—18 (IXa層—4)

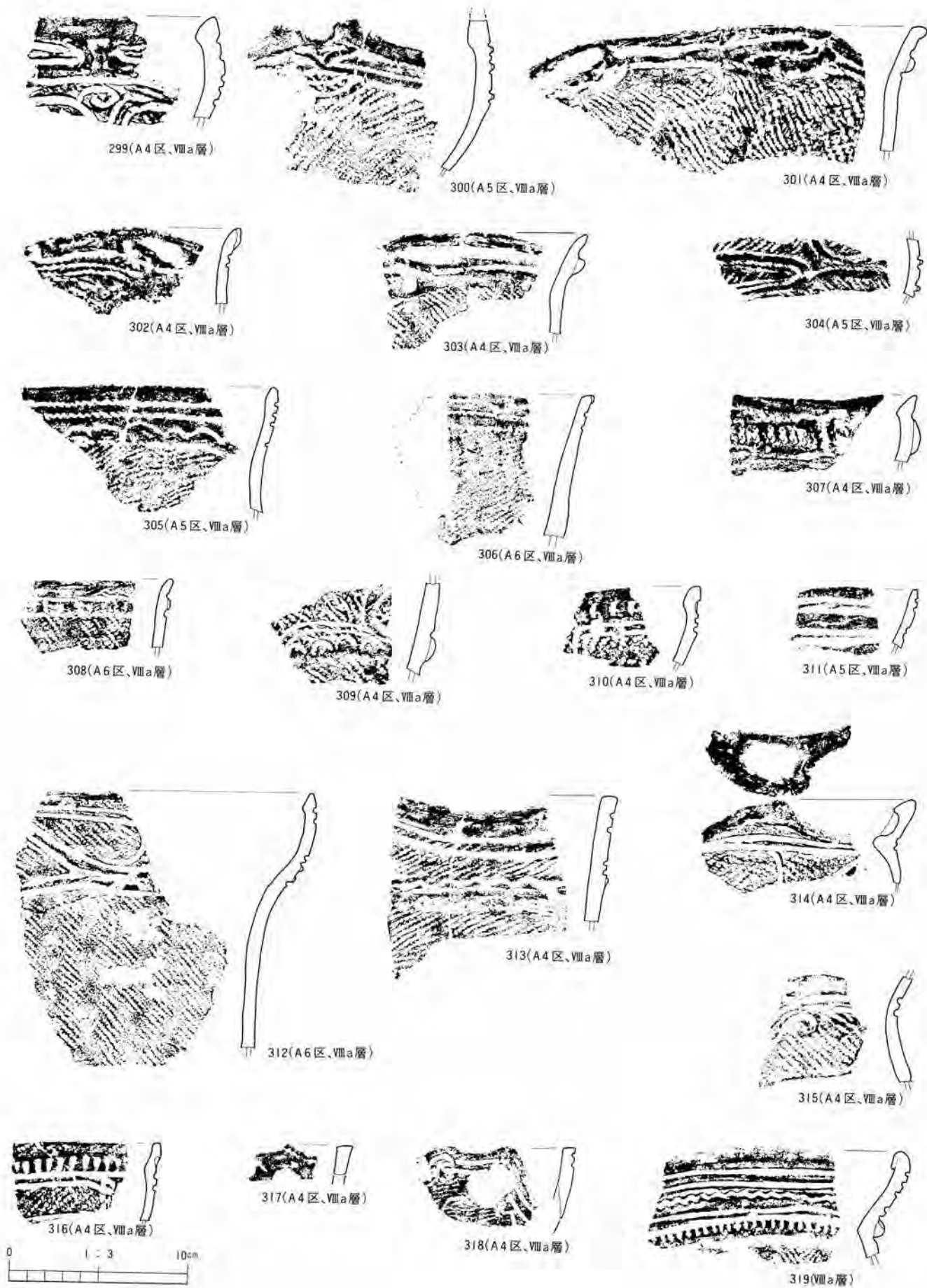


第27图 出土土器—19 (IXa層—5)

273・242は浅鉢であるが、いずれも底部からほぼ直線的に立上がる。
242は口縁部に台形の波頂と小突起を有する。口縁部文様帯はやや肥厚させた上に円形の連続刺突が伴う。
237は口縁部に小突起を有するもので、縄文のみを施す。
238・239・243（前述）、244～246・288・295～298は現存部に地文のみを施す深鉢である。
245は口縁部に4単位の波頂を有するミニチュア土器である。
244は口縁部が直上に立上がる深鉢である。
288は頸部に屈曲を有し、口縁部が内湾する深鉢で、横方向の綾絡文等を地文とする。
295～297は体部に縦方向の綾絡文を施す。298は2条の平行した条線を施す。
289～294は竹管文等で施文されるものである。
289～291は半裁竹管等により沈線や鋸歯状文等を施すものである。289はボタン状の貼付を施すものである。
292は沈線間に刻目を有するもの。293は鋸歯状文等を施すもの。294はボタン状の貼付を施すものである。

VIII a 層出土土器（第28図）

300・317・318は台形状の波頂を有するものであるが、器形は不明である。300・317は円孔が穿たれる。
300は口縁部を肥厚させ、口縁部文様帯に原体圧痕を伴う隆起線により横位の区画文を施すが、端部が変形している。区画文の連結部の下位には原体圧痕による弧状文が加飾される。
317は五角形の波頂部破片である。
318は波頂部に沈線による渦巻文等を施すものである。
310・312・316はキャリパー形深鉢（深鉢B）である。
310・316は口縁部文様帯を重層化し、上部は溝状の凹部に原体圧痕や沈線による刻目を施し、下部には、沈線による区画文等を施す。
312は口縁部文様帯に沈線を伴う波状文を施すもので、沈線により加飾することで文様帯を細分割している。地文はL-R単節斜縄文を口縁部から体部にかけて縦方向に回転する。
306・308は口縁部がやや外反する深鉢（深鉢C）で、口縁部文様帯に横位3条の原体圧痕を施す。
308は頸部の粘土紐上に刻目を施す。粘土紐には沈線と原体圧痕が伴う。
301～303は頸部に屈曲を有し、口縁部が外反する深鉢（深鉢D）である。
いずれも口縁部に原体圧痕を伴う隆起線を用いて区画文を施すが、やや不整形である。
299・307は口縁部の内湾する深鉢（深鉢F）である。
299は口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線にて横位楕円形区画文を施す。また、これの下部の文様帯には沈線による渦巻文等を施す。
307は口縁部文様帯に隆起線による横位楕円形区画文を施し、内部に刻目状の原体圧痕を施す。区画文の連結部には小突起を施す。
305・311・313・314は器形の不明な深鉢である。



第28图 出土土器—20 (VIIa層—1)

305はゆるやかに屈曲し、キャリパー形に類似する。口縁部文様帯には横位の原体圧痕文や連弧文が施される。

311は口縁部が内湾気味の深鉢で、口縁部文様帯に横位4条の沈線文を施す。

313は波状口縁を呈する深鉢（深鉢Aか）で、口縁部文様帯に横方向の沈線文や鋸歯状文を施す。

314は頸部が強く屈曲する深鉢（深鉢Dか）で、外面には沈線による施文がみられる。また、内面には楕円形の凹部がみられる。

304・309は体部破片である。いずれも原体圧痕を伴う隆起線により施文される。

315も体部破片であるが、頸部に屈曲を有し、沈線により渦巻文等を施す。

319は口縁部文様帯に横位の沈線文や鋸歯状文を施す。また、頸部にめぐらせた粘土紐の上面には原体圧痕による刻目を施す。

VII b 層出土土器（第24図、第29図～第31図）

248・320～324・334はキャリパー形深鉢（深鉢B）である。

248・321・323・324は口縁部文様帯に沈線文を伴う隆起線を施文するものである。

248は波状に展開するモチーフがみられ、波頂部に渦巻文を施し、その下に小さな山形文が施される。地文はL-R単節斜縄文を、口縁部は横方向に、体部は縦方向に回転される。

321・324は波状に展開する隆起線を文様帯下端に接続せずに、縦位2条の隆起線（ノ字形と逆ノ字形）にて連結している。あるいは、隆起線を反転させて、連結している。このため、結果的に山形の区画文を作出することとなる。なお、波頂部は文様帯上端と接し、この部分に原体圧痕による刻目が施文される。321は地文としてR-L単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転する。

324は口縁部文様帯に隆起線で波状のモチーフを展開させるが、やはり反転させて文様帯下端に連結させ、区画文を作出す。地文はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。

323は上記のいずれか不明である。波状に展開した隆起線の波頂部に渦巻文を施し、この上部に刻目を有する小突起を施す。波頂下は隆起線に伴った沈線を渦巻文下位で反転させ、区画文を作出す。地文はL-R単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転する。

320・322は口縁部文様帯を上下に重層化するものである。

320は上部文様帯を溝状の凹部とし、内部に刻目を連続させる。下部文様帯は沈線により波状のモチーフを施すが、渦巻文等が伴う。

322は上部文様帯を溝状の無文帯とし、下部文様帯に沈線を伴った隆起線により波状のモチーフが展開する。321等に類似し、隆起線を反転させて文様帯下端と連結する。

325～333もキャリパー形（深鉢B）を呈する可能性が大きい。

328～322は248や321に類似するものであろう。

325・326は320に類似する。

338・344・345・349・352～355・357・358・360・362は口縁部が外傾または外反する深鉢（深鉢C）である。

338は口縁部文様帯に原体圧痕を伴う隆起線により横位楕円形区画文を施すものである。区

画文同志を連結し、連結部にはY字形の隆起線を加飾する。区画文はやや変形している。文様帯下部には原体圧痕による弧状文が伴う。

344・345は口縁部文様帯を肥厚させて、原体圧痕により刻目を施すものである。344は文様帯下端に横位1条の原体圧痕文と連弧文が伴う。

360・361は口縁部文様帯に刻目を施すもので、下位には横位2条の沈線文を施す。

349は口縁部文様帯に横位1条の原体圧痕文を施すものである。

358は口縁部文様帯に横位2条の沈線文を施すものである。

352～355・357・362は波状口縁を呈するものである。352は隆起線と沈線により施文するもの。352は原体圧痕により施文するもの。354は沈線を伴う隆起線で施文するものである。355は口縁部を無文帯とするもの。357は口縁部文様帯に横位2条の沈線文と鋸歯状文を施すものである。362は波頂部に円文を施し、口縁部から体部に半裁竹管様の平行沈線文を施すものである。

348・350は頸部が屈曲する深鉢（深鉢D）で、いずれも、口縁部文様帯に横位の原体圧痕文を施す。

335・343は大波状を呈する大形の深鉢である。器形はキャリパー深鉢（深鉢B）か台形状の波頂を有する大形深鉢（深鉢A）の変形したもののいずれかであろう。

335は波頂部の内外面に粘土紐を逆C字形に貼付けている。口縁文様帯は上下に重層化し、上部は前述の貼付けを伴う無文帯（あるいは区画文か）とし、下部は縦位の隆起線文や、渦巻文等の施文がみられる。

343は波頂部の形態は不明である。口唇部に波状の粘土紐を貼付ける。口縁部文様帯を上下に重層化し、上部は、やや変形した横位楕円形の溝状凹部に刻目を施す。下部は波頂下に沈線を伴う縦位の隆起線により文様帯を区画している。渦巻文等による加飾がみられる。

336・340・346・347・356・359は口縁部が内湾気味の深鉢である。

336は口縁部文様帯に溝状の凹部を有し、円形文などを施す。体部文様帯（?）には縦位の隆起線による施文がみられる。

340は口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線にて横位楕円形の区画文を施す。区画文の連結部には突起が施される。文様帯下部にも沈線による施文がみられる。

346・347は口縁部文様帯に原体圧痕による刻目を有するもので、文様帯下部にも原体圧痕や沈線等による施文がみられる。

356は口縁部文様帯に横位1条の沈線文と連弧文が伴う。

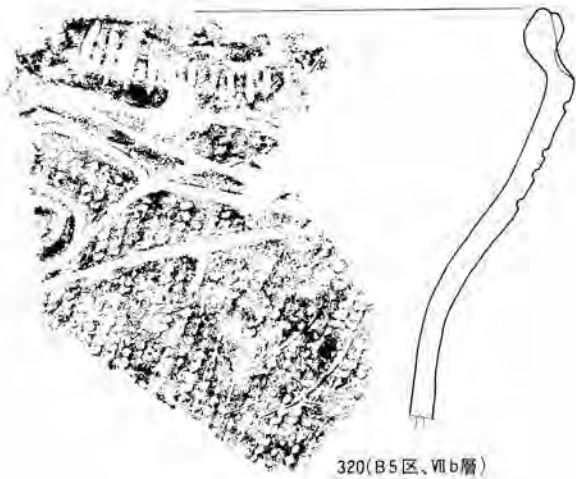
359は口縁部文様帯に刻目を伴う粘土紐の貼付けがみられる。

339・341・342は器形が不明の深鉢である。

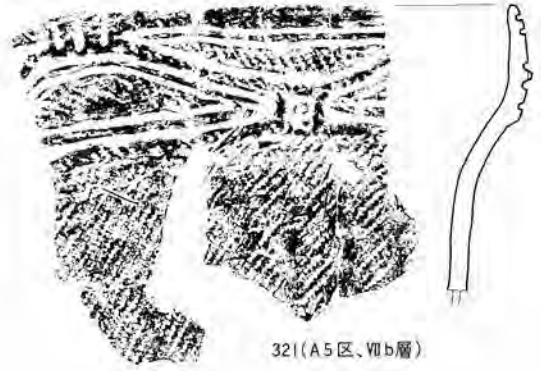
339は口縁部に強い屈曲を有する。口縁部文様帯は原体圧痕を伴う隆起線により横位楕円形区画文を施し、下部の文様帯には沈線を伴う隆起線による施文がみられる。

341は口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線で横位楕円形区画文を施す。キャリパー形を呈する可能性もある。

342は口縁部文様帯を溝状の凹部とし、内部に原体圧痕により波状の施文をする。下位にも原体圧痕による横位の施文がみられる。



320(B5区、Ⅶb層)



321(A5区、Ⅶb層)



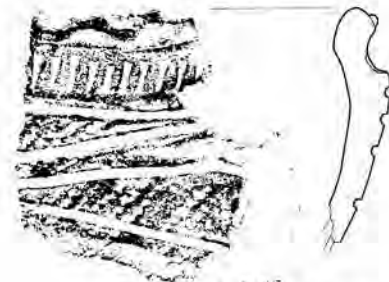
322(B6区、Ⅶb層)



323(B5区、Ⅶb層)



324(B5区、Ⅶb層)



325(A5区、Ⅶb層)



326(B5区、Ⅶb層)



327(A6区、Ⅶb層)



328(A6区、Ⅶb層)



329(B6区、Ⅶb層)



330(A6区、Ⅶb層)



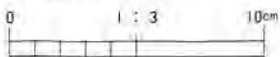
331(A5区、Ⅶb層)



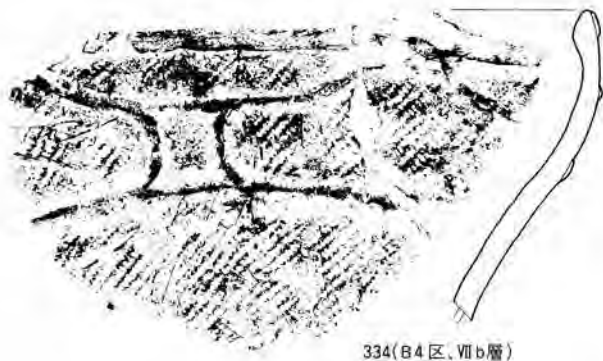
332(A5区、Ⅶb層)



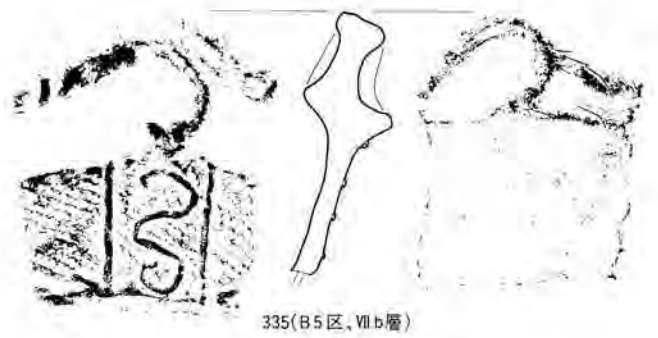
333(A4区、Ⅶb層)



第29图 出土土器—21 (Ⅶb層—1)



334(B4区、VIIb層)



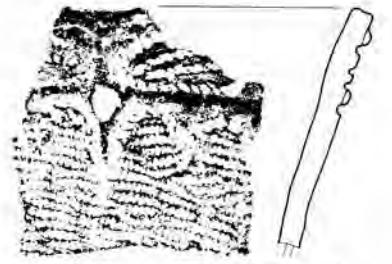
335(B5区、VIIb層)



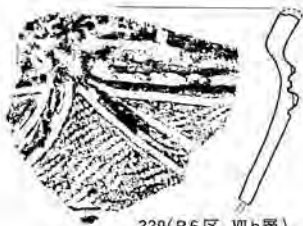
336(A5区、VIIb層)



337(B5区、VIIb層)



338(B6区、VIIb層)



339(B6区、VIIb層)



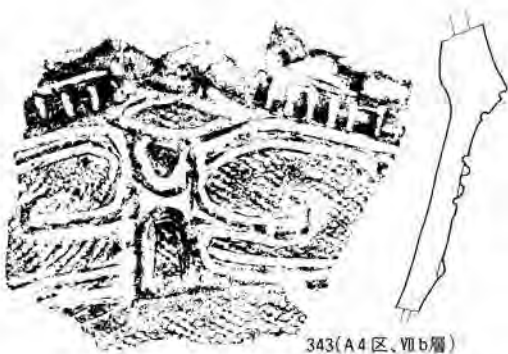
340(A5区、VIIb層)



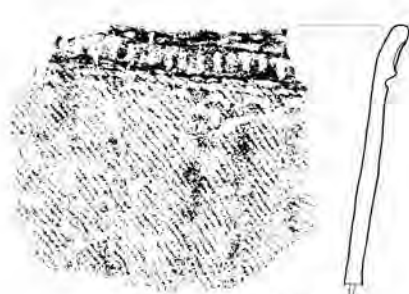
341(B6区、VIIb層)



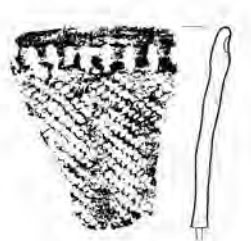
342(A6区、VIIb層)



343(A4区、VIIb層)



344(A5区、VIIb層)



345(A6区、VIIb層)



346(B6区、VIIb層)



347(B6区、VIIb層)



348(A5区、VIIb層)



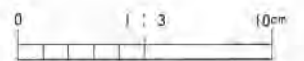
349(B6区、VIIb層)



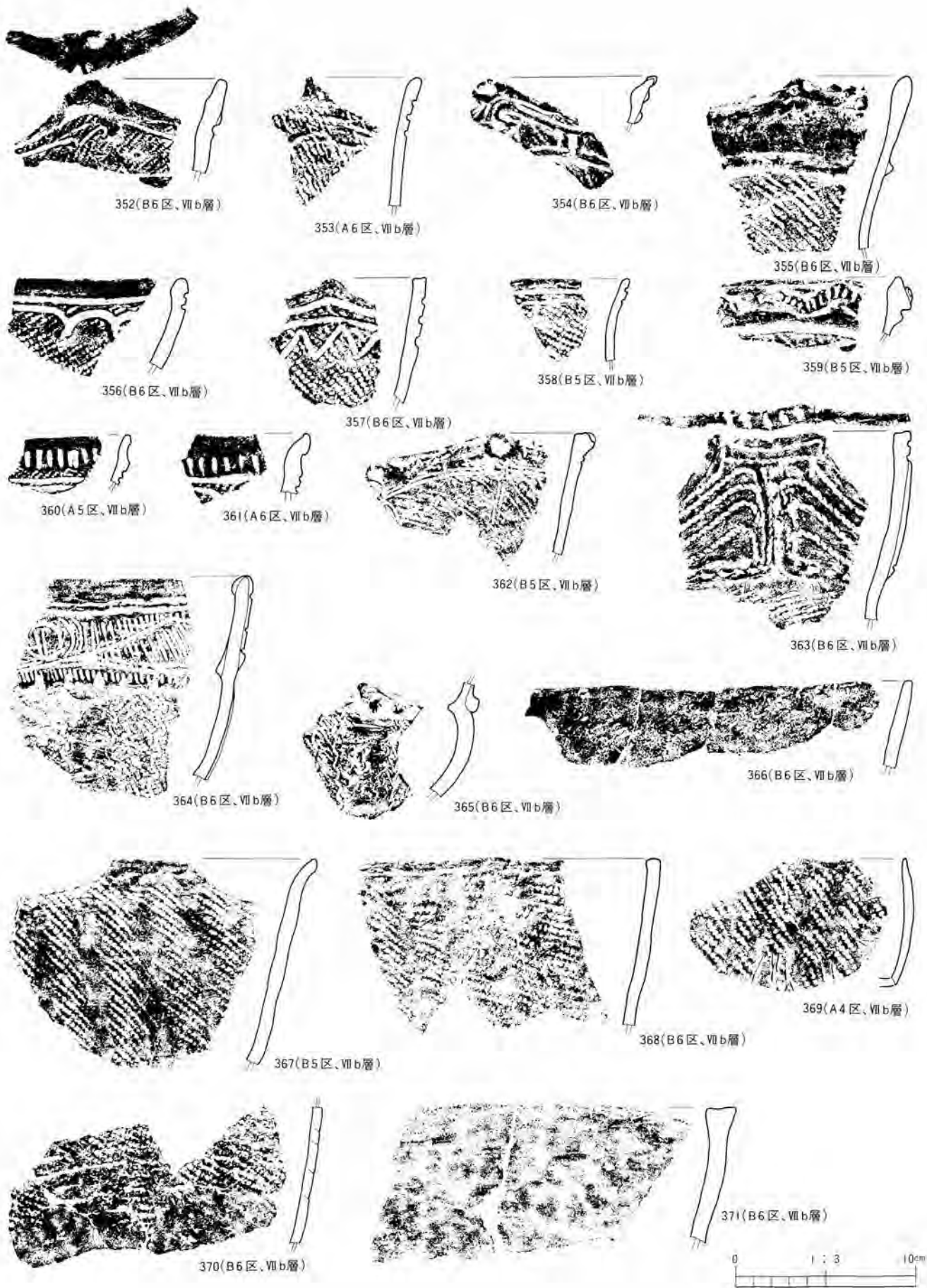
350(B6区、VIIb層)



351(A6区、VIIb層)



第30图 出土土器—22 (VIIb層—2)



第31图 出土土器—23 (VIIb層—3)

337は浅鉢で、口縁部文様帯に原体圧痕による横位区画文を施す。区画文の連結部には刻目を有する小突起を施す。文様帯下部には原体圧痕による半円文や縦位波状文等が施される。

363は台形状の波頂を有する深鉢（深鉢A）で、口縁部文様帯に原体圧痕や隆起線による施文がみられる。

364は口縁部文様帯に平行沈線による同心円文等を施すものである。

365は頸部に強い屈曲を有する深鉢で、頸部に粘土紐の貼付けがみられる。

366～371は地文のみの深鉢である。

367は台形状の波頂を有するもの。369は内湾する器形のミニチュア土器。371は無文の深鉢である。

Ⅶ b 層～Ⅶ a 層出土土器（第24図、第67図）

247・886はⅦ b 層とⅦ a 層の層位面から出土したものである。

247は体部から口縁部にかけて直線的に立上がる深鉢（深鉢C）で、口縁部に台形状の波頂を有する。口縁部文様帯には沈線を伴う隆起線による波状のモチーフがみられ、波頂部には渦巻文を施す。

886は体部破片で、波状の隆起線を縦位に2条施す。

Ⅶ a 層出土土器（第32図～第35図）

378～380は大波状を呈する大形の深鉢（深鉢A）である。

378は波頂部の内外面ともに粘土紐の貼付けにより渦巻文を施し、下部に刻目を施す。口縁部文様帯には沈線を伴う隆起線で横位楕円形区画文を施し、内部に沈線による小渦巻文等を施す。区画文の連結部には下位に沈線を伴う隆起線をD字形に配し、上位には刻目を施す。地文はL-R単節斜縄文を口縁部を横方向に、体部で縦方向に回転する。

379は台形状の波頂を有し、波頂部外面に粘土紐をY字形に貼付け、縦位のブリッジ状把手とする。内面にはノ字形の貼付けがみられる。口縁部文様帯は重層化し、上部文様帯は横位溝状の無文帯で、前述の把手により分割している。下部文様帯は沈線を伴う隆起線により波状のモチーフが展開している。波頂部には渦巻文が施される。

380は波頂部外面に逆C字形の貼付け、内面に円形の貼付けが施される。口縁部文様帯には沈線を伴う隆起線により渦巻文等を施す。

372、383は口縁部文様帯を重層化する平縁のキャリパー形深鉢（深鉢B）である。

372は口縁部上端に波状の粘土紐を貼付ける。口縁部文様帯は沈線を伴う隆起線により横位楕円形区画文を8単位ずつ2段に施す。上段のものは内部が無文となる。下段の区画文連結部には部分的に沈線による円文が伴う。地文はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。

383は上部文様帯を溝状とし、内部に原体圧痕等による刻目を施す。下部文様帯は、383が沈線を伴う隆起線により横位楕円形区画文を施し、区画文の連結部には刻目を有する小突起を施す。文様帯下部には沈線による横位波状文が伴う。地文はL-R単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

374・377・381・382・384・385・402～412は口縁部文様帯が単層の平縁のキャリパー形深鉢

(深鉢B)である。ほとんどが沈線を伴う隆起線により施文するが、モチーフにより次の3者に分類できる。

a 382・384・385は口縁部文様帯に横位楕円形区画文を施すものである。382は区画文の連結部に刻目を有する小突起を施し、地文としてL-R単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

b 374・402～409は隆起線を波状に展開させながらも端部を反転させることにより山形の区画文を作出すものである。部分的に刻目を有する小突起がみられ、波頭部に渦巻文等を施すものが多い。地文はいずれも単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

c 377・381・410～412は隆起線を波状に展開させるものである。隆起線が文様帯の上下境界線と接する部分には刻目を有する小突起がみられる。410は沈線による波状の加飾がみられ、地文はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。411は波頭部に渦巻文を施す。412は沈線を反転させ区画文を施す。両者ともに地文はL-R単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

413・414もキャリパー形深鉢であるが、口縁部を欠くため器形や文様帯構成は不明である。両者ともに沈線を伴う隆起線により施文されるが、やや複雑な施文となる。地文は単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

373・375・394・397は口縁部の外傾または外反する深鉢(深鉢C)である。

373は台形状の波頂を4単位施す。口縁部文様帯を上下2条の沈線で区画し、内部に沈線による横位楕円形区画文を施す。

375は口縁部文様帯に粘土紐の貼付により渦巻文と溝状の凹部を作出し、横位波状の粘土紐を貼付ける。体部文様帯は沈線を伴う隆起線により波状のモチーフが展開する。波頂部の下部には沈線による渦巻文とY字形の隆起線を施すが、縦位の隆起線は波状となる。文様帯上位の沈線には波状文がみられ、また、文様帯下部には部分的に縦位波状の沈線文が伴う。

397は口縁部文様帯に刻目を有する波状の粘土紐を貼付け、体部文様帯に横位と縦位の沈線による施文がみられる。

394は口縁部に突起を有する深鉢で、口縁部を無文帯とし、体部にL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。

395・398は頸部に屈曲を有し、体部が膨らみを有する深鉢(深鉢D)である。

395は頸部に横位2条の沈線を施し、内部に円形の連続刺突文が伴う。

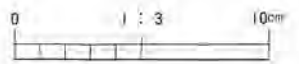
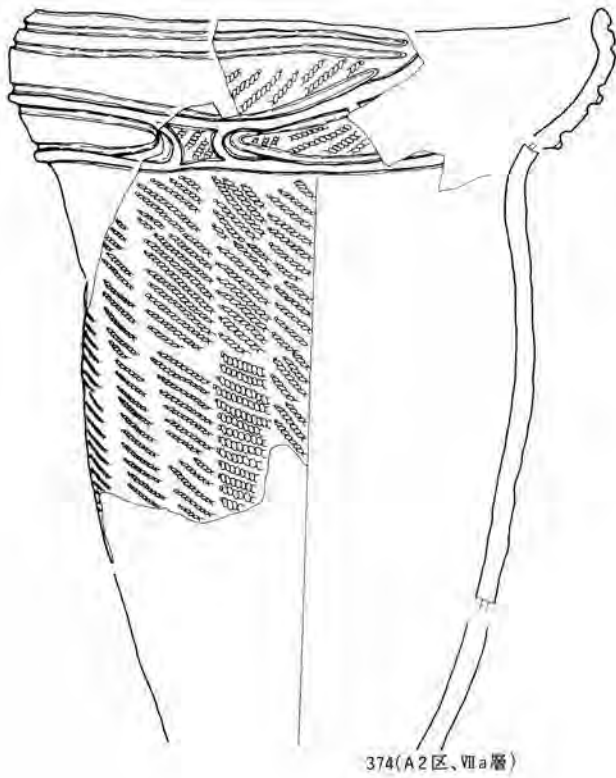
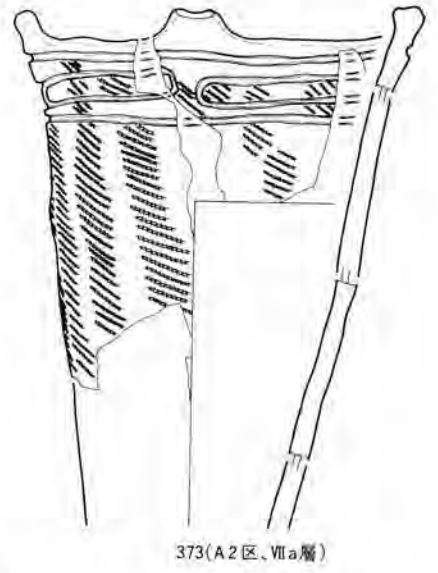
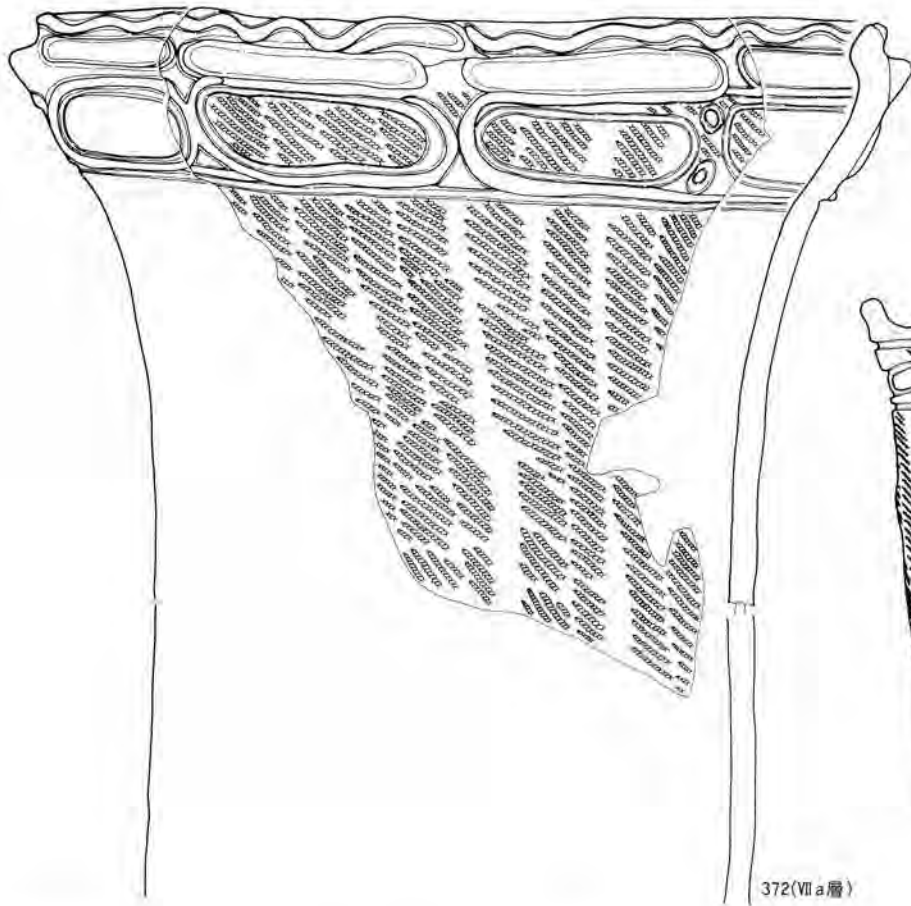
398は頸部に沈線を伴う粘土紐を貼付け、上面に原体圧痕による刻目を施す。

386は口縁部の外反する深鉢(深鉢Cまたは深鉢D)である。口縁部に波頂を有す。口縁部文様帯は重層化し、上部文様帯は溝状の凹部に原体圧痕による刻目を施す。下部文様帯は隆起線により横位楕円形の区画文を施す。体部文様帯には縦位2条の波状隆起線を施す。

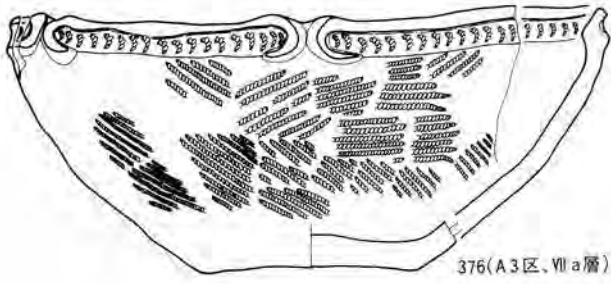
387～393は口縁部が内湾気味の深鉢である。

388・389は口縁部文様帯を溝状とし、原体圧痕による刻目を施す。両者ともに下部にも文様帯を有し、388は沈線を伴う隆起線で、389は沈線で施文する。

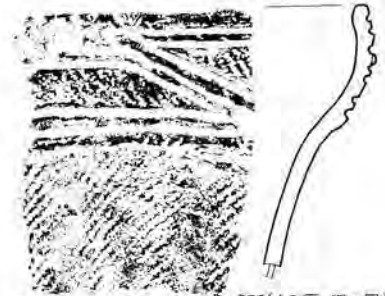
387・390～393は原体圧痕を伴う隆起線で施文するもので、387・390・393は横位楕円形区画文がみられる。



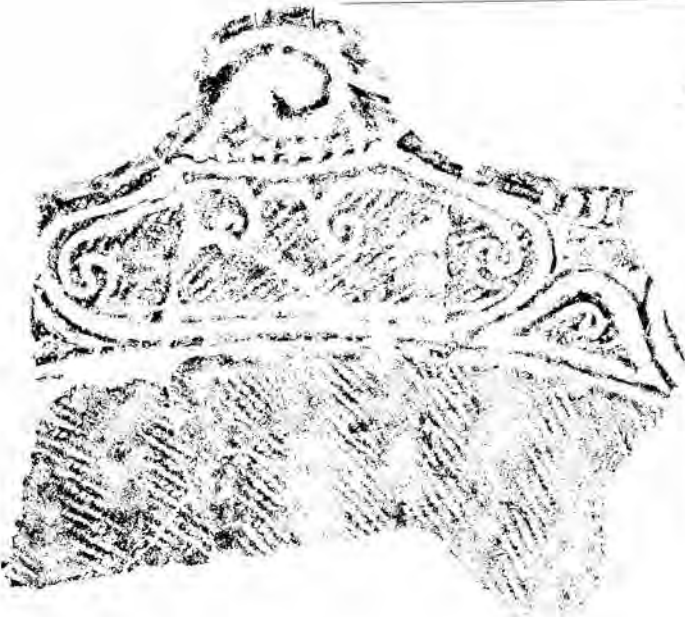
第32図 出土土器—24 (VII a層—1)



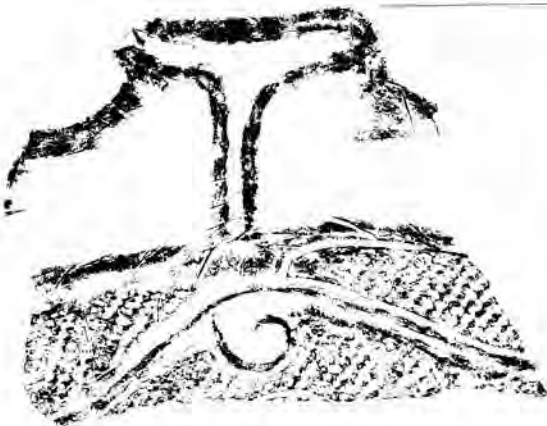
376(A3区、Ⅶa層)



377(A5区、Ⅶa層)



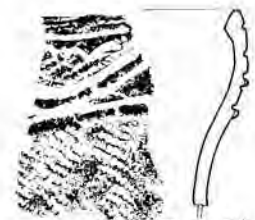
378(B5区、Ⅶa層)



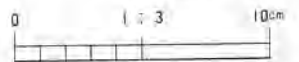
379(B4区、Ⅶa層)



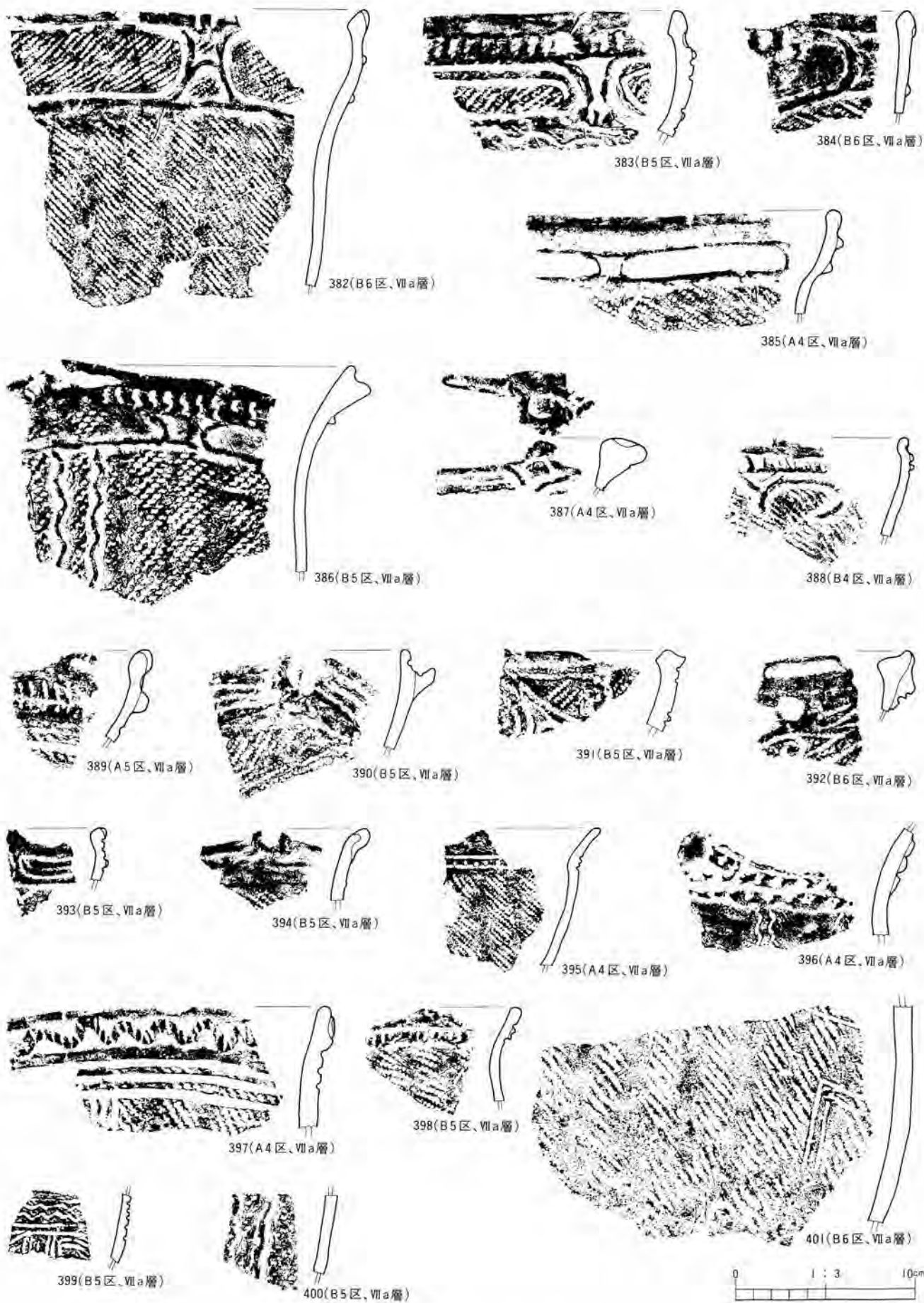
380(B5区、Ⅶa層)



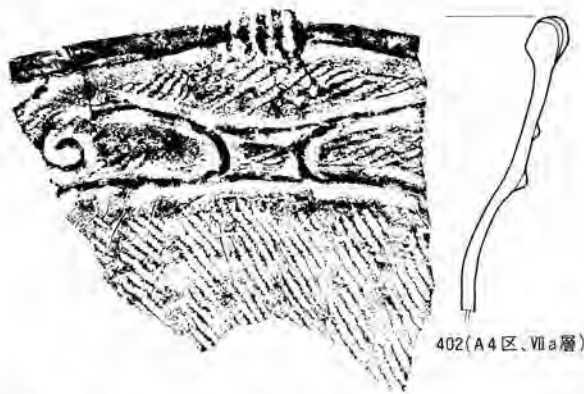
381(A4区、Ⅶa層)



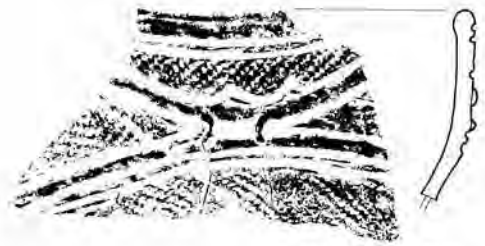
第33图 出土土器-25 (Ⅶa層-2)



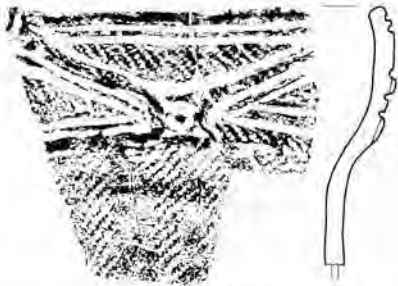
第34图 出土土器—26 (VIIa層—3)



402(A4区、VIIa層)



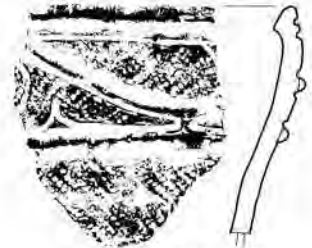
403(A4区、VIIa層)



404(B5区、VIIa層)



405(B6区、VIIa層)



406(B4区、VIIa層)



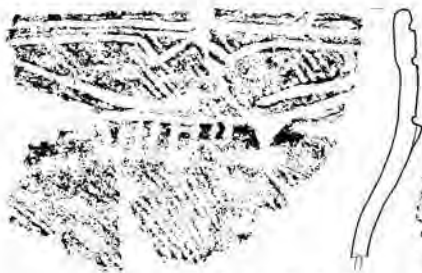
407(B5区、VIIa層)



408(B5区、VIIa層)



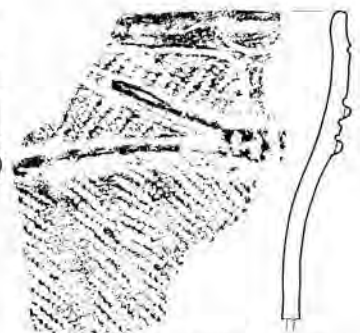
409(A4区、VIIa層)



410(B5区、VIIa層)



411(B5区、VIIa層)



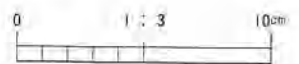
412(B4区、VIIa層)



413(B5区、VIIa層)



414(B6区、VIIa層)



第35图 出土土器—27 (VIIa層—4)

396・399～401は体部破片である。396は頸部に粘土紐を貼付け、上面に原体圧痕による刻目を施すものである。

399は沈線により横位波状文等を施すものである。400は縦位波状の隆起線を施すものである。

401は平行沈線により施文するものである。

376は浅鉢である。口縁部文様帯に隆起線により横位楕円形の区画文を作出し、内部に原体圧痕による刻目を施す。

VI a 層出土土器（第36図）

415・416・419～422・425・426はやや大形のキャリパー形深鉢（深鉢B）である。

415・416は波頂を有する破片である。415は波頂部を欠き、口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線にて波状に展開するモチーフを施す。部分的に渦巻文を施す。416は円孔を穿つ波頂部の破片である。

419～422・425・426は波頂を持たない破片である。

416～425・426は沈線を伴う隆起線で波状に展開するモチーフを施すものである。いずれも隆起線等の端部を反転させることにより区画文を作出す。

420・421は小突起上に沈線による刻目を施すもので、426は小突起上に原体圧痕による刻目を施す。

425は口縁部文様帯上部に波状の粘土紐を貼付け、下部に沈線を伴う隆起線により横方向のモチーフを施文する。

422は口縁部文様帯下半の破片である。

以上の破片はいずれも地文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

424は中形～小形のキャリパー形深鉢（深鉢B）である。口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線で波状のモチーフを施文する。波頭には沈線による渦巻文を伴う。

431は口縁部の外反する深鉢（深鉢C）である。口縁部文様帯を溝状とし、やや幅の狭い粘土紐を波状に貼付ける。体部文様帯は沈線を伴う隆起線により波状のモチーフを施す。波頭下部にはY字形？のモチーフを伴う。また、文様帯上部には沈線による波状文が施される。第32図375に類似する。

417・418・429は口縁部が内湾気味の深鉢である。

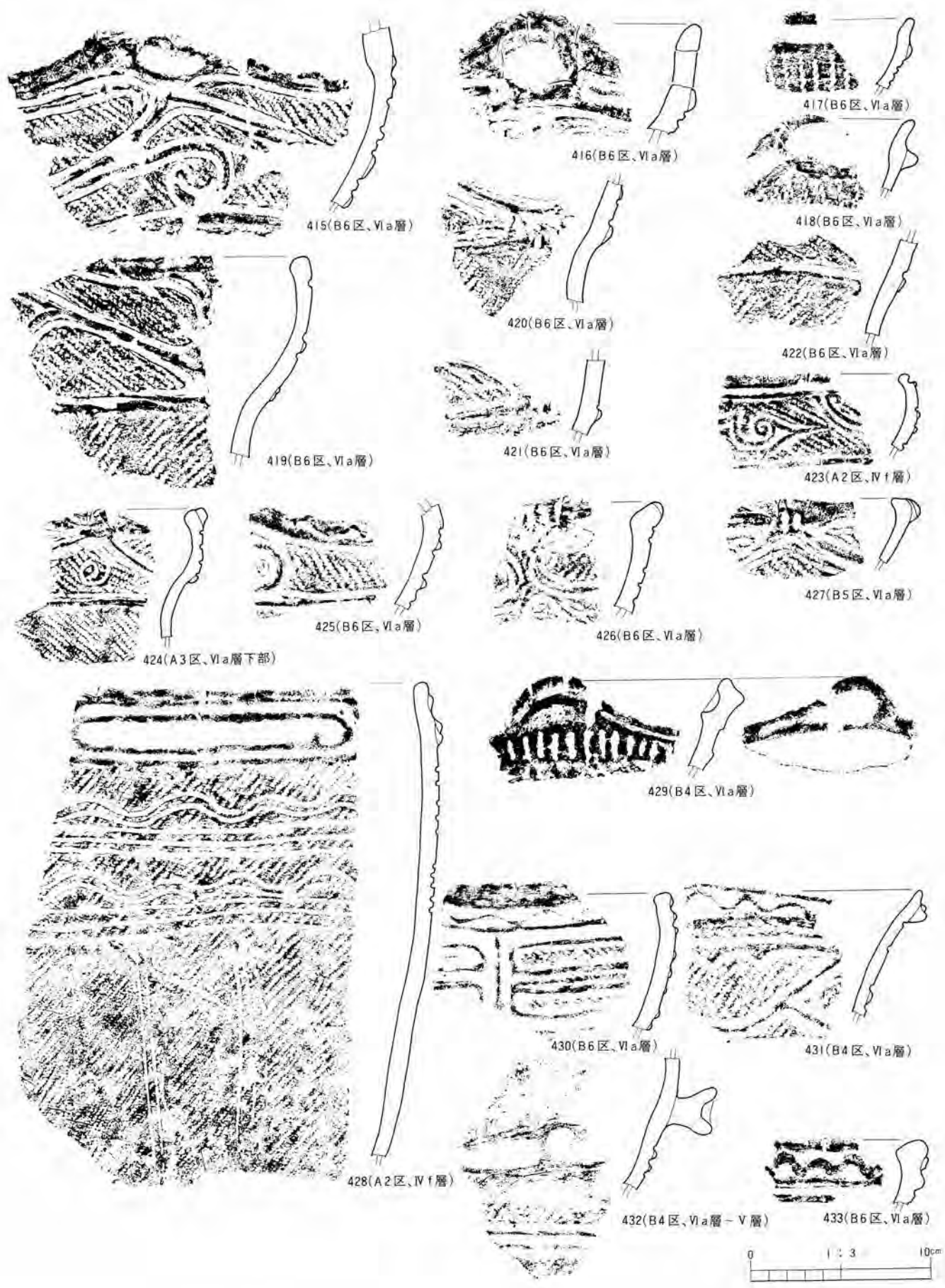
418・429は波頂部を有する破片である。418は外面に、429は内面にC字形等の粘土紐を貼付ける。いずれも口縁部文様帯上部を無文帯とし、下部文様帯に原体圧痕によるやや長目の刻目を施す。

430・433は口縁部の内湾する深鉢（深鉢F）である。

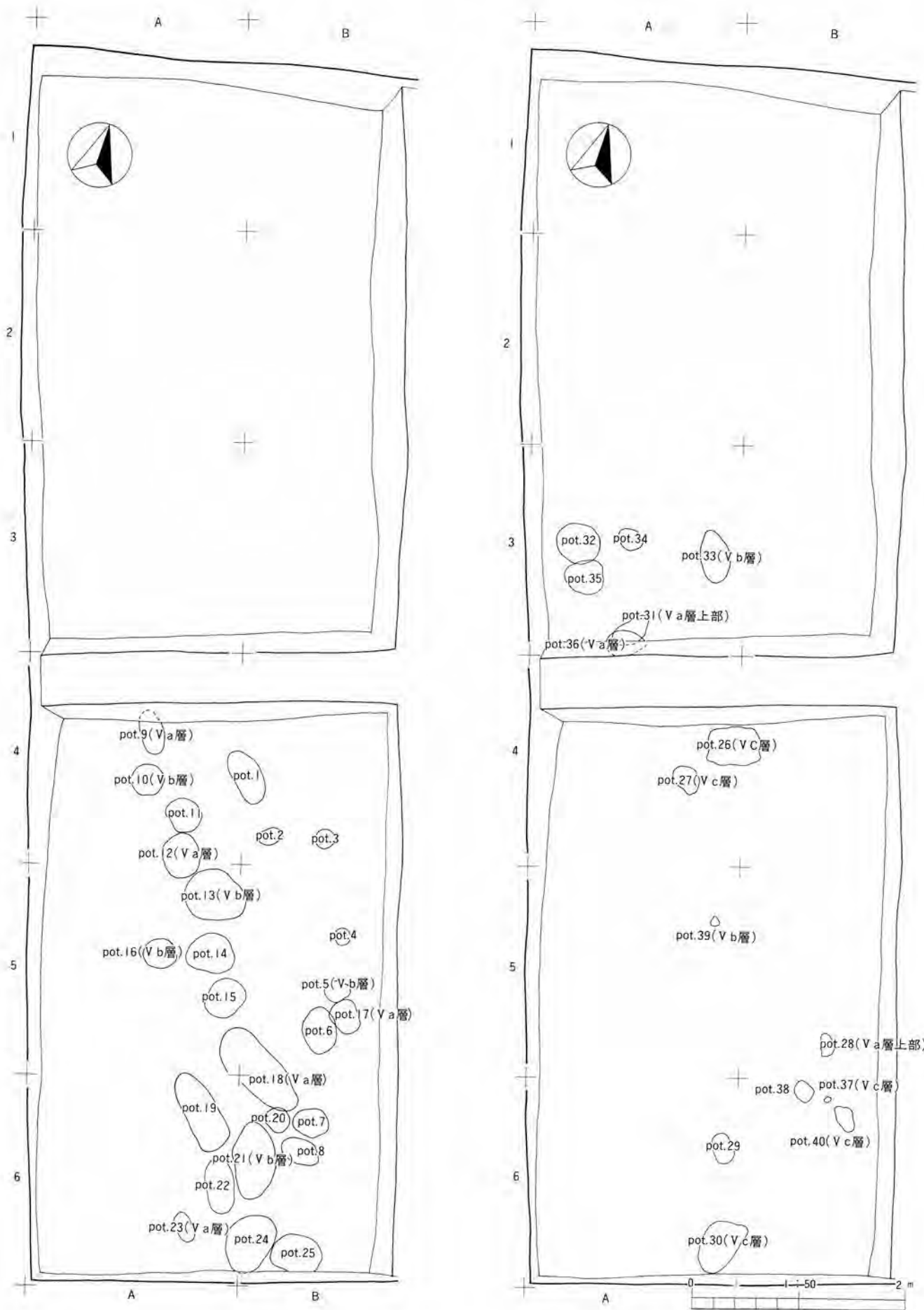
430は口縁部文様帯を溝状とし、やや幅の狭い粘土紐を波状に貼付ける。体部文様帯は隆起線による横位楕円形区画文を2段に施し、区画文の連結部に縦位の隆起線を1条施す。

433は口縁部文様帯を溝状とし、やや幅の広い粘土紐を波状に貼付けるものである。

432は頸部に粘土紐を貼付け、上面を無文帯とするもので、部分的に渦巻文が施文される。体部には横位の隆起線が施される。むしろV層に伴うものであろう。



第36图 出土土器—28 (VI a層—1)



第37図 遺物出土状況 (Va層~Vc層)

V c 層～V a 層遺物出土状況（第37図）

V層は最も遺物の出土量が多く、特にV c層～V a層に集中している。第37図右は主にV c層、左は主にV b層～V a層の出土状況を示したものである。但し、図示した範囲は土器片の分布範囲を示したもので、必ずしも同一個体片のまとまりを示すものではない。従って、pot. 1～5・7・8・11・14・15・19・20・21・22・24・25・29・32・34・35・38は図示することが無意味であったために割愛した。

V c 層出土土器（第38図～第47図）

436・463～466・473・505・506は大波状口縁を呈する大形のキャリパー形深鉢（深鉢A）である。

436・463～466・478はほぼ同様な個体であり、463・466は同一個体の可能性が大きい。これらはいずれも口縁部文様帯にやや調整の粗い隆沈線で横方向に展開するモチーフを施文し、波頂下にはやや大きめの有棘渦巻文を施す。文様帯上下との連結は少なく、やや開放的な施文となる。いずれも地文は単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

473は口縁部文様帯を重層化し、上部文様帯は波頂部に施した渦巻文とこれを連絡する溝状の凹部無文帯により構成される。下部文様帯は調整を伴う隆起線で、端部を連結した横位楕円形区画文（？）・半円文などが施文される。頸部は地文帯とし、体部文様帯は上部を沈線と交互刺突を伴う隆起線により区画し、内部に平行沈線により方形の区画文等を施文する。地文はL-R単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

505は口縁部文様帯にブリッジ状の把手を伴う無文帯を施すものである。下部の文様帯には隆起線により渦巻文等が施文される。

506は口縁部文様帯を重層化するもので、上部文様帯は波頂部の上面に施した横位S字状の貼付けと、これを連絡する溝状の無文帯により構成される。下部文様帯は沈線を伴う隆起線で上下を区画し、内部に平行沈線による渦巻文等を施す。地文はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。

434・435・438・456・471・472はキャリパー形深鉢（深鉢B）であるが、口縁部がゆるやかな波状を呈する。いずれも口縁部文様帯を重層化し、上部文様帯は波頂部に施文された渦巻文と、これを連絡する隆沈線により構成される。

下部文様帯は434・438が中段に施文された隆沈線による渦巻文と、これを連絡する横方向の隆沈線により構成されるが、上下境界線との連絡は少なく開放的な施文となる。438は頸部を地文帯とし、体部文様帯に平行沈線により渦巻文等を施す。

456・471は隆沈線により端部に渦巻文や有棘渦巻文等を伴うクランク文を施すもので、部分的に上下境界線との連絡がみられるものの開放的な施文である。

435・472はやや不整ではあるが隆沈線による渦巻文や端部に渦巻文を伴うクランク文等を施文する。

これらはいずれも縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

454・455・457～459・462・467・474～477・485・486は平縁のキャリパー形深鉢（深鉢B）

である。

459・467・474・485・486は口縁部文様帯中段に隆沈線による渦巻文や円形文と、これを連絡する横方向の隆沈線により施文される。上下境界線との連絡は少なく開放的である。

467は頸部にも施文され、474は頸部を無文帯とする。

454・457・475は隆沈線によるクランク文状の施文がみられる。454・457は端部を上下境界線に連結し、横位T字形となる。いずれも上下境界線との連絡が少なく開放的である。

他のものも横方向へ展開するモチーフを施すが、やはり開放的である。

これらはいずれも縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。

468・479もキャリパー形深鉢（深鉢B）で、前述したものに類似するモチーフを施文するが、口縁部の形態が不明である。

461・469も平縁のキャリパー形深鉢（深鉢B）である。

461は口縁部文様帯に調整された隆起線によりクランク文を施すが、文様帯下部の境界線への連絡はない。

469は口縁部文様帯を重層化し、上部文様帯は横位楕円形の区画文を施す。下部文様帯は調整された隆起線により施文されるが、モチーフは473との類似点が指摘できる。

439～441・480～482・487・489・491・501～504は口縁部が外反あるいは外傾し、体部にはほとんど膨らみを持たない深鉢（深鉢C）である。

439はほぼ平縁である。口縁部文様帯は渦巻文と、これを連絡する隆沈線により構成される。頸部文様帯は上下を横位3条の平行沈線で区画し、内部に横位波状の平行沈線を施す。

440・480・482・487・489・499は波状口縁を呈する。

440は口縁部文様帯に渦巻文と、これを連絡する隆沈線を施す。頸部文様帯は上下に横位の平行沈線文を施し、内部に波状の平行沈線文を施す。体部文様帯は縦位の平行沈線文を施す。

480・487・489も類似するものである。499も同様であるが、波頂部に貫通孔を穿つ円文を施す。

481は口縁部を無文帯とするものである。491は頸部文様帯を構成せず、口縁部文様帯直下に体部文様帯を持つものである。

441・500～504は口縁部文様帯のみに施文され頸部から体部に地文のみを施すものである。

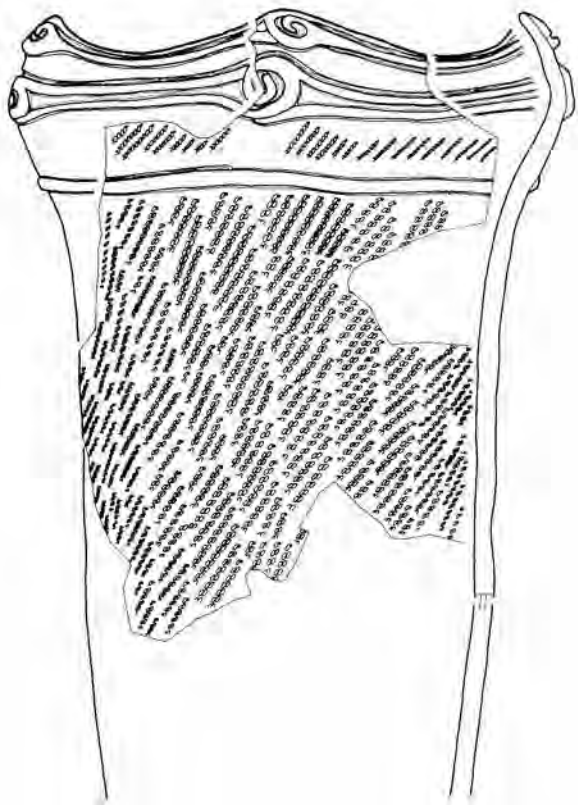
442・490は頸部が屈曲し、体部中央に強い膨らみを有する深鉢（深鉢E）である。

いずれも口縁部文様に隆沈線や渦巻文等を施し、頸部は無文帯とする。体部文様帯は上部を横位の平行沈線にて区画するが、491は円形の連続刺突が施される隆沈線文が伴う。以下、平行沈線による大渦巻文等が施される。

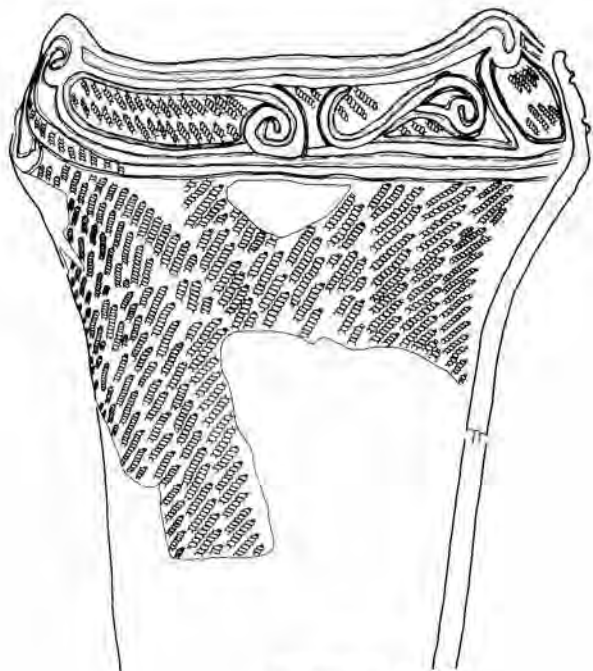
447・460・483は口縁部の内湾する深鉢（深鉢F）である。

447は口縁部文様帯に横位S字形とこれらを連絡する上下の粘土紐により施文される。粘土紐は隆沈線状に調整され、これらの施文により作出された区画文内部は無文帯とする。頸部は地文帯とし、体部文様帯は上部を横方向の隆沈線により区画し、以下に部分的な渦巻文や有棘渦巻文を配する懸垂文が施文される。他のものも類似するものであろう。

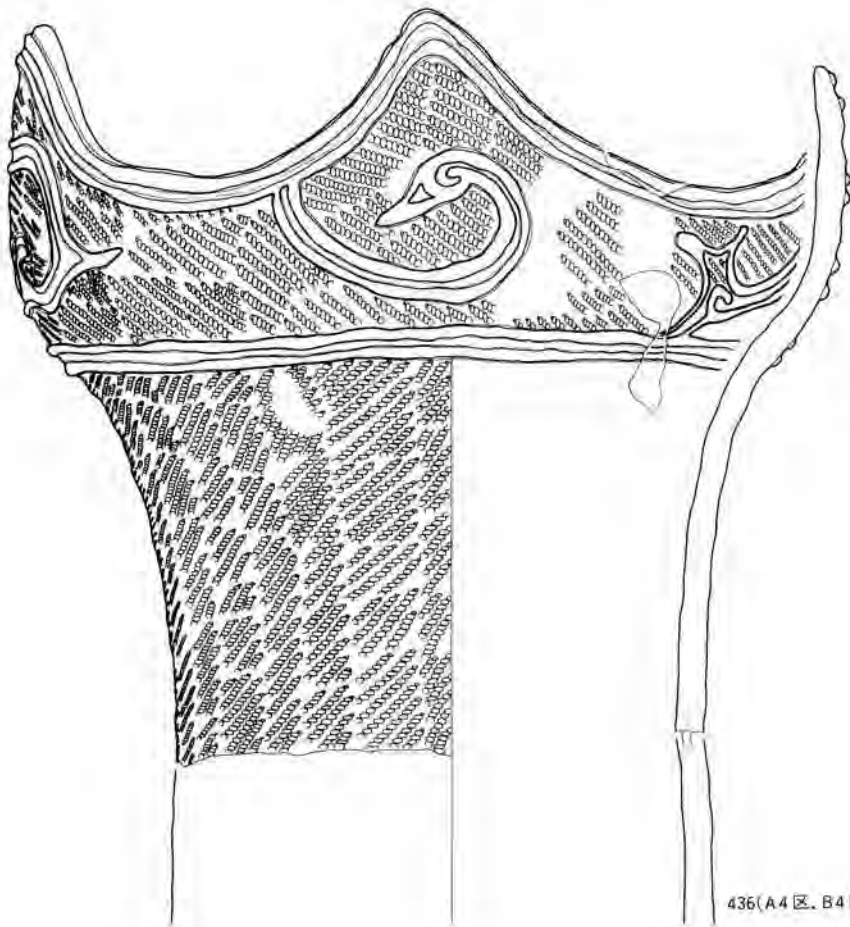
449～453は同一個体であると思われるが、451はⅤa層から、453はⅢ層から出土している。胴張りの樽形を呈し、頸部につば状の装飾を有する深鉢（深鉢H）である。口縁部文様帯は横位2条の隆起線文をめぐらせただけである。頸部文様帯は粘土紐を貼付けて4単位のブリッジ



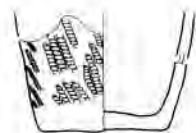
434(B4区、Vc層)



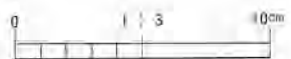
435(A4区、Vc層、pot.27)

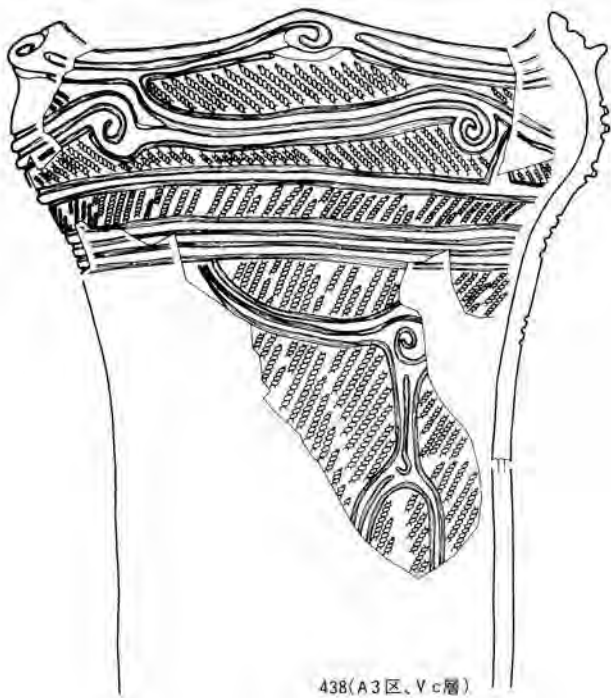


436(A4区、B4区、Vc層、pot.26)

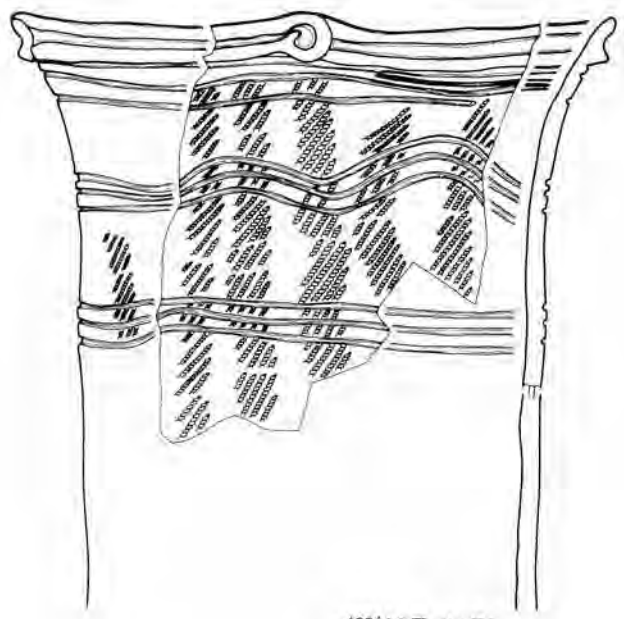


437(A2区、Vc層)

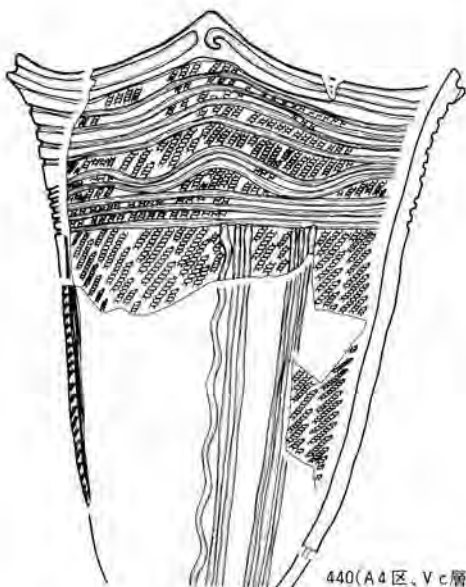




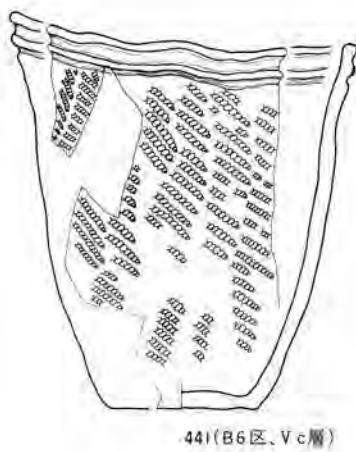
438(A3区、Vc層)



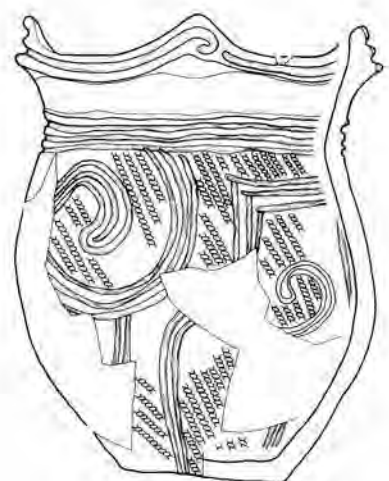
439(A3区、Vc層)



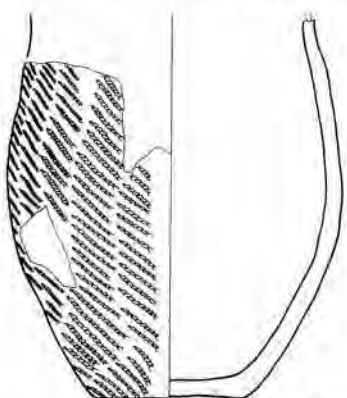
440(A4区、Vc層)



441(B6区、Vc層)



442(A2区、Vc層)



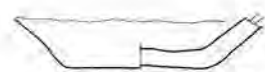
443(A3区、Vc層)



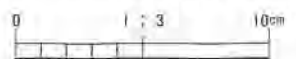
444(A3区、Vc層)

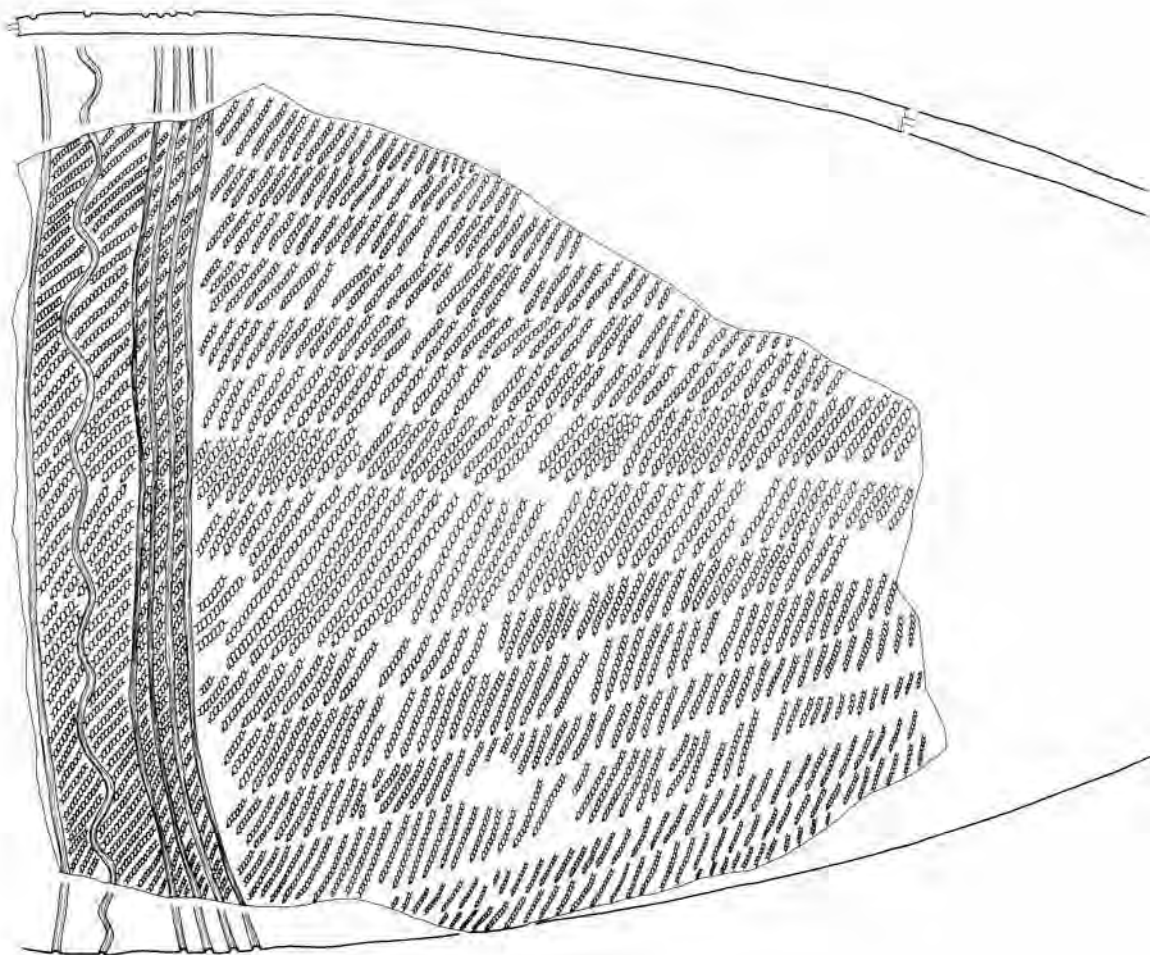


445(A3区、Vc層)

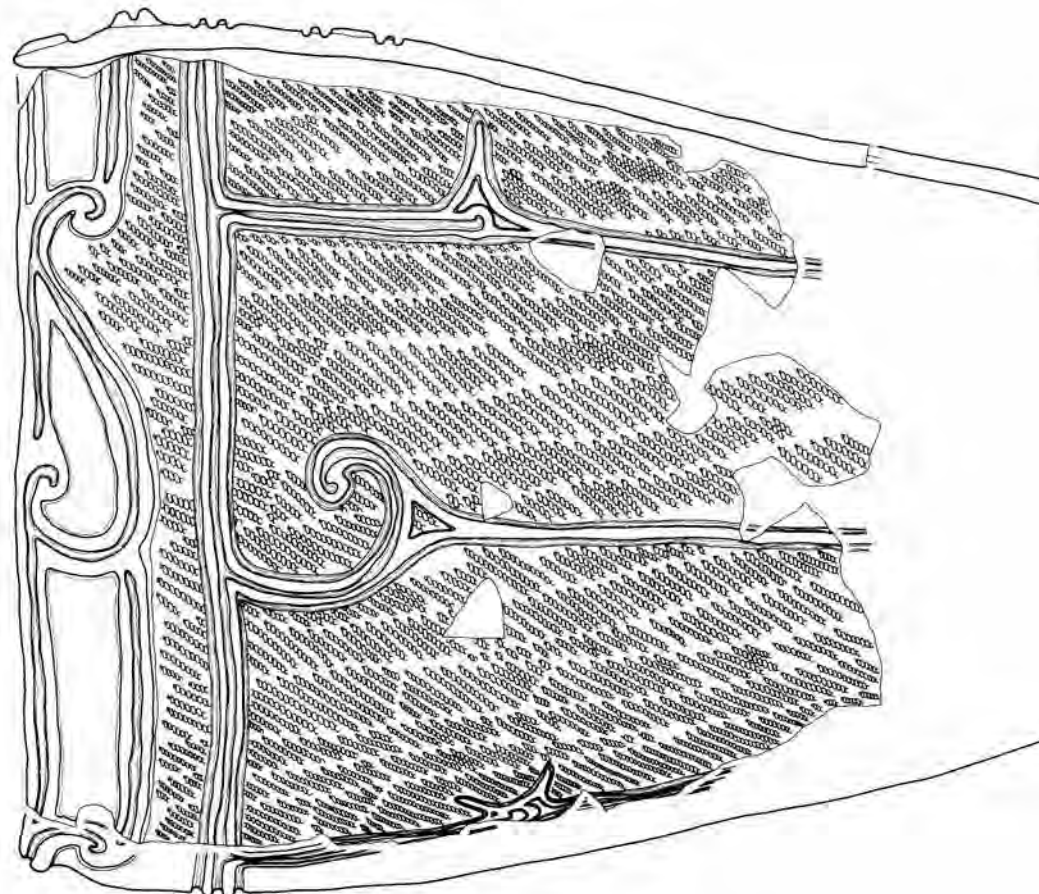


446(B6区、Vc層、pot.37)



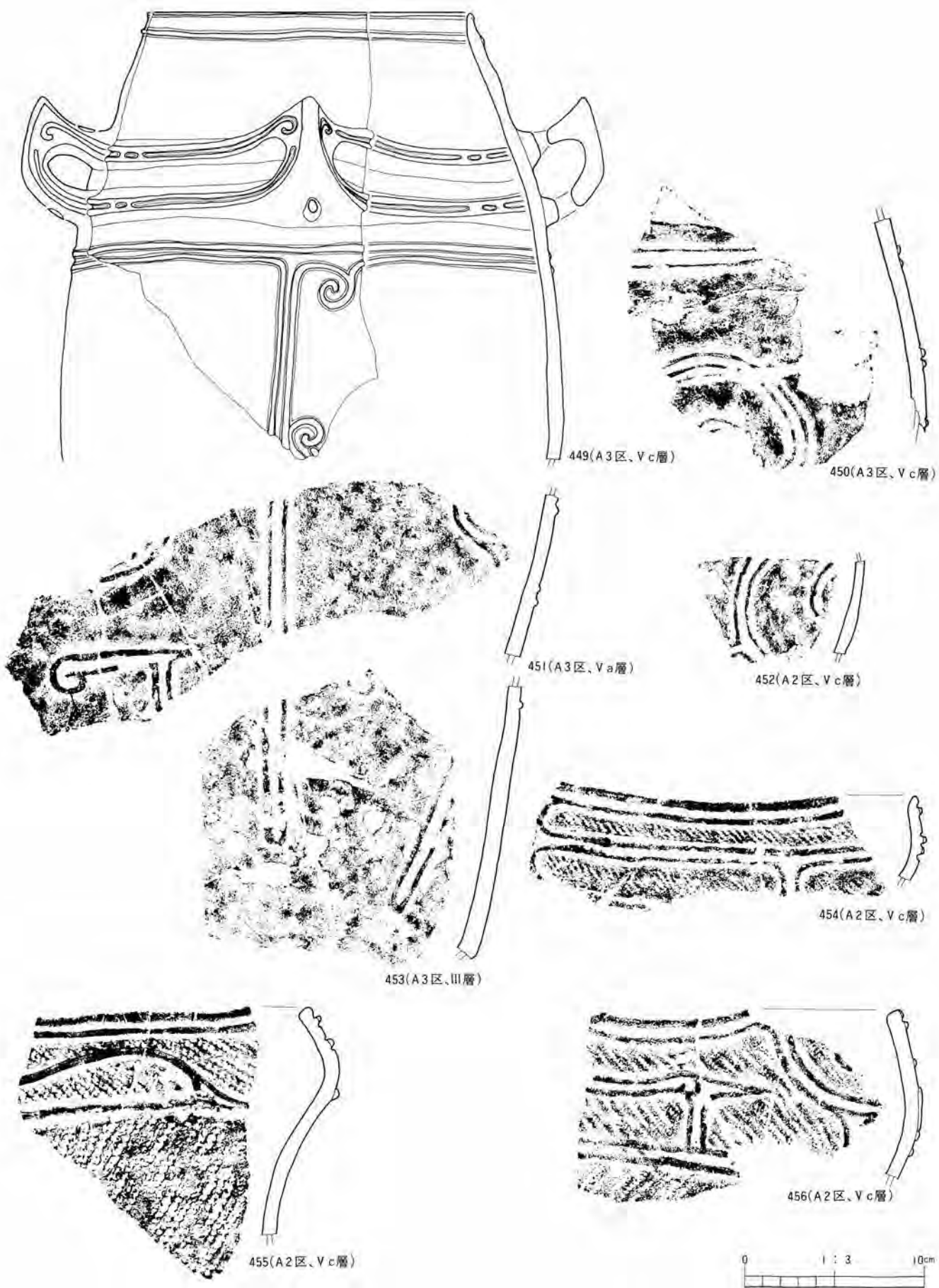


448 (A5区、B6区、Vc層、pot.30)

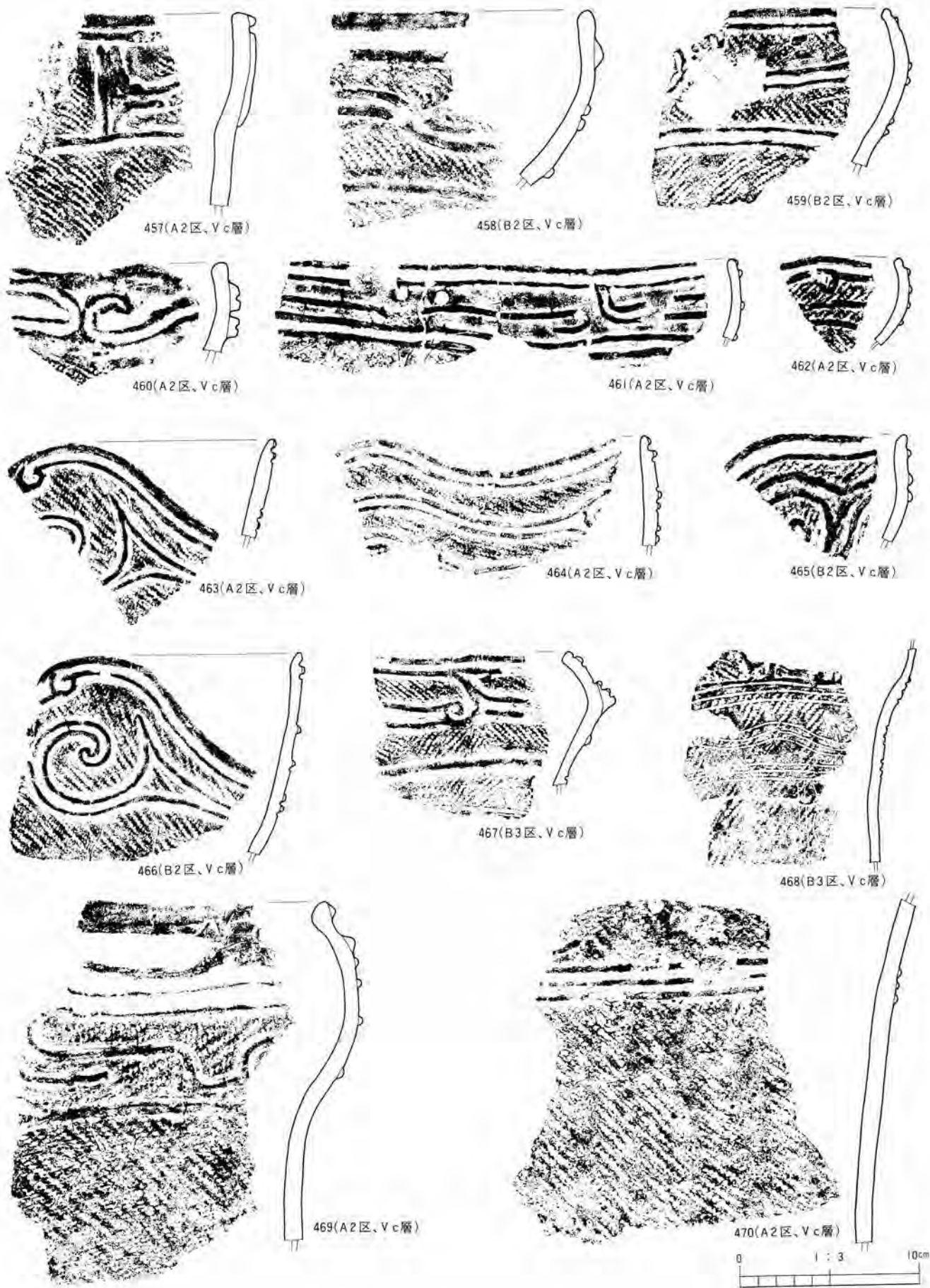


447 (A3区、Vc層)

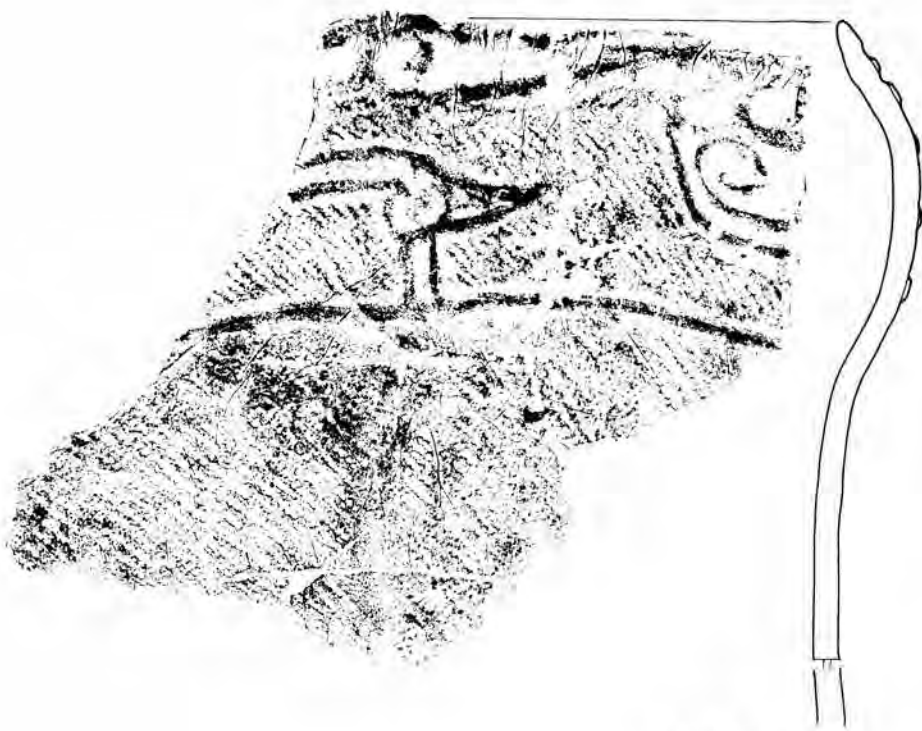
第40図 出土土器-31 (Vc層-3)



第41図 出土土器-32 (Vc層-4)



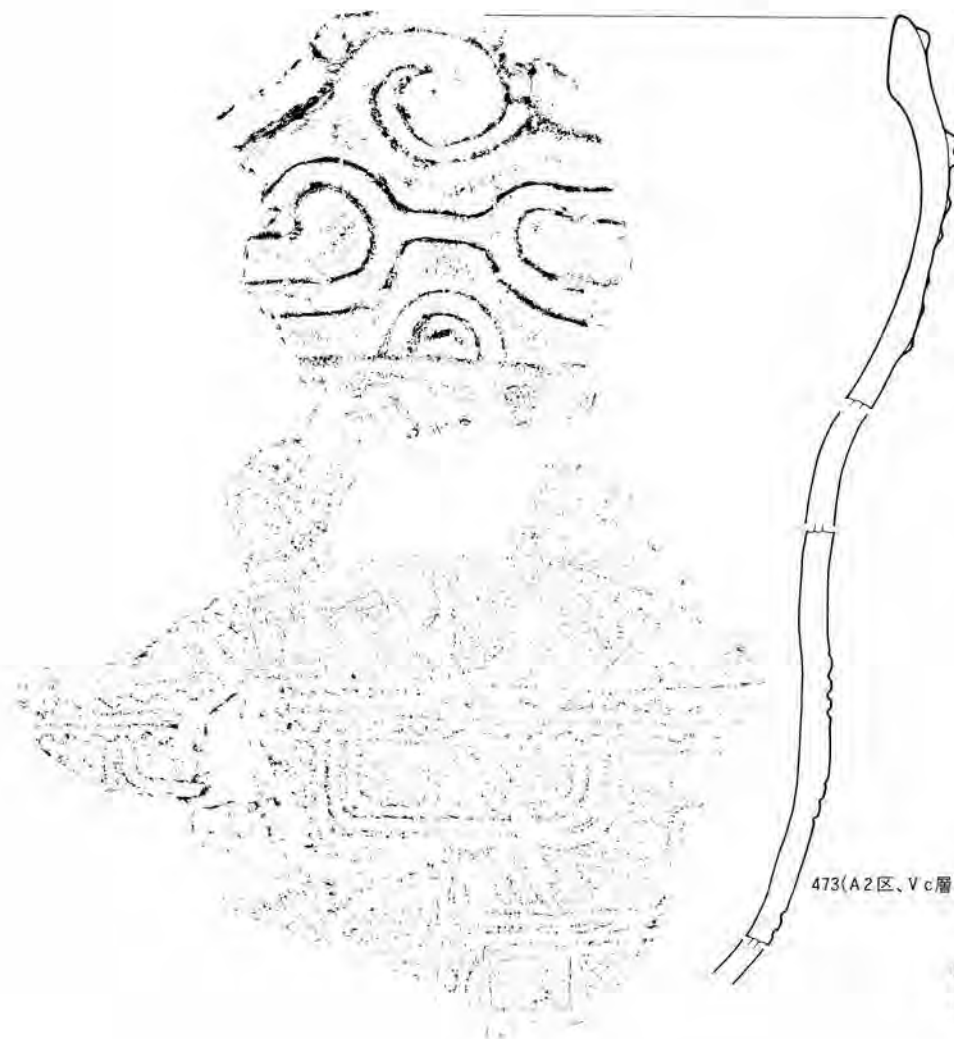
第42图 出土土器-33 (Vc層-5)



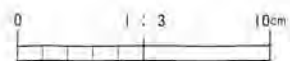
471(A2区、Vc層)



472(A2区、Vc層)



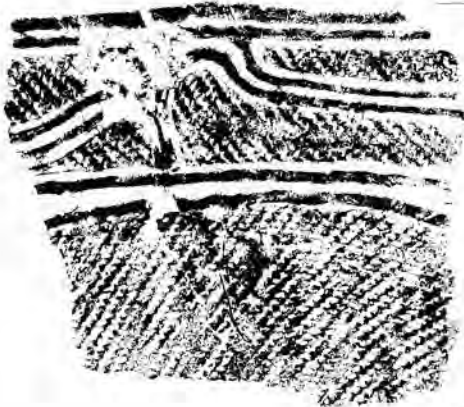
473(A2区、Vc層)



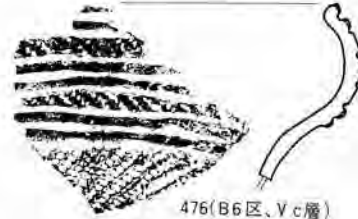
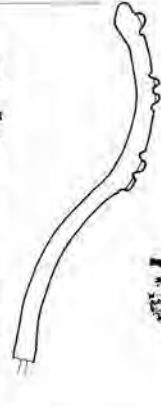
第43図 出土土器-34 (Vc層-6)



474(B3区、Vc層)



475(B6区、Vc層、pot.40)



476(B6区、Vc層)



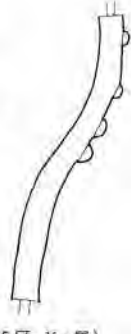
477(B5区、Vc層)



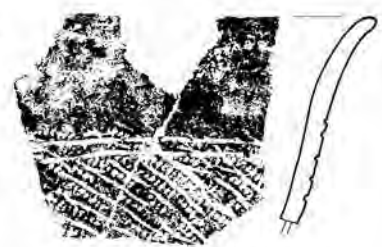
478(B2区、Vc層)



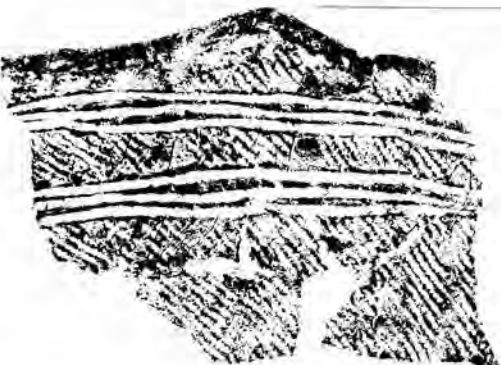
479(B6区、Vc層)



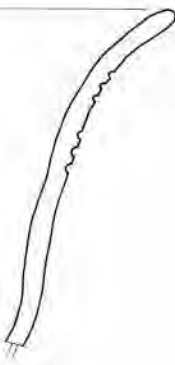
480(B5区、Vc層)



481(B3区、Vc層)



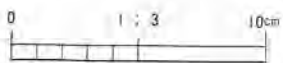
482(B6区、Vc層)



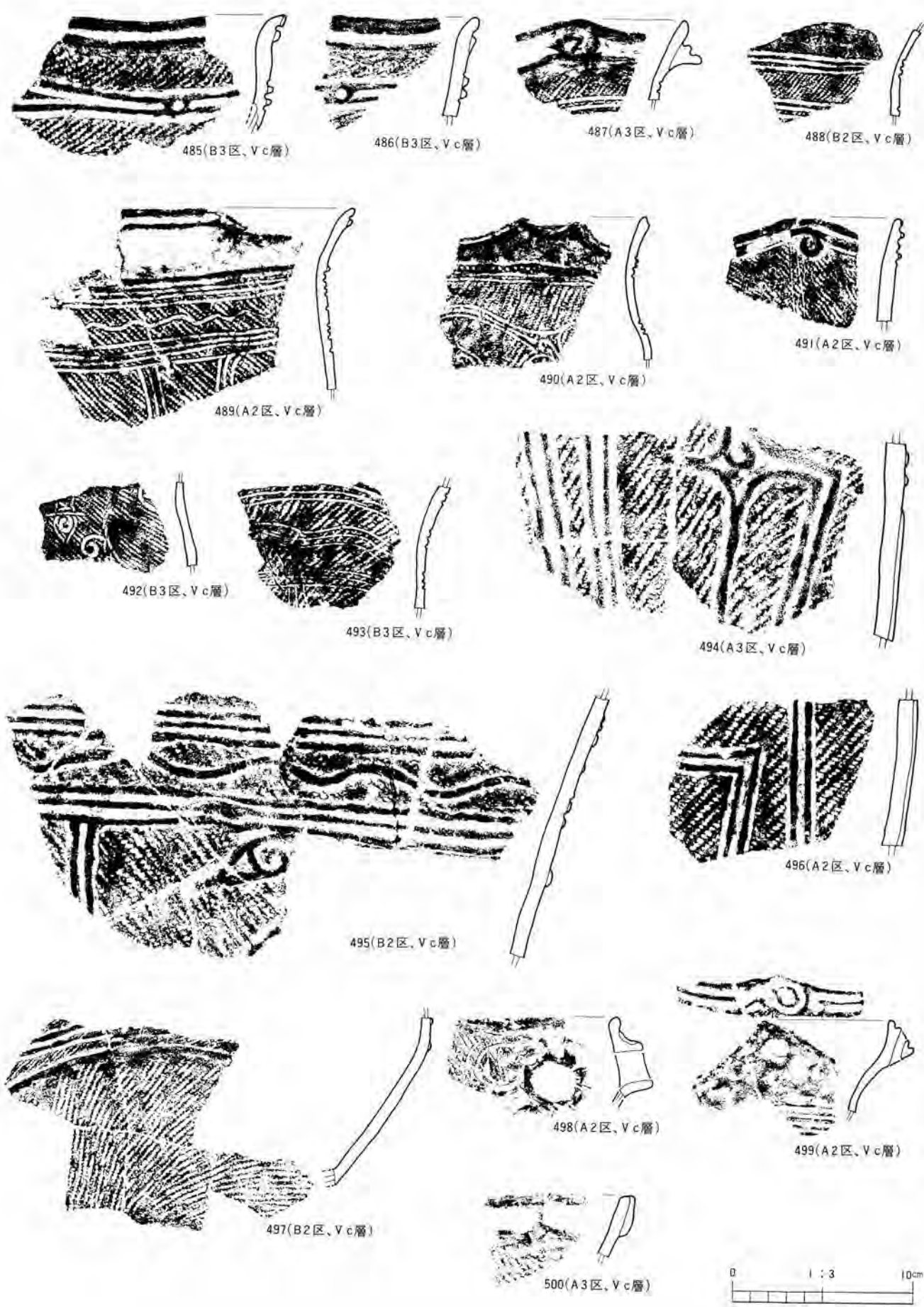
483(B6区、Vc層)



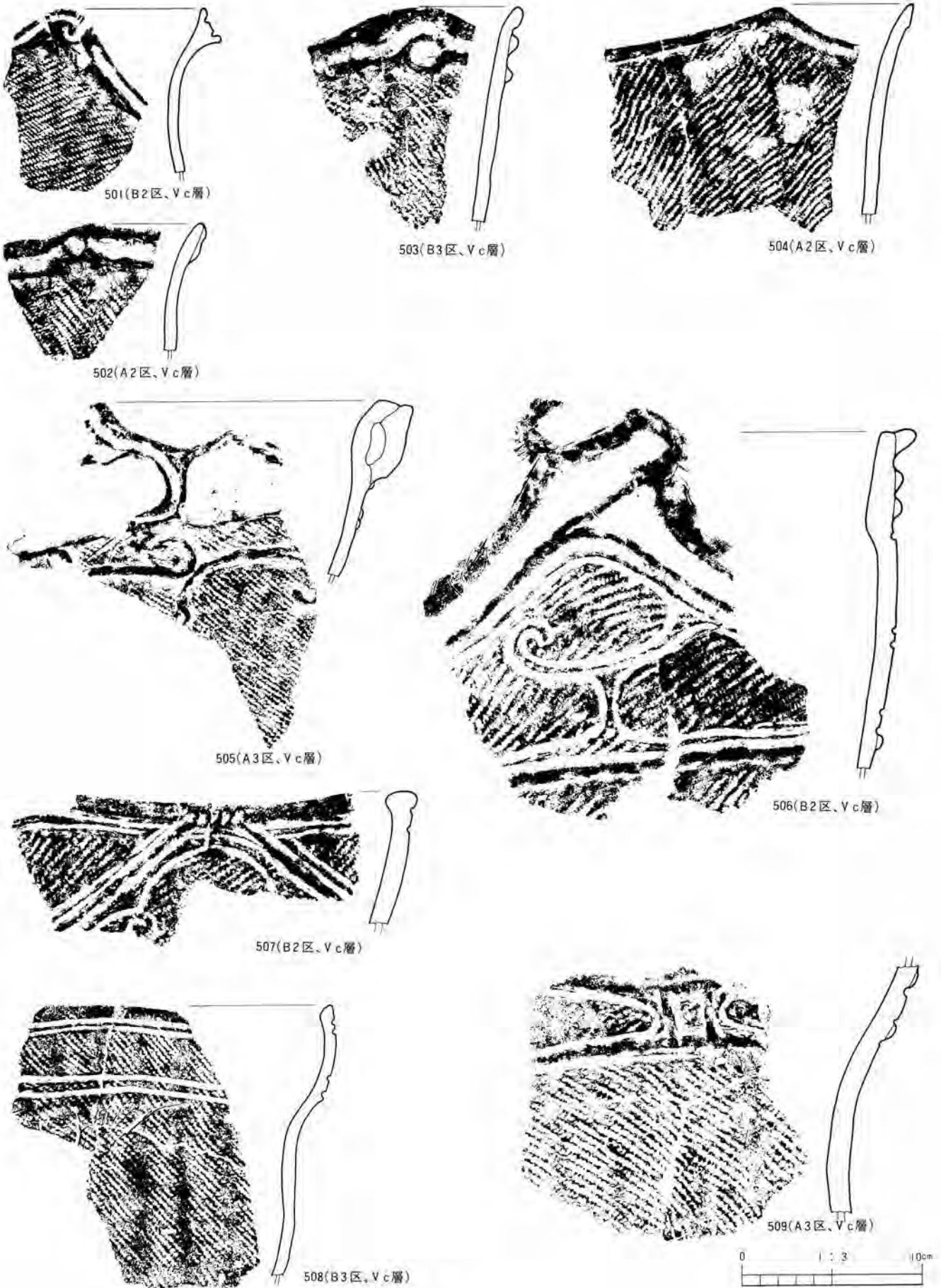
484(B2区、Vc層)



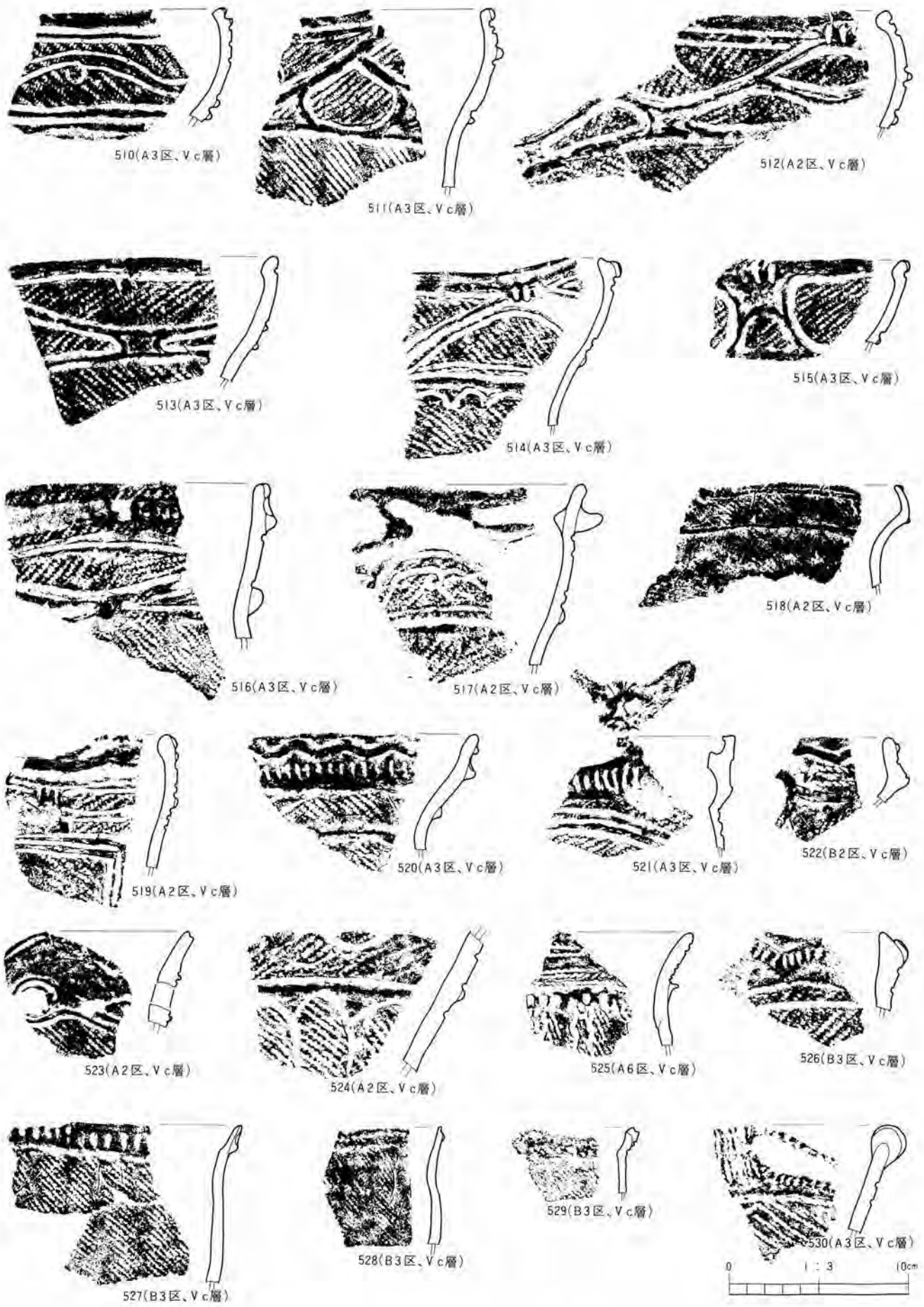
第44图 出土土器—35 (Vc層—7)



第45图 出土土器—36 (Vc層—8)



第46图 出土土器—37 (Vc層—9)



第47图 出土土器—38 (Vc層—10)

状の把手を施す。把手の上下には貫通孔が穿たれる。粘土紐の上面等は隆沈線状に調整されている。体部文様帯は上部を横位2条の隆起線により区画される。把手の下位に小渦巻文を施し、縦位の隆起線文を懸垂させ、器面を4分割し、内部に大渦巻文等を施すようである。

445・448・470・484・492～496は深鉢の体部～底部破片である。

448・493は439や440に類似する施文を認めるが器形が不明である。

445・470・484・494～496は隆沈線により施文されるもので、492は沈線により施文されるものである。

437・443・444・446は地文のみを施す深鉢の体部下半である。

497・497は浅鉢である。

497は口縁部文様帯に横位の隆沈線を施すが、上下境界線への連絡は無く開放的な施文なる。キャリパー形深鉢に類似する施文である。

498は注口を有するもので、注口付近に隆沈線による施文がみられる。

507～515・518はキャリパー形深鉢（深鉢B）である。

510は口縁部文様帯上下を隆沈線で区画し、内部に波状の平行沈線を施す。部分的に小渦巻文により加飾される。

518はほとんど調整されない隆起線にて口縁部文様帯上部を区画するだけのものである。同様に508は上下を平行沈線にて区画したものである。

他のものは沈線を伴う隆起線で波状文や区画文等を施し、Ⅶa層～Ⅵa層のものに類似する。

516・517・519～530は沈線を伴う隆起線により施文されるものや、原体圧痕により施文されるもので、Ⅵa層以下に伴うものである。

V b 層出土土器（第48図～第55図）

552・556はキャリパー形深鉢（深鉢B）である。

552は口縁部文様帯上部に隆沈線による円文とこれに連絡する隆沈線により施文される。下部文様帯は横位に展開する施文がみられるが、他のモチーフとの連絡が行われ、結果的に不定形の区画文を作出す。頸部は無文帯とし、体部文様帯は上部横位3条の平行沈線で区画し縦位3条の平行沈線を懸垂する。地文はL-R単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転させる。556も類似する施文がみられる。

531・553・555～562・564～567は平縁のキャリパー形深鉢（深鉢B）である。

553・555・557・560・561・565は口縁部文様帯に隆沈線により横方向に展開する施文がみられるが、渦巻文を施す部分等で上下の境界線と連絡することにより不定形の区画文を作出す。

531・567は口縁部文様帯に横位波状の隆沈線を施すもので、上下境界線への連絡はない。他のものは横方向に展開するもののモチーフの全容は不明である。

620は大波状口縁のキャリパー形深鉢（深鉢A）である。口縁部文様帯上部は渦巻文と、これに連絡する隆沈線により施文される。上部文様帯は隆沈線により横方向に展開させ、波頂下に大渦巻文を、波頂間に小渦巻文を配す。小渦巻文には不完全ながら上下境界線への連絡がみられる。

566・568～572はキャリバー形深鉢であるが、口縁部を欠き、器形が不明である。568・569は頸部や体部に沈線による施文がみられる。

532・564・548～551・573～589は口縁部が外反または外傾する深鉢（深鉢C）である。

532は大波状口縁を呈し、口縁部文様帯は波頂部に施した渦巻文と、これらを連絡する隆沈線により構成される。頸部文様帯は上部を無文帯とし、下部文様帯は上端を隆沈線と平行沈線により、下端を平行沈線で区画し、内部に波状の平行沈線を施す。体部文様帯は縦位に平行沈線文を懸垂する。

549～551は532に類似するが、頸部の無文帯が不完全である。

580・586・587も532に類似し、頸部無文帯を有すが、以下欠損しておりモチーフは不明である。

581～585・588・589も532に類似するが、頸部に無文帯を持たないものである。585は平縁である。

546は口縁部文様帯に隆沈線を施し、体部に平行沈線により渦巻文等を施す。

578は頸部文様帯に平行沈線により半円文等を施す。

573～579は体部文様帯等を隆沈線により施文するものである。

573、576はモチーフが縦位に展開し、573は半円文と、これの下端から懸垂する施文がみられる。576は隆沈線を懸垂させる。

579は口縁部文様帯に円文や区画文（あるいは無文帯か）を施すが、体部のモチーフは不明である。

533～535・548・590は頸部が屈曲し、体部が張り出す深鉢（深鉢E）である。いずれも平行沈線により施文される。

533・535は口縁部を無文帯とし器面全体に大渦巻文を施すが、他のモチーフとの連絡はみられず開放的な施文となる。535は部分的に棘状の加飾がみられる。

534は口縁部を無文帯とし、頸部文様帯に横位の平行沈線や波状文を施す。体部文様帯は小渦巻文を配しながらも懸垂文を主体とした施文となる。

548は口縁部を無文帯とし、体部文様帯に有棘渦巻文等を施す。沈線間には一部円形の連続刺突文が伴う。

590は口縁部を無文帯とし、体部文様帯上端に隆沈線をめぐらせて、上面に円形の連続刺突文を施す。文様帯内部には平行沈線で大渦巻文（？）を施し、有棘渦巻文で加飾している。

592～601は口縁部の内湾する深鉢（深鉢F）で波状口縁のものが多く様である。比較的モチーフが判別できるものは596と597である。

596は口縁部文様帯に隆沈線文を施し、体部文様帯に隆沈線による大渦巻文を上下2段に展開させる。モチーフ間の連絡はほとんど認められないが棘状の加飾を多用している。

597は口縁部文様帯に渦巻文とこれに連絡する隆沈線を施す。体部文様帯は懸垂文を主体とするが、上段と中段に渦巻文を配し、これらを連絡することにより不定形ながら区画文を作成する。

536・543・601～617は深鉢の体部破片である。

536は体部文様帯に隆沈線により懸垂文を施すが、有棘渦巻文を伴い、またモチーフ間の

連絡もみられる。

543は大形の深鉢で頸部文様帯に隆沈線による有棘波状文を施す。体部文様帯には平行沈線により懸垂文を施すが、隣接するモチーフとの連絡がみられ、区画文を作出す。

602・603・605・606は深鉢Fに類似するもので隆沈線により器面全体に大渦巻文を施す。有棘渦巻文により加飾されるものや、モチーフ間の連絡により区画文を作出すものもみられる。

610は平行沈線により器面全体に大渦巻文等を施すものである。やはり深鉢Fに類似するものである。

607は隆沈線により懸垂文を施すものである。

608・609は無文帯下部に横方向の隆沈線と平行沈線を施すものである。

611は平行沈線により有棘渦巻文等を施すもので、モチーフ間の連絡により不定形な区画文を作出す。

612～614は平行沈線により渦巻文等を施すが、やや開放的である。

615～617は平行沈線により頸部文様帯に波状文や、体部文様帯に懸垂文を施す。深鉢Bや深鉢Cの体部破片だと思われる。

537は胴張りの深鉢（深鉢H）で、頸部に粘土紐を貼付けてつば状に作出し、4単位のブリッジ状把手を施している。

541、542、592、628は浅鉢である。

592は注口部の破片で、隆沈線による施文がみられる。

628は口縁部に屈曲を有し口縁部文様帯に横位1条の隆沈線文を施し、地文としてL-R単節斜縄文を口縁部付近で横方向に体部で縦方向に回転させる。

541は口縁部が屈曲し、口縁部文様帯に横位楕円形区画文を施し、内部に原体圧痕文を施す。

542は口縁部がわずかに内湾し、やはり口縁部文様帯に横位楕円形区画文と原体圧痕文を施す。

541、542は本来この層に伴うものではないと思われる。

622～626はキャリパー深鉢（深鉢B）であるが、前述したものとは異なる。

622、623は口縁部文様帯に調整の不完全な隆起線による横方向に展開する施文がみられるものである。622は部分的に渦巻文の施文がみられる。

624～626は区画文や渦巻文を施すもので、VI a層以下に類例を求めることができる。

627は口縁部の外反する深鉢（深鉢C）で、口縁部文様帯に調整の不完全な粘土紐を波状に貼付ける。

538は鉢形を呈し地文としL-R単節斜縄文を縦方向に回転する。

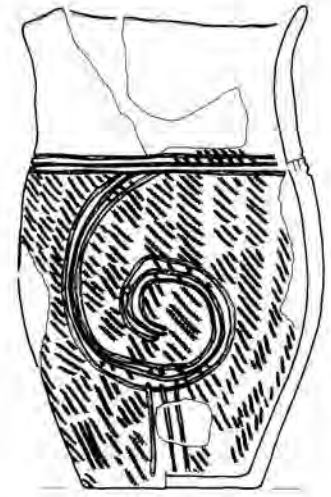
629～631は口縁部の外反する深鉢（深鉢C）で、口縁部文様帯に渦巻文や隆沈線を施す。

539・632・633も同様であるが、器形は深鉢Fである。

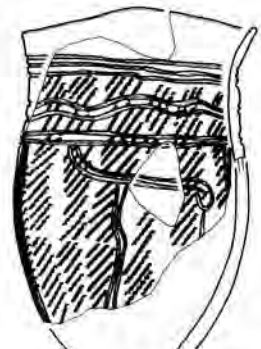
634～636は口縁部の外反する深鉢（深鉢C）で、地文のみを施す。



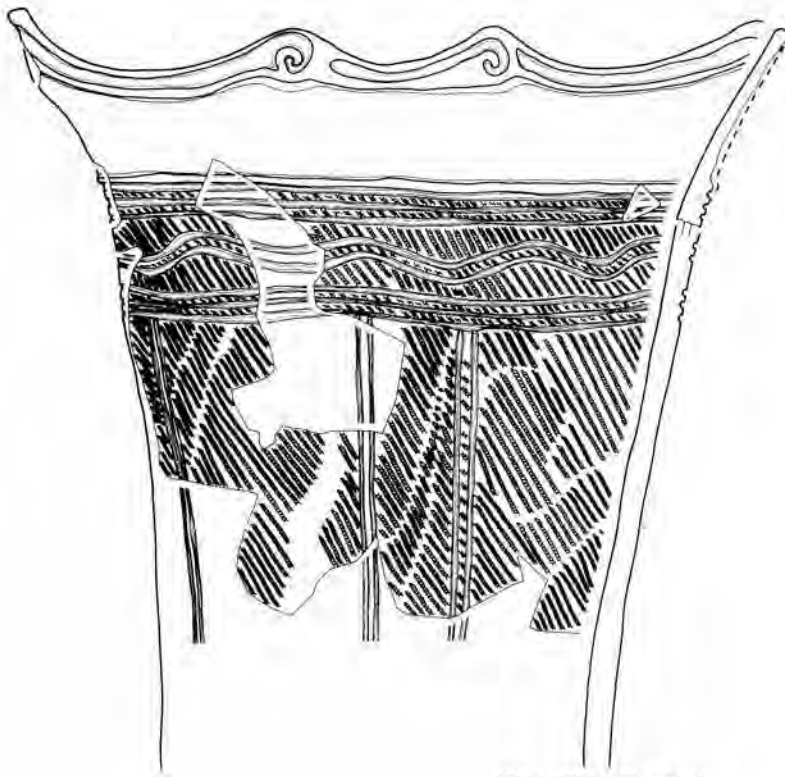
531(A4区、Vb層)



533(A3区、Vb層)



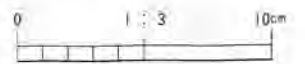
534(B5区、Vb層、pot.6)

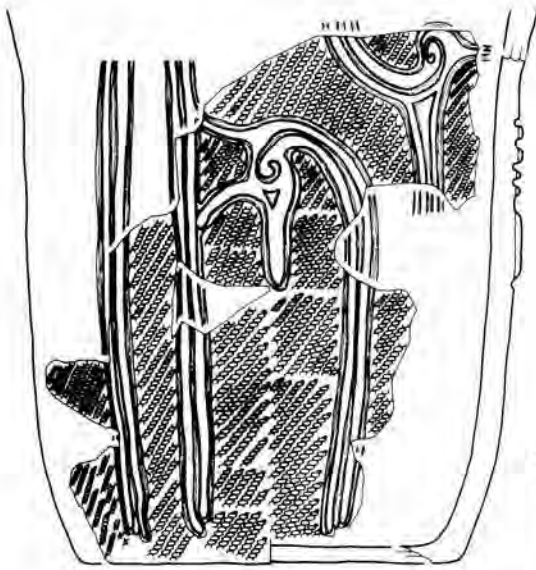


532(A5区、Vb層、pot.13)

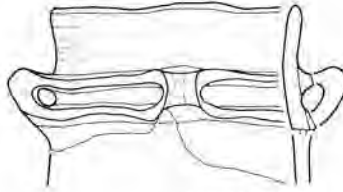


535(A3区、Vb層)

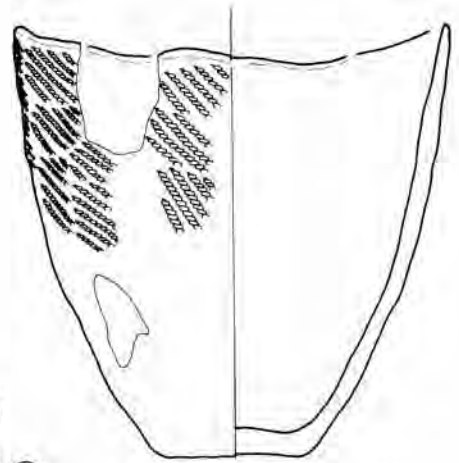




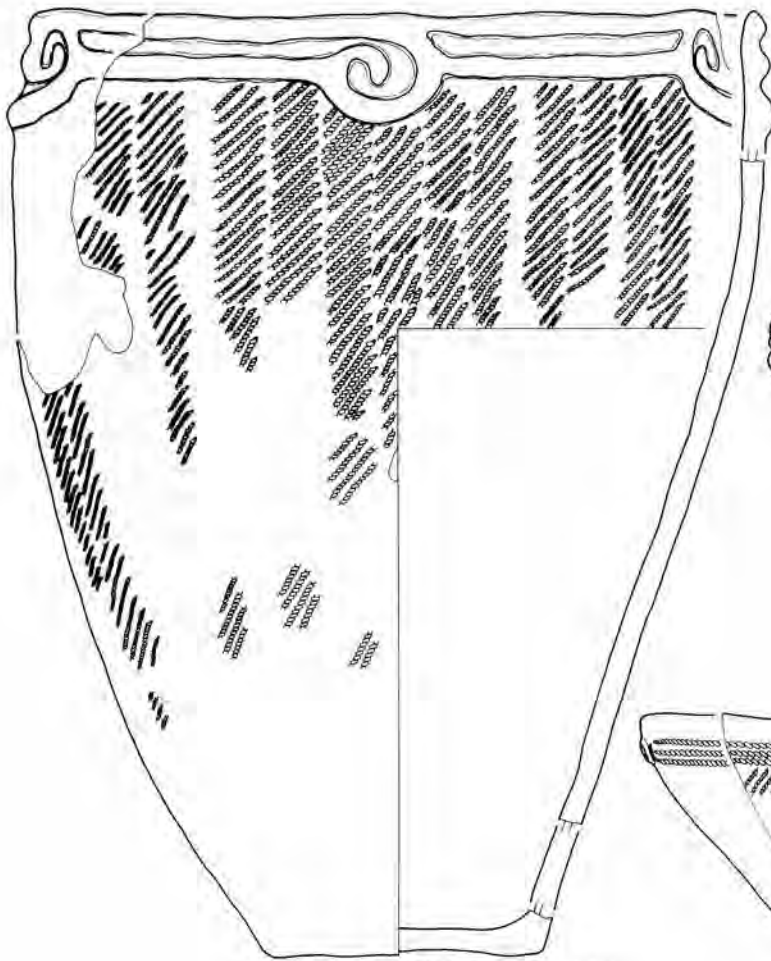
536(A2区、Vb層)



537(B4区、Vb層)



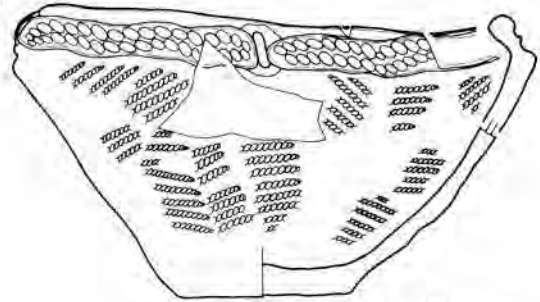
538(A4区、Vb層、pot.10)



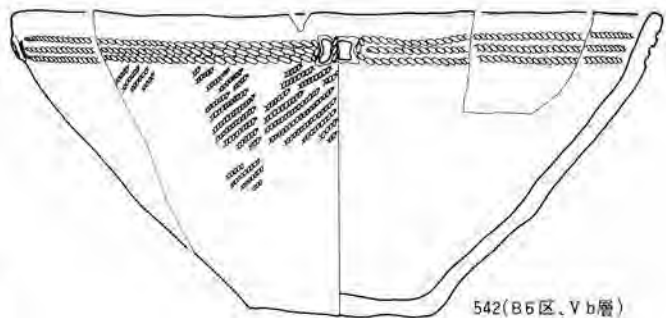
539(B6区、Vb層、pot.21)



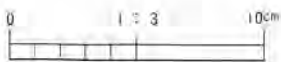
540(A5区、Vb層、pot.39)



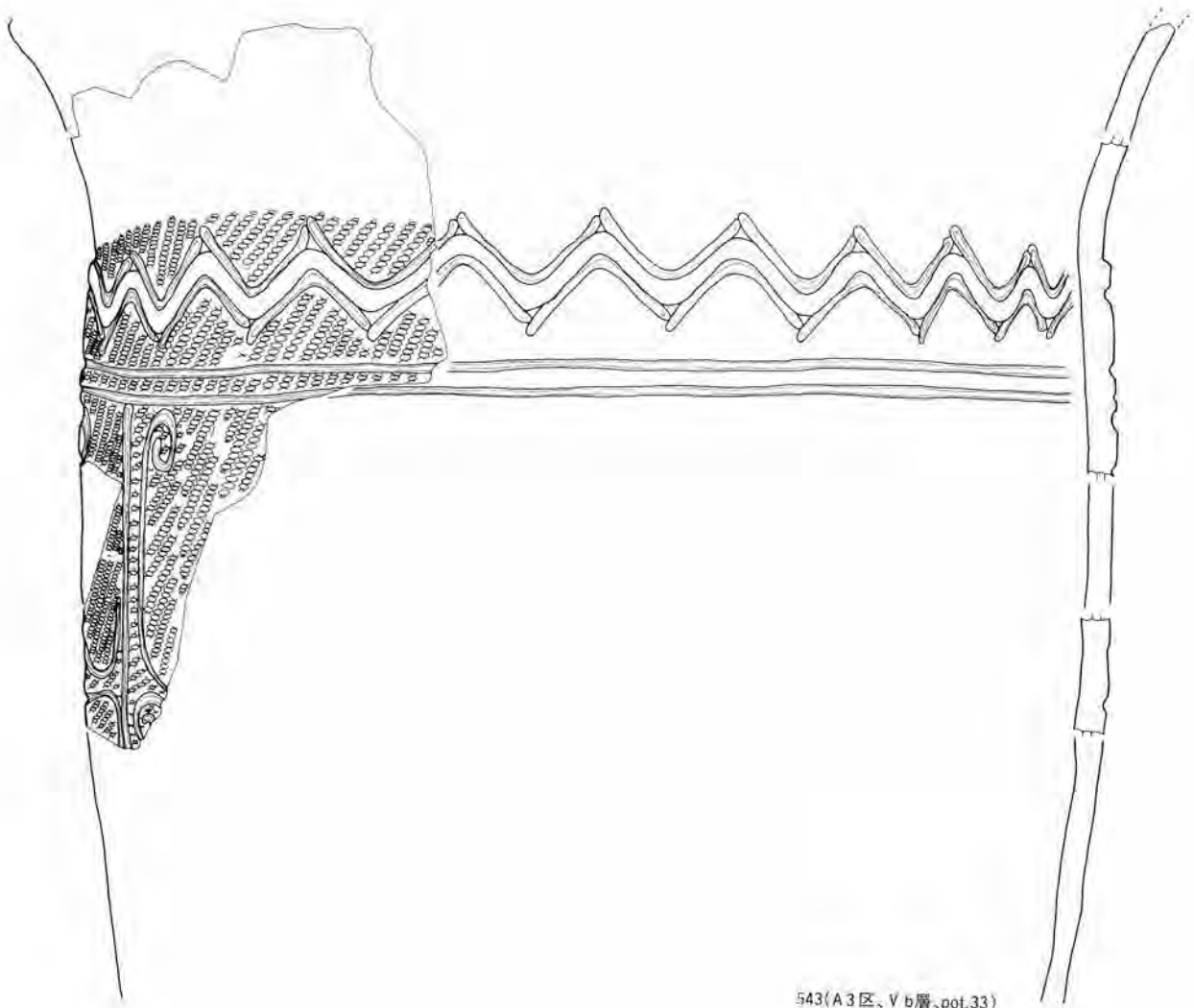
541(A5区、Vb層、pot.16)



542(B6区、Vb層)



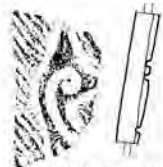
第49图 出土土器—40 (Vb層—2)



543(A3区、Vb層、pot.33)



544(A2区、Vb層)



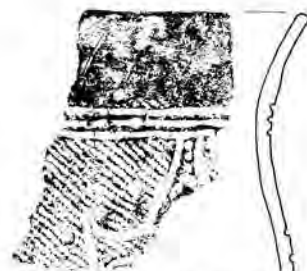
545(A2区、Vb層)



546(A2区、Vb層)



547(A2区、Vb層)



548(A2区、Vb層)



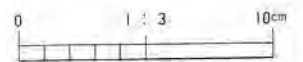
549(A2区、Vb層)



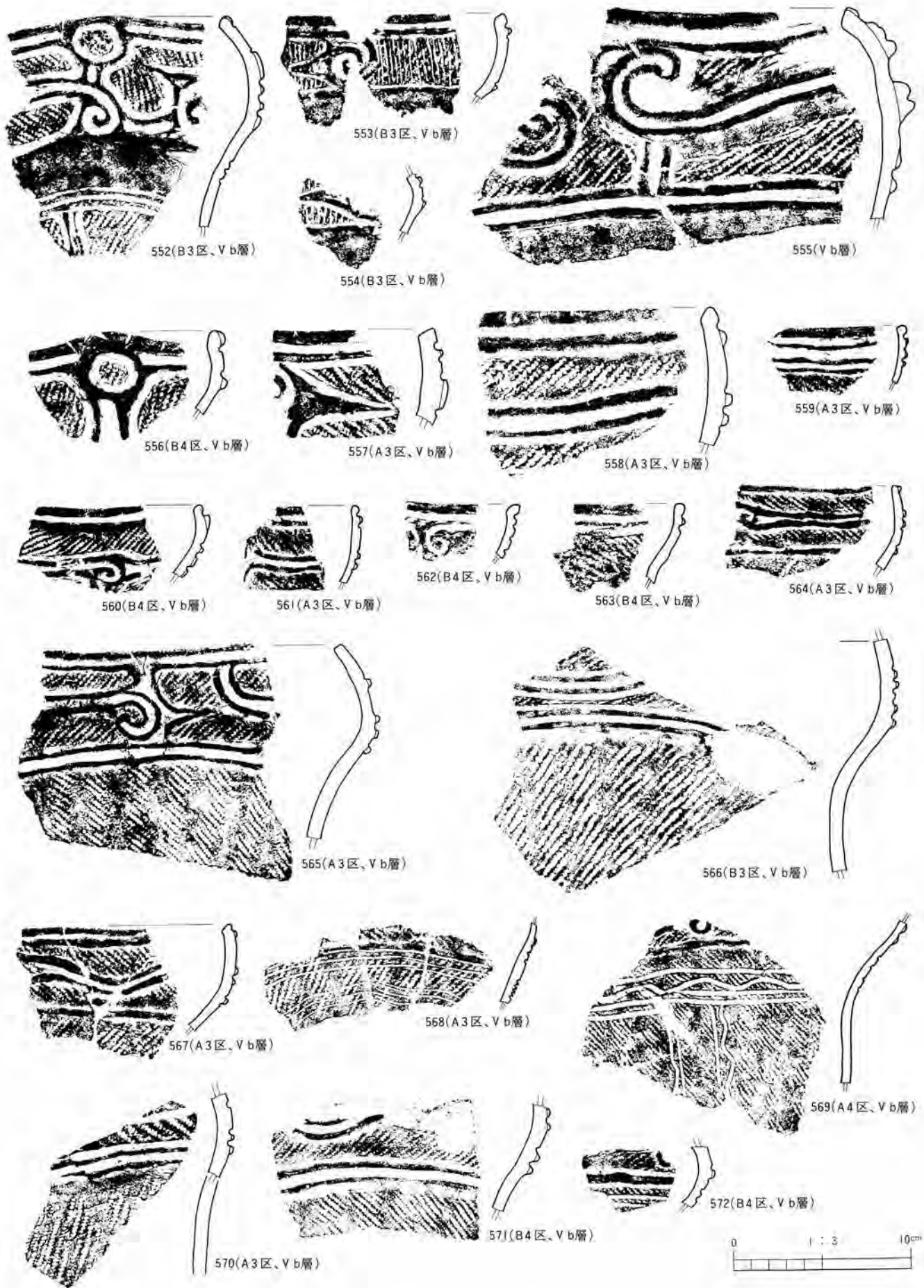
550(A2区、Vb層)



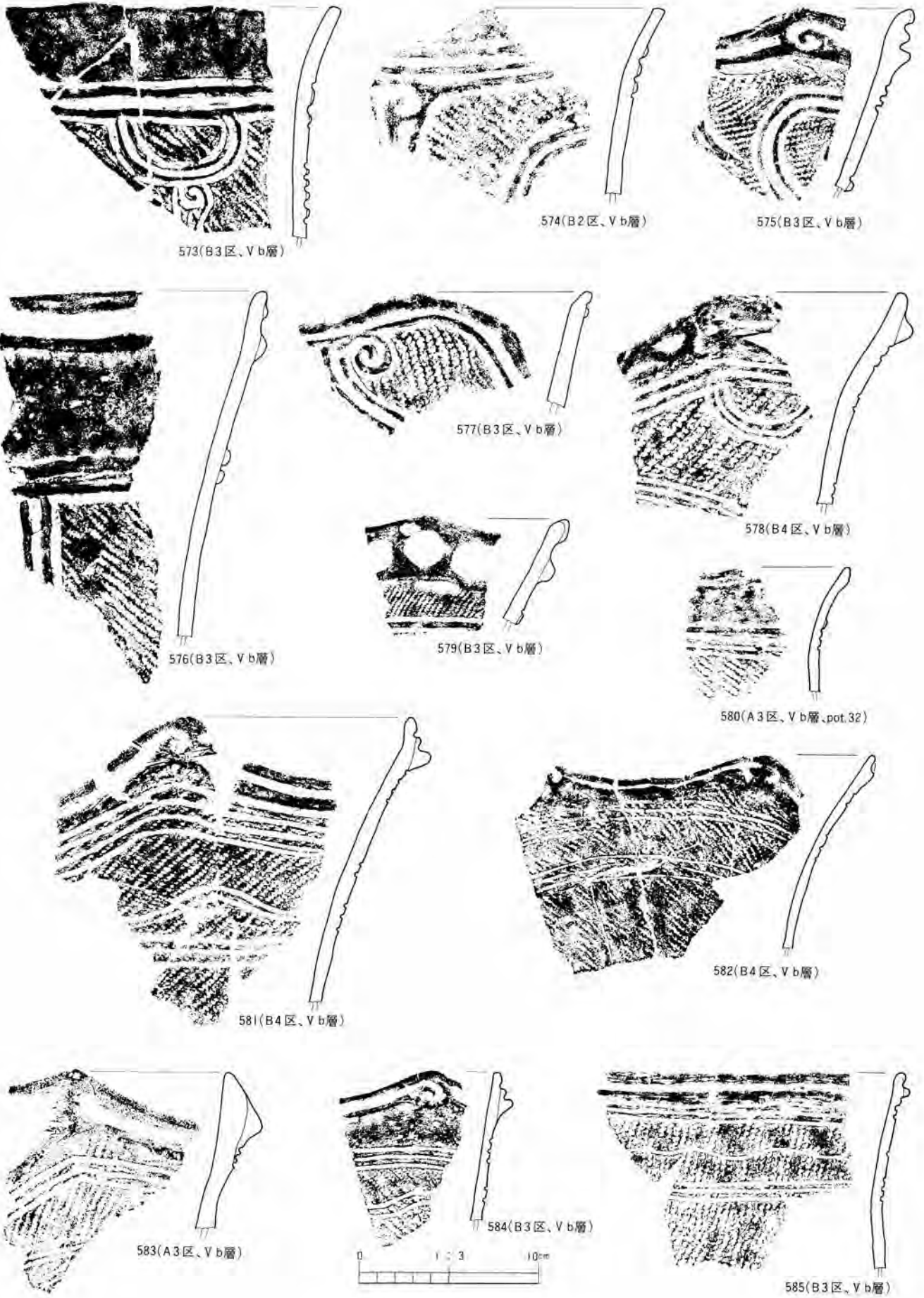
551(A2区、Vb層)



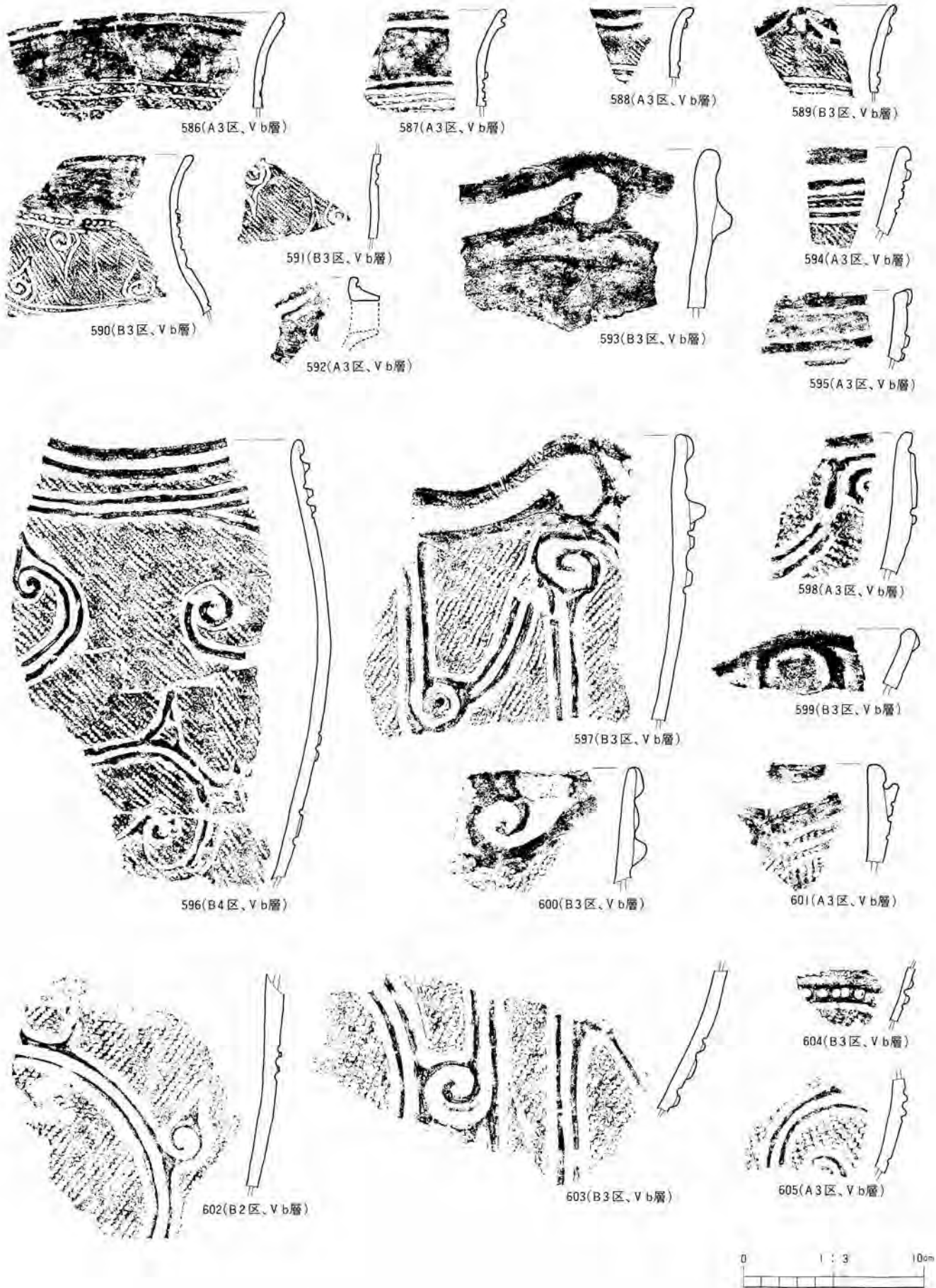
第50図 出土土器—41 (Vb層—3)



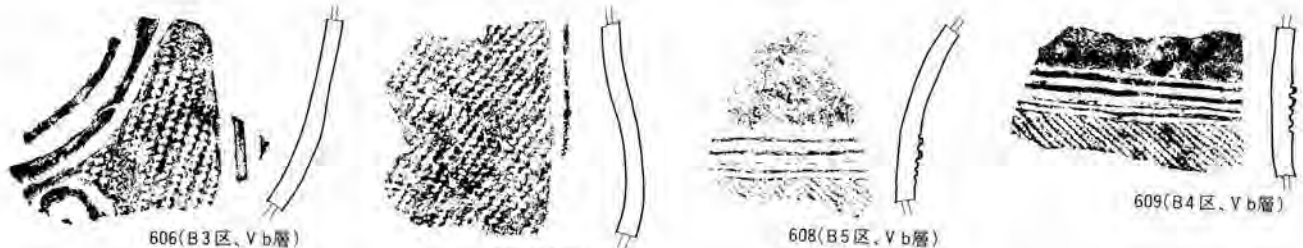
第51图 出土土器-42 (Vb層-4)



第52図 出土土器—43 (Vb層—5)



第53图 出土土器—44 (Vb層—6)

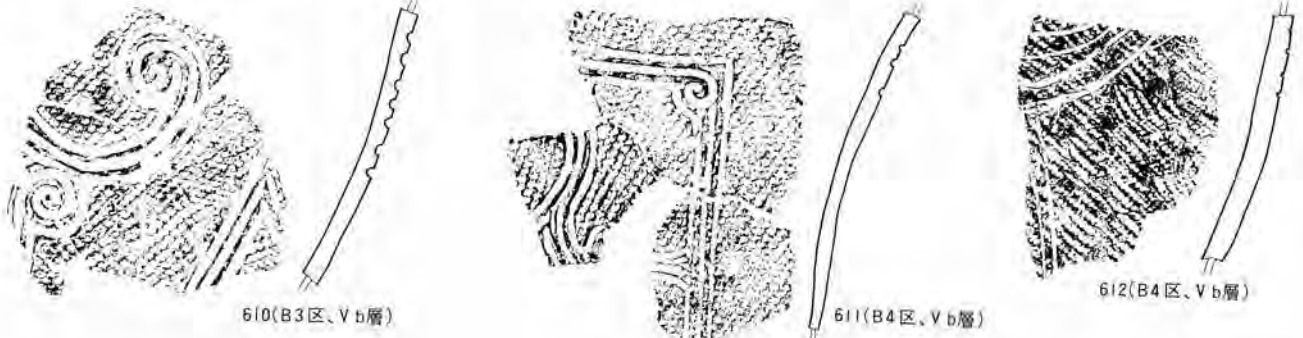


606(B3区、Vb層)

607(B4区、Vb層)

608(B5区、Vb層)

609(B4区、Vb層)



610(B3区、Vb層)

611(B4区、Vb層)

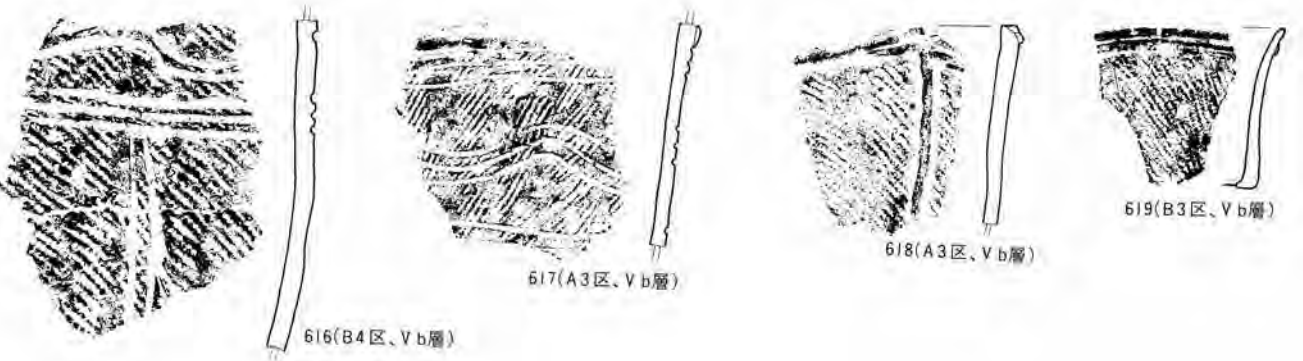
612(B4区、Vb層)



613(A3区、Vb層)

614(A3区、Vb層)

615(A3区、Vb層)



616(B4区、Vb層)

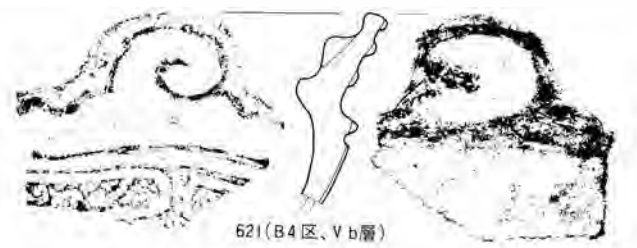
617(A3区、Vb層)

618(A3区、Vb層)

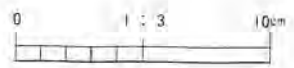
619(B3区、Vb層)

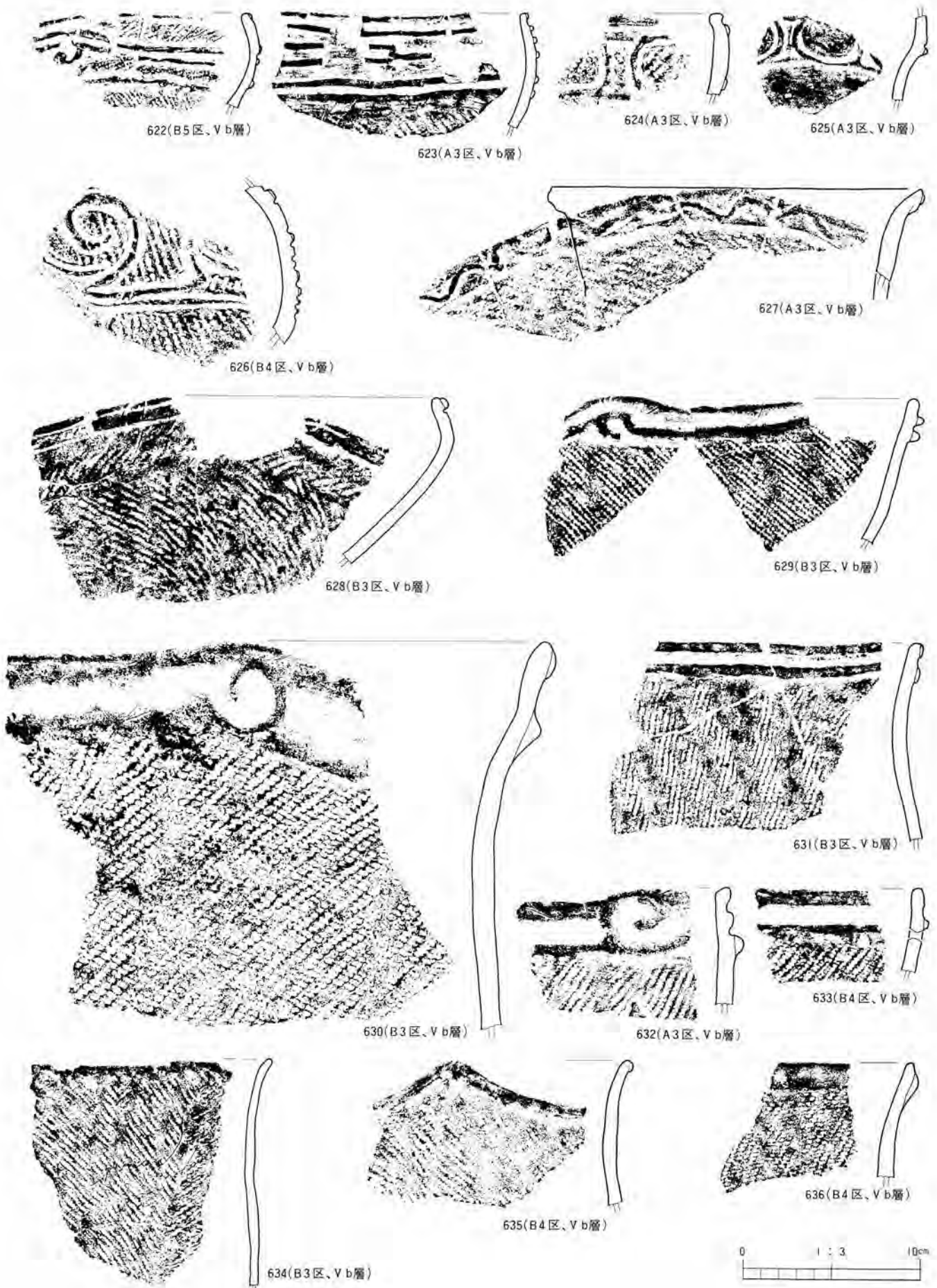


620(B4区、Vb層)



621(B4区、Vb層)





第55图 出土土器—46 (Vb層—8)

V b層～V a層出土遺物（第67図）

887・888は土層断面のV b層とV a層の層位面から検出した。887は口縁部が大波状を呈し外反する深鉢（深鉢C）である。口縁部文様帯は波頂部に渦巻文を施し、隆沈線にてこれらを連絡している。頸部文様帯は横方向の平行沈線と波状文により施文され、体部文様帯は縦位の平行沈線文を懸垂する。888もこれに類似するものである。

V a層遺物出土状況

V a層は土層断面の観察によると明確な区分はできなかつたものの、下部から上部にかけてわずかずつではあるが漸移的に色調が暗くなるという傾向がみられた。

また、遺物の出土状況はV b層との層位面からV a層下部にやや大形の破片が集中する傾向がみられ、出土量も多かった。一方、上半部は小さ目の破片が主体となり、やや出土量が少なかった。このため、調査中に上半のものをV a層上部、下半のものをV a層として遺物を取り上げた。更に、整理作業を集めるなかで両者に型的差異が認められた。

このため両者を区別して報告することとした。両者は本来別々な層であった可能性も考えられる。

V a層（下部）出土土器（第56図～第60図）

637～641はキャリパー形深鉢（深鉢B）であり、口縁部が波状を呈するものと平縁の2者がみられた。

637・638は口縁部文様帯を重層化し、上部文様帯は渦巻文とこれらを連絡する隆沈線文により構成され、横位楕円形区画文を作出す。637は下部文様帯に隆沈線により上下境界線に接する渦巻文、渦巻文+円文、縦位の連結文等を施することにより渦巻文と横位楕円形（あるいは方形）の区画文が交互に出現するという定型化された施文をとる。638の下部文様帯は渦巻文に連結する隆沈線の方向が異なるものの、やはり渦巻文と横位の区画文を交互に配している。区画文内には刻目を2段に充填している。両者はいずれも頸部を無文帯としている。

639～641は平縁のキャリパー形深鉢である。

639の口縁部文様帯も637、638同様に渦巻文と区画文を交互に配する。区画文内には刻目を2段に充填している。また、頸部を無文帯としている。

640・641も類似するモチーフではあるが、残存部位が少なく、口縁部文様帯全体での施文なのか、口縁部文様帯上半での施文なのかは不明である。

642～645・665～667は口縁部の外反する深鉢（深鉢C）である。

642・643は口縁部文様帯に隆沈線文を施し、ここから直接体部文様帯としている。両者ともに隆沈による渦巻文を施す。

644・645は口縁部を無文帯とするやや小形の深鉢で、体部文様帯に平行沈線による施文がみられる。

665～667・687は口縁部がわずかに外反する深鉢（深鉢C）であるが、前述のものよりやや大形である。いずれも口縁部を無文帯とする。

665は体部文様帯に平行沈線により弧状のモチーフと縦位波状文等の懸垂文が施文される。

666は体部文様帯に平行沈線により渦巻文等を施し、他のモチーフとの連絡により区画文を作出すものである。

667は口縁部無文帯と体部の境界線に1条の沈線文を施すものである。

687は口縁部を無文帯、頸部を縄文帯とし、体部文様帯に隆沈線により小渦巻文を伴う懸垂文が施される。

646～648・659は口縁部の内湾する深鉢（深鉢F）であり、いずれも口縁部文様帯として隆沈線を施し、直下に体部文様帯が構成される。

646・647は体部文様帯に隆沈線により大渦巻文等を施し、モチーフ間を連絡することにより区画文を作出す。646は地文として刻目を充填する。

648も同様に渦巻文等を施すものであるが、モチーフ間の連絡は少ない様である。

649～655・657・658・660～664は深鉢の体部破片である。

649・653・654は体部に膨らみを有する深鉢で、体部には隆沈線により大渦巻文を施す。この大渦巻文からは底部方向へ懸垂文を施すことにより区画文を作出す。661も大渦巻文等を施文するものであろう。

657・658は頸部文様に隆沈線により波状文を施す。体部文様帯は657が平行沈線で、658が隆沈線により施文される。両者ともにモチーフが類似し、渦巻文・有棘渦巻文・懸垂文等を施し、部分的ではあるが、モチーフ間の連絡により区画文を作出す。

650～652・655・661～664も体部破片であり、懸垂文を施文するもの、あるいはその部分である。いずれも隆沈線により施文される。

650は頸部を無文帯とし、体部文様帯に懸垂文を施すが、横方向の隆沈線を伴うことにより方形の区画文を作出す。651も同様である。

他のものは小渦巻文等を伴う懸垂文が施文される破片である。

659は平行沈線により大渦巻文(?)を施すものである。

656は浅鉢であり、口縁部が屈曲している。口縁部文様帯は隆沈線により渦巻文と方形の区画文を交互に配するものである。キャリパー形深鉢(637～639)の口縁部文様帯に類似する。地文はL-R単節斜縄文を口縁部で横方向に、体部で縦方向に回転する。

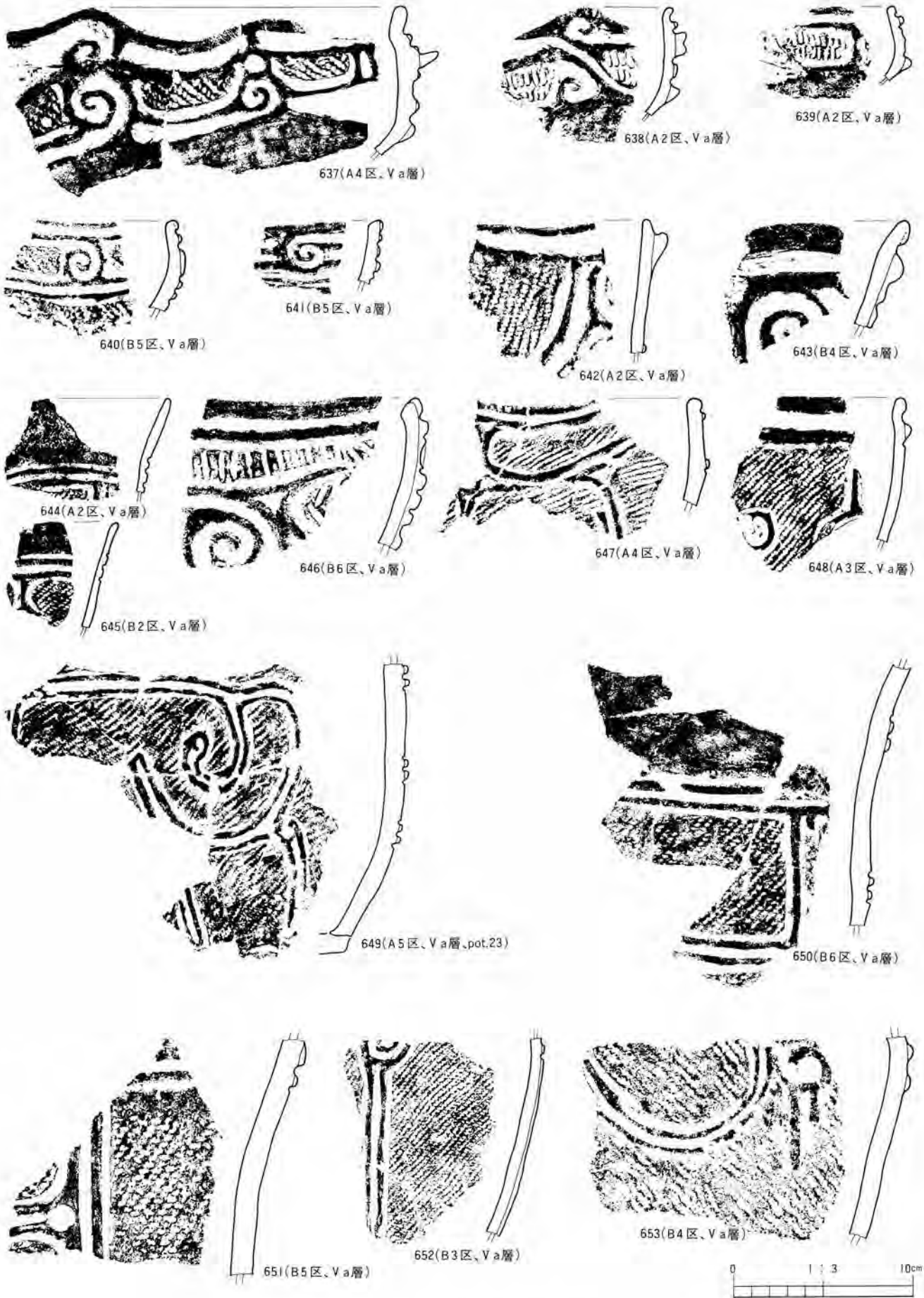
707も浅鉢であるが、口縁部は屈曲しない。口縁部文様帯に隆沈線を施すのみで、体部にR-L-R複節斜縄文を縦方向に回転させる。

670～677・679・681は平縁のキャリパー形深鉢（深鉢B）であり、いずれも口縁部文様帯に隆沈線による施文がみられるもの前述したものとは異なり横方向に展開するモチーフがみられる。V c層～V b層に類例を求めることができる。

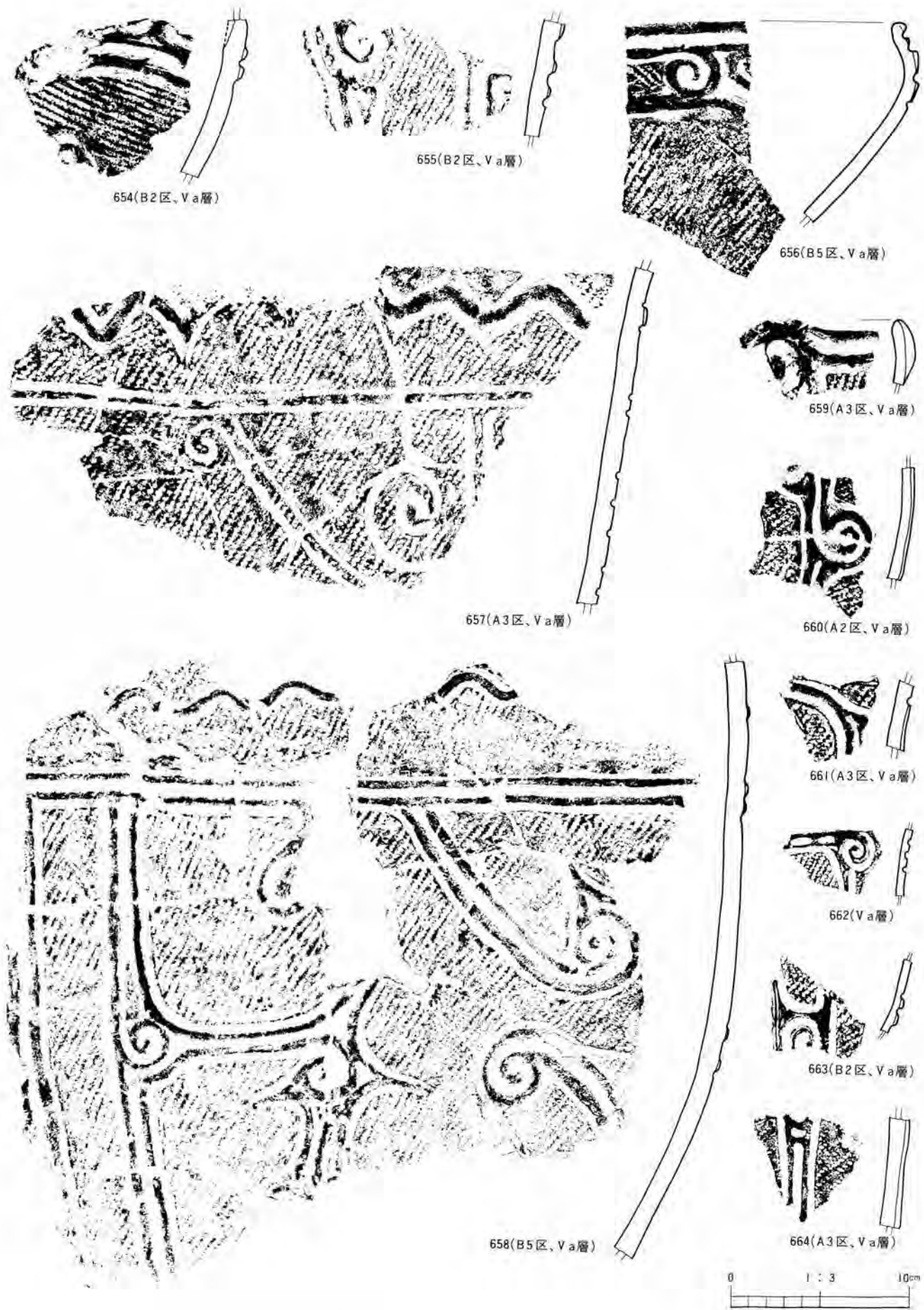
678・680・682～685は大波状を呈するやや大形のキャリパー形深鉢（深鉢A）で、やはりV c層～V b層に類例を求めることができる。

690～695・699は口縁部が外傾する深鉢（深鉢C）で、690～694は大波状口縁のものである。モチーフはV c層～V b層に類例を求めることができる。695・699は小形深鉢であるが、やはり同様である。

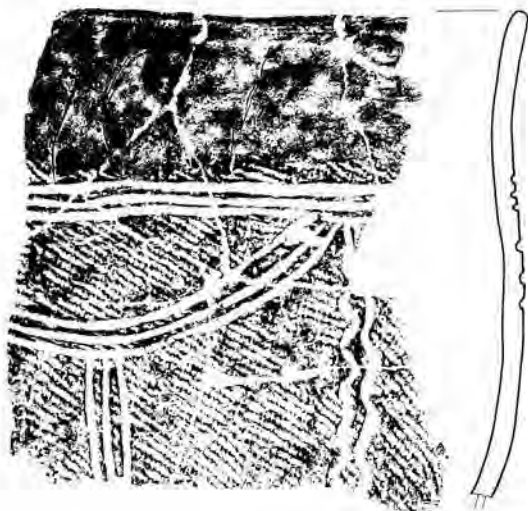
697は口縁部が外反し、体部が強く張り出す深鉢（深鉢E）である。体部文様帯に平行沈線により有棘渦巻文等を施すが、開放的である。V c層～V b層（特にV b層）に類例を求める



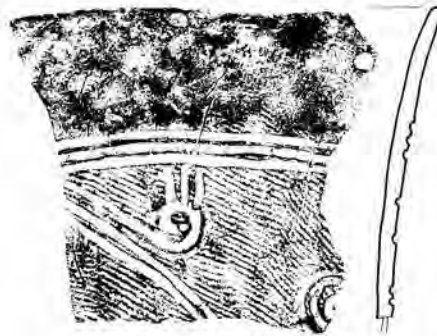
第56图 出土土器—47 (V a層—1)



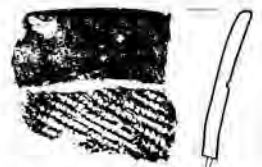
第57図 出土土器—48 (V a層—2)



665(B4区、V a層)



666(A2区、V a層上部)



667(B3区、V a層上部)



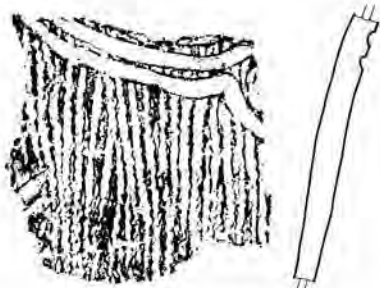
668(B5区、V a層上部)



669(B4区、V a層)



670(B6区、V a層)



671(B6区、V a層)



672(B5区、V a層、pot.17)



673(A3区、V a層)



674(B5区、V a層、pot.17)



675(B5区、V a層)



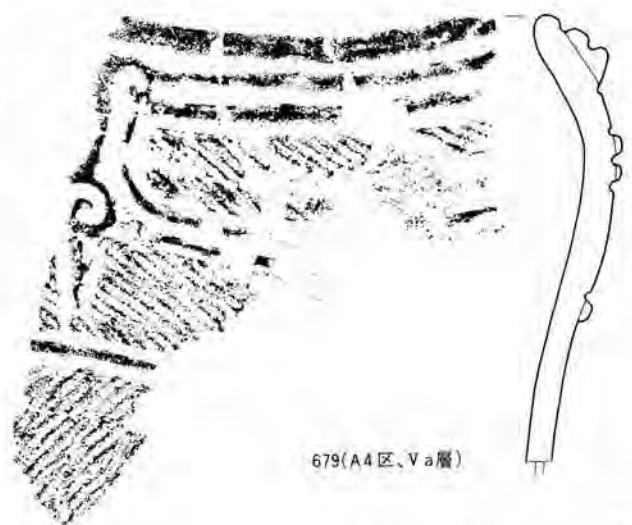
676(B5区、V a層)



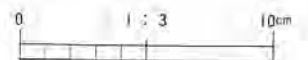
677(A3区、V a層)

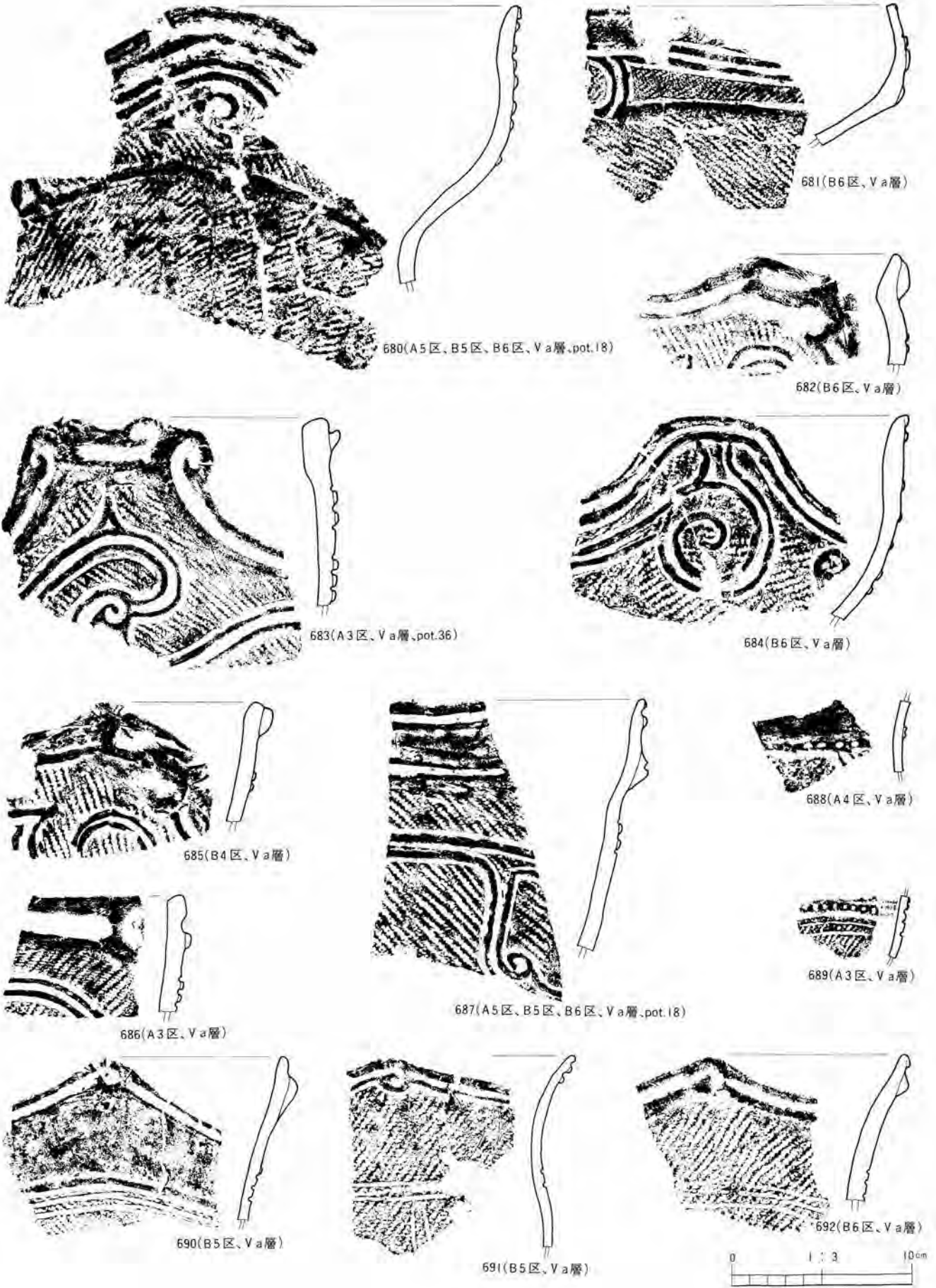


678(A3区、V a層)

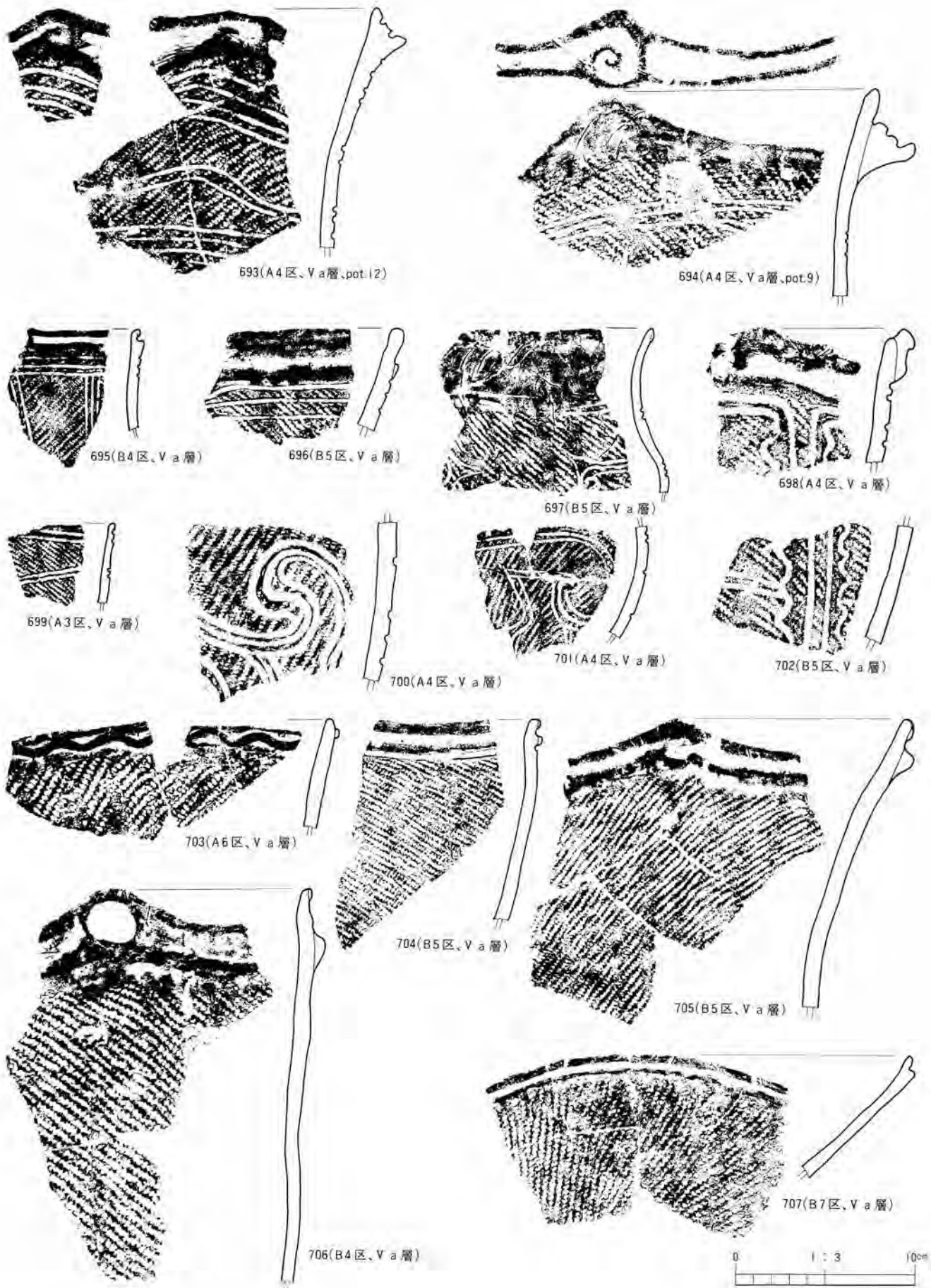


679(A4区、V a層)





第59图 出土土器—50 (Va层—4)



第60图 出土土器—51 (V a層—5)

ことができる。

686・696・698・702は口縁部の内湾する深鉢（深鉢F）である。いずれもモチーフの全容を把握できないため本層に伴うものか否か判断ができない。

688・689・699～701は体部破片である。渦巻文や懸垂文を施文するものがみられるものの、やはりVc層～Vb層に伴うものが主体を占めるのであろう。

703～706は体部に地文のみを施す深鉢である。

703は口縁部の外反する深鉢（深鉢C）で、口縁部文様帯に波状の隆起線を貼付ける。

705・706は口縁部の外反する深鉢（深鉢C）で、口縁部文様帯に隆沈線により渦巻文や円文等を施す。

704は口縁部の内湾する深鉢（深鉢F）で口縁部文様帯に隆沈線文を施す。

Va層上部出土遺物（第61図～第62図）

調査中にVa層上部として取上げられたものである。Va層として取上げたものの中に本層出土遺物に類似するものが数点みられたが、このうち2点を図示した。

708は平縁のキャリパー形深鉢（深鉢B）である。口縁部から体部にかけてL-R単節斜縄文を縦方向に回転させる。

709～743は沈線による磨消技法にて、逆U字形の区画文を施すものである。

器形は711～716・721が体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する深鉢（深鉢C）である。

709・710は口縁部が外反し、体部に膨らみを有するもの（深鉢D～E）である。

717～721は口縁部が内湾気味の深鉢（深鉢F）であるが、718は屈曲が著しい。

722は口縁部を内湾気味に外傾させながらも頸部を屈曲させるもので、体部が張り出すものと思われる。他は体部の破片である。

モチーフは極めて斉一性が強く逆U字形の区画文を施すが、715は文様帯上部に沈線による渦巻文を伴う。

718は文様帯上部に円形の押捺が伴う。

709・718・725・726は区画文を構成する沈線が部分的に二重以上となるものである。

723～725・727・729～741は部分的に区画文を上下2段とするものである。

744～746は隆沈線により施文されるものである。

744は波状を呈し、口縁部上端が外反するが全体的には内湾気味の深鉢（深鉢F）であろう。口縁部文様帯を持たず、口縁から体部にかけて、縦位の楕円形区画文を施す。区画文内部に縦位の刺突を充填する。

745は口縁部の内湾する深鉢（深鉢F）である。口縁部文様帯には隆沈線による施文がみられ、波頂部に渦巻文が伴う。体部文様帯は波頂部の渦巻文と一体となった施文がみられ、この部分から2方向へ隆沈線文が施される。

746は器形が不明であるが渦巻文が区画文の下部に小渦巻文を伴う懸垂文が施される。

744についてはモチーフが下層に類例がみられないが、745・746については下層の遺物との類似点が指摘できる。



708(B4区, Va层上部)



709(A2区, Va层上部)



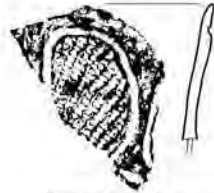
710(A3区, Va层上部)



711(B3区, Va层上部)



712(A3区, Va层上部)



713(A3区, Va层上部)



714(A2区, Va层上部)



715(A3区, Va层上部, pot.31)



716(B3区, Va层)



717(A2区, Va层上部)



718(A3区, Va层)



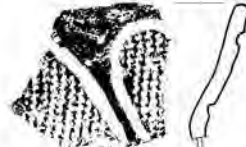
719(A3区, Va层上部)



720(B3区, Va层)



721(A3区, Va层上部)



722(B3区, Va层上部)



723(A3区, Va层上部)



724(A3区, Va层上部)



725(A3区, Va层上部)



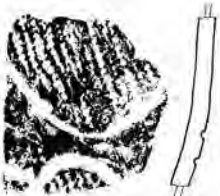
726(A3区, Va层上部)



727(B3区, Va层上部)



728(A2区, Va层上部)



729(A2区, Va层上部)



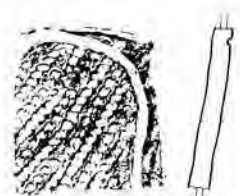
730(A3区, Va层上部)



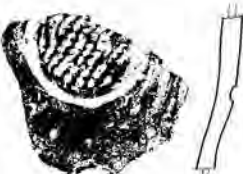
731(A2区, Va层上部)



732(A2区, Va层上部)



733(A2区, Va层上部)



734(A2区, Va层上部)



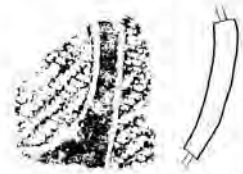
735(A3区, Va层上部)



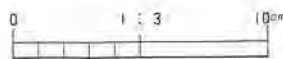
736(A3区, Va层上部)



737(A3区, Va层上部)



738(A3区, Va层上部)



第61图 出土土器—52 (Va层—6)



第62图 出土土器—53 (V a層—7)

ただし、相違点としては次の点を上げることができる。

- a. 隆沈線の断面形が三角形となる。
- b. 隆沈線の隆起線間がやや広く、内部の調整も比較的丁寧である。
- c. 隆起線の連結部の幅を著しく広げ、三角形状とする。このため、隆沈線外縁の沈線により作出された区画文（地文部分）も丸味を帯びた曲線的なものとなる。

749～755は隆沈線により施文されたもので、V a層出土遺物に類例を求めることができる。

750～752などは745に類似するモチーフを有しながらも、隆沈線の断面形が台形や方形を基調とし、渦巻文内部を磨消さない。また、隆起線の幅はほぼ一定で文様帯上縁と渦巻文が接する部分も隆起線の幅を広げない。このため、作出された区画文（縄文部分）の端部が鋭角的となっている。やはりV a層出土遺物に類似するものであろう。

747・748は小片でありどちらか判断が難しい。

756～758も隆沈線や平行沈線にて施文されるもので、V b層以下に類例を求めることができる。

761～763はVI a層以下に類例を求めることができる。

IV f 層出土遺物（第36図、第63図）

出土点数が少なく、時期的にもだいぶ幅がありまとまった出土状況を呈してはいない。

766は磨消技法によるもので、沈線により帯状に区画した内部に撚りの細かい羽状縄文を充填する。

767も磨消技法によるが、逆U字形の区画文を施す。

768はキャリパー形深鉢（深鉢B）で、口縁部文様帯に区画文や渦巻文（？）を施す。

423もキャリパー形深鉢（深鉢B）であり、口縁部文様帯に有棘渦巻文等を施す。

769～772は口縁部が波状を呈する深鉢で、隆沈線や平行沈線により施文される。

428は口縁部の内湾する深鉢で、口縁部文様帯に横位楕円形区画文を施し、体部文様帯に平行沈線を施す。

764は平縁のキャリパー形深鉢（深鉢B）で、口縁部文様帯に隆沈線により波状文を施す。刻目を有する小突起は伴わない。

773は口縁部文様帯に波状の隆起線を施し、刻目を施す小突起が伴う。

774は口縁部文様帯に縦位の粘土紐を貼付け、横位の沈線文を施すものである。

IV e 層出土土器（第63図、第64図）

776は注口土器と思われ、三叉文を主体とした施文がみられる。

777は口縁部が大きく外傾するもので皿形を呈するかと思われる。外面に2条の平行沈線を施し、口唇部に三叉文を施す。

778は口縁部の内湾するもので、沈線により施文される。三叉文となる可能性が大きい。

779～783は横方向の帯状の区画文と粘土紐を貼付ける所謂「コブ付土器」の類である。器形は口縁部の内湾するものと、頸部に屈曲を有するものの2者がみられる。

784～792・794も横方向の帯状の区画文を施すが、コブは認められない。



第63图 出土土器—54 (IV f層、IV e層—1)



第64图 出土土器—55 (IVe 層—2、IV b 層—1、IV a 層—1、III a 層—1)

793・795・796は曲線的な区画文を施すものである。

797は体部下半の破片で、横方向に施した粘土紐に沈線を添わせるものである。

798は、やや幅の広い区画文を施すものである。

799は口縁部文様帯に2段の刻目を有し、体部文様帯にやや幅の広い区画文を施すものである。

800は脚部の破片である。801は無文の深鉢である。

802も磨消技法により施文され、口縁部内面に逆ノ字形に粘土紐を貼付けるものである。

IV b 層出土土器（第64図）

出土量は極めて少なく、図示できたのは第1号集石跡に伴った2点だけである。

803は現存部上端に横方向の刻目状の施文と、下半に雲形文的な施文がみられるものである。

804は口縁部を無文とし、体部文様帯に帯状の区画文を施すものである。

IV a 層出土土器（第64図）

出土量は少ない。

805、806は横方向に施した沈線間に刻目を有するものである。

807は体部下端に無文帯を施すものである。808は三叉文（？）を施すものである。809は帯状の区画文を曲線的に施すものである。

III a 層出土土器（第64図、第65図）

844は口縁部がわずかに外傾する深鉢で、口縁部は小波状を呈する。口縁部文様帯に横位の平行沈線を施す。

810は皿形土器で、口縁部を欠く。口縁部文様帯下部に横位の平行沈線を施し、底部外面に磨消技法により大腿骨文風の施文をする。内面へは施文されない。

811は注口土器と思われるものの注口部を欠く。口縁部が内湾し、頸部と体部に強い屈曲を有する。口唇部に小突起を有し、口縁部文様帯上部にノ字形の沈線を連続させ、刺突文ないし刻目序の施文をする。下部文様帯は三叉文と渦巻文を組み合わせ、X字文的なモチーフを連続させる。体部文様帯は体部上半に集中し、下半は無文となる。文様帯上部は刻目帯などを重層的に施文する。下部文様帯は三叉文系のモチーフを施文する。

812～814・827～843は鉢形土器である。

812・828・829は直線に立上がりながら口縁部がわずかに内湾している。口縁部文様帯に三叉文を主体とする施文がみられる。

827もほぼ同様な器形である。口縁部文様帯に三叉文的なモチーフを施すものの、前述したものと異なる。

843も同様な器形である。口縁部文様帯に横位3条の平行沈線を施す。

他のものは体部～底部の破片である。体部下端に沈線をめぐらせて下部を無文帯とするものが多い。前述した口縁部破片のいずれかに伴うものであろう。

842は脚部の破片である。下端部に文様帯を有し、刻目帯と縄文帯を施す。おそらく鉢形土



第65图 出土土器—56 (IIIa層—2)

器につくものであろう。

820・839～841は器形、モチーフ等一様ではないものの、前述したもののいずれかに伴う時期のものであろう。

815～825はⅢ a 層下部として取り上げたものである。820は既に記述したもので除外する。これらはモチーフ等に類似性は認められるものの層位的なまとまりとしては意味を成さないものと思われる。

なお、845～849もこれらに類似するものであり、両者を一括して扱う。いずれも磨消技法により施文されている。

器形は815・816・825・848・849が口縁部の内湾気味となるものである。817はつぼ形を呈するものであろうか。846は体部に屈曲を有する。

816は方形の波頂部で、外面に方形の区画文を施し、口唇部から内面にかけて斜方向の平行沈線を施す。

815・819は、やや幅の狭い横位帯序の縄文帯と縦位の波状文を施すものである。

848・849もやや幅の狭い横位帯序の縄文帯を施す。

825は平行沈線内に刻目を施す。

818・821・822・845は、やや幅の広い横位帯序の縄文帯を施す。

823・824は、やや幅の広い曲線的な縄文帯を施す。

846・847は縄文帯、刻目、円形の小突起などを施す。

850～854は縄文のみを施すものや無文のもので、前述したもののいずれかに伴うものであろう。

855～858は磨消技法により逆U字形の区画文等を施すものである。855、856は沈線により857・858は隆沈線により施文される。V a 層上部に類例を求めることができる。

859は隆沈線により施文されるもので、把手を有する。やはりV a 層以下に類似するものであろう。

Ⅱ a 層出土陶磁器・土器（第66図、第80図）

1011は肥前系の染付碗で、外面に草花文を施す。（磁器）

1012は擂鉢であり内外面ともに鉄釉を施釉する。内面にやや細かいおろし目を施す。（陶器）

1013は小皿であり内外面ともに鉄釉を施釉する。（陶器）

860は土師器甕の体部破片で、内外面ともにヘラナデにより調整される。

861～864は磨消技法により施文されるもので、Ⅲ a 層～Ⅳ層に類例を求めることができる。

876は隆沈線により施文されるもので、V a 層上部～V a 層に類例を求めることができる。

865～868も隆沈線により施文されるもので、V a 層に類例を求めることができる。

877は沈線を伴う隆起線や沈線により施文されるもので、Ⅶ層に類例を求めることができる。

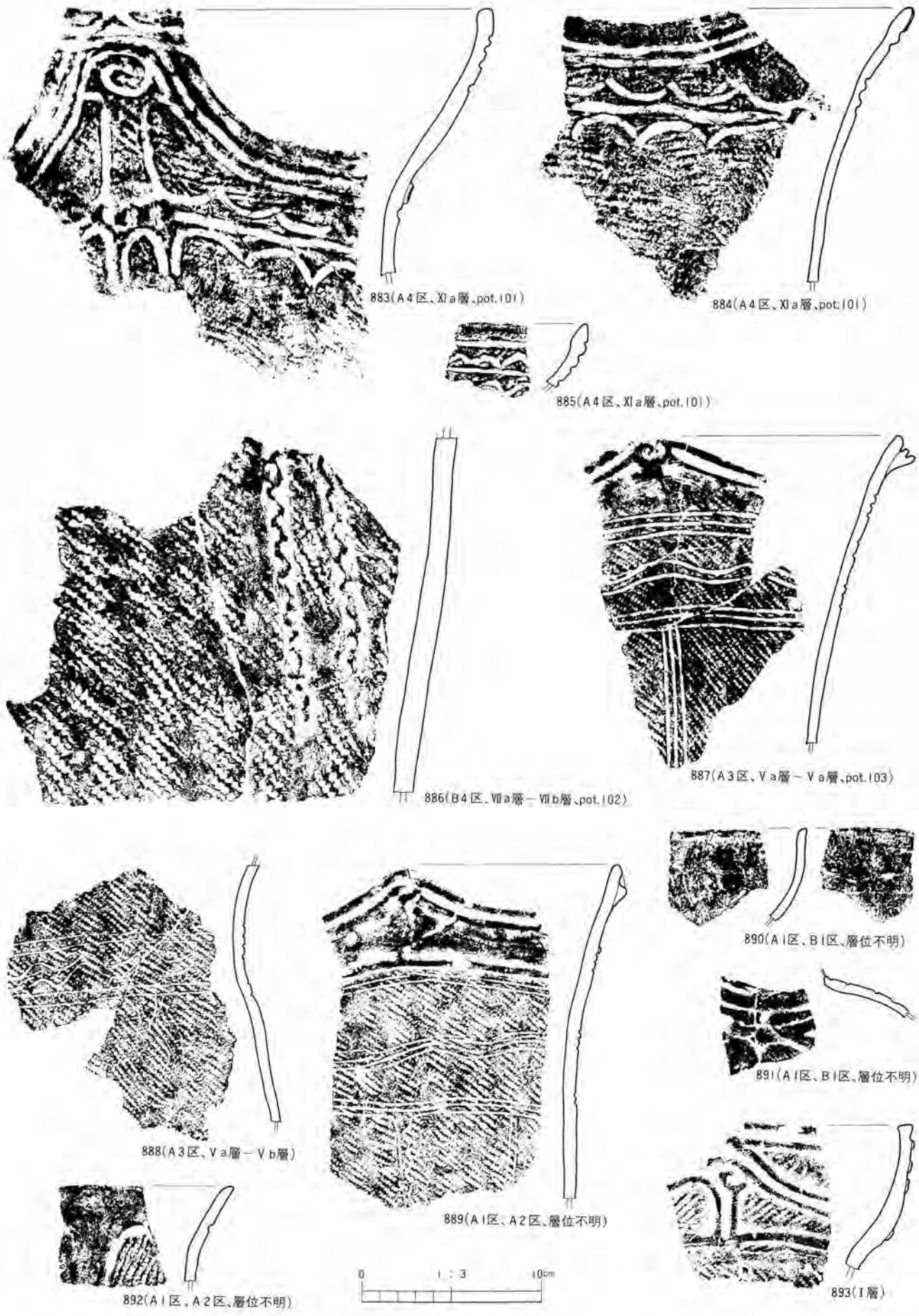
869～871は原体圧痕により施文されるもので、Ⅺ層に類例を求めることができる。

872は平行沈線、波状文、刺突文などで施文されるものである。

873は口縁部が著しく広がるもので、平行沈線間に鋸歯状の沈線を施す。



第66图 出土土器—57 (III a層—3、II層~I層—1)



第67図 出土土器-58 (セクションベルトほか)

I層出土土器（第66図、第67図）

890～893は調査区北壁、西壁の崩壊土中（IV層～I層主体）に含まれていたものである。出土層位が不明であり、ここに一括する。

890は土師器碗である。

891は磨消技法により施文されるもので、IV層～III a層に類例を求めることができる。

882・892は磨消技法により逆U時形の区画文を施文するものでV a層上部に類例を求めることができる。

889・893は隆沈線等を施文するもので、V c層～V b層に類例を求めることができる。

878～881は沈線等により施文されるもので、主にXI層～IX層に類例を求めることができる。

これら以外に陶磁器片や鉄器など現代の遺物が出土しているが図示しなかった。

b 石器（第68図～第76図）

土器の項で記述したとおり、その土層の堆積時以前の遺物が少なからず混入していることが判明した。土器の場合は型式分類や他の土層との比較等を通して堆積時以前の可能性が大きい遺物を抽出することができる。

しかし、石器の場合は一部のものを除き型式的な分類や編年が確立していないために、この様な方法を適用することが不可能である。また、概して小形のもが多く、土器以上に古い時期の遺物が混入する可能性が大きいと言える。

このため、石器については器種毎に記述することとした。但し、出土層位は挿図中に示したので参照されたい。

なお、II層～I層出土石器については伴出遺物が近世以降ということもあり、定形的なものみに留め、使用痕のある剥片等の不定形石器の大部分を割愛した。

剥片石器（第68図～第71図）

894・895は石槍である。894は、やや細身で柳葉形を呈するものの基部を欠く。先端部付近は、より丁寧な調整となる。 石 槍

895は、やや幅が広い木葉形を呈する。一方の側縁の一部に湾入がみられる。やはり先端部付近で丁寧な調整が認められる。

896～904は石鏃である。 石 鏃

899は、やや細身で柳葉形を呈する。基部は凹基である。

904は、やや細身の三角鏃で、基部は平基である。主要剥離面を残す。

897は、三角鏃で、基部は平基である。主要剥離面を残す。

896・898・900～903は三角鏃で、基部は凹基である。898・903は主要剥離面を残す。

905～908は石錐である。 石 錐

905は不定形剥片の一側縁に搔器様の調整を施し、先端部を石錐状に尖らせるものである。

906・908は基部を有するものである。

907は基部を有さない細身のものである。

909～920は石匙である。 石 匙

913は縦長の不定形剥片を用いて、両側縁上部につまみ状の調整を施したものである。両側縁の下部は全く調整されず、使用時のものと思われる微細な剥離が観察されるのみである。あるいは湾入する刃部を有する削器の可能性もある。

909～911は従来の分類では横形石匙に相当し、912・916～920は縦形石匙に相当する。刃部形態は搔器様のもの（909～911・920など）と削器様のもの（912、916～919）がある。

また、912は基部付近を中心にピッチの付着が観察される。

914・915はこれらの分類から外れるもので、形態的には円形搔器にも類似する。ただし、刃部の形態はどちらかと言えば削器様である。

石 籠

921・922は石籠である。両者ともにやや小形であり、側縁の一部と下辺を中心に調整を施す。下辺の刃部は搔器様となる。

削 器

923～930は削器である。

923～925・930は、やや小形である。925・930はほぼ全周を調整し、やや湾入する刃部を作成するものである。925は先端部が欠損しているため器種が不明瞭であり、石錐の基部破片である可能性も考えられる。

923～924は不定形剥片の1側縁を刃部とするもので、調整も粗雑である。

926～929は、やや厚手で大形の剥片を用いる。主に1側縁を両面から調整し、刃部とする。

搔 器

931・932は小形ではあるが搔器である。両者ともに、全面的な調整を行わずに、剥片のカーブを利用し、刃部付近にのみ調整するものである。

932は黒耀石製である。

楔形石器

933・934はピエス・エスキューイ（楔形石器）である。933は、やや大形で、934は、やや小形である。いずれも上下両端からの加撃による剥離がみられる。また、これらの剥離のリングは、ややつまっている。

使用痕のある剥片

937は使用痕のある剥片である。三角形を呈する剥片の側縁に使用時のものと思われる小さな剥離が伴う。

石核石器（第71図）

石 核

936は石核である。不整形ではあるが、いずれもネガティブな剥離面のみを有する。断面形は大略四角形を呈し、各面を打面としている。

礫石器等（第71図～第76図）

磨製石斧

935・938～945は磨製石斧である。945以外は比較的緻密な石材を用い、器面を丁寧に研磨している。

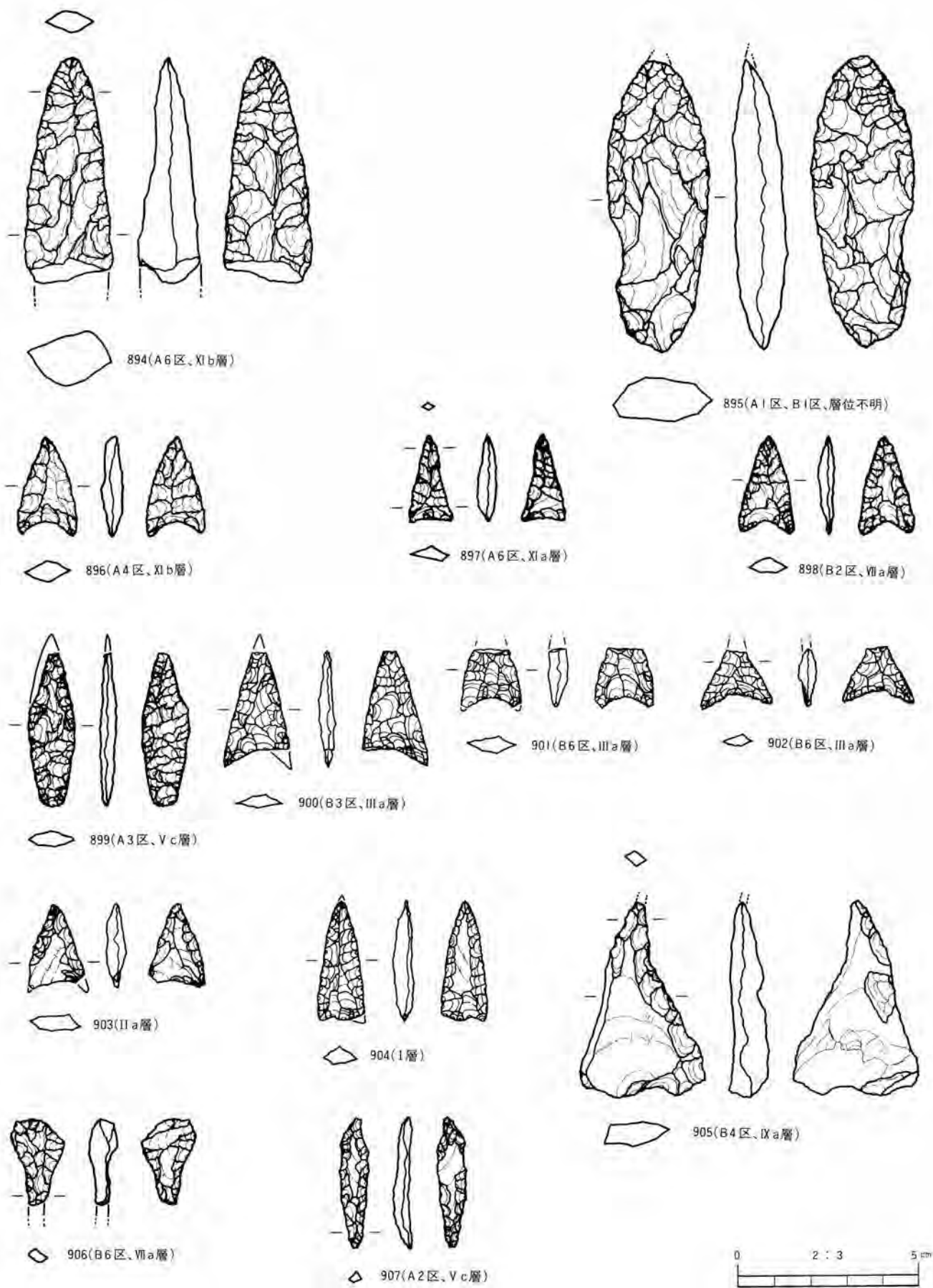
935は小形で細身のものの刃部破片である。

938～944は、やや大形である。941は刃部が片刃的である。

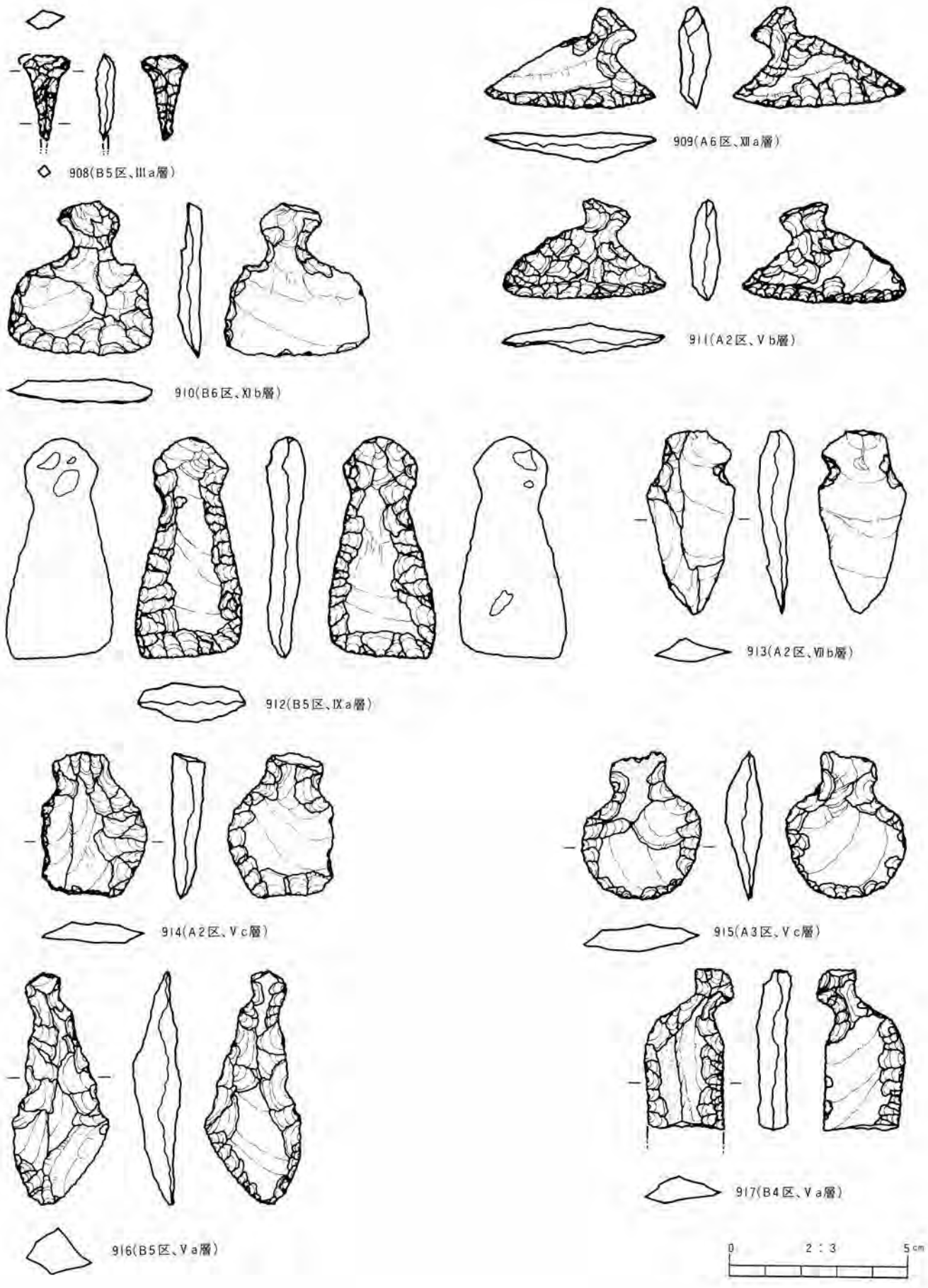
939・940・943・944は刃部欠損後に再利用を目的とした剥離等を施すものである。944は部分的に欠損後の刃部の研磨と、体部に横位溝状の擦痕が伴う。

941は基部に敲石様の敲打痕が伴うもので、再利用されたものであろう。

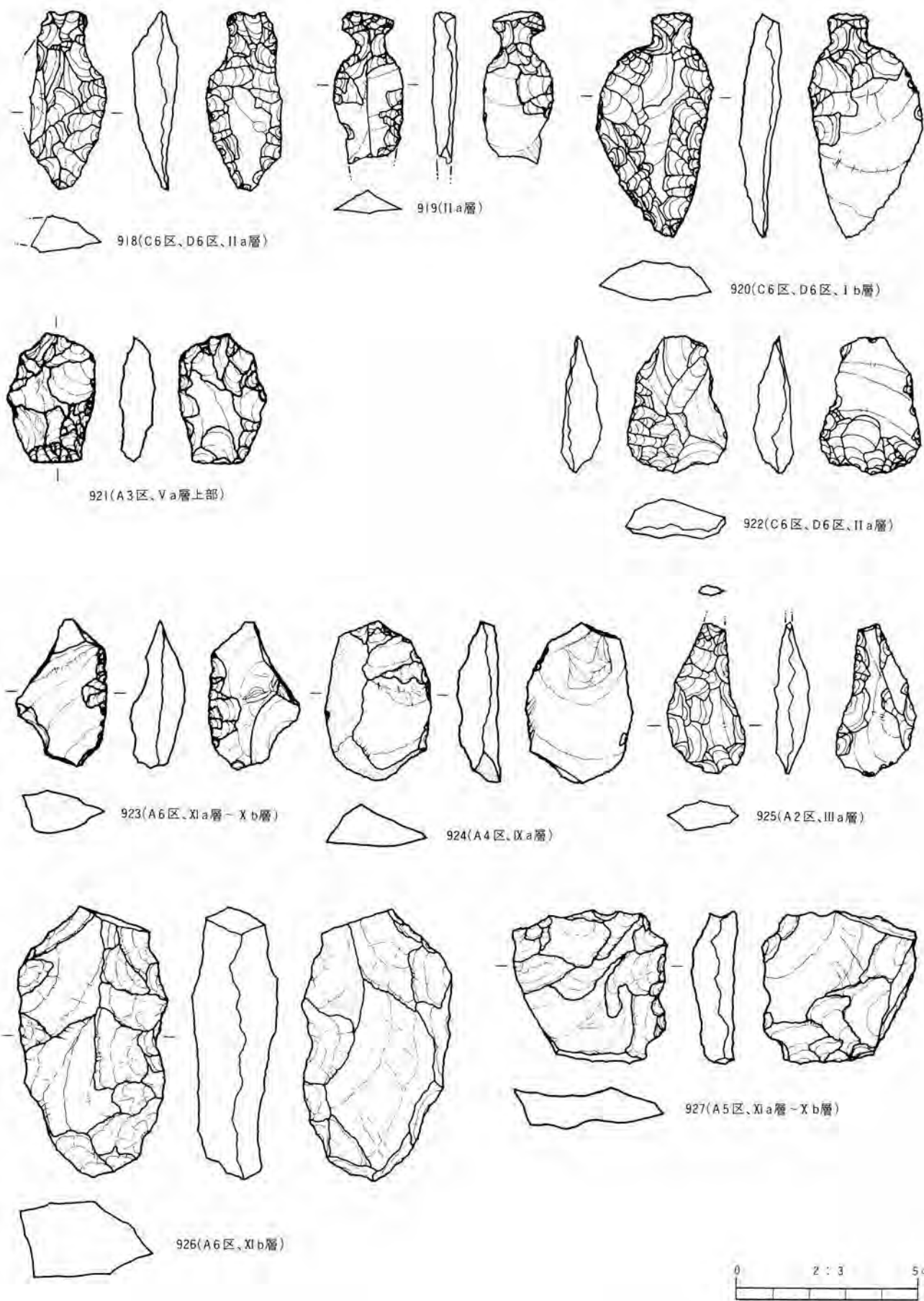
945は、やや粗い石材を用い、剥離と敲打痕が伴うものである。敲打成形時のものである。



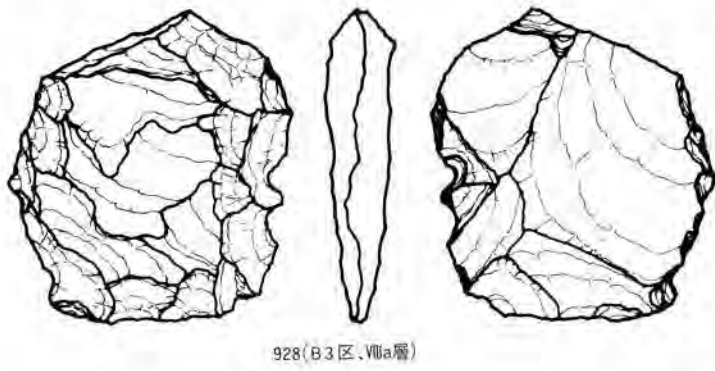
第68图 出土石器—1 (剥片石器—1)



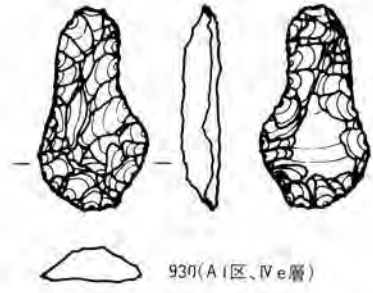
第69图 出土石器—2 (剥片石器—2)



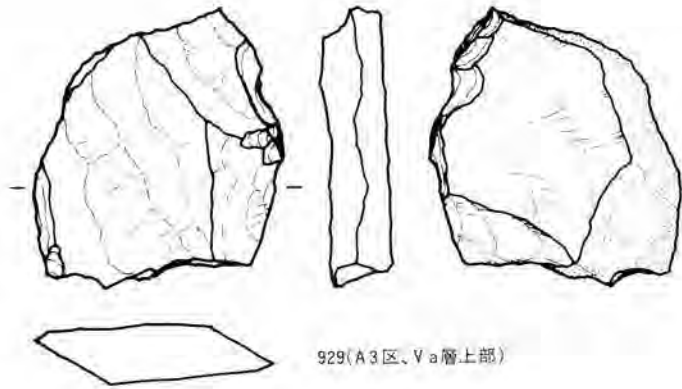
第70图 出土石器—3 (剥片石器—3)



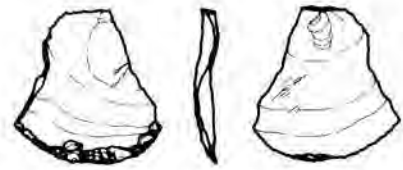
928(B3区、VIIa層)



930(A1区、IVe層)



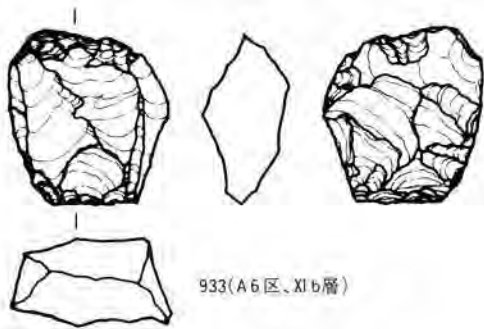
929(A3区、Va層上部)



931(B2区、VIIa層)



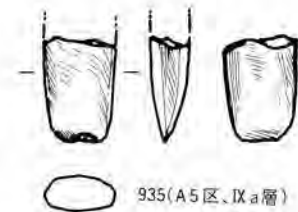
932(B6区、Vc層)



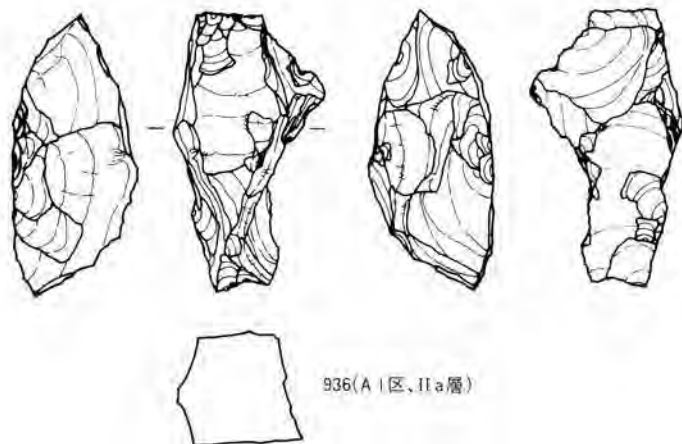
933(A6区、XIb層)



934(A2区、VIIa層)



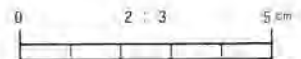
935(A5区、IXa層)



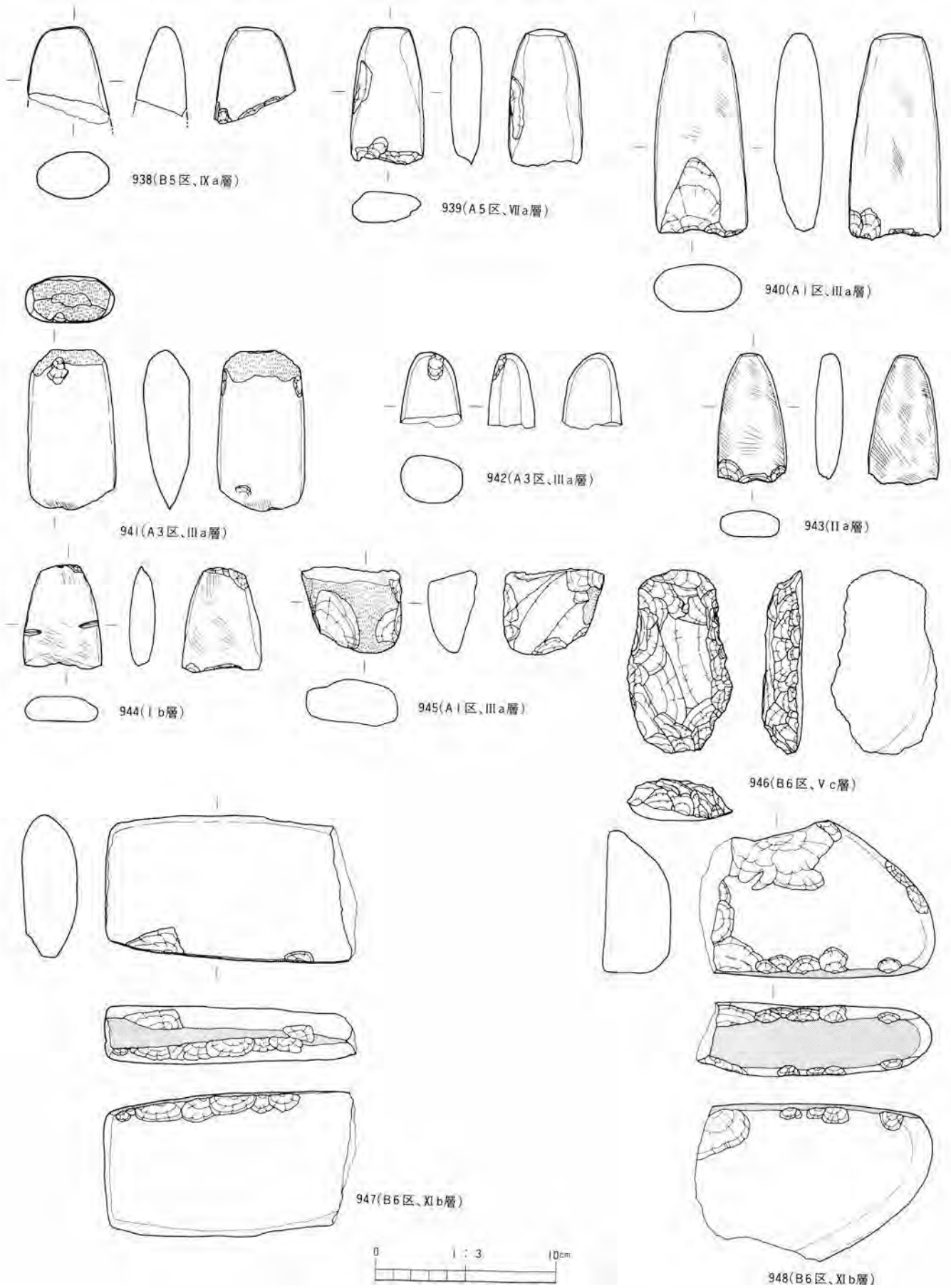
936(A1区、IIa層)



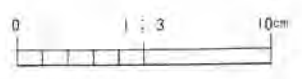
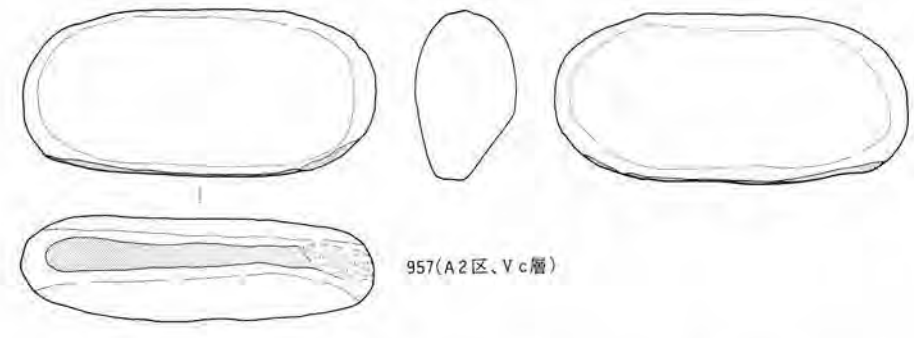
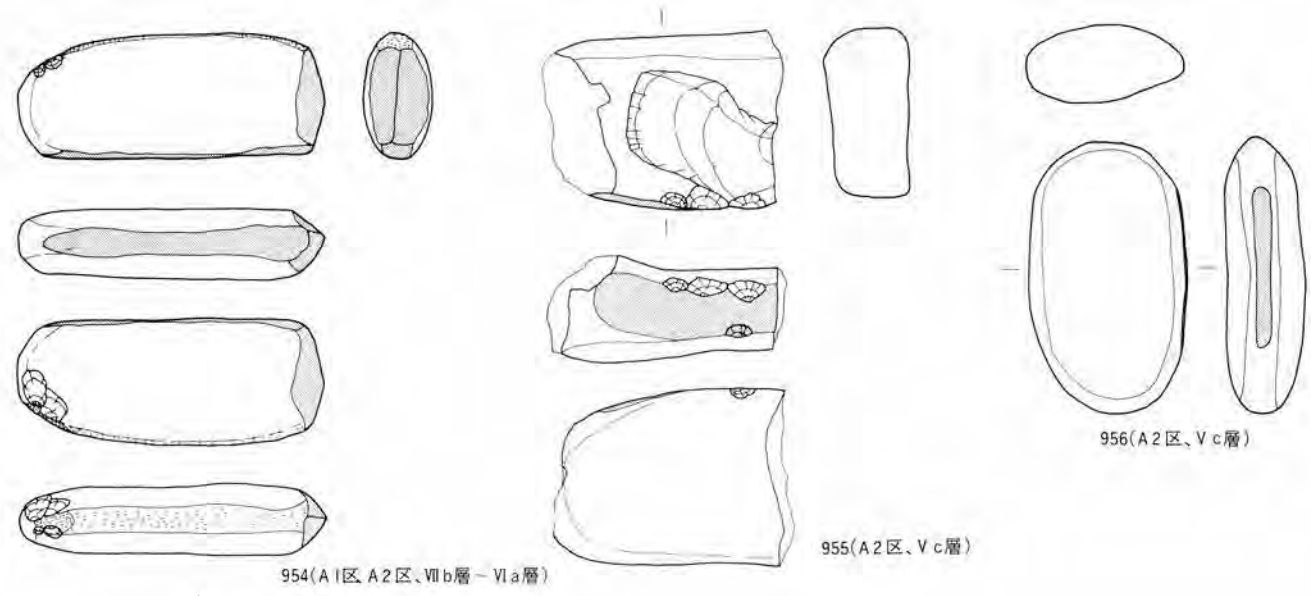
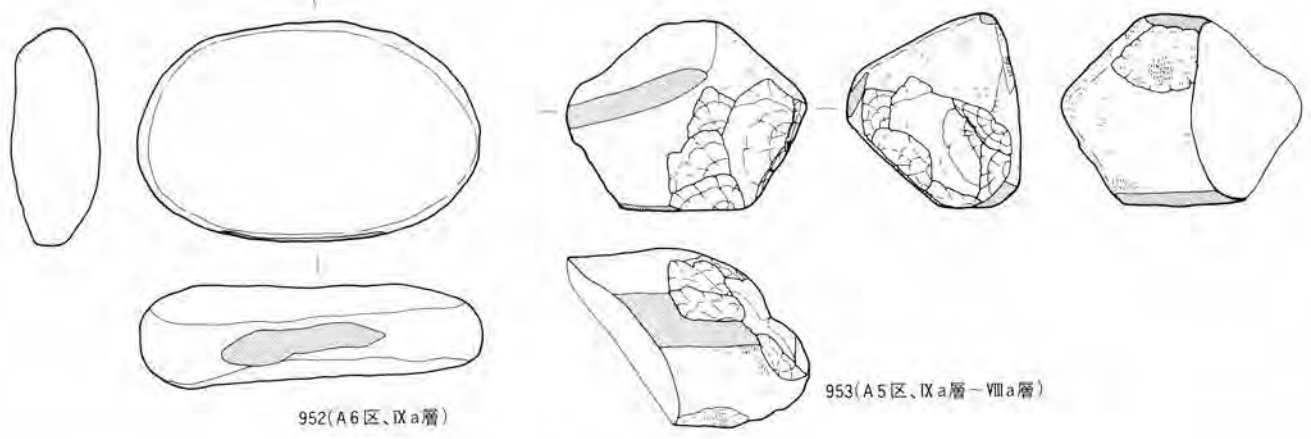
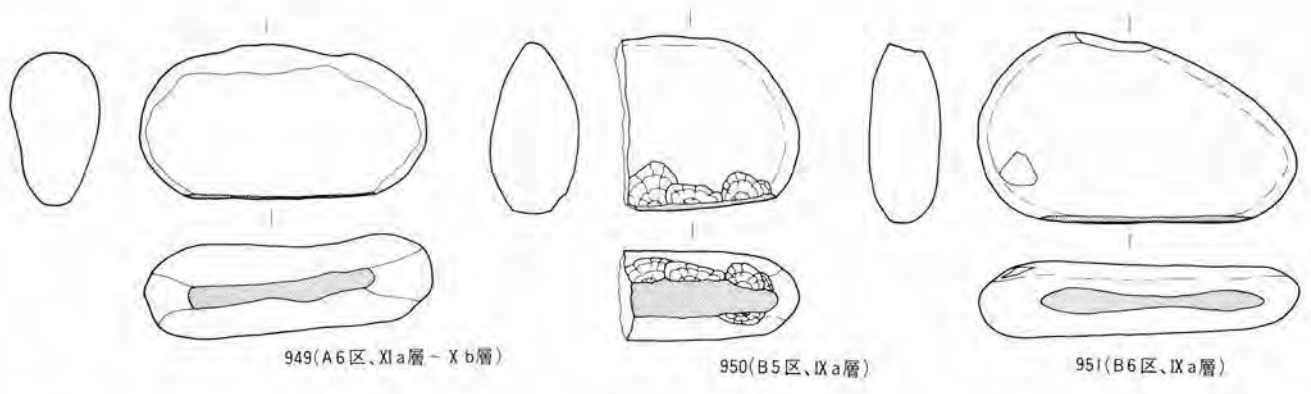
937(A6区、XIa層)



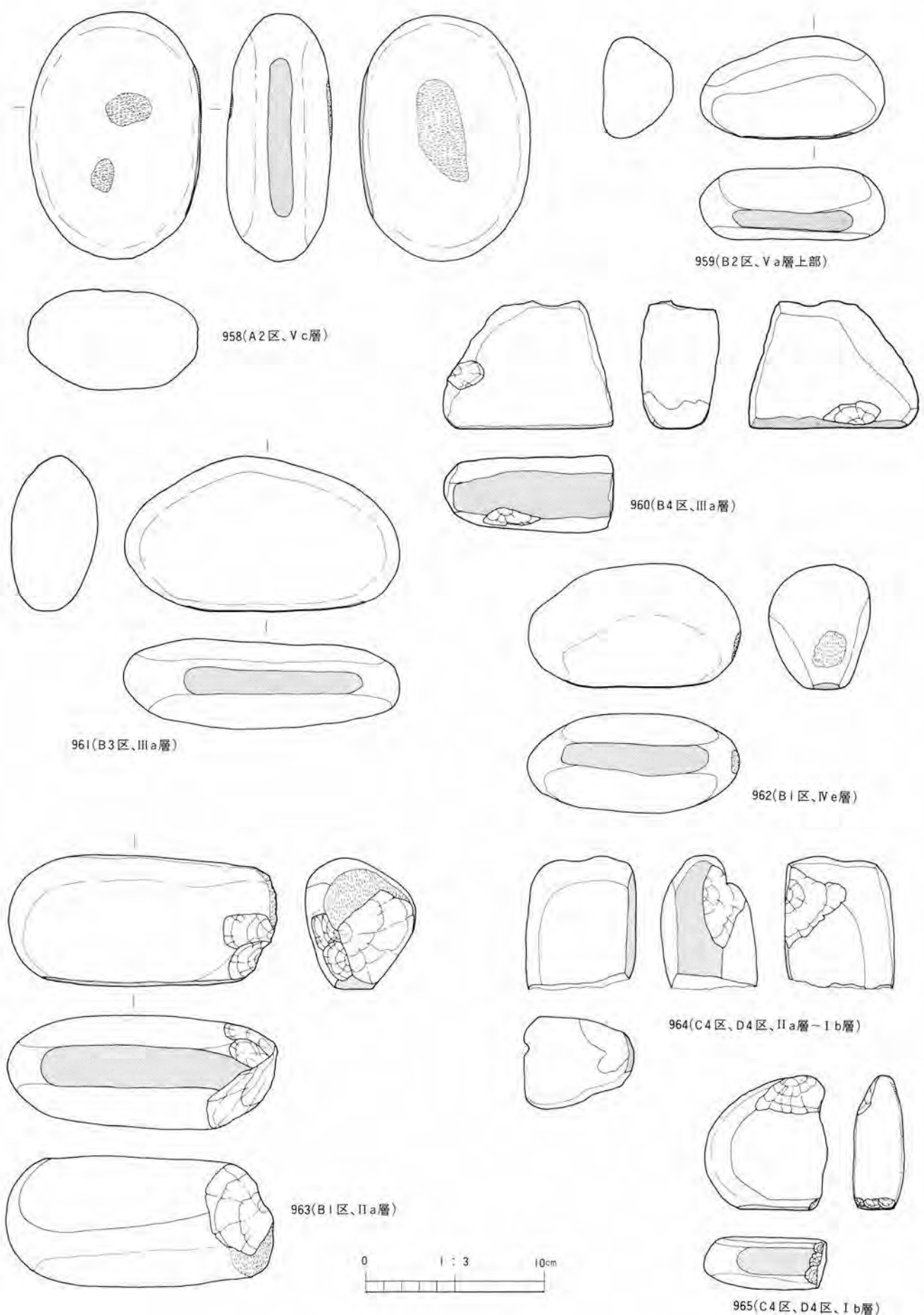
第71图 出土石器—4 (剥片石器—4、砾石器—1、礫石器等—1)



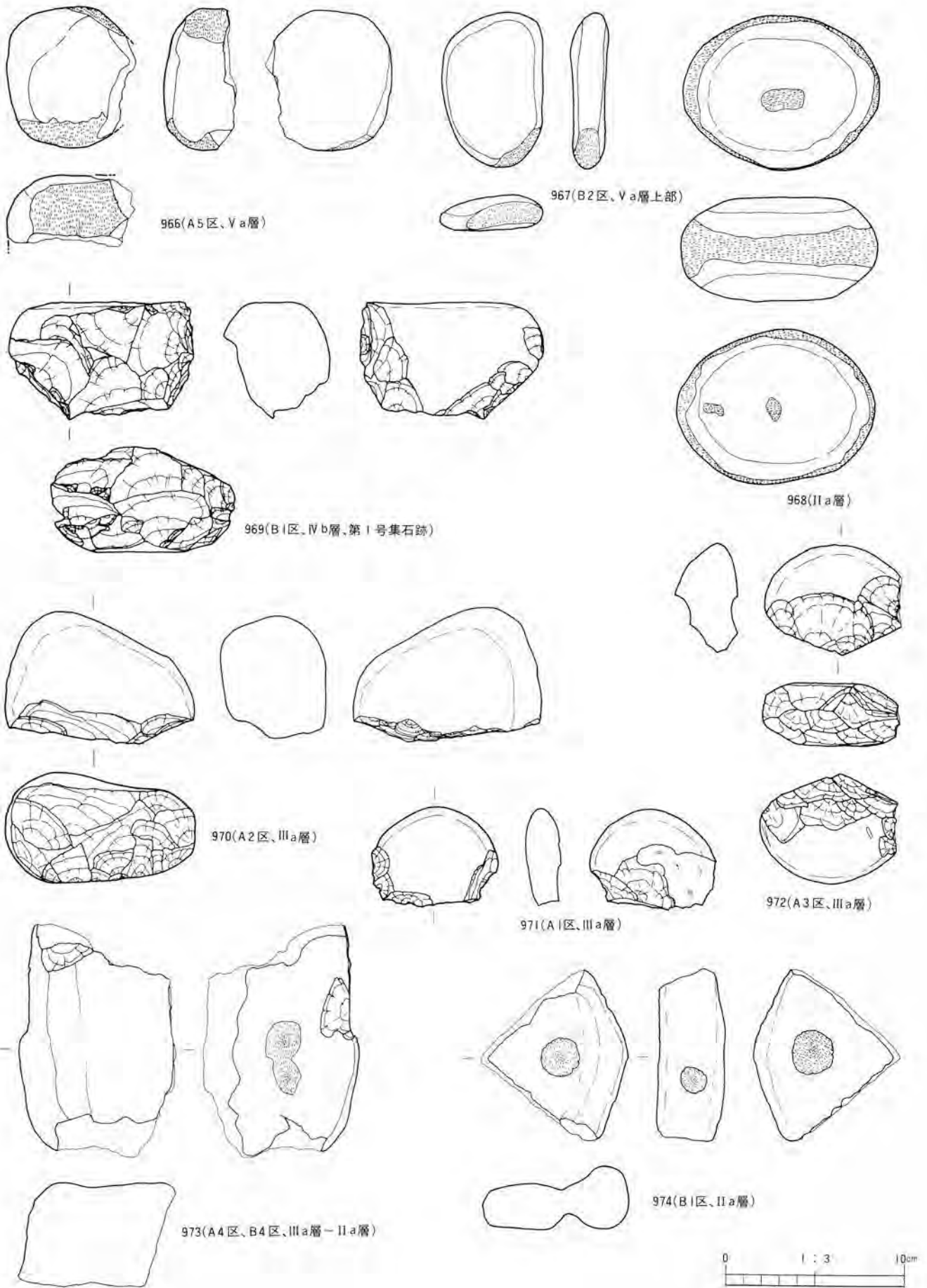
第72図 出土石器—5 (礫石器等—2)



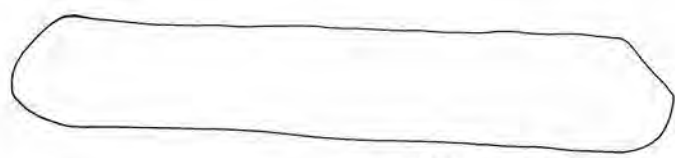
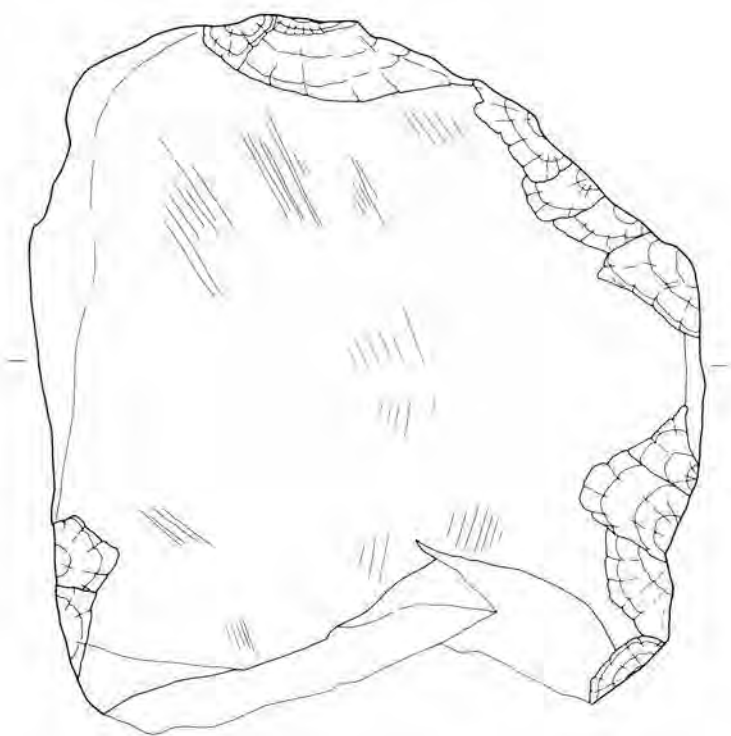
第73図 出土石器-6 (礫石器等-3)



第74図 出土石器一7 (礫石器等一4)



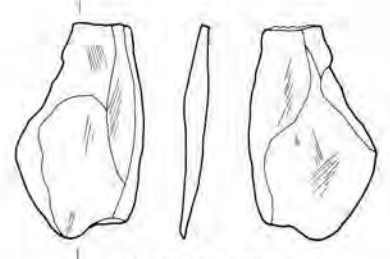
第75図 出土石器—8 (礫石器等—5)



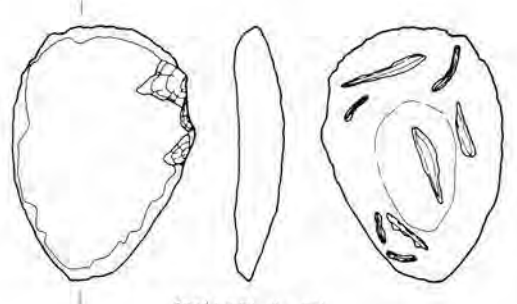
975(B5区、XIb層)



976(BI区、XIa層)



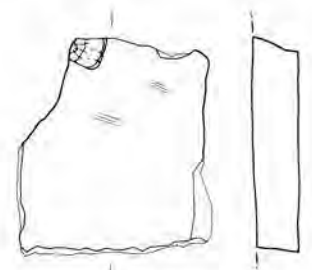
977(B2区、XIa層)



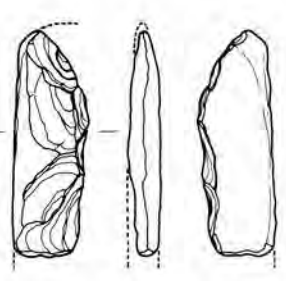
978(A2区、Vc層)



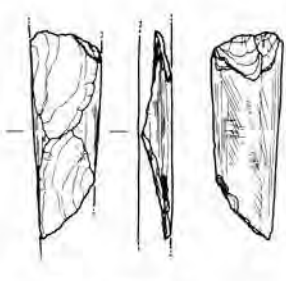
979(AI区、IVf層)



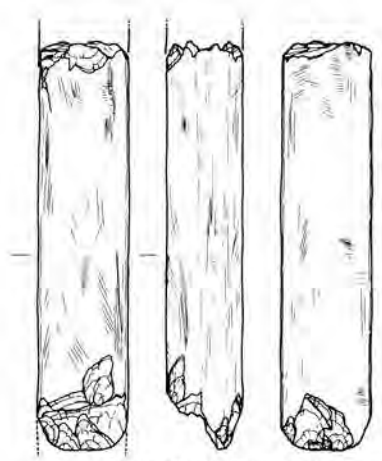
980(AI区、IVf層)



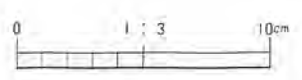
981(BI区、IIa層)



982(IIa層)



983(B2区、IVb層、第I号集石跡、S.O.A)



第76図 出土石器—9 (礫石器等—6) 出土石製品—1

打製石斧

946は片面に大きく自然面を残す打製石斧である。形態は方形を基調とし、周縁を剥離させるものである。使用時の刃つぶれ等はほとんど確認されない。

敲打磨石類

947～965は敲打と磨擦の両方をあわせ持つ機能磨面を有するものを一括した。想定される使用方法は擦り潰しであろう。

いずれも楕円形や長方形などの自然礫を用い、長軸方向の側縁に機能磨目を有する。断面形は、楕円形を呈するものが一般的であるが、953・962～964は隅丸三角形となる。

947・948・950・955は機能磨面に隣接して剥離が伴うもので、磨面幅の調整を行ったものと思われる。

954は1側縁と1端部に機能磨面を有し、もう一方の側縁に敲打痕を有する。

957は機能磨面に隣接して敲打痕を有する。

953・958は側面部に敲打痕を有する。

960・964は欠損面に磨面を有するもので、欠損後に再利用されたものである。

敲石

966～968は敲石である。扁平円礫の側縁や上下端部等に敲打痕を有するものである。機能部にはほとんど磨擦が伴わない様で、敲打磨石に比べてかなりざらついている。

礫器

969～972は礫器である。いずれも自然礫に粗い調整を施したものである。

969～971は主に1方向からの調整により刃部を作り出すもので、片刃礫器（チョッパー）に類似する。

一方、972は両面からの調整により刃部を作り出しており、両刃礫器（チョッピング・ツール）に類似する。

石皿

973～975は石皿である。973は明瞭な縁を作り出すもの。974は不明瞭な縁を有するもの。975は縁を有さずに、使用面がわずかに凹むものである。

973・974は欠損後かと思われるが、凹石状の使用痕が伴う。

砥石

976～980は砥石である。いずれも擦痕や溝状の使用痕（擦痕）を有する。

c 土製品（第77図～第80図）

土偶（第77図、第78図）

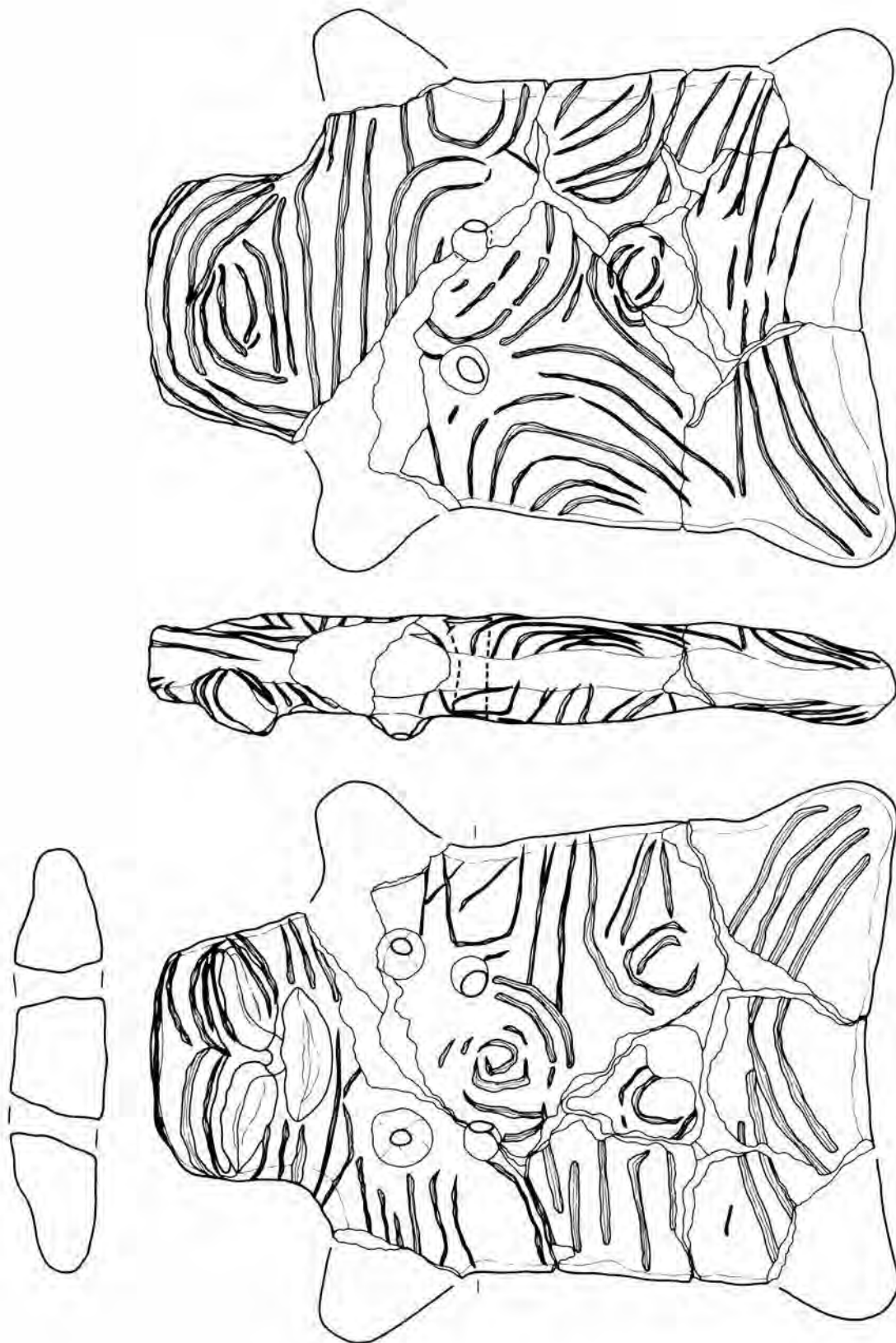
984は板状土偶である。両手と右足を欠くものの、ほぼ全容が判明した。頭部は方形で、腕部は、やや上方に張り上げている様である。脚部は横（やや下方）に張り出す。体部は幅が広く、どちらかと言えば土版に近い感さえある。

顔面部はY字形の粘土紐を貼付けて眉と鼻を表現し、やや掘込みが深い楕円形の凹部により目と口を表現している。胸部には粘土紐の貼付けにより乳房を表現し、直下に一对の貫通孔を穿つ。

施文は正面、背面ともに平行沈線を主体とする。正面では眉や目に沿った沈線を施し、首の部分に境界線状の沈線と鋸歯状の沈線が伴う。

また、胸部と腹部には沈線による渦巻文を施し、最下位の脚部付近の沈線は弧状となる。

背面もほぼ同様であるが、頭部に渦巻文、肩に横位の平行沈線を施し、背中に渦巻文や縦位の弧状文、臀部～脚部に横位の弧状文を施す。



984(A5区、Ⅹa層—Ⅹb層)

第77図 出土土製品一1

胎土は白色鉱物等の粗砂を含み、やや粗いものの、焼成は良好である。

985・986は立体的な土偶の脚部である。いずれも沈線により施文され、986地文としてL-R単節斜縄文を縦方向に回転する。986は上下両端ともに、985は上端のみが、接合面であり、いくつかの粘土塊から成形されたものであることが想定される。

異形土製品（第78図）

988～991はいずれも皿形を呈するもので、器形は不明であるが、むしろ皿形の異形土器とすべきかもしれない。

988は三角形を呈する部分で、990は舌状を呈する部分である。989・991は前述したものに連続する部分であると思われる。991は外縁が直線的であり、989はやや反っている。

いずれも内面をミガキにより調整するものの、外面は磨滅している。また、色調は灰褐色を呈している。

988、990は胎土に白色鉱物などの細砂をやや多く含み、焼成がやや不良である点で類似している。他は、やや焼成が良い。また、991はやや薄手である。このような差異が同一個体内の焼成具合等によるものなのか、別個体なのかも不明である。

円盤状土製品（第78図～第80図）

いずれも土器片を再利用し、円盤状としたものである。

d 石製品（第76図、第78図）

動物形石製品（第78図）

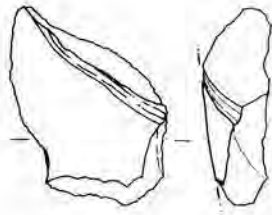
押圧剥離により頭部、腕部、脚部に類似する突起が作出されており、人体か動物を模したものと解される。

石棒・石剣類（第76図）

983は石棒の体部破片であり、断面形は楕円形を呈する。器面全体に整形時の擦痕が観察される。上下両端ともに欠損後の剥離が伴っている。

981・982は石剣や石刀などの破片である。いずれも欠損後の剥離が伴い、再利用が図られているようである。

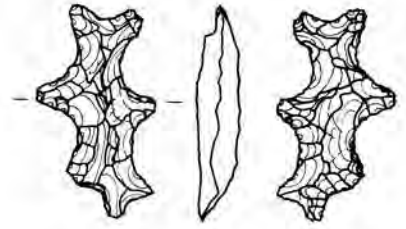
981は先端部の破片で、両側縁が刃部状となる（両刃）。また、982は片刃である。いずれもやや薄手である。



985(A区、IIIa層)



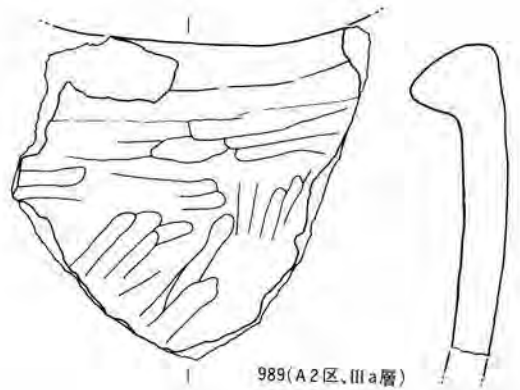
986(B区、IIIa層)



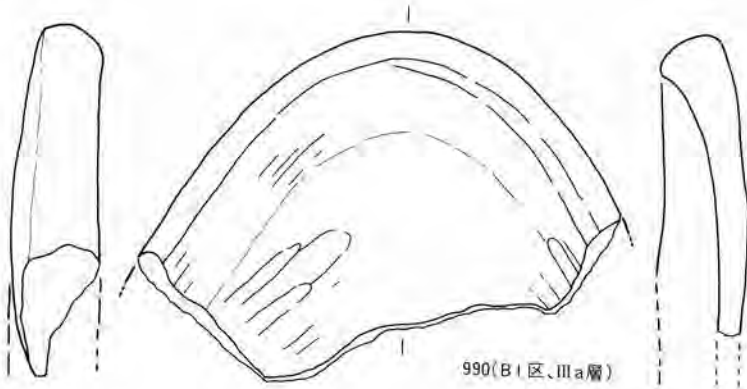
987(A4区、B4区、Ia層)



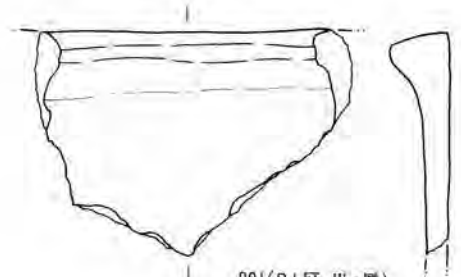
988(B2区、IVb層、第I号集石跡、pot.A)



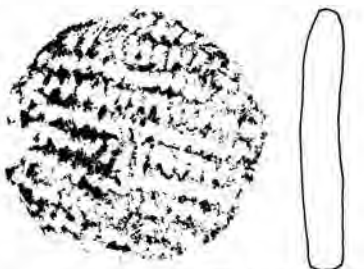
989(A2区、IIIa層)



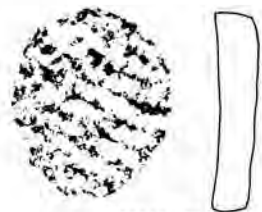
990(B区、IIIa層)



991(B区、IIIa層)



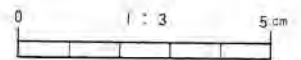
992(A4区、IXa層)



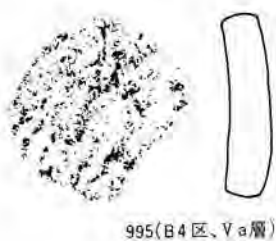
993(B6区、Vc層)



994(B4区、Va層)



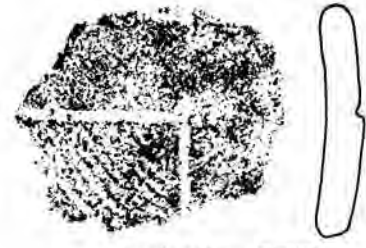
第78図 出土土製品-2、出土石製品-2



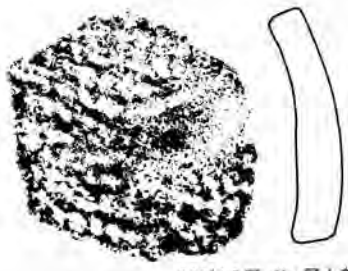
995(B4区、Ⅴa層)



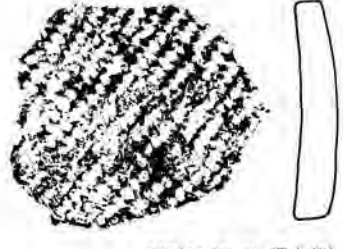
996(A4区、Ⅴa層)



997(B2区、Ⅲa層下部)



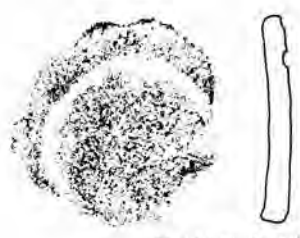
998(A3区、Ⅴa層上部)



999(A3区、Ⅴa層上部)



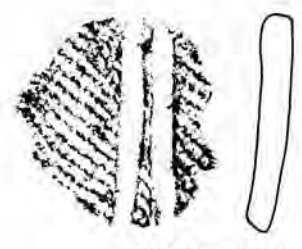
1000(A3区、Ⅲa層)



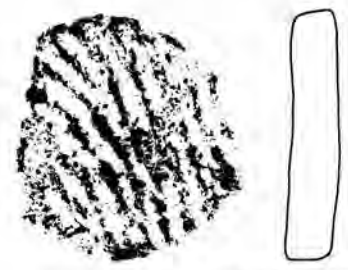
1001(A1区、Ⅲa層)



1002(A2区、Ⅲa層)



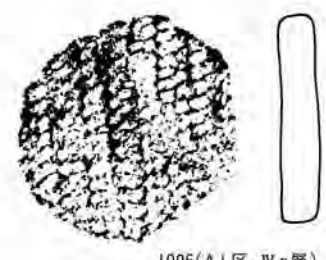
1003(A3区、Ⅲa層)



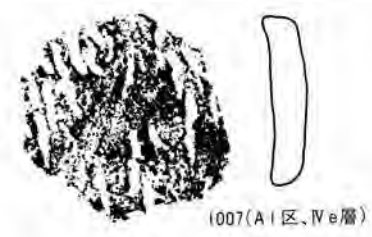
1004(A1区、Ⅳf層)



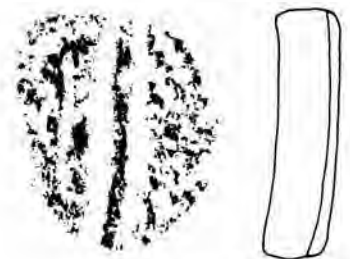
1005(B2区、Ⅳe層)



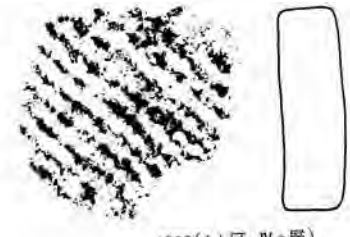
1006(A1区、Ⅳe層)



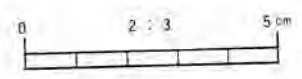
1007(A1区、Ⅳe層)



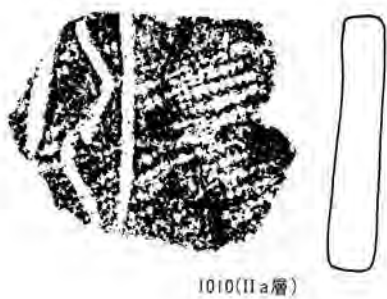
1008(A1区、Ⅳa層)



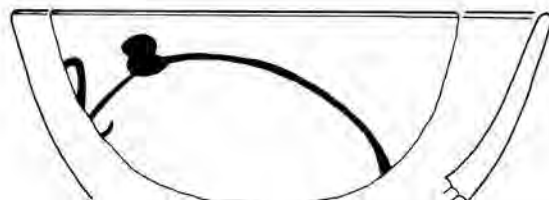
1009(A1区、Ⅳa層)



第79图 出土土製品一3



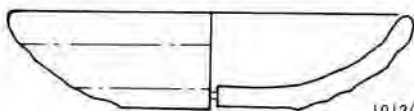
1010(II a層)



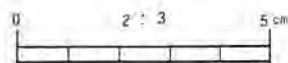
1011(SW区、II a層)



1012(CI区、DI区、II a層)



1013(I a層)



Ⅳ 調査のまとめ

今回の発掘調査では、東向きの緩斜面に形成された遺物包含層より多量の遺物を層位的に検出することができた。出土した土器は、おおむね縄文中期前葉から後葉にわたりほぼ継続した堆積状況を呈している。

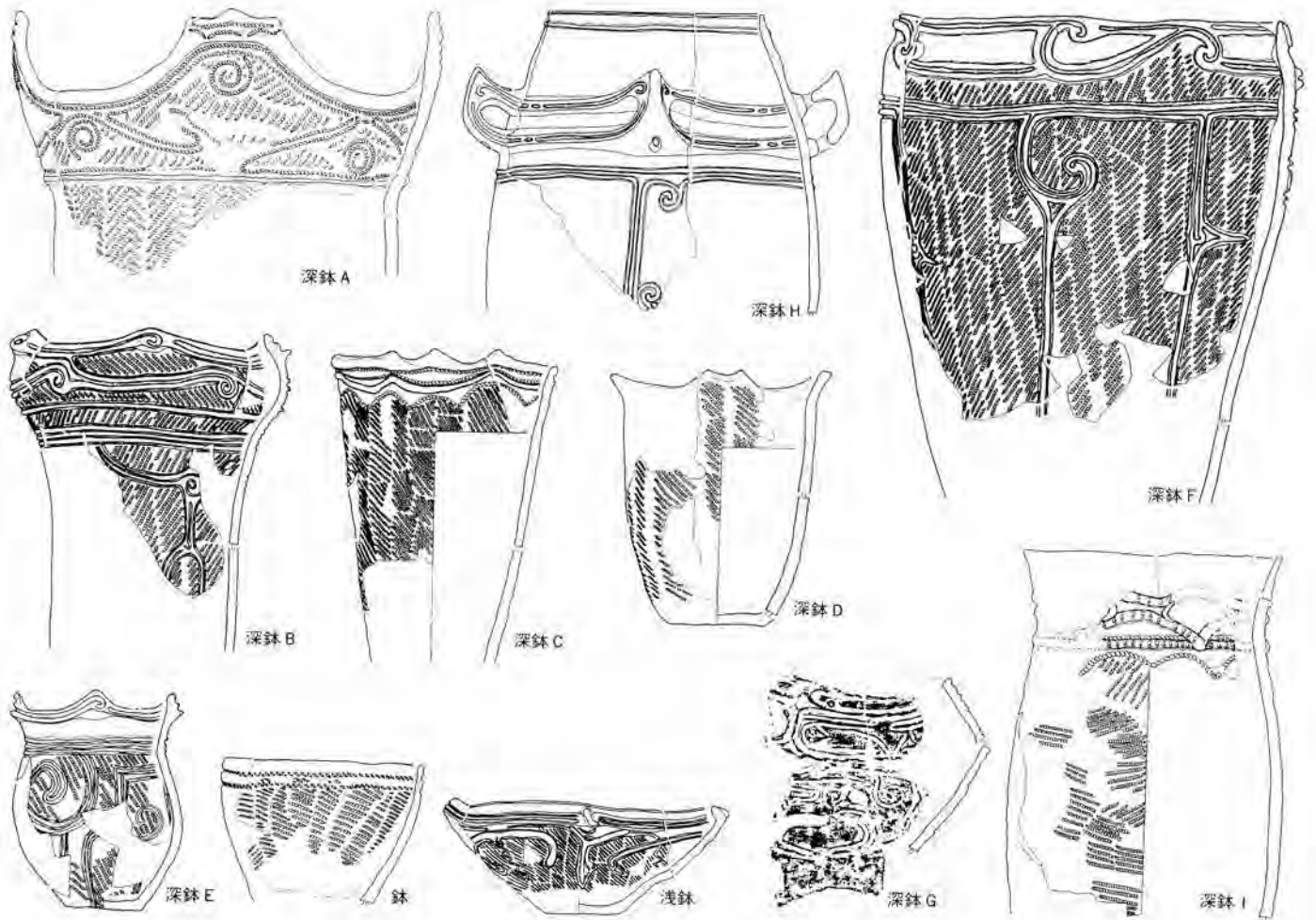
一方、遺構については、Ⅳb層上面に第1号集石跡を検出したのみである。本調査区周辺部（特に斜面の上方）には、遺物包含層を形成した人々の集落跡が存在するものと思われるが、本遺跡内での発掘調査は今回が初めてであり、今後の調査により究明されるべき大きな課題となった。

従って、ここでは出土遺物の主体を占める土器を中心に考察を加え、今後の周辺地域での調査の足がかりとしたい。

1 土器

(1) 器形分類（第81図）

今回の調査で得られた土器群のうち、層位的にまとまって出土したⅫa層～Ⅴa層の土器について次のとおり大まかに器形を分類した。



第81図 器形分類図

本来であれば、口縁部形態や全体のプロポーション等により細部するべきであるが、破片でしか図示できない資料も多いため、大別に留めている。

深鉢A 大形の深鉢で、口縁部に4単位の山形～台形状の波頂を有することを大きな特徴とする。文様帯は口縁部にのみ集中するものが主体を占める。上層のものは、口縁部の膨らみが強く、ほぼキャリパー形を呈するようになる。

深鉢B 中形のキャリパー形深鉢で、口縁部を平縁とするものが主体を占めるが、上層のものは4単位の小突起を有するものもみられる。文様帯は口縁部のみに集中するものが主体を占める。

深鉢C 中形の深鉢で、口縁部の外反または外傾するものを一括した。底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がるものが主体を占める。口縁部の形状は、平縁・小波状・小突起を有するもの等がある。文様帯は口縁部に集中するものが多いが、体部に文様帯を有するものもやや多い。

深鉢D 中形の深鉢で、頸部に弱い屈曲を有し、体部がやや膨らむものを一括した。口縁部は外反するものが多い。口縁部形態や文様帯構成については深鉢Cに類似するものが多いようであるが、小片ではいずれの器形か判別のつかないものもある。

深鉢E 中形～小形の深鉢で、頸部に強い屈曲を有し、体部に強い膨らみを有する。主要な文様帯は体部に形成される。

深鉢F 中形～大形の深鉢で、口縁部の内湾するものを一括した。文様帯は口縁部に集中するものの両者がある。

深鉢G 中形の算盤玉形を呈する深鉢で、頸部に強い屈曲を有し、口縁部が内傾している。文様帯は口縁部、体部ともに形成される。深鉢下の変形とも考えられるが、XI b層のみで検出した器形である。

深鉢H 胸張りの深鉢で、頸部につば状の装飾やブリッジ状の把手を有する。文様帯は体部に形成される。

深鉢I やや大形の円筒形深鉢で、頸部の屈曲や体部の膨らみは極めてゆるやかである。文様帯は口縁部のみに形成される。

鉢 おおむね最大径と器高が同程度のものを鉢とした。中形～小形のものが主体を占め、文様帯は口縁部に集中するものが多い。

浅鉢 最大径が器高の2倍程度のものを浅鉢とした。口縁部は内湾するものと、程部から直線的に立ち上がるものの2者がある。文様帯は口縁部にのみ集中するものが主体を占めるが、一部体部に文様帯を形成するものもみられる。

また、浅鉢よりもさらに浅く、皿状を呈すると思われるものも認められるが、いずれも破片であり一括した。

(2) 土器群の分類と編年的位置づけ

各層からの出土土器は、その層が堆積する以前の土器を少なからず含んでいることは前述したとおりであるが、これら土器を除外し、本来その層に伴うと思われる土器群のみを抽出して

器形毎に集成したものが第82図～第88図である。

各層毎の概要は既に記述したとおりであり、ここではこれらの土器群について分類を行ったうえで編年的位置づけについて検討する。

第Ⅰ群 XIII a層出土土器が相当する。出土点数が少なく判然としないが、深鉢A・C・Dにより構成される。

深鉢Aは口縁部文様帯の沈線による鋸歯状文（あるいは連弧状文）を特徴とする。同様なものは上層からも出土しており94・95・202～205・883・884等がこれに相当する。

深鉢C・Dについては、口縁部文様帯に横位の鋸歯状文や沈線文を施すものと、隆起線上に連続刺突文を施すもの等がある。

第Ⅱ群 XII a層～XI b層出土土器が相当する。深鉢A・C・D・F・G・I・鉢・浅鉢により構成される。

深鉢Aは原体圧痕による山形の区画文を主要なモチーフとすることで第Ⅰ群とは異なる。

深鉢C・D・鉢・浅鉢の口縁部文様帯は隆起線による横位楕円形区画文を多用することを大きな特徴とする。また、区画文内に原体圧痕文を伴うものもやや多い。

深鉢Gは沈線によりやや複雑なモチーフを施すものの、やはり横位楕円形区画文が認められる。

深鉢Iは円筒上層C式に相当するものと思われるが、多分に大木式の影響を受けており、口縁部文様帯下部に原体圧痕による連弧文を施す。

第Ⅲ群 XI a層～X a層出土土器が相当する。深鉢A・B・?・C・D・F・浅鉢により構成される。

深鉢Aは破片資料のみであるが、やはり山形の区画文を施すもの（160・164・165）と変形した楕円形区画文を施すもの（154）などが認められる。

深鉢C・D・F・浅鉢の口縁部文様帯には横位楕円形区画文を多用するが、端部がきちんとした円弧を描かないもの（171・201・153）や隆起線を波状に施したもの（150）など変形または省略されたものが多く第Ⅱ群とはやや異なった様相を呈している。また、深鉢Fには平行沈線と鋸歯状文を施すものも認められる。

深鉢Bについては横位楕円形区画文を施すもの（200）と波状に展開するもの（158・159）の2者が認められるが、いずれも破片資料であり同様なものが第Ⅳ群以降に伴うことから本来は本群に伴うものではない可能性も指摘できる。

第Ⅳ群 IX a層出土土器が相当する。深鉢A・B・C・D・F・鉢・浅鉢により構成される。

深鉢Aは破片資料のみであるが器形の変化するもの（256）が認められる。

深鉢Bは確実に伴出している。大半は平縁であるがC字状の突起を有するもの（233）もある。口縁部文様帯は横位楕円形区画文を主体とするもの（250・251）、波状に展開するもの（233・249—深鉢Aの可能性も有）、横位波状に粘土紐を貼付けたもの（241）の3者が認められ、い

ずれも原体圧痕文を伴っている。これらのうち波状に展開するモチーフは深鉢Aの山形区画文の影響を受けて成立したと思われる。

深鉢C・D・F・鉢には横位の平行する原体圧痕文が多用されるが、これは楕円形区画文内に施されたものの省略形態と見ることできる。また、269・279～282など第Ⅲ群と類似するモチーフを施すものもあるが、これは後考を要する。

浅鉢は円形の連続刺突文を伴うもの(242)などがある。

ところで、横位楕円形区画文については第Ⅲ群よりさらに省略されたものも認められ、連結部にX字状の隆起線を施しただけのもの(234)や同じく連結部に縦位2条の隆起線を施しただけのもの(233)などがある。

第Ⅴ群 Ⅷa層～Ⅵa層出土土器が相当する。深鉢A・B・C・D・F・浅鉢により構成される。

深鉢Aは横位楕円形区画文の連結部に∩形のモチーフを施すもの(378)、波状に展開するモチーフを施すもの(379・380・415)、波頂下に縦位のモチーフを施すもの(343・345)などがある。このうち前2者は深鉢Bのモチーフとの類似性が認められる。

深鉢Bは出土点数が多くなり主要な器種のひとつとなる。口縁部文様帯は横位楕円形区画文を主体とするもの(372・382)のほかはいずれも波状のモチーフを主体とする。第Ⅳ群の深鉢Bと比較し、原体圧痕文から沈線文への施文技法がみられ、本群での原体圧痕文は小突起上の刻目のみとなる。

また、波状に展開するモチーフも渦巻文を多用する点や隆起線に沿う沈線が反転して区画文を作出す点などの差異もある。

深鉢C・Dも横位楕円形区画文を主体とするもの(373・386)と波状に展開するもの(375・431)などがあり、体部に波状文を懸垂するもの(375・386)も認められる。

原体圧痕文はⅧa層～Ⅶb層から出土したものの中に古い形質を有するものが多く、第Ⅳ群以下に伴うものである可能性が大きい。一方、Ⅶa層～Ⅵa層から出土したものは刻目状のもの(386・397)とスリット状のもの(417、419)があり斉一性が強い。

深鉢Fは隆起線により施文されるものが認められる。

浅鉢は楕円形区画文内に刻目を有するもの(376)がある。337は古い形質を有している。

第Ⅵ群 Ⅴc層出土土器が相当する。深鉢A・B・C・D・E・F・G・浅鉢により構成される。

深鉢A・Bが主体を占め、両者の共通性が大きくなる。これらの口縁部文様帯はいずれも隆起線や隆沈線により横方向に展開するモチーフが認められるが、上下境界線との連絡が極めて少なく開放的な施文となる。また、体部文様帯を形成するものは少ないが、平行沈線による施文を主体とするようである。深鉢Bの中には口縁部に小突起を有し、ここに小渦巻文を配すものが多くなる点は特筆される。

深鉢C・Dは口縁部が大波状を呈するものが主体となる。頸部文様帯は平行沈線や波状文を施す等の斉一性がみられる。体部文様帯を形成するものは少ないが、頸部に類似するモチーフ

フを垂下する。

深鉢Eは本群より確実に共伴する。いずれも口縁部～頸部を無文帯とし、体部文様帯に平行沈線による大渦巻文や有棘渦巻文等を施すが開放的である。

深鉢Fは口縁部文様帯に隆沈線により横位S字状文を施す。体部文様帯には懸垂文系のモチーフを施し、渦巻文や有棘渦巻文等が伴う。

深鉢Gは頸部にタガ状の隆起線とブリッジ状の把手を有し、体部文様帯には隆起線による施文が認められる。

浅鉢は口縁部文様帯に深鉢A・Bと類似する施文が認められる。また、498は注口を有するもので特筆される。

第VII群 V b層出土土器が相当する。深鉢B・C・D・E・F・G・鉢・浅鉢により構成され、深鉢Aを欠く。

深鉢Bは口縁部文様帯に隆沈線による横方向のモチーフが施されるが、上下境界線との連絡が集み、結果としてやや閉鎖性の強い施文となる。531は他とモチーフを異にし、横位小波状の隆起線を施すのみである。本来下層に伴うものなのか本群内の省略形態なのかは不明である。

深鉢C・D・Eは第VI群に類似するが、口縁部を無文帯とするものが多くなる点やモチーフの閉鎖性が増す点で異なる。

深鉢Fも同様に施文要素間での連絡がみられ閉鎖性を増している。

浅鉢は592が注口を有するものである。他のものは本来本群に伴わないものと思われる。

第VIII群 V a層（下部）出土土器が相当する。器形で確実なのは深鉢B・C・浅鉢・皿?などである。

深鉢Bは口縁部文様帯に隆沈線により渦巻文と区画文を交互に配する斉一性の強い施文となる。他の深鉢の体部文様帯は隆沈線や平行沈線により施文要素間の連絡が集み、閉鎖性に強い施文となっている。

浅鉢の口縁部文様帯は深鉢Bに類似するもの（656）と文様帯を省略し皿形?を呈するものの2者が認められる。

第IX群 V a層上部出土土器が相当する。深鉢B・C・Fなどにより構成される。

深鉢Bは地文のみを施すものである。他の深鉢はいずれも口縁部から体部にかけての文様帯に縦位楕円形区画文を施す。施文技法は沈線による磨消技法によるものと、隆沈線によるものの2者がある。後者（744・745）については沈線の幅が広い点や隆起線の断面が三角形になる点で第VIII群とは異なる。

第X群 IV層～III層出土土器が相当し、やや時間幅があるが一括した。注口土器・鉢・皿などの器形が認められる。

第Ⅺ群 II a層出土遺物が相当する。いずれも陶磁器類であり碗・小皿・搦鉢などの器形が認められる。

次に各群の編年的位置づけについて触れることにする。

第Ⅰ群は大木7 a式に伴うと思われる。岩手県内では最近大木6式～大木7 a式の古い段階に伴う資料は蓄積されつつあるが、大木7 a式の新しい段階～大木7 b式のまとまった資料は極めて少ない。本群は丹羽茂氏の大木7 a式第Ⅱ段階以降(註1)としたものや宮城県小築川遺跡第Ⅲ群土器(註2)などに相当するものと思われるが出土数が少なく判然としない。場合によっては大木7 b式の初頭にまで下る可能性があるかもしれない。

大木7 a式

第Ⅱ群・第Ⅲ群は大木7 b式に伴うと思われるものである。山内清男氏が大木7 b式とした資料中には横位楕円形区画文と原体圧痕文を施すものが確実に含まれており(註3)、これがひとつのメルクマールになるかと思われる。

大木7 b式

岩手県内では層位的まとまりを有する資料は少ないが、確実な例としては北上市鳩岡崎遺跡FD15P.3(註4)を上げることができる。ここでは本遺跡第Ⅱ群のうち69や55?に類似するものなどが共伴している。丹羽茂氏が大木7 d式としたものや小築川遺跡第Ⅳ群・第Ⅴ群土器などに併行するものと思われるものの全体的にモチーフや施文技法の差異が目立っている(註5)。おそらくは両者間の地域性が大きく現われたものと思われる。

ところで、第Ⅱ群と第Ⅲ群との間には横位楕円形区画文を中心とした形態的な変化があり、両者を型式学的に分類した。つまりこれは、前者が比較的整然とした横位楕円形区画文を施す一群と後者がやや形のくずれた一群と言い換えることもできる。層位的関係から第Ⅱ群を大木7 b式の古い段階、第Ⅲ群を大木7 b式の新しい段階に伴うものと見做しておくが、器種やモチーフが出そろっていない感があるためもう少し資料の蓄積を待つ必要がある。

第Ⅳ群・第Ⅴ群は大木8 a式に伴うと思われるものである。岩手県内での大木8 a式土器は層位的まとまりを持つ資料が最近増加している。熊谷常正氏はこれらの成果を受けて大木8 a式を2段階に分類したうえで、将来的にはさらに細分される可能性も指摘している(註6)。

大木8 a式

氏によると新段階は紫波町西田遺跡E C 032ピット・同E D 091ピット・北上市鳩岡崎遺跡C J 27住居跡出土土器を標式資料とし、この類例として盛岡市大館町遺跡R A 105住居跡床面・北上市鳩岡崎上の台遺跡S K 018土坑・同梅ノ木Ⅶ遺跡B a 80住居跡・同B b 74埋設土器をあげている。古段階は盛岡市大館町遺跡R A 305(A 7-1)住居跡・同繫V遺跡3号住居跡・同5号住居跡・同19号ピット出土土器を標式資料として、これに紫波町西田遺跡第Ⅱ群2 b類土器を加えている。

熊谷氏が新段階とした資料は、やはり丹羽氏も新段階とした宮城県長者原貝塚第1号住居跡出土遺物に対比し得るものである。丹羽氏はこれ以前の段階として宮城県青島貝塚第1次調査トレンチ第3層下層出土土器をあげているが、これも熊谷氏の古い段階に対比される(註7)。

丹羽氏はこれらよりさらに古い段階の存在する可能性も示したが明言を避けている。

ここで、これらの土器群と本遺跡の第Ⅳ群・第Ⅴ群を比較すると、第Ⅴ群は熊谷氏の古段階

に対比されるものと思われるが、この中でも特に大館町遺跡 R A 305 (A 7-1) 住居跡出土遺物に極めて類似する内容を有する。

しかし、第 V 群の中には繫 V 遺跡出土土器 (の一部) や西田遺跡第 II 群 2 類土器のように隆起線に原体圧痕を沿わせるものを基本的には含まない点で熊谷氏の古段階とは若干様相を異にしている。このことはキャリパー形を呈する深鉢 A・B において特に顕著である。

但し、VIII a 層～VII a 層出土の深鉢 C・D の中には隆起線に原体圧痕が伴うものがみられるが、これらはモチーフ等から第 V 群より古い段階に伴うものである可能性が大きいことは既に指摘した通りである。

次に第 IV 群であるが、岩手県内での類例は極めて少ないが、盛岡市大館町遺跡 R A 306 住居跡出土土器をあげることができる (註 8)。この資料は一部古い型式のものを含むが、炉に埋設された土器が大木 7 b 式に伴うもので、おそらく本遺跡の第 II 群～第 III 群に伴うものと思われる。埋土出土土器のうち D 層からは第 V 群 236・240 に類似するモチーフを施す浅鉢が出土しており、B 層～A 層からは同じく 233・250・251 に類似する土器が出土している。

ところで、本群は大木 7 b 式的要素と大木 8 a 式的要素が混在しており、いずれとも決めかねるものである。実際に山内氏が写真で示された資料のいずれにも類似するものが見当らず、熊谷・丹羽両氏ともにこの段階の具体的資料は提示されないばかりかその存在さえも明言されていない。

しかし、第 IV 群の中には明らかに西田遺跡第 II 群 2 類に相当するもの (深鉢 B の大半) を含んでいることから少なくとも IX a 層での最新型式は大木 8 a 式の古い段階であると言える。

ただ注意しなければならないのは、R A 306 住居跡出土遺物のうち D 層と B 層～A 層出土遺物の間に層位的上下関係はあるにしても型式学的な差異を見出すべきなのか。同様に第 IV 群内でも 234・235・236・240 といった土器群を分離し、例えば大木 7 b 式に含むべきなのか、今後資料の蓄積を待って検討しなければならない。

ここでは熊谷・丹羽両氏の 2 段階に先行する土器群の存在を仮に認め、第 1 段階に第 IV 群を、第 2 段階に V 群を当て、第 1 段階については今後その存在をも含めて更に検討を要することとする。

尚、第 3 段階については V 群より上層に類例を求めることができるものの層位的まとまりを持たないものであり詳述を避ける。

大木 8 b 式

第 VI 群・第 VII 群・第 VIII 群の大木 8 b 式に伴うと思われるものである。大木 8 b 式も岩手県内でも資料の蓄積が集んでおり、かつて筆者も県央部を中心とした資料の集成を行い、大木 8 b 式を 3 段階に分類した (註 9)。大木 8 b-1 式は盛岡市大館町遺跡 R A 102 住居跡下層出土土器と同 R A 301 住居跡下層出土土器を、大木 8 b-2 式はこれらの住居跡の上層出土土器を大木 8 b-3 式は大地渡遺跡の遺構出土土器と柿ノ木平遺跡 I b 群土器をそれぞれ標式資料として設定された。

大木 8 b-1 式は丹羽氏の宮城県大松沢貝塚出土土器群の段階に、大木 8 b-2 式は同じく桂島貝塚 B 地点と勝負沢遺跡出土土器群の段階にそれぞれ対比される。また、大木 8 b-3 式とした大地渡遺跡出土土器群について丹羽氏は大木 8 b 式の中に含むべきであるとし、2-3

段階の変遷を想定された(註10)。

本遺跡での第Ⅵ群は大木8b-1式に、第Ⅶ群は大木8b-2式に、第Ⅷ群は大木8b-3式にそれぞれ対比されるもので、器形、モチーフ、施文技法ともに県央部と類似している。

いくつかの差異を認めるとすれば、大木8b-1式の中に深鉢Aが残る点や大木8b-2式の中で施文が閉鎖性に増すものがやや少ない点があげられようが本質的な問題ではない。

ところで、大木8b-3式については大木9式の初期に位置づける意見もあろうが、器形および器種組織・文様帯構成・モチーフ・施文技法ともに大木8b式の系譜の中で位置づけられるべきものと思われる。実際、大木8b-3式には基本的には磨消技法によるものを全く含まないことでも裏づけられている。このことは換言すれば、大木9式の中に磨消技法を全く持たない段階が存在するかどうかといった問題提起にもつながることになる。

宮古市周辺でも該期の資料が蓄積されており、トロノ木Ⅰ遺跡第1号～第3号住宅跡・鎌ヶ崎館山貝塚第1号土坑跡などから磨消技法によるものを全く含まない大木8b-3式単独のセットを得ており、大木8b-3式と大木9式が伴出した例は全くなかった。

ところが、市内上村貝塚を調査した小田野哲憲氏により、F-3号住居跡から大木8b-3式と磨消技法によるもの(大木9式)がまとまって出土したという報告がなされ、ここに至ってこれまでとは全く違ったレベルでの問題提起がなされることとなった(註11)。

しかし、その前に確認しておかなければならない問題点がいくつか存在している。まず、ひとつはF-3号住宅跡は石囲炉とその周辺のわずかな床面しか確認されておらず、柱穴や周壁などは全く認められなかったこと。同じレベルで出土したとは言え土層断面の確認がなされていないので、同一層内の遺物として認定できるのかどうかなどである。つまり、これらの遺物が住居跡の床面に残された一括遺物であるのか、遺物包含層のようにある程度の時間幅を有するもので、その層が堆積した時期以前に遺物を含んでいるのか否かといったことである。

また、他の遺跡でも同様な事例があるのか否かも重要な問題となる。

これらの点については氏も一抹の不安を持っておられたようである。

また、同貝塚の遺構のなかには大木8b-3式や大木9式をそれぞれ単独で出土するものもあり、これらを系統的にどう位置づけるのかといった検討も必要かと思われる。この点について筆者は遺物のすべてを実見している訳ではないので語るべき資格を持たない。

今後、資料を実見したうえで宮古市周辺の様相をまとめてみたい。

第Ⅸ群は大木9式に伴うものである。前述したとおりⅤa層上面付近にのみ集中したもので同一層内とは言え第Ⅷ群とは明らかな時間差が想定される。資料点数も少ないため詳述を避ける。

大木9式

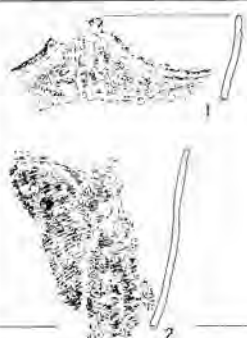
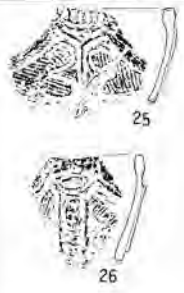
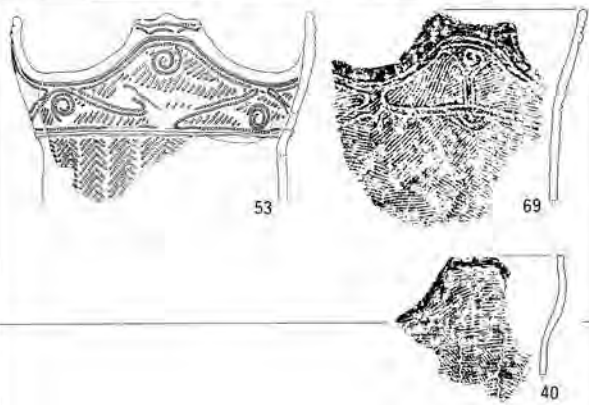

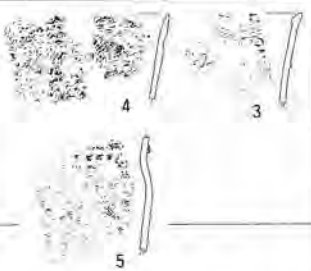
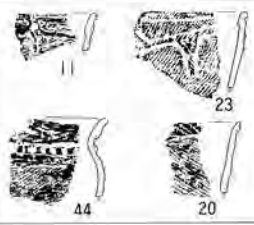
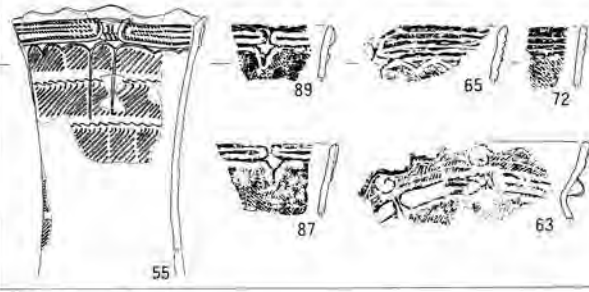


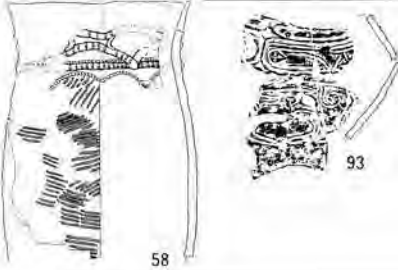


第Ⅹ群は縄文後期～晩期に伴うものであるが、とりわけ大洞B式～C2式に相当するものと思われる。

縄文後期～晩期

第Ⅺ群は江戸時代に伴うものであり、特に1011は肥前系染付碗ではほぼ18C後半～19C前半代に伴うと思われる。

江戸時代

以上、本調査区内から出土した土器群を11群に分類し、各々の編年的位置づけを行ってみた。

	X IIIa層 (第I群)	XIIa層 (第II群)	XIb層 (第II群)
深鉢A			
深鉢B			
深鉢C・D			
深鉢E			
深鉢F			
深鉢G・H・I ほか			
鉢			
浅鉢			

第82図 出土土器集成図 (1)

	XI a層 ~ X a層 (第III群)	IX a層 (第IV群)
深鉢 A	<p>164 165 160 154 191</p>	<p>256 267 249</p>
深鉢 B	<p>200 158 159</p>	<p>233 241 250 251</p>
深鉢 C・D	<p>150 167 171 180 174</p>	<p>269 243 234</p>
深鉢 E		
深鉢 F	<p>215 216 201</p>	<p>235 279 282 281 280</p>
深鉢 G・H・I ほか	<p>232</p>	
鉢		<p>236 240 278</p>
浅鉢	<p>153 231</p>	<p>237 242</p>

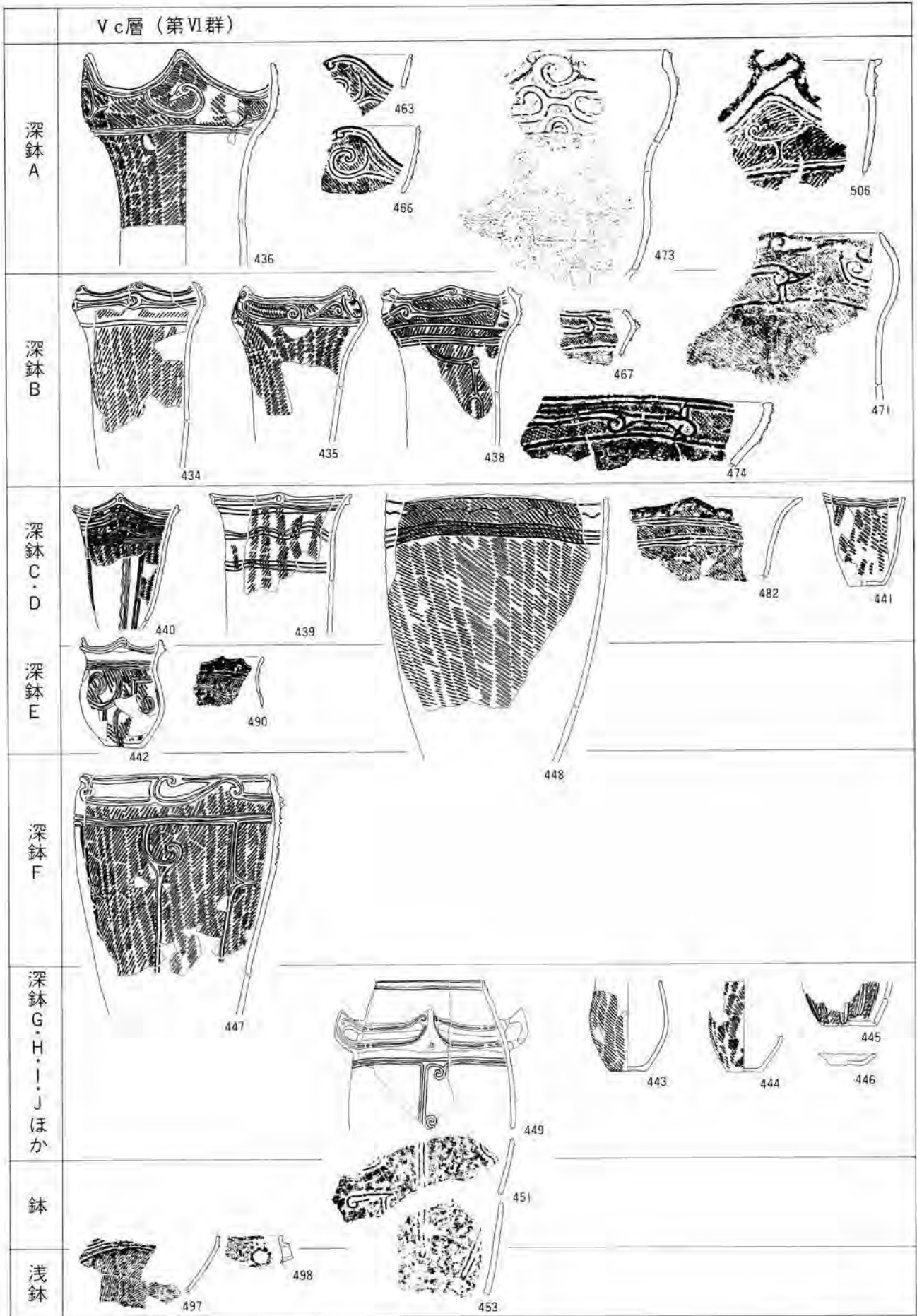
第83図 出土土器集成図 (2)

	VIIa層 (第V群)	VIIb層 (第V群)
深鉢A	<p>317 300 318</p>	<p>343 335</p>
深鉢B	<p>312</p>	<p>320 321 322 323 324 325 334</p>
深鉢C・D	<p>301 303 305</p>	<p>338 352 344 355 367 357 345</p>
深鉢E		
深鉢F		<p>336</p>
深鉢G・H・I・Jほか	<p>314</p>	<p>369</p>
鉢		
浅鉢		<p>337</p>

第84図 出土土器集成図 (3)

	VIIa層 (第V群)	VIa層 (第V群)
深鉢 A		
深鉢 B		
深鉢 C・D		
深鉢 E		
深鉢 F		
深鉢 G・H・I・Jほか		
鉢		
浅鉢		



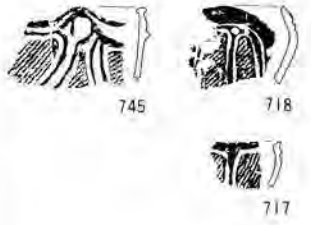




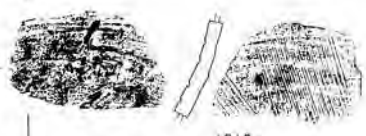


第85図 出土土器集成図 (4)



第86図 出土土器集成図 (5)

	V b層 (第Ⅶ群)	V a層 (下部) (第Ⅳ群)
深鉢 A		
深鉢 B		
深鉢 C・D		
深鉢 E		
深鉢 F		
深鉢 G・H・I・J ほか		
鉢		
浅鉢		

第87図 出土土器集成図 (6)

	V a層上部 (第IX群)	IV層 (第X群)	III層 (第X群)	II層 (第XI群)
深鉢 A				
深鉢 B				
深鉢 C・D				
深鉢 E				
深鉢 F				
深鉢 G・H・I・Jほか				
鉢				
浅鉢				

第88図 出土土器集成図 (7)

各群ともに器形やモチーフ等が出そろってはいない状況であり、標式的な資料とはできないものの土器群の変遷についてはある程度の情報を提供できたものと思われる。今後も周辺地域の資料蓄積を進め、今回解決できなかった問題点について再度検討を行うこととしたい。

2 土偶

今回の調査で出土した土偶は3点あるが、このうちXI a層～X a層より出土した984が特筆される。この形態については前述したとおりであるが、いわゆる板状土偶と呼ばれるタイプのものである。類例は内陸部に多く、盛岡市大館町遺跡（註12）・雫石町塩ヶ森遺跡（註13）・北上市鳩岡崎遺跡（註14）などで多量に出土している。

従来、このタイプの土偶は大木6式～大木7 a式に伴うものとして報告される例が多かった様であるが、今回の調査では第Ⅲ群土器（大木7 b式）を主体とする層から出土している。

しかし、各層ともに堆積時以前の遺物を含んでおり、この土偶についても第Ⅲ群より古い時期に伴うものである可能性を全く否定しうることでもない。

いずれにしても、周辺地域での類例が極めて少ない遺物でもあり、今後の資料蓄積が必要であることは言うまでもない。

〈註記〉

註1 丹羽茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究4（縄文土器Ⅱ）』雄山閣 より

註2 相原淳一ほか 1986 『小梁川遺跡、遺物包含層土器編』宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所 より

註3 小岩末治 1960 『岩手県史 上古篇』岩手県 より

註4 相原康二ほか 1982 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XV（江釣子村鳩岡崎遺跡）』岩手県教育委員会・日本道路公団 より

註5 註1および註2より

註6 熊谷常正 1989 「北上川中流域における大木8 a式土器」『岩手県立博物館研究報告 第7号』岩手県立博物館 より

註7 註1に同じ

註8 八木光則ほか 1982『大館遺跡群 大館町遺跡—昭和56年度発掘調査概報—』盛岡市教育委員会より

註9 高橋憲太郎ほか 1982 『柿ノ木平遺跡—昭和50・51年度発掘調査報告—』岩手大学考古学研究会編 より

註10 註1に同じ

註11 小田野哲憲ほか 1991 『上村貝塚発掘調査報告書』（助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター より

註12 武田将男ほか 1978 『大館町遺跡』岩手大学考古学研究会編 等より

註13 本沢愼輔ほか 1982 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 雫石町塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡』岩手県教育委員会・助岩手県埋蔵文化財センター より

註14 註4に同じ

第1図版



調査区全景（北から）



遺物包含層堆積状況

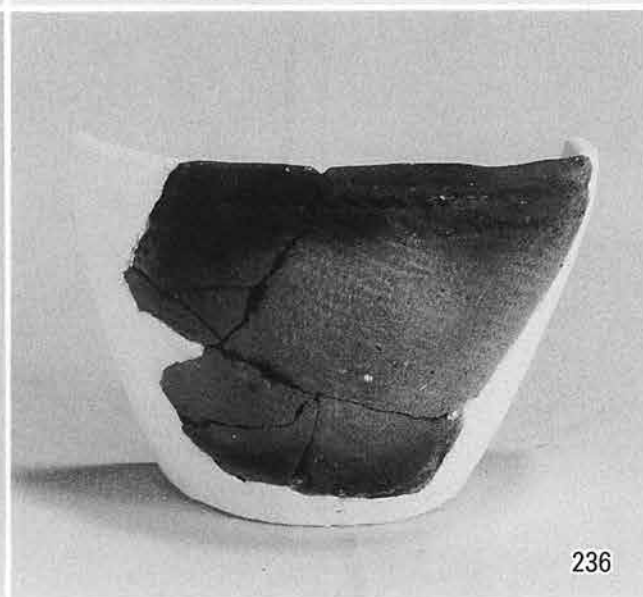
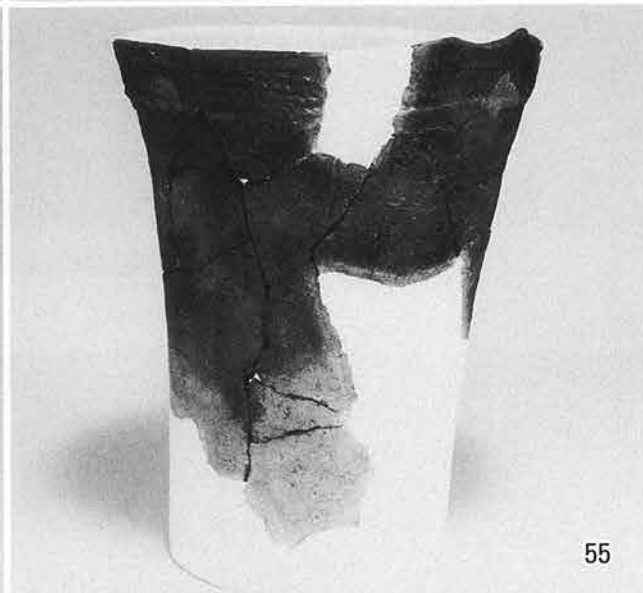
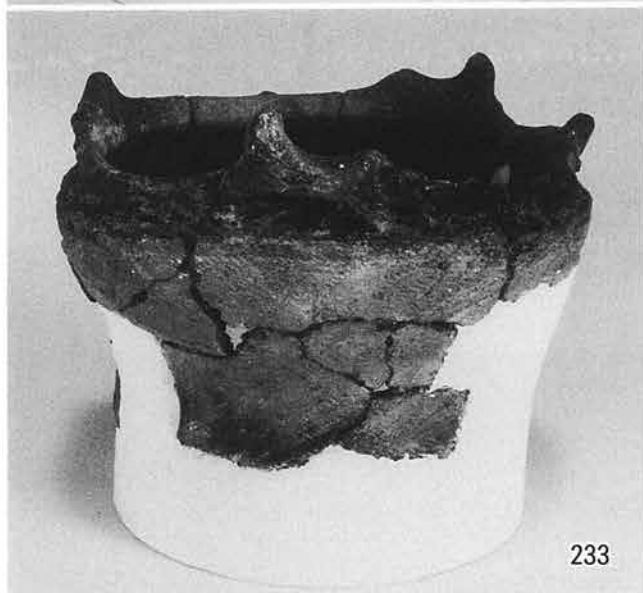
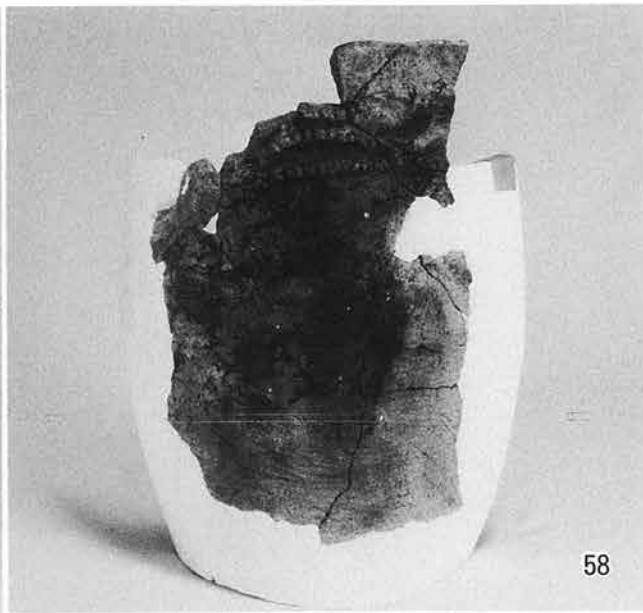
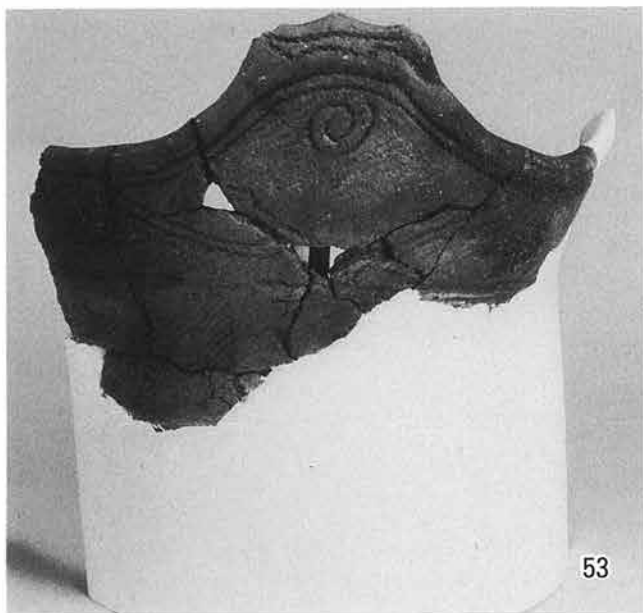


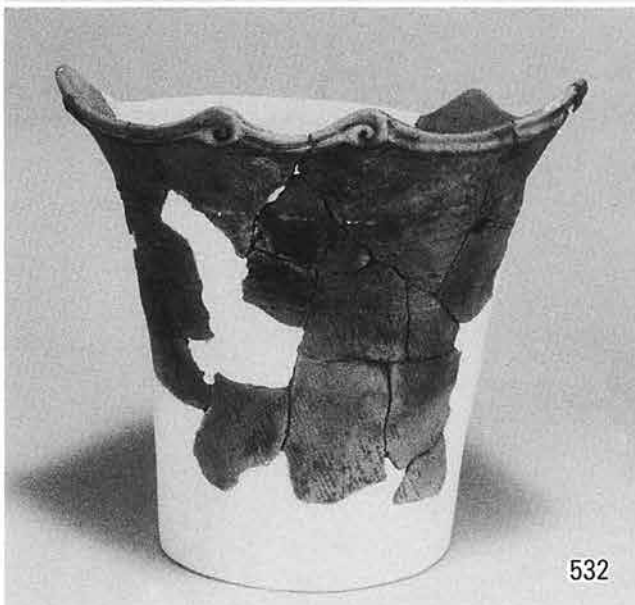
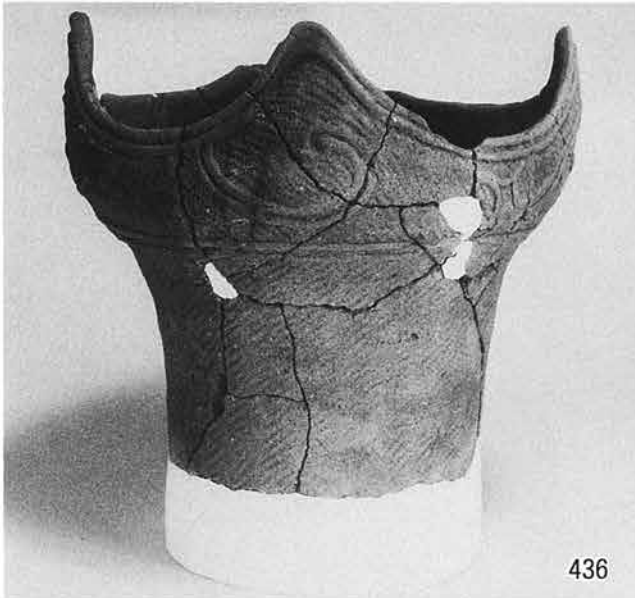
遺物出土状況 (234)



遺物出土状況 (436)

第3図版





第 5 図版



宮古市埋蔵文化財調査報告書31

重茂館遺跡群

—第1次発掘調査報告書—

1992.3

発行 岩手県宮古市教育委員会
〒027 宮古市新川町2番1号
TEL0193-62-2111

印刷 株式会社文化印刷
岩手県宮古市大通2丁目5の2